

あやかしの棲む家

秋月あきら

目次

第一之世界	双生児	1
第二之世界	そこに棲むものたち	67
第三之世界	土蜘蛛	138
第四之世界	紅い世界	207
第五之世界	異界の少女	274
第六之世界	黙して語らず	345
第七之世界	隠された物語	412

第一之世界 双生児

それは運命の糸に弄ばれた惨劇。

山里の小さな村、そのはずれにある大きな屋敷。

村の者は決して寄り付かない呪われた一族。

その屋敷に訪れることになった、ひとりの少女。

叔父は村の入り口までしか、みはな美花を送つてはくれなかった。

明らかに様子の可笑しかった叔父。村が近づくにつれて、唇

が蒼く染まり、顔から汗を噴出していた。

なにを恐れることがあるのだろうか？

美花が屋敷を訪れることになった理由。それは実の母と、つい最近に知らされた双子の姉に会うため。

どこに恐れることがあるのか？

本当に恐れられるのは自分だと美花は思った。

こんな自分を今まで育ててくれた叔父夫婦。いや、本当は影で自分のことを恐れていたのかもしれない。

悪魔の子。

そう影で囁いていたのかもしれない。

屋敷までの道を村人に尋ねると、皆一様に顔を伏せて、無言になつてしまった。やっと教えてくれた村人も、屋敷の方向を指差すだけだった。

美花は見ていた。屋敷を示す村人の指が酷く震えていたことを。

屋敷が大きなことは、外からでも十分に知ることができた。大きな門の前に小柄な娘が立っていた。

服装はあまり上等な物ではなく、腰に巻かれた白い前掛けを見るに、侍女だということがすぐにわかった。

いや、それにしても綺麗な娘だ。

黒く美しい髪、端正な顔立ち、上等な着物を着せれば、和人形のように美しく飾られるだろう。ただ、この娘は表情と愛想に欠けていた。

美花に軽く会釈した娘は、なにも言わずに屋敷の中へと歩き出した。

慌てて美花は追いかけて歩いた。

その瞬間、美花の足首が誰かに掴まれた。

驚きにあまり美花は声も出せずに全身から血の気が失せた。

しかし、何もなかった。

こんな場所で誰かに足を掴まれる筈などないのだ。

侍女は足を止めて待っていてくれた。

美花は何事もなかったように取り繕おうとした。のだが、

侍女の視線の先を追ってゾツとした。

侍女は美花の足元をじつと見詰めていたのだ。

何事もなかったように歩き出す侍女。

美花も何事もなかったように努め、侍女に話かけることにした。

「あの、お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「菊乃きくのと申します」

最低限の礼儀は心得ているらしく、しつかりと名を答えてくれた。けれど、淡々とした口調と愛想のない顔。菊乃から話題を振ってやることはなさそうだ。

さらに美花は会話を続けようとした。

「わたしは美花と言います」

相手が自分の名前を知らないはずがないが、これは売り言葉に買い言葉だ。

会話が途切れないように美花は話し続ける。

「菊乃さんは、ここのお手伝いさんですよ？ 住み込みで働いているのですか？ ここに勤めて長いのでしょうか？」

「……………」

質問が多かったのか、それとも無駄話はしたくないのか、菊乃は黙ったまま淡々と前を歩いていった。

そうしているうちに玄関までたどり着いた。

玄関で美花を出迎えてくれる者は誰一人といなかった。

実の母も、双子の姉も、まだその姿を現さない。

家の中は静かだった。

前を歩く菊乃の足音も聞こえない。

聞こえるのは美花の足音だけ。

そこへ騒がしい足音が聞こえて来た。

廊下を走る二つの音。

すぐに前方から幼い少女が駆けてきた。

美花は少女をかわそうとしたが、運悪く避けた方向に少女も動き、二人はぶつかってしまった。

少女は美花の顔を上目遣いで覗き込むと、すぐに駆けて行ってしまった。その後を追うように新たな侍女の娘が現れ、美花の顔を見て、「いつものように」軽く頭を下げて立ち去った。

美花は呆然としてしまった。

不思議な光景を見たような気がした。

あの幼い少女の頭から、角が生えていたような気がした。

見間違え立ったかもしれない。でも、髪の毛に隠れた二本の角が見えたような気がした。

考え込みながら美花が視線を上げると、菊乃がただじっと美花を見つめていた。

再び廊下を歩き出す菊乃。美花はついて行くしなかった。

大きな庭を見渡せる縁側を歩き、閉められた障子の前で菊乃は足を止めた。

菊乃は何も言わなかったが、その障子を開けるように促しているのはわかる。

この障子の向こうに誰かがいる。

美花が部屋に入ろうと決意したと同時に、心を読み取ったように菊乃が障子を開けたのだった。

部屋の奥を見た美花は息を呑んだ。

そして、思い出したように言葉を喉から搾り出した。

「は、はじめまして……」

それ以上の言葉を思いつかなかった。

自分と同じ顔がそこにある。わかっているも驚いてしまった。いや、それよりも驚かされたのは母だ。

直感的にそこに座っている着物の女が母だとわかった。その母の顔には、痛ましい痣があった。顔の半分を埋め尽くすほどの痣。

とても美しい人だった。とても綺麗な人だった。だからこそ際立つ醜い痣。

美花はその痣から視線を逸らした。

何を思ったのか、母は静かに笑った。

「さあ、こつちへいらつしやい美花」

はじめて母から名を呼ばれ、戸惑いながらも美花は母のすぐ前に正座をした。

母の手が伸び、美花の両手を優しく握った。

「逢いたかったわ」

「わたしもです」

「そちらのいるのがあなたのお姉さんの美咲よ」

「こんにちはお姉さま」

美花が笑いかけると、姉の美咲は不気味に笑った。

自分はあるな表情をしたことがない。あんな恐ろしい笑みを浮かべたことはない。だが、まるで鏡に映った自分を見ているようで、美花はとても恐ろしく感じた。

そう、まるで自分の裏の顔を見てしまった気分だ。

顔は同じなのに、そこにいるのが姉だと信じる事ができない。

中身が違いすぎる。直感的にそう感じられた。

母は美花の手を愛でた。

「綺麗な手……美咲にそっくりだわ」

そう言いながら母は美花の手を自分の頬にこすりつけた。そこはあの醜い痣がある場所。美花の手の甲に伝わるざらざらした感触。鮫の肌を触っているような感触だった。

母が為すがままに美花は自分の手を委ねた。

しかし、母の舌が手を這って、指を口に含むうとした瞬間、急に美花は手を引いて逃げた。

驚いた美花の顔を見ながら微笑んでいる母。その傍らでは美咲も不気味に笑っていた。

同じ血を引いている肉親の筈なのに、まるで蚊帳の外にいるような気分を美花は味わった。

美花は不安だった。

もう叔父夫婦の家に帰ることはない。今日からこの屋敷で暮らすことになる。この家に馴染むことができるか不安だった。

積もる話もいろいろあつたが、美花はなにか話していいのかわからない。向こうから投げかけられる言葉もなかった。

美咲は依然として不気味に笑っている。母は美花を見つめて微笑んでいた。

この場で戸惑っているのは美花だけのようだ。

母が静かに口を開く。

「まだ来たばかりで戸惑うのはわかるわ。でも大丈夫、あなたはわたくしの娘なのですから、すぐにこの家にも慣れるでしょう。美咲、この屋敷を案内してあげなさい」

「はい、わかりましたお母様」

「わたくしは用事があります。夕食の時にまた会いましょう」

静かな笑みを浮かべ、母はこの部屋を早々に後にした。

残された姉と妹。

緊張感が部屋を満たし、美花は息苦しさを感じた。

ゆつくりと美咲が立ち上がった。

「わたしに付いておいでなさい、屋敷の中を案内して差し上げますわ」

「はい、お姉さま」

同じ声音。同じ顔。しかし、同じ人間ではない。

この姉妹はまるで朝と夜。

夜はその闇の中に何を隠すのか？

美咲の微笑みは昏い陰を含んでいた。

「家の者にはもう会ったかしら？」

「菊乃さん以外にもお二人とすれ違いましたが、お名前までは聞く時間がなくて」

「すれ違った二人には何かされませんでしたこと？」

「いいえ、会ったのはたぶんわたしと同い年くらいのお手伝いさんと、その方が追いかけていた小さな女の子でした。お二人とも悪い方には見えませんでしたけど？」

「それは侍女の瑤子と、我が家で預かっている“るりあ”ね。会ったのがその二人でよかつたわ。この屋敷にはわたしたちに危害を加えるモノも多いから」

危害を加えるモノ？

わたしたちとは誰を示す言葉なのか？

それ以外にモノたちはいつたい誰なのか？

怖くて美花が問うことができずにいると、不気味に美咲は嗤った。

「目に見えるモノが全てではないわ。この屋敷は昔から怨念に血塗られているらしいから」

眼を剥いた美咲は狂気の相を浮かべながら嗤った。今まででもっともおぞましい表情。

背筋が凍りつく思いを美花はした。壊れている。

貴女は本当にわたしの姉のですか？

それはまるで禁忌の問いかけ。口に出すことは恐ろしい。

もしも“肯定”されてしまったら……。

思い描いていた世界。

思い描いていた姉の存在。

全てが音を立てて崩れそうだった。

その場に立ち尽くしていた美花に美咲が優しく微笑みかけた。

「どうしたの、行きましよう？」

その笑みはまるで別人のようだった。

平屋建ての屋敷だが、迷うほどの部屋数と入り組んだ廊下。

そして、昼だというのに仄暗い。

部屋の一つ一つを案内しては日が暮れるのか、それとも考えがあつての行動なのか、美咲は多くの部屋を素通りした。

二人は無言だった。

美花は口を開くことが恐ろしかった。

相手を知ることが恐ろしい。

相手の声を聞くことが恐ろしい。

その恐怖は根深く美花を侵食し、自分の声を聞くことすら恐ろしく感じられた。

赤い札の貼られたふすまの横を通り過ぎた時、美咲が声を潜めながら忠告をした。

「必要のない部屋には立ち入らないこと。決して開けてはいけないわ。うちの者でさえ絶対に入らない」

なぜとは訊けなかった。

美咲の足が止まった。

「ここがわたしの部屋、そして向かいがあなたの部屋よ」

そう言つてから美咲は美花の部屋を開けた。

張り替えたばかりの青い畳の香り。

何もない淋しい部屋。

雨戸も全て閉ざされ、光すらも遮断されていた。

美咲は押し入れを開けた。

「ふとんだけは用意してあるわ。他に必要な物は菊乃に申し付けるといいわ。彼女が町まで調達しに行つてくれるから」

「はい、わかりました」

二人は部屋を後にした。

廊下を歩いていると、駆け足の音が響いてきた。

あの少女だ。名前はるりあ。

美花は見てしまった。やはりるりあの頭には角のような物が

生えている。

るりあは急に反転して走り出した。

それを見た美咲は意地悪そうに言う。

「あの子わたしのことが嫌いな。わたしは別に嫌いではないのに」

本当にるりあが逃げたのかはわからない。

ただ、今に思えば少し怯えたような表情をしていたかもしれない。

るりあが廊下の角を曲がり、姿を消したと同時に小さく叫ぶ声が聞こえてきた。

すぐに角から姿を現したのは瑠子だった。

「あつ、美咲さまがお二人？」

美咲は意地悪そうに笑った。

「馬鹿ねあなた、わたしのこともわからないなんて、本当に頭が足りないのだから」

「申し訳ございません美咲さま。では、そちらにいらっしやるのが美花さまなのです。ね。ということは、もしかして先ほど私と会ったのは美花さまでしたか、着物がいつもと違うと思っておりました」

瑠子のはにかんで頬を赤らめた。

素朴な顔つき、柔和な笑顔、この場には似つかわしくない存在だった。

しかし、外の世界はどこにでもいる少女。

美花はほっと胸を撫で下ろした。ここに来てはじめて緊張の

糸が解けたかもしれない。

瑤子の背中にはるりあが隠れていた。怯えたような、威嚇するような、そんな瞳でこちらを見ている。

るりあは天井を眺め、急に逃げ出した。瞬時に美花も目をやめたが、そこには何もなかった。

瑤子は二人に頭を下げ、るりあを追って姿を消してしまった。多くの疑問を持ちながらも、美花は何一つ訊くことができなかった。

美咲が歩き出す。

「次は慶子先生に会いに行きましょう。先生は離れに住んでいるわ」

本館から渡り廊下で繋がっている別館。その別館にある部屋の一つを使っているのが慶子と呼ばれる部外者だった。

二人が部屋に入ると、読書中だった慶子が顔を上げた。

才色兼備を絵で描いたような眼鏡を掛けた女性だった。見た目から感じられる年齢は美花と美咲の母よりも上かもしれない。

「こんにちは美咲さん、そちらが美花さんね。よろしく、私は武内慶子たけうち。この屋敷の主治医で、美咲さんの家庭教師もしておりますの」

「はい、よろしくお願いします」

慌てて美花は頭を下げた。

内心で美花はほっとしていた。ここにも緊張せずに付き合えそうな人が居た。

部屋にはたくさんの本があった。壁一面本棚と言っている。

読書家なのか、ほかにすることがないのか。

美花が本棚を眺めているに慶子が気が付いた。

「本はお好きかしら？ 気に入った物があれば持って行っていいわよ」

慶子は木漏れ日のような優しい笑みを浮かべた。笑うと童顔に見える。

「はい、ありがとうございます」

「そんなに礼儀正しくしないでいいのよ。これから同じ屋敷に住むのだから、肩が凝ってしまうでしょう」

「でも年上の方ですし」

「うふふ、そんな小母さんに見えるかしら。静枝さんと比べたら十以上も離れているけれど、自分では若いと思っておりますの」

静枝とは美花と美咲の母の名。その母の年齢すら美花は知らなかった。

知らないことが多すぎる。

いや、この屋敷に謎が多いのかもしれない。

美咲の案内はここで終わりだった。

「家の者は慶子先生で最後よ。他にいとすれば招かれざる客か、棲み付いてしまっているモノたち」

それを聞いて慶子にはこやかに微笑んだ。

「そう言えば瑤子さんから聞いたのだけれど、最近食料がなくなっているらしいですわね。前からそういうことはあるけれど、最近は何に見えて減っているのか？」

美咲は頷き答える。

「ええ、きつと屋敷に忍び込んだ者がいるのでしょう。馬鹿な人間ね、絶対に出ることはできないのに」

「そう、死んでも出られないもの。あたしもここに来て十年ほどになるかしら、たまには外の土も踏んでみたいもですわね」

「先生はまだ良いですよ、わたしなんて生まれてから一度も屋敷から出たことがないもの。美花のことも羨ましいわ」

眼を向けられた美花はゾツとした。冷たい眼。呪われてしまいそうだった。

自分は姉に怨まれているのだろうか？

なぜ？

育った環境が違うから？

そんなにここでの生活は嫌なものだろうか。これからここで生活していけるだろうか。

嫌なのは周りの空気、それとも自分の気持ちか、とにかく拭いたくて美花は笑顔を作った。

「どうして外に出ないんですか、わたしと一緒にいるんなところへ行きましょう、お姉さま」

「本当にこれがわたしの妹なのかしら、腹立たしいわ！」

急に怒って美咲は部屋を出て行ってしまった。

なぜこんなことになってしまったのか美花はわからなかった。悲しかった、嫌われてしまったこと、自分が誰かを傷つけてしまったこと。全ては自分が傷ついてしまうから。

「わたし……何か言ってしまったのでしょうか？」

「出られないのよ、この屋敷から」

「どうしてそんな決まりがあるんですか？」

「決まりではないのですのよ、変えられない摂理とでも言うのかしら。この屋敷を出られるのは菊乃さんだけ。後で試して見るといいわ……ただし、外との境界線は怨念が強いから不要に近づくのは危険かも」

「話がよくわかりません」

「うふふふふ、本当に何も訊かされていないのね」

その笑いの奥に狂気を感じた。やはりこの女も異質だった。

慶子は悪戯に笑いながら話し続ける。

「貴女を育てた養父母も知らないのですから、訊かされていないのも当然かしら。あたしもこの屋敷のことは目に見えることしか知らない、知るつもりもないわ。知りたいことがあるのなら静枝さんにお聞きなさい、彼女もどこまで知っているのか怪しいものだけねど」

そう語って慶子は低い笑いを部屋中に響かせた。

怖くなつてきた美花は手に握った汗を着物で拭き、言葉を喉に詰まらせながらもやっと吐き出した。

「もう失礼します。姉を追いかけて謝りたいですから」

美花は逃げるように部屋を出た。

美咲を追いかけた気持ちがあった。

それと同時に会いたくない気持ちもあった。

それ以前にどこを探したらいいのか、道も何もわからないこ

の屋敷で、すぐに迷ってしまった。

周りの部屋の入り口には全て赤い札が貼つてある。いったいその先になにがあるのか、好奇心よりも恐怖が先に立つ。

静かな廊下を歩きたびに軋む音が鳴る。

廊下の先は光も届かない暗闇。

美花は息を呑んで足を止めてしまった。

聴こえたような気がした。

歩く音。

それも上を歩く音。

美花は天井を見上げた。

平屋建ての上に部屋はない。そこにあるのは屋根裏。そんな場所から足音が聴こえる筈がない。

しかし、美花はそれを完全に否定することができなかった。

先程の会話　忍び込んだ者がいる。

本当にそんな人がいるのか、いたとしても忍び込む理由は何か？

美花は考えないように首を振って思いを消した。

慶子も言っていた。『知るつもりはない』と。

そうだ、この屋敷には知らない方が多いのだろう。

いや、知ってはいけないのかもしれない。

廊下の向こうに光が見えた。

少し早足で歩くと、縁側に出ることが出来た。

外の空気、外の景色、夕焼けの空。

ここから見える世界が全てではない。庭の先には高い垣根が

あり、その先に世界は広がっている。

今日から垣根の中が美花の世界になってしまふのだろうか？

本当に外に出ることができないのか？

縁側の先に草鞋わらじが並んで置かれていた。迷うことなく、考えることもなく、自然と美花はわらじを履いて外に飛び出していた。

美花は外の世界に向かって走り出した。

垣根がどんどん近づいて来る。

どうして外に出てはいけない決まりがあるのかわからない。

だって、あんな人の作った垣根なんて、すぐにでも飛び越えられそうなのに。

急に美花の足が止まった。

「……何これ？」

気持ち悪い。

胸の底から湧いて来る気持ち悪さ。

頭も痛い。

誰かが美花の足を触った。

すぐに地面を見るが、居る筈がない。

誰かが美花の背中を、胸を、腹を、尻を、舐め回すように触った。

これが境界線の怨念？

美花は泥のような汗を流しながら外に出ようとした。

自分の背よりも高い垣根だが、越えられない筈がない。目の前に、目の前にあるのに越えられない筈がない！

「きゃー！」

一瞬のことで美花にも何が起きたのかわからなかった。気づいたら垣根は手の届かない遥か遠くにあった。

そんな筈はない。垣根に手を伸ばし、あと少し、あと少しで手が届いた筈なのに。

身体中を濡らす油汗。

不快な気持ちなのは汗だけのためではない。まだ鮮明に残る身体を触れられた感覚。

「本当に外に出られない」

それは誰かが決めた掟ではなかった。出ようと思っても出られないのだ。

美花は自分に起きたことを思い出す。

垣根に触れようとした瞬間、後ろに引かれたのだ。それはまるで身体を縄で縛られ、急に後ろへ引かれたような感覚。とても争うことすらできない力だった。

もう一度試す勇氣は起きなかつた。

後ろを振り返ると大きな屋敷がある。

どうしてか屋敷の中に入る気にもなれなかつた。

怖いのだ。どちらも怖い。

垣根に近づくことも、屋敷の中に入ることも、どちらも怖かつた。

そして、この場でじっとしていることも怖く感じ、美花はどこに行くでもなく歩きはじめた。

屋敷を囲む大きな庭。庭といっても庭園ではない。木もなけ

れば草もない。枯れた大地が延々と続く庭。

玄関からは裏手になるのだろうか、そこには小さな祠があった。

小さな鳥居から続く石畳の道。その先に祭られているモノが何なのか、美花がわかる筈もなかった。

誰かの気配がした。

祠の陰からるりあが現れ、すぐに逃げようとしたのを美花が止めた。

「待って」

るりあは背を向けたまま足を止めた。

思わず呼び止めてしまったが、何を話しているのかわからない。

美花が困っているとるりあが振り向いた。

「お前誰だ、美咲じゃない誰だ」

少し片言のしゃべり方だった。

美花は相手を怖がらせないように、精一杯の笑顔で答えた。

「わたしは美花です。今日からこの屋敷でお世話になることになりました」

「お前美咲に似てるな」

「はい、双子の妹なんです」

「ならお前も嫌い」

るりあは走り去ってしまった。

嫌われてしまった。

何も知れない筈なのに、双子だというだけで嫌われてしまっ

た。

姉はそんなに嫌われる存在なのだろうか？

その答えを美花は出すことが出来なかった。きつと答えは出ている筈なのに、自分が姉をどう思っているのか、その気持ちに気づいている筈なのに、答えを出すことは絶対に出来なかった。

光と影。

同じ姿かたちをした存在。

美咲を否定することは、自分の存在も否定しているようであった。

恐ろしい美咲の表情を思い出す。あんな表情を美花がしたことはない。けれど、同じ顔ならば出来る筈。

自分の中にもあんな狂気が存在しているのだろうか？

恐ろしくたまらない。美花は胸が苦しくて気分が悪くなった。その場にしゃがみ込み、自分の体を抱いて震える。

「……わたしも……わたしは人間じゃない……お姉さまを見ればわかる……わたしも人間じゃないんだ」

認められない。認めたくない。

物心が付けば自分でも気づいてしまった。周りの子供と自分が違うことに気づかない筈がない。

友達に気づいていただろうか？

その点は養父母が気をつけてくれた。おそらく美花に気を使ったのではなく、自分たちが迫害されるのを恐れてだろう。数年おきに引っ越しを繰り返した。

悪魔の子。

今なら確信できる。影でそう囁いていたのだ。涙が零れ落ちた。

止まらない、止まらない、涙が止まらない。

溢れ出す涙は枯れた地面に吸い込まれる。

「……死にたい」

この屋敷にも馴染める気がない。かと言って養父母のところには帰れない。彼らはきつと喜んで美花を手放したのだ。

帰るところはどこにもない。

ふと美花の脳裏に浮かぶ自分の顔。違う、それは美咲の顔だった。

自分と同じ顔を持つ存在。

背格好も同じなら、アレも同じ筈だ。そうでなければ、姿かたちが同じの筈がない。

美咲との距離は近づいては離れ、離れては近づく。

はじめて姉の存在を知ったときの歓喜。思いを馳せた。

しかし、実際に会ってみると想像とかけ離れた存在だった。

そこにあつたのは恐怖。

でもアレの呪縛に姉も苦しんでいると思うと、美花は親近感と悲しみを共有できるような気がした。

美花は涙を拭いてゆっくりと立ち上がった。

今なら屋敷の中へ足を踏み入れることができそうだった。

食卓はとても淋しいものだった。

侍女の菊乃と瑤子は主人たちと食卓を囲むことはない。るりあも姿を見せない。

淡々と箸を進め、私語を慎み、三人だけの食卓。食器の音すら立ててはいけない雰囲気だった。

この場に美花がいなければ、もつと淋しい食卓なのかもしれない。それとも、そんな感情すら抱かないのだろうか。

山里にある偏狭の村だが、食卓には生鮮野菜や新鮮な魚が並んでいる。魚は川魚だが、いったい誰が届けてくれているのだろうか？

この屋敷を出ることは出来ない。

出られるのは菊乃だけと聞いたが、全て菊乃が調達して来るのだろうか。疑問は尽きない。

美花は赤いお吸い物を口に運び、一番遅く食事を終えた。

全員の食事を終わったところで静枝が席を立つ。

「美咲さん、美花さん、あとでわたくしの部屋に來なさい」

静枝は姿を消した。

美咲も美花に微笑みかけて姿を消した。

片づけをはじめめる菊乃と瑤子。

慌てて美花も手伝おう茶碗に手を伸ばした。

「わたしも手伝います」

しかし、菊乃が茶碗を先に取った。

「わたくしたちの仕事でございます」

無愛想に菊乃は食器を運んでいってしまつた。

少し哀しそう顔をした美花に瑤子は笑いかける。

「美花さんは何もしなくてもいいんですよ。そのためにあたしたちがいるんですから」

「でも、そういうの慣れていなくて」

「大丈夫です、すぐに慣れますよ！」

「はい、そうですね」

本当に慣れることができるのか、美花は自信が持てなかった。

美花は後片付けを終えた瑤子に静枝の部屋まで案内してもらったことにした。

日中の間でも暗い屋敷内は、黄昏時を過ぎるとその不気味さを増す。

行灯の光は廊下の奥まで照らしてはくれない。

美花は会話が途切れぬように努めた。

「瑤子さんはここに来て長いのですか？」

「いえ、まだ三年です」

「三年は十分長いと思います。その前は何をなされていたのですか？」

「実は覚えてないんです。行き倒れになっていた所をこの人たちに助けていただいたらしくって、それ以前の記憶は何も」

瑤子の年齢は見た目から察すると美花と同じくらい。まだまだ若い十五歳前後くらいに見える。三年前の瑤子もつと幼かったのだらう。そんな歳からこの屋敷に住み、奉公していると考えると、心中を察したくなるが、瑤子の表情に悲壮の欠片もない。

こんな場所でなぜ屈託のない笑顔で居られるのか？

他の者の笑顔は皆、どこか壊れていた。

美花は訊かずには入れなかった。

「ここを出たいとは思わないのですか？」

「思いません。ここはあたしの家なんです、ずっとずっと昔から住んでいるような、とても愛着のある住処ですから」

「そうですか……」

瑤子を見習わなければならぬと思った。この場所でもそんな笑顔で笑えるように。例えどんな場所でも、己の心構え一つで変わるのだ。

二人が廊下を歩いていると、暗闇の先に物陰が見えたような気がした。驚いて美花は瑤子に顔を向ける。

「今、誰かいませんでしたか？」

「そうですか、あたし鈍感なんでわからないんです。他の人たちはみんな感じてみたいんですけど」

この話を追求していいものなのか、けれど瑤子の口調からはまるで恐怖を感じない。日常的で当たり前のこと、そこに何も恐れることはない。

美花が黙っていると、瑤子が悪気なく話しはじめた。

「るりあちゃんが一番良く見えているみたいです。そこら中にいるみたいで、いつも怖がつて屋敷の中を走り回ってるんです。でもあたしはソレに何か危害を加えられたことはありませんし、たまに物音が聞こえるくらいで、ぜんぜん怖いものだとは思ってません」

「危害は加えないのですか」

では、いったい美花の足を掴み、躰中を舐め回すように触れたモノは何だったのか？

あれは危害と言わないのだろうか。

それからすぐに静枝の部屋の前まで来た。

「では、あたしはこれで」

軽く会釈をして去ってしまおうとした瑤子。

独りにされるのは心細かった。部屋の中には静枝がいる。けれど、そこに入っても美花は独りだった。

この屋敷で唯一心を許せる存在。

美花は手を伸ばした。

「待つて」

その言葉をやっと言うことができた。

「何でしょうか？」

柔らかな顔で瑤子は振り返った。その顔を見ると安心できる。

「あの、ここで待つていてくれませんか。わたし自分の部屋にもまだ独りじゃ帰れなくて」

「あはははは、この屋敷は大きいですからね。大丈夫ですよ、ここでお待ちしております」

にこやかに笑いながら瑤子は廊下で待つていてくれることになった。本当は部屋の中まで付いて来て欲しかった。けれど、それは無理な話だろう。

美花は緊張した面持ちでふすまを開けた。

部屋の中には二つの影が正座していた。静枝の他に美咲がすでにいたのだ。

ふすまを閉めて部屋に入った美花は、用意された座布団の上に正座した。

静枝が微笑みながら口を開く。

「二人とも良く聴きなさい。これから話すことは二人の命に関わることよ」

美咲の目つきが少し鋭くなった。美花もまた、少し驚いたように瞳を大きくした。

静かな、それでいて恐ろしさを背負う静枝。口を挟む隙をまったく見せず、二人を見据えながら話を続ける。

「美咲さんはもうわかっていると思うけれど、美花さんも気づいているかしら。貴女方とわたくしの違い。わたくしの見た目はそうね、二五歳前後……実年齢は数え年で十九歳」

若く妖艶な母であったが、見た目よりもさらに実年齢が若い。そして、もっとも問題なのは、双子の姉妹の見た目は十五歳前後。

十九歳の女が十五歳の子を持てるものなのか？

本当は実の母子ではないのか、その疑問を持つのは当然かもしれない。だが、姉妹がその疑問を持つことはない。

静枝は淡々と言う。

「貴女方の見た目は十五歳前後、そして数え歳は七歳。それがわたくしと貴女方の明確な違い」

二人の姉妹は二倍の速さで成長し、老化していたのだ。

そして、これが重要な一言だった。

「わたくしはその呪縛を絶った」

つまりそれは静枝もまた、過去に姉妹と同じ運命を背負っていたのだ。

二倍で老化していく恐怖。

通常の間人よりも死を身近に感じ、特に“外”で育った美花はそれを強く感じていた。

美花は決して口を開ける状態ではなかったが、美咲は堂々と口を開いた。

「それはお母様が行っているアレと関係あるのでしょうか？」

「アレ？」

少し惚けた様子で静枝は答えたが、美咲は凜として核心を迫及する。

「わたし知っておりますのよ、お母様と先生が何をしているか」

「何かしら？」

「人間を解体して丸ごと喰らっているのでしょうか？」

「ふふふふ……きゃははははは……やっぱり気づいていたのね、お利巧さんだこと」

「そして、喰い切れない肉は食事に混ぜてわたしたちに喰わせていたことも。今日の夕食にも混ぜていたのでしょうか？」

それを横で聞いていた美花は口に手を当てて吐き気を催した。美花を見て鼻で笑う美咲。

「馬鹿ね、人間の血は呑めるのに、肉は喰えないの？」

「……だって……それは」

仕方なかった。

仕方なく人間の血を飲んでいた。

それが嫌で嫌で堪らなかつた。

クツクツと嗤いながら静枝は話を戻した。

「人間の血を浴び、肉を喰らうのは美容のために過ぎないわ。

貴女方は動物の血、特に人間の血を飲まなければ、老化の早さがさらに加速する。何もしなければわたくしよりも早く死ぬでしょうね」

では、どうやって静枝はその呪縛を断ち切つたのか？

「貴女方が呪縛を解くためには、人間を喰らうしかない」

静枝の言葉に気性を乱して美咲が食つて掛かつた。

「それでは無理とご自分で言つたではありませんか！」

「そんなことは言っていないわ。たしかに貴女方がわたくしと同じように人間を喰らつても呪縛を解けない。そう、同じでは駄目なのよ……」

美咲と美花は息を呑んだ。

そして、静枝はこう断言した。

「片割れを殺し、肝を喰らいなさい」

寒気と静かさが部屋を包み込んだ。

数刻の沈黙。

美花が大声で叫ぶ。

「できません！」

それは姉妹で殺し合うということ。同じ顔を持った相手を自らの手で殺めるということ。

精神的な自分殺し。

美咲は静かな表情をして、口を開く気配すら見せなかった。

静枝は自らの顔に残る醜い痣に触れながら遠い目をした。

「わたくしにも姉がいたわ。別々に育てられ、出逢ったその日に殺せと言われた。代々我が家系は双子の姉妹が生まれ、同じ事を繰り返してきたらしいわ。だからわたしは姉を喰らって生き延びた」

そんなこと美花にはできなかった。

「姉を殺すなんて、できるわけない……」

涙ぐむ美花に静枝は頷いて見せた

「わたくしもそうだった。わたくしも美花さんのように外で育てられたから。別々に育てられるのが掟なのよ、双子に優劣を生むために」

微かに美咲の耳が動いた。だが、口を開かず無言のまま。

涙を流して躰を震わせる美花。

無言のまま動じない美咲。

別々に育てられた双子の姉妹。

美花は涙を拭った。

「やっぱりできません。そんなことしなくても、まだ三十年……四十年は生きられる。お姉さまを殺めてまで長く生きたいとは思いません」

美咲も頷いた。

「そうね、長生きなんて興味ない。この鳥籠の中で何十年も生きなくてはいけないなんて苦痛だわ」

美咲の言葉に美花は心から安堵した。殺し合いをしなくて済

む。

決して母を軽蔑しているわけではない。生きること執着するのは動物の本能。

でも、姉妹で殺し合うなんて間違ってる。

美咲は席を立てて部屋を出ようとした。

すぐに静枝が呼び止める。

「待ちなさい美咲さん」

「まだ何か？」

「話は終わっていないわ」

「もう済んだでしょう」

「いいえ、まだ終わっていないわ」

美咲は座布団に再び座ろうとしなかったが、足と止めて静枝の話に耳を傾けることにした。

静かに語りだす静枝。

「先程、三十年と言ったわね。このまま二倍の速さで老化が進めばそうでしょう。しかし、過去に殺し合いをせずに生きようとした者がいたそうだけれど、数年と経たずに死んだそうよ。

ちようど十歳になったとき」

あざ笑うかのように美咲は反論する。

「ただの偶然でしょう」

「違うわ。この呪縛は体質ではないの、呪いなの。争うことのできない呪いなのよ。双子の血が途絶えても、一族のどこかで双子が生まれ本家の養子となる」

「だからどうしたって言うの。別に構わないわ、あと一、二年

で死のうと」

美咲はふすまを開けて部屋を出て行った、今度は止める間もなかった。

残された美花もゆっくり立ち上がり、涙を堪えながら部屋を出た。

冷たい廊下では瑤子が待っていてくれた。

美花は膝から崩れ落ちた。それを抱き支える瑤子。

「大丈夫ですか美花さま」

「……………」

美花は無言のまま、ただ涙を零した。

瑤子は夜空の下で火を焚いて湯を沸かしながら、風呂場の中にいる美花に声をかけた。

「お湯加減はいかがですか？」

檜の湯船に浸かっている美花は柔らかな顔をしていた。

「はい、良い湯加減です……あっ！」

「どうなさいましたか!？」

「いえ……なんでもありません」

美花の視線の先、湯煙の先に立っていたのは美咲だった。

包み隠さず裸体を晒す美咲。発育途中の身体だが、腰はくびれ、尻は張りがあり、胸は小振りながら御椀型で美しい。

その裸体を見ることが　いや、見られることが美花は恥ずかしくなった。

美花が視線を背けたのに気づいて美咲は微笑んだ。

「自分の躰には見慣れていてるのではなくて？」

「恥ずかしいものは恥ずかしいですから」

「女同士よ。あと、双子なのだから、その口調はやめてもらえないかしら？」

「ごめんなさい、こんなしゃべり方しかできないんです」

この口調は養父母に対するものと同じだった。美花は友達の接し方も知らない。自分と周りが違うと感じはじめたころから、友達や周りの人たちと距離を置くようになったからだ。

美咲は湯船からお湯を桶に取り、背中に湯を浴びた。

身体の曲線を滑るお湯。白い肌は水を弾き、ほんのりと桜色に染まった。

美咲は湯船につま先をつけた。そのまま滑らかに湯に体を沈め、美花と向かい合った。

真正面から向かい合う双子の姉妹。まるで鏡に映っているようだ。

湯に緩やかな波を起こしながら美咲が美花に近づいた。

「本当に鏡を見てみるみたい」

美咲の指先が美花の頬を撫でた。

鼓動を乱しながら美花はただじっとしたまま、美咲にされるがまま躰を預けた。

繊細の指先は頬をなぞり、耳、首、肩、鎖骨、一つ一つの部位を確かめるように、美咲の指は細やかに肌を滑る。

そして、形の良い胸が包むように触られた。

「そこは触らないでください」

頬を赤らめながら美花は顔を背けた。

「自分の臍を自分で触っていると思えば恥ずかしくないわ」

「そんなことを言われても……嗚呼っ」

胸を強く握られた。

そのまま胸を揉みしだかれ、美花は抵抗しようともがいた。

しかし、美咲はそれを許さず無理やり美花を押さえつけ力を込める。

水飛沫が散り、美花の口に湯が入る。

「お姉さま……やめ……」

揉み合う間に美花は頭まで湯に沈み、口から気泡が漏れ、足をばたつかせた。

中の騒ぎを聴いて目を丸くした瑤子が窓から顔を出した。

「どうなさいましたか？」

「いいえ、別に何も無いわ」

美咲はにこやかに答えた。

その腕にはぐつたりと首を垂らした美花が抱かれていた。

「少しじゃれ合っていたら度が過ぎてしまったのよ。美花は湯にのぼせてしまったみたい、運ぶのを手伝って頂戴」

「はい、今すぐそちらに向かいます」

瑤子が窓から姿を消すと、美咲は美花の頭を愛しそうに撫でて微笑んだ。

暖かな温もり。

人肌の温かさだった。

美花が目を覚ますと目の前には美咲の顔。

「お姉さま……」

「目が覚めたようね」

美花の頭を撫でながら、美咲は膝枕をしていた。

ここは美咲の部屋。

とても質素な雰囲気で、家具は最低限必要な物だけ。

鏡台に映る二人の姉妹の姿は、母と子の様でもあった。

愛しい顔をしながら妹の髪を撫でる姉。

膝枕で安らかに心を落ち着かせる妹。

しかし、美花はふと恐怖に駆られてしまった。

意識を失う前の出来事。

浴槽に強い力で沈められ、もがけばもがく程に口に浸入して来る水。咳をすればさらに苦しくなった。

美花は躰を強張らせた。

だが、そんな美花を見守る美咲の瞳。とても和やかな瞳だった。

「ごめんなさい美花」

「どうして謝るのですのか？」

「妹への接し方がわからないの。とても嬉しい出来事なのに、その気持ちをどうやって表していいかわからなくて、だから風呂場ではあんなことになってしまっただけで、決して貴女を傷つけるつもりはなかったのよ、愛しい妹だもの」

「……お姉さま」

美咲のことを誤解していたのかもしれない。

はじめの印象はとても恐ろしいものだったが、今はとても温かい。

きっと、姉も接し方のわからない人なのだ。

生まれた時から、この屋敷で育ち、外との交流もなく、毎日顔を合わせる限られる人々。

絶的な主従関係ばかりのある世界。母と子、主と侍女、教師と教え子。同世代の友達など一人もいなかった。

姉もまた、疎外感を感じていたのかもしれない。

美花がにこやかな顔をして美咲を見つめた。

「わたしにお姉さまがいると知った時、とても嬉しかったです」

「こんな姉で幻滅したかしら？」

「いいえ、これからも一緒に生きていきたい」

「そう、永久に過ごしましょう……二人で」

二人は同じ部屋で眠ることにした。

美咲の部屋に並べて布団を敷き、姉妹揃って床に就く。

部屋を淡く照らしていた行燈が美咲の息によって吹き消された。

静かに眼を瞑る双子の姉妹。

安らかな吐息。

静かな夜。

そして、暖かな布団。

美咲は静かに手を伸ばし、美花の手を握った。

驚いた顔をして美花が首を横に向けると、美咲が静かな笑み

を浮かべていた。

美花はとても心が温かかった。

こんなに安心して眠れる日はあっただろうか。これからは姉が傍にいてくれる。心強く、愛しく、これから生きていける。

もしかしたら、一年か、二年先に死が待っているかもしれない。

長く生きられてもあと三十年余りの人生。

砂時計の砂は残り僅かかもしれない。

それでも姉がすぐ傍にいてくれる。

精一杯幸せな日々を生きようと美花は心に誓った。

美花の手が美咲によつて強く握られた。

絆。

その手を強く握り返そうとした瞬間、突然に美咲が覆いかぶさつて来た。

「わたしは永久に一緒よ。美花はわたしの身体の中で行き続ける」

冷たく静かな微笑。

美咲が背中に隠し持っていた短刀を翳した。

「お姉さま!？」

寝首を掻こうとした短刀を美花は手で受けた。

握られた手から滲み出す鮮血。

激しい痛みは胸まで届いて美花を困惑させた。

信じていたのに！

臓腑を抉られる程の裏切り。

憤りよりも悲しみが美花を支配した。

無我夢中で美花は暴れて足を蹴り上げた。

腹を押さえてよろめく美咲。

「よくも姉のわたしを蹴ったわね！」

「……だって……どうして……」

「死ね!!」

般若の形相で眼を剥いた美咲が襲い掛かって来る。

美花は逃げることにしかできなかった。

血が流れ出す手を押さえ、部屋を飛び出して廊下を必死で駆ける。

短刀を受け止めた傷は骨まで達していた。とても痛く、躰が芯から震え、涙も零れた。けれど、その涙は痛みよりも悲しみが零れたもの。

お姉さまはわたしを殺そうとしている。

死ぬことは怖くなかった。姉が傍にいてくれると思ったから。しかし、殺されることは怖い。

同じ顔をした者に殺戮され、腹を裂かれ肝を喰われる。考えるだけでぞっとする。

暗い廊下。

ほとんど何も見えなかった。

振り返ることもできない。すぐそこまで美咲が迫っているかもしれない。だが、振り向くことは恐怖で出来なかった。

助けを叫びたかった。

しかし、叫んだところで誰かが助けしてくれるだろうか？

双子が殺し合うことを知ってるのか、そんなことが行われるの
に知らない筈がないかもしれない。

助けを求めても裏切られたら？

この屋敷の中には誰も味方がいない。

美花は今日来たばかり。生まれた時からこの屋敷で育った美
咲とは違う。

広い屋敷と言っても逃げ場はどこにもない。

逃げ場の限られた閉鎖空間。さらに入りを封じられた部屋
ばかり。

走れば走るほど鼓動は高まり、血流が激しく全身を駆け巡り、
手から流れる血は止まらない。

廊下の行き止まりに来てしまった。

振り返るしかなかった。

意を決して美花は振り返った。しかし、眼は開けられなかつ
た。

今度は眼を開けられなくなった。一度恐怖で閉じられてしま
った眼はなかなか開くことができない。

視界を閉ざされた分、聴覚が鋭く研ぎ澄まされた。

空気が流れる音。

風が戸を揺らす音。

足音は……聴こえた。

美花は唾を呑み込んで、静かに目を開けて天井を見た。

足音は廊下から聴こえたものではなかった。屋根裏から聴こ
えたのだ。

この屋敷に棲むモノ。

何がそこにいる？

耳をさらに澄ますと、足音が近づいて来るような気がした。おそらく降りて来ている。階段を下りているようだ。

そして、近づいて来ていた。

逃げようと思つた。けれど、足が動かない。

広がる闇の先。そこは来た道を戻る廊下。その先には美咲がいるかもしれない。

確実に何かが近づいて来ている。

後ろだ、行き止まりの筈の木壁から、その先から下りて来る

微かな音が聴こえる。

微かな物音。

それが何かかわからず、美花は息を潜めて気配を探つた。

静かに開かれた。

そこは開く筈もない木壁だった。隠し戸になっていたのだ。

眼が合ってしまった。

美花は全身を凍らせて死を覚悟した。

男は瞬時に美花を取り押さえ、口を手で塞ぎ、その首に短剣を付きつけた。

抵抗する猶予すら与えられないまま、美咲は開いた戸の中に引きずり込まれた。

男は短剣を付きつけたまま、戸を閉めて木製の鍵を閉めた。そのまま美花は階段を登らされた。

屋根裏に存在していた部屋。

最低限の家具がここには揃っていた。

家の者はこの屋根裏の存在を知っているのだろうか？

知っているならば、とうにこの男は見つかっていただろう。

男は美花の手足を縛ろうとして、深く傷ついた美花の手に気づいた。

自ら着ていた長袖のシャツの袖を破り、男は美花の傷口に強く縛り付けた。

男は美花を縛り付けることをやめたようだった。美花も逃げの様子を見せない。怯え、床に座りじっとしている。

美花の前に男は胡坐あぐらを掻いた。

若い男だった。年齢はおそらく二十代後半、細身で色は白い。無精髭を触っている。人相はそれほど悪そうな人間には見えなかった。

「声を潜めて話してください。で、その傷はどうしたんですか
美咲お嬢様」

「わたしは美咲ではありません。妹の美花です」

「ほう、それは初耳です。でも嘘をついているとは思えない。見た目は似てるが、受ける印象がぜんぜん違う」

「わたしをどうするおつもりですか？」

「考え中」

男は短剣を持ったままだ。

「それでわたしを殺すのですか？」

「あなたが俺……私を殺すのであればそうしますがね」

「そんなこと……」

「やつぱりあんた、いや、あなたは美咲じゃないようですね。ここに棲んでる者は皆狂ってる、あなたと俺を除いてね」

男は短剣をしまつて歯を見せて笑った。その笑みはとても人懐っこいものだった。

「少しだけ美花の緊張がほぐれた。」

「あなたは誰なのですか？」

「私は、まあなんていうか、人の喜びそうな記事を書いて出版社に売り込みに行く職業つてとこですか。名前を言つてませんでしたっけ、立川克哉たちかわかつやつて言います。名刺は切らせてるんで、あと煙草も」

「今なら逃げ出そうと思えば逃げられるかもしれない。恐怖で躰が竦むこともない、恐怖がなくなったから逃げる必要がなくなつた。」

「克哉が隠れ棲んでいるのには理由が必ずある。発言からも伺えるが、ここの住人をよく思つていとは思えない。つまり、ここの住人に見つからないために隠れている。」

「美花も同じだった。もう外には出られない。克哉と同じ立場に置かれ、妙な信頼感も生まれはじめていた。」

「克哉が美花に手を伸ばした。思わずその手を美花は振り払つた。まだ完全に打ち解けたわけではない。」

「すまなそうな顔をして克哉は頭を下げた。」

「すまん。いや、傷がどうなつたかと思つて」

「こちらこそごめんなさい。大丈夫です、血は止まつたみたい

「ですから」

「深そうな傷だったが、やっぱりあなたも姉と同じで人間じゃないんですか？」

「わたしは……人間です」

自信を持って言うことはできなかった。

傷が治るのが人よりも早い。成長の早さが二倍ならば、治癒する早さも二倍だった。

「克哉は再びこの質問をずる。」

「で、その傷はどうしたんですか？」

「この傷は……」

実の姉に殺されたなんて言えなかった。今でも信じられない。でも、たしかに手に傷が残ってしまっている。

口ごもる不自然さを見逃さない克哉。

「この家の者だったら肉親でも殺しかねない。中でも人殺しを趣味にしているのが、ここの当主の鬼塚静枝おにづかと医者いしやの武内慶子。

おっと、静枝はあなたの母親でした」

美花は何も言い返せなかった。

さらに克哉は美花の心を揺さぶるような話をする。

「最初は行方不明者とこの屋敷の繋がりを調べて記事にしようと思っただんですが、この屋敷は俺を思っていた以上に恐ろしい。殺すばかりかそれを喰う女たち、角が生えた娘、屍体を平然な顔して料理する奉公人、かたつぽの奉公人は一見して普通に見えるが、探れば何か出てくるかもしれない。そして、あんたは人喰いの娘だ」

「わたしは……」

「そうだな、あんたも一見して普通だ。けど、美咲にそっくりなその顔、双子だろう。あの娘も狂ってる、この屋敷に迷い込んだ動物や虫を虐待して殺すのが趣味だ。あの調子だったら人間だって殺せるだろう、ただその人間が近くにいないだけ」

克哉は美花の傷ついた手の手首を握った。

「この傷は誰にやられたんですか？」

「これは……」

「私はあなたが敵か味方か見極めたいんですよ。もう記事を書くどころじゃない、私はここから生きて帰りたいだけです」

「その話をわたしにするということは、わたしを敵だと思わないということでしょうか？」

「世の中の裏も表も見えて来たんでね、少しは人を見る眼があるつもりです」

本当にこの男を信じていいのか？

疑えば切がなく、だからと言って信じきれものでもない。

この屋敷に来てから目まぐるしく回る世界。

思い描いた期待は全て裏切られた。

今、目の前に居る男もいつ裏切るかわからない。

しかし、美花には行くところがなかった。

養父母のところに行った頃も、美花は小さな世界の中だけで生きていた。そして、この屋敷の中だけの世界がはじまり、さらに世界は狭まり屋根裏だけとなった。ここを出ればいつ殺されるかわからない。

誰が敵か味方かわからない疑心暗鬼。

美咲と出遭えばすぐに殺されるだろう。

ここにいれば、この男は今すぐに美花を殺す気はなさそうだ。例え裏切られるとしても、今すぐではない。

美花は静かに口を開いた。

「お姉さまに襲われました」

「理由は？」

「……言えません」

おそらく動機は生きるため。片割れを殺し肝を喰らう。そうすれば死なずに済む。

それが本当なのか美花にはわからない。ただ、静枝はそれを信じ、美咲もそれを信じたのだろう。

美花が語らずとも克哉は勝手に推理をはじめた。

「新参者が現れたことへの嫉妬か、それは違うだろうな。この家は代々双子の姉妹が生まれるらしいですね、奇怪なことだ。

そして、どうやら双子の片方は十年もしないうちに亡くなっているらしい。それと関係あるんですか？」

「あなたはどこまで知ってるんですか？」

この男は何を知っているのか？

おそらく美花よりも多くの情報を握っている。美花はつい最近まで、本当の家族が生きていることさえ知らされていなかった。死んだと教え込まれていたのだ。

「さあ、それほど知りません。皆さん口はとても堅く、誰もしゃべろうとしない。だから、こうして屋敷に忍び込んだわけ

すが、どういうわけか外に出られなくなってしまうました」

「ごめんなさい、わたしも何も知りません。今日ここに来たばかりで、ここに来てから知ったことが全てです」

「でも自分のことはわかるでしょう。あなたも人よりも早く歳を取り、人の血を飲んで生きていますでしょう？」

「……はい、でもわたしは何も知らない。何でこんな身体に生まれてしまったのか、何で何でこんなことに……」

殺し合う運命。

美花には美咲を殺すことはできなかった。そんな恐ろしいことはできない。けれど、この屋敷の外に出る方法が見つかったとしても、逃げるといふ選択を選ぶだろうか。

美咲に襲われた時は咄嗟に逃げてしまったが、もしかしたら数年で死んでしまう美咲を置いて逃げることができるだろうか。

わたしが死ねば姉が長く生きられるかもしれない。

しかし、死は恐ろしい。

自分も死にたいわけではない。出来ることならば生きたい。

突然、何処かで大きな音がした。

何度も何度も打ち付けるような音。

それが止んだかと思うと、今度は階段を上る音が聴こえてきた。

行燈の光に照らされた狂気の顔。

「こんなところに隠し部屋があったなんて、お母様も知らなかったでしょうね」

姿を現したのは美咲だった。

その手で光る短刀は血で彩られていた。

美咲は深いため息を吐いた。

「きつと菊乃はこの存在を知っていたかもしれないわ。本当に使えない女、必要最低限のことしかしないのだから。あの馬鹿女のせいで、侵入者まで放置だわ」

美咲は鋭い眼付きで克哉を睨んだ。

克哉の警戒心は美花と出会った時と比べ物にならないほど強い。

「侵入者は殺しますか？」

「私は殺した覚えがないわ。気づくといつも気配が消えているの。きつと家に棲む何かが処分しているのね、悔しいわ」

「今まで覚えがなくても、機会があれば殺すと解釈しましたか？」

「そうよ！」

美花が短刀で切りかかる。

刃が交じり合った。

克哉が抜いた短剣が美咲の短刀を受けた。

二人の顔が互いの呼吸が聞こえる距離まで近づいている。

美咲が不敵に笑う。

「本物の男を見るのはこれがはじめて、それもこんな間近で見られるなんて。身体の隅々まで観察してみたいわ」

「それはお断りで」

克哉は交合う刃ごと美咲を押し飛ばした。

狂気に駆られているとはいえ、大の大人と少女の力の差は歴然。美咲は大きく飛ばされた反動で、近くにあった本の山に突っ込んだ。

大量の埃が舞う。

克哉が咳き込んだ。

本の山に埋もれたまま美咲は動かない。

美花は二人から眼を離せないで居た。

二人が争っている間に逃げる機会はいくらでもあった。けれど、多くの想いが重なって美花が逃げることができない。

倒れたまま美咲はいつこうに動かない。

不安と心配で美花は美咲に一步近づいた。

まだ美咲は動かない。

美花はまた一步だけ近づいた。

そして、もう一步、二歩……三歩。

美花が美咲に手を伸ばそうとした瞬間、その手を克哉が掴んだ。

驚いた顔をして美花を見ると、克哉は首を横に振って自らが美咲の様子を探ろうと近づいた。

まったく動かない美咲。

だが、その手はしっかりと短刀を握り締めていた。

気づいた克哉が避けようとした時は遅かった。

短刀は美咲の手を離れて宙を趨った。

眼を剥く克哉。その腹に刺さった短刀。

「糞ッ、俺としたことが……」

汗が滲む手で克哉は短剣を握り締め、倒れる美咲に突き刺さうと振り下げようとした。

美花が叫ぶ。

「殺さないで！」

未だに姉を庇う妹。

己を殺そうとする者を庇う心境。

克哉の手が鈍った。

その隙を衝いて美咲が動こうとするよりも早く、それは起きた。

克哉の身体が宙を浮き、突然に後ろへ引つ張られたのだ。

暗い闇の中に克哉が消えた。

そして。

「ギヤアアアアアツ！」

男の断末魔。

ぐりやりと肉が潰れる音。

骨が砕かれる甲高い音。

歯を鳴らしながら何かを喰らう音。

何が起きているのかわからない恐怖。

美花はその場に立ち尽くし、美咲ですら動くことを忘れた。

暗い闇の向こうに潜む者の影。

微かに見えるその姿は、手足が長く虫のように床を這う影。

美花の足元に何かが転がって来た。

恐怖の形相を浮かべ、こちらを見る男の顔 生首。

闇の向こうから糸のような物が飛び、男の生首を絡め取り再

び闇の中に引きずり込んでしまった。

「きゃあああああ！」

今まで腹の中に溜め込んでいた叫びを喉から出し、美花は周りを省みず逃げ出した。

もはやあの場所に美咲がいたことすら忘れ、ただひたすらに逃げることだけしか考えられなかった。

屋根裏を降りる階段。

美花は足を踏み外し階段を転がった。

膝を打ち、肩を打ち、腰を打ち、全身を強く打った。

最後まで転がって階段の下で美花は床に這いつくばった。

全身が痛かった。

それでも無理やり立ち上がり、ただ逃げようと必死だった。

足首が痛い。

あれだけ転がったのだ、怪我の一つや二つは当たり前だろう。

おでこに触れると、ねっとりとし生暖かい血が手に付いた。頭

も打っていたらしい。

全身が痛い。

それでも逃げなくてはいけない。

あの場所で何が起きたのか、闇に潜んでいたモノは何だったのか、そんなことを考える余裕すらない。ただ逃げた。

片足を引きずりながら美花は暗い暗い廊下をどこまでも逃げた。

どこに逃げたらいいのか？

逃げる場所などあるのだろうか？

道がわからない。

いったい自分がどこにいるのかすらわからない。

美花は廊下の突き当たりまで来てしまった。

足を止めたくはなかったが仕方がない。

早く別の道を探さなくては。

美花は来た道を振り向き、ここで急に冷静さが戻ってきた。

こんな闇の中を自分はどうやって逃げて来たのだろうか？

闇。

静寂。

聴こえるのは荒い呼吸と鼓動の音。

美花は息を静めようと口を閉じたが、余計に息苦しく鼓動が

高鳴る。

木が軋む音が聴こえたような気がした。

天井か、廊下か、それとも別の場所からなのか。風か、鼠か、

それとも人か。

美花は辺りを見渡した。

封じられた部屋。

赤い札で固く閉ざされた部屋。

また音が聴こえた。

廊下の先だ、誰かが歩いている。

美花の視線が泳ぐ。

逃げなくは、逃げなくては、早く逃げなくては……。

美花の手が赤い札を塗り取った。

そして、無我夢中で封じられた部屋に飛び込んだのだった。

戸を閉めて、息を潜める。

もともと静かな屋敷だったが、この部屋はもつと静かだった。畳が異様に冷たい。

流れる空気も氷のように冷たい。

棺桶のような場所。その表現がもつとも適切かもしれない。

この場所では何も生きていない。

場違いな生者の美花は息を呑んだ。

なぜ、この部屋は封じられていたのか？

締め切られた雨戸。そこから屋敷の外に出られるかもしれない。

屋敷の外に出ても、敷地内から出ることはできない。

それでも屋敷を出る。そして、敷地内から出る方法も見つけない。

雨戸にも赤い札が貼られていた。それも一枚、二枚ではなく、戸の隙間を塞ぐように貼られている。

その札の一枚に触れようと手を伸ばした時、風が流れた。

風など流れる筈がないのに、札が次々と揺れる。

部屋に明かりが差し込んだ。

急に美花の腕が掴まれた。

驚いた美花の瞳に映った無表情の少女 菊乃。

菊乃は何も言わず骨が折れるほどの力で美花を部屋の外に引きずり出した。

風 いや、唸り声。

部屋の奥から次々と声が上がった。

泣き叫ぶ女の声、怒鳴るような男の声。

菊乃はまったく動じず、戸を閉め赤い札で部屋を封じた。

そして、廊下に尻をついている美花に視線を向ける。

「封じられた部屋には決して立ち入り」

言葉の途中で部屋の中から戸にぶつかったような音を揺れ。

何かが戸を突き破ろうとしている。

二度、三度、大きな音を立てながら戸が激しく揺れた。

それでも菊乃はまったく動じなかった。

「時が来るまで決して封印を解かないでくださいませ」

「時？」

「中にいるモノが消滅するまで。美花様が開けてしまわれたので、五十年ほどまた封じて置かなければなりません」

「……ごめんなさい」

中に何が居たのか、なぜ封じて置かなければならないのか、漠然としつつも理由ではない。美花は理解できずとも話を受け入れることができた。

戸を揺らした音もいつの間にか止んでいた。

まだ廊下に尻をついていた美花に菊乃が手を貸した。

「夜はご自分のお部屋を出ることをお勧めいたしません。お部屋までご案内いたします」

出るなど言われても、居たくてこんな場所にいたわけではない。自分の部屋に戻ることも不安だ。

立ち上がった美花はその場から動くことができなかった。

「部屋には戻りたくありません」

菊乃は無言で美花を見つめた。美花が何も言わなければ、ずっとその瞳で見つめられていそうだ。

「部屋には戻れません。お姉さまが……お姉さまに会いたくありません」

菊乃から問うことはないのだろう。必要最低限の質問だけに答え、自ら相手に問うことはしない。菊乃はただじっと美花を見据えている。

美花の喉の奥に詰まっている言葉。

言わないのなら問わない。菊乃は歩き出そうとしていた。

「お部屋までご案内いたします」

行燈で照らされる廊下。

美花は歩けなかった。

「……お姉さまはわたしを殺そうとしています」

「知っております」

やはり、そのような大事が屋敷内で行われることを、屋敷の住人たちが知らされてしない筈がなかった。

美花は強く手を握り締めた。

「わたしはそんなことをしたくないのに。助けてください、助けてくださいお願いします」

「それはできません。わたくしが邪魔をすることは許されておられません。ただし、必要な物があればなんなりとお申し付けください、簡単な武器ならばすぐに調達いたします」

敵でも味方でもない。かと言って中立と呼ぶのも適切でないように感じる。

ただ美花は孤独だった。

顔は無表情なままなのに、菊乃が慌てたように美花に駆け寄った。

轟々と風が叫ぶ。

次の瞬間、戸が破壊され黒い風が封印された部屋から飛び出した。

美花を庇って菊乃が突き飛ばした。

黒い風が菊乃と衝突した。

風が叫ぶ。

菊乃の身体が飛んだ。まるで体重を感じさせない。廊下の中に行燈の光が飲み込まれていく。それは吹き飛ばされたというより、連れ去られたようだった。

追うべきか、追わざるべきか、美花は重い足を引きずって菊乃の後を追った。

暗い廊下。

美花は何かに躓いた。

廊下に転がるそれを見て、美花は全身を強張らせた。

それはまるで人間の腕だった。

美花は恐怖で顔を歪めながら逃げた。

一心不乱で逃げる美花の足にまた何かがぶつかった。見るのが怖かった。

美花は見て確かめることをせず逃げた。

しばらくして、前方に明かりが見えてきた。

行燈が床に落ちている。

それに近づこうとした美花の足が急に止まる。

行燈のすぐ近くに転がる何か。

こちらを見ている。

菊乃の見開かれた瞳がこちらを見ている。瞬きもせず、ただじつとこちらを見ている。

躰はない。

美花は急いで来た道を引き返す。

見間違えたかもしれない。しかし、近くでそれを確かめることはできなかった。

あまりにも恐ろしすぎる出来事。

嗚呼、どこに逃げても同じなのではないか？

美花の全身から力が抜けた。

壁に寄りかかり、冷たい廊下に尻を付ける。

もう立つことはできない。

一度、床に腰を下ろしてしまつたら、もう立ち上がるのは難しい。

ここで眼を閉じて視界から逃れてしまつたら、再び瞳を開けることは難しい。

しかし、眼を閉じ、今置かれている状況を忘れることができれば。

眼を開けた時、全てが悪夢だったなら。

美花は静かに瞳を閉じた。

その声がするまで、気配すら感じることはできなかった。

「お嬢様、どうかいたしましたか？」

おそらく、この声は瑤子のもの。

美花は目を開け、瞳孔を開いて絶句した。

それはまるで着物に咲いた花のよう。瑤子の前進は血みどろに汚れていた。

美花は息を呑んだ。

「ど、どうしたの？」

「驚かせてしまつて申し訳ありません。気づいたらこんな姿で廊下にひとり立っていたんです。急いで着替えようと思ひまして部屋に戻る途中、お嬢様の姿が見えたので……美花お嬢様ですよね？」

「はい、美花です」

「よかつた、ちゃんと見分けがつくみたいです」

につこりと瑤子は笑つた。

こんな状況でよくそんな笑顔ができるものだ。瑤子は美花の身に起こつたことを知らない。それを差し引いても、血で汚れた着物を自身が着ていて、恐怖に駆られたりしていないのだからか？

美花は恐る恐る尋ねる。

「その血に検討はないのですか？」

「さあ、何の血なのでしょう。よくあるんです、こんなこと恐ろしいことを平気な顔をしてさざりと言つた。

美花はぞつとせずにはいられない。

この屋敷の中で唯一親近感があつた瑤子。だが、やはりこの

娘も屋敷の住人。

「着物に血がついているのに、屋敷の誰も怪我をしてないんですよ。家畜を含めて誰も血を流す怪我なんかしていないのに、こつやつて着物に血がついてるんですよ、不思議ですよね」

それはいったい何の血なのか？

屋敷のモノの血ではない。屋敷に他人がいるのか、それとも血ではないのかもしれない。

現実を逃避して、これが悪夢であればどんなに心が安らぐことだろうか。

嗚呼、この生臭い香り。

瑠子が美花に差し伸べた手は赤く汚れていた。その手を取らずに美花は立ち上がった。

疑心暗鬼に駆られる美花の心。

目の前にいる瑠子を信じていいものか。

血だらけの女。いたいけな笑顔。心の奥まで見ることは叶わない。

いつ裏切られるのか。

信じたい。

何かを信じたい。

屈託のない笑みを浮かべる瑠子。

「お部屋までご案内しますね」

そこが帰るべき場所とは思えず、美花は首を大きく横に振った。

「部屋には帰りません。屋敷の外に案内してもらえないでしょ

うか？」

「こんな夜更けに屋敷の外へ？」

「この屋敷にわたしの居場所はありませんから。姉に殺されるのも殺すのも嫌。もう決めました逃げる」と

なぜか瑤子は絶句した。なぜなら瑤子は知らされていなかったからだ。

「美咲さまに殺される？ そんな物騒なこと……… いったい何が？」

驚きに驚きで返す美花。

「聞かされていないの？ わたしたちが殺し合わなければならぬこと………」

「殺し合う？ どうしてですか、血の繋がった姉妹なのに、どうしてそんなことをしなければいけないのですか!？」

「わたしだってわからない。けれど姉はわたしを殺そうとしたの、それは起きてしまった事実、変えられない事実なの」

美花の躰に起こっている老化現象は事実。片割れの肝を喰らえば、それが止まるというのは不確定。美咲が美花を殺そうとしたことは事実。

殺すか殺されるか、それだけが選択肢ではない。美花は逃げることを選んだ。ただし、その選択が成就されるとは限らない。今のままでは決して成就されることはない。もつとも大きな問題は屋敷と外の世界の境界線を越えられないこと。境界線そのものに“何か”があるというより、あの感覚は引つ張り戻される感じだった。

瑤子は美花を屋敷の外に連れ出してくれた。玄関を通らずに渡り廊下から外に出た。

履き物を履く余裕はなく、素足だったが、それでも構わない。いつどこから美咲が、それとも別の“何か”が現れるともしれなかった。

巨大な屋敷を出て、庭先で瑤子の足が止まる。

「あたしはこれ以上進めません」

垣根はすぐそこだった。

「ありがとう」

と、美花は静かに言った。

瑤子に背を向けて走り出そうとした美花。その背中に声をかける少女。

「どこへ行くの美花、わたしを置いて？」

ぞつとして振り返ると、そこには美咲が佇んでいた。

なぜか哀しい表情をしている美咲。

「どうしてわたしを置いていこうとするの？」

「わたしを殺そうとしているお姉様がどうしてそんなことを言うのですか？」

美咲が美花を殺そうとしなければ、逃げる理由などどこにもないのに、なぜそんなことを言われるのかわからなかった。

最初から逃げようと思っていたわけではない。残される姉のことを考え、躊躇っていたときもあった。けれど、姉が自分を殺そうとする現実を前に、逃げずにはいらぬところまで追い詰められたのだ。

追い詰めたのは貴女なのに。

「わたしを置いていくの？」

美咲は言葉を繰り返した。

虚ろげな哀しみ。姉のそんな表情に美花とまどった。それは人を殺そうとする者の表情なのか。

しかし、虚ろなまま美咲はこう呟いた。

「……許さないから」

その声はどこまでも響き、美花の胸に突き刺さった。

短刀を握り直す美咲。

「逃がさないわよ、貴女だけ運命から逃れようとするなんて、わたしは絶対に許さない！」

狂気に染まった美咲は美花に飛びかかるようにする。その前に立ちほだかった瑤子。

「駄目です、こんなこと！」

「退きなさい！」

「きゃっ！」

美咲には瑤子を押し飛ばし美花を追い詰める。

もう逃げる道以外ない。美花は全速力で走り垣根に手を伸ばした 刹那。

体中を締め付ける糸。

夜の闇に光る銀色の糸が美花の眼にもすっかりと見えた。

糸は網の目のように、いや、逃げ場のない蜘蛛の巣のように、至る所に張り巡らされていた。

一心不乱で糸を振り払いながら美花は逃げようとした。

だが、糸は幾重にも美花の躰に巻き付き、決して逃がそうとはしない。

次から次へと飛んで来る糸。その糸の先にいる少女を美花は見てしまった。

嗚呼、何かに憑かれたように白目を剥き、糸を口から吐き出す瑶子の姿。

どうして、どうして、先ほどまで逃がそうとしてくれていたのに、どうして？

すべては嘘だったのか、また裏切られてしまったのか、美花は為す術もなく垣根から引き離された。

地面に這い蹲る美花を冷たく美咲は見下した。

「きゃはははは、この屋敷からは誰も逃げられないのよ。でも、やっとな逃げ出す方法がわかったわ。まずはあなたを殺して、次にあの怪物も殺してくれる！」

鋭い美咲の視線が瑶子に向けられた。

獣というより、それはもはや蜘蛛のような格好で、瑶子は地面を這いながら闇の中へと逃げてしまった。

月明かりに翳る美咲の邪悪な顔。

短刀の切っ先が仄めく。

美花は小石を砂ごと握って投げつけた。

美咲が顔を伏せる。その手は額に当てられている。

ゆっくりと退けられた美咲の手には、べっとりとした血がついていた。そして、眉尻の辺りから流れる鮮血。

冷たい風が流れた。

「よくも、よくもやってくれたわね！」

美咲が美花にのし掛かり馬乗りになった。

髪を振り乱しながら絡み合いもつれ合う双子の姉妹。

姉が上になり、妹が上になり、地面を幾重にも転がった。

いつしか星空は曇天に覆われ、夜更けだというのに空は赤黒く染まり、稲光が轟々と奔った。

泥だらけになりながら姉妹は必死の攻防を続けた。

上になったのはどちらか？

短刀が振り上げられた。それを持つ少女の顔に傷はない。

下になっている少女が嗤った。

「やりなさいよ、あなたにできるものならね！」

できなかつた。

美花は短刀を遠くへ投げ飛ばした。そしてうなだれた。

「こんなことしたくないのに……なんで」

「なんでなんて愚問よ、生きるためだわ」

「生きるために殺し合うなんて間違ってる」

「それは人間の理屈ね。ほかの動物は生き残るためなら家族も喰うわ」

「だからって……本当に相手を喰らえば老化が止まって生きられるとは限らない」

「そうね、すべて嘘かもしれないわ。でも、この屋敷にいればどんなことだってありえる。死んでから本当だったと気づいても遅いのよ、だから……わたしはあなたを殺す！」

下になっていた美咲が手を伸ばし、か細い美花の首を強く絞

めた。

声も出せないほどに絞まる首。

ふつりと切れる理性の糸。

恐ろしい鬼女の形相をしているのは美花。

美花は美咲の首を絞め返し、そのまま何度も何度も美咲の後頭部を地面に打ち付けた。

人形のように揺れる美咲の躰。

もう美咲の手は美花の首から離され、泥水に浸かっている。

それでも美花は美咲の首を絞め続け、頭を地面に打ち続けた。

土砂降りの雨、泣き叫ぶ雷光、美花の叫び声も涙もすべて呑まれた。

美花の腕が何者かによって強く掴まれた。

「なんてことを……」

悲痛な声を漏らしたのは静枝だった。

稲光に照らされた母の顔を見た美花は我に返り、頭から血を流す美咲の姿を見て絶叫した。

「いやあああああつ！」

そして、美花は気を失って泥の中に身を沈めた。

目を覚まさない二人の姉妹。同じ寝室で隣り合わせに寝かされている。

姉の美咲は頭に重傷を負いながらも、それは呪われた一族の力なのか、どうにか一命を取り留めた。しかし、まだ目を覚まさない。

頭から血を流し動かなくなった姉の姿を見て絶叫し、そのまま気を失ってしまった美花も、それからいつこうに目を覚ます気配を見せなかった。

部屋に差し込む優しい陽の光。

寝かされている二人の姉妹を見守っていたのは瑤子だった。すでに姉妹が目を覚まさないまま数日の時が流れている。その間、瑤子は二人の世話をした。躰を濡れ布で拭き、着物は毎日着替えさせた。髪も時間さえあれば櫛で梳かしていた。姉妹はとても安らかな顔をしている。殺し合っていたとは思えないその表情。

二人が目目を覚ました時、それはただの悪夢だったと思えばいいのに。

「またあとで来ますね」

につこりと微笑みながら瑤子は会釈して、静かに部屋を後にして行った。

それと入れ替わるように静枝が部屋に入ってきた。

静枝はまず美咲の傍らに膝をついた。

「愛しい美咲、早く目を覚ますのよ」

艶やかな髪を優しく撫で、麗しい瞳で愛娘を見つめた。

だが、その目はすぐに狂気を彩った。その視線の先に寝ているのは美花。

「すべてお前のせいよ、どうして潔く死ななかつたの。お前が死ねば美咲は生きられる、死ぬのよ、お前が死ぬのよ！」

静枝は隠し持っていた短刀を握り、美花の首を切ろうとした

時。

背中が急に熱くなり、全身に痛みが走った。

眼を剥きながら振り返った静枝が見た者は、包丁を持った菊乃の姿。

菊乃と静枝の躰が重なり合った。

包丁は再び肉を貫いた。

無表情な顔をして菊乃は何度も何度も静枝の腹を刺した。内臓はずたずたに傷つき、腹からは腸が飛び出している。

それでも静枝は死せることなく菊乃につかみかかった。いや、もたれかかったというべきか。

「どうして……わたくしは鬼頭家の当主……なぜ……？」

「貴女様は双子を産み落としたその日から、すでに当主ではございませぬ」

「そんな……やつと死ねる……ありがとう……ぐあっ」

首を捌かれ口から血の泡を吐いて絶命する静枝。

なぜ静枝は最期に礼を口にしたのか？

力なく転がる静枝の骸。

一つの生が失われ、双子の姉妹の臉が微かに動いた。

虚ろな瞳。

魂を悪夢の中に置いてきてしまった。

上体を起こして互いの顔を見合わせる姉妹。そこに感情はなかった。

ただ互いの顔を見つめたまま動かない。視線の先にいるのが双子の姉妹だということ理解しているのだろうか？

菊乃は感情のない顔で二人の姉妹に会釈をした。

「おはようございます、美咲様、美花様」

無表情の少女たち。傍らに転がる無惨な死骸。

その日の夕食。

食事を調理したのは菊乃だった。

食卓に料理を運びながら瑤子が尋ねる。

「今日はめずらしく豪勢ですね。肉料理がこんなにいっぱい顔を向けられて尋ねられた菊乃は何も答えなかった。」

それでも瑤子はしゃべり続けた。

「ところで奥様の姿が見えたらないんですけど？」

「この屋敷で人が一人二人いなくなつて不思議ではございません」

菊乃はにべもなくそう答えた。

食卓で虚ろな表情をする二人の姉妹。

美咲は頭を打つた後遺症で重度の痴呆となり、美花は精神的な衝撃から精神を崩壊させた。

二人が殺し合うことはもうないだろう。

瑤子が肉を箸で摘み美花の口へ運ぶ。

「いっぱい食べて早く元気になつてくださいね」
肉を租借する。

他の命を喰らい生き延びる。それはごく自然なこと。

二人の姉妹は虚ろなまま、それから数年の時が流れた。

数え年で十歳、それからまた一年、さらに一年。

姉妹は現実を忘れたまま生き続けた。

十歳になっても死ぬことはなく、呪いが嘘か誠か知る術はなかった。

ただ姉妹は生き続けているという現実。

そして、急速な老化も止まり、緩やかな成長をしているという現実。

姉妹の平穩はいつまで続くのだろうか……？

第二之世界　そこに棲むものたち

それは運命の糸を覗き見た末路。

男は尋ねた。

村人は答えず。

誰もが口を閉ざす呪われた一族の怪。

雑誌の取材だと説明すると、早く帰れと怒鳴られた。

そのような扱いをされると逆に興味がそそられる。

立川克哉はその屋敷に直接向かうことにした。

取材をしていた山里の小さな村からだいぶ距離があった。こんな場所に屋敷があつては不便だろう。狩人や農民であるなら自給自足もできるだろうが、立派な屋敷を見る限り、物資は遠方から運ばされているように思える。

そう考えると、新たな疑問が浮かんでくる。

こんな辺境でどのようにして生計を立てているのだろうか？

この辺りの土地を所有していて、あの里からの税収のような物があるのだろうか？

「……つたく、誰も取材に答えてくれないから、なんにもわからずじまいだ」

愚痴をこぼしながら克哉は屋敷に近付いた。

悪寒がした。

「嫌な感じの屋敷だ」

何がと問われると答えるのは難しい。大雑把に言えば雰囲気。

普段は無邪気な子供の笑い声も明るく聞こえるが、ここでのそんな声が聞こえてきたらぞつとする。

大きな正面門は固く閉ざされていた。克哉はそこから堂々とした中に入る気がしなかった。門を開けてもらうには人を呼ばなくてはならないが、まだ屋敷の者とは会いたくない。

まずは屋敷に周りを歩いてみることにした。
背の高い垣根が続いている。

垣根は唐竹で作られた格子の物で、四つ目の隙間から中のよすを伺うことができる。

庭には草木一つなく、枯れた大地が深々と広がっている。

屋敷は平家建て、雨戸などはすべて閉められ、閉鎖的な印象を受ける。見通しのよい格子とは対照的だ。

さらに進むと竹林が広がっていた。鬱蒼としていて、あまり進んで入りたいとは思わない。

道を戻り逆方向から屋敷の周りを歩いてみると、今度は崖がありそれ以上は進むことができなかった。

克哉は垣根に足を掛けた。体重を乗せても大丈夫そうだ。そのまま垣根を登った。

折り返して下りようとしたとき、足に何かがぶつかり掬われた!
た!?

「お…つと」

垣根から手足が離れた。

「うっ」

どしりと音を立てて克哉は腰から地面に落ちてしまった。

腰を押さえながら立ち上がって、周りを見回してみるが何もない。

見通しのよい何もない庭だ、屋敷の者が現れたらすぐに見つかつてしまう。垣根を越えて入ってくるような真似をしたのだから、こんなところで住人に見つかっては意味がない。

小走りで屋敷に近付いた。

固く閉ざされた雨戸。中からの気配はなく、静まり返っている。

どこか中へ侵入する場所はないかと歩き出そうとしたときがたつ、がたがたがた！

騒々しい音が中から聞こえてきた。

耳を澄ますと、すぐに音は聞こえなくなってしまった。

もうしばらく耳を澄ませてみたが、もう音が聞こえてくることはなかった。

見切りをつけてほかの場所へと移動する。

窓の一つも開いていそうだが、まるで空き家のように閉ざされている。

しかし、先ほどの音からわかるように、中に何者がいることは間違いないだろう。

屋敷の裏手まで来ると扉の開く音が聞こえ、克哉は慌てて身を隠した。

勝手口から出てきた侍女らしき少女。

機会は今しかないと思い、克哉は勝手口から屋敷の中に侵入した。

脱いだ靴を片手に持ち、早々に台所から立ち去る。

広い屋敷とはいえ、無闇に歩き回ればすぐに住人と鉢合わせしてしまうだろう。しかもまだ真つ昼間だ。さらに鉢合わせの危険性が高まる。

これだけ広い屋敷だ。あまり使われていない部屋があるに違いない。

廊下には余り長居をしたくない。気配がしたら近くの部屋に逃げ込みたいところだが、この場所ではそれも叶わないらしい。部屋の戸には赤い札が貼られている。それもそこかしこの部屋の戸だ。剥がして中に逃げ込めば一目でわかる。

それにしてもこの赤い札はなんなのだろうか？

自然に考えれば部屋の立ち入りを禁止しているのだろうが、部屋の立ち入りを禁止すること自体が自然ではない。それもそこから中の部屋だ。

多くの部屋が開かずの部屋となつていたら、開いている部屋に入った途端に住人と鉢合わせ、という確率が高くなる。広い屋敷でも、まるで狭い家にいるようなもの。こうやって屋敷の中を歩き回る危険性も高くなるということだ。

一步踏み出した廊下が酷く軋んだ。体重を乗せる度に静かな廊下に音が響き渡ってしまう。

その軋みが逆に克哉の身に危険が迫っていることを教えてくれた。

誰かが廊下を歩いてやってくる。まだ曲がり角の向こうにいるらしいが、このままでは鉢合わせだ。

慌てた克哉は辺りを見回した。札のない部屋だ。

この場に立って見て見つかるくらいなら、部屋に入った途端に住人がいても同じだ。

克哉は速やかに部屋の中に入り、静かに戸を閉めた。

少し安堵できた。部屋には誰もいなかったのだ。

しかし、安心してもいられないだろう。

廊下からはまだ音が聞こえてくる。この部屋に向かっているという可能性は十分に考えられるだろう。

隠れられそうな場所は押し入れしかなかった。

開けてみると布団などが収納されていた。葛籠などの箱がいくつか入っているが、少しどかしてやれば大人ひとりくらいなら入れそうだ。

克哉は急いだ。

部屋の前で足音が止まった。

静かに押し入れがしまるとほぼ同時に戸が開いた。

克哉は息を呑んだ。

ほんの少しだけ押し入れを開けて、部屋のように目を凝らした。

入ってきたのは少女だ。花の刺繍が施された着物を纏った清楚な少女。

少女は部屋でなにかを探しているようだった。

そして、克哉が隠れている押し入れに近付いてきたのだ。

もう一巻の終わりだと克哉は思った。

言い訳など役に立たないだろう。見つかったときは相手を押

し倒して一目散に逃げよう、とまで考えて覚悟した。

だがそのとき、部屋の戸が開き新たな少女が顔を見せた。克哉はその少女の顔を見て息を呑んで驚いた。今部屋にいる少女と瓜二つなのだ。

「美花いらっしやい、探し物が見つかったわよ」

探し物　少しどきつとする言葉だ。

美花と呼ばれた少女は、同じ顔をした少女と共に部屋をあとにした。

忘れていた呼吸を思い出し、克哉は大きく息を吐いた。

周りの気配を探りながら念のため少し時間をおき、それから押し入れから出た。

やはり屋敷の中を歩き回るのは難しい。せめて夜中になれば状況が変わるかもしれない。それまでどこかに隠れていようか？

押し入れに目をやる。布団が収納されていることから、寝室である可能性が高い。こんなところに隠れていては見つかってしまう。

克哉はさらに押し入れの奥を見た。押し入れの天井。天井裏なんて場所は人が来る場所ではない。いるとしたら鼠や蜘蛛くらいだ。

どうにか天井裏に隠れないものか？

克哉は押し入れの二段目によじ登り、布団を掻き分けるようにして天井を調べた。

天井が動いた。

外れたというよりは、まるで戸のように動いたのだ。はじめから屋根裏に入ることを前提に作られているかのようだ。

その意図的な仕掛けに不安を感じながらも、克哉は屋根裏へと登った。

ライターの火を灯す。

遠くまでは暗くて見通せないが、屋根裏は思ったよりも広かった。屋根も高く立って歩けるくらいだ。

足下には埃が溜まっている。

暗がりでは何かあるのかわからないので慎重に歩く。足下だけでなく、頭も気をつけなくては

いつ梁にぶつかるかわからない。

少しずつ目が慣れてきたが、それでもライダーだけの灯りでは心許ない。

驚くべき物を見つけて、出そうになった言葉を引つ込めた。

そこにあつたの部屋だった。いや、この屋根裏自体が巨大な部屋だったのかもしれない。

質素ではあるが家具一式が揃っている。どこれも埃を被っていて、長らく使われていないことは明らかだ。

ありがたいことにまだ使えそうな蝋燭もあつた。すぐにライターから火を移した。

蝋燭に火を付けると、先ほどよりも見通しがよくなり、小さな雨戸を見つけることができた。

雨戸に手を掛けるがなかなか開かない。

「くっ……この……っ!!」

勢いよく開いた雨戸。全体重を掛けて開けようとしたため、開いた反動で克哉は転んでしまった。

屋根裏に響いた大きな音。

克哉は身の凍る思いをした。

今さら息を潜めるが、鳴ってしまった音は消すことができない。

すぐに屋根裏に誰か上がって来やしないか肝を冷やす。

誰にも気づかれていないことを祈るばかりだ。

仕方がないので克哉は気を取り直すことにした。この屋敷のどこにいても気は休まらないのだ。

雨戸を開けるとさらに屋根裏は明るくなった。

息を止めて椅子に乗った埃を静かに払う。山盛りの埃を手から落としてから椅子に腰掛けた。

自然と溜め息が出る。

ズボンから出した煙草の箱は潰れてしまっている。残りは三本。いったん口に運んでから箱に戻そうとしたが、やはり口に啜えることにした。

ライターで煙草に火を付ける。

ふかした煙を雨戸の先に見える空に向かって噴き出した。

安堵と余裕が生まれた。

煙草を吸い終えたが灰皿がなかった。

まさか灰皿なんてないだろうと探してみると、別の物を見つけてしまった。

机の隅に黒く焼け焦げた箇所があったのだ。それは何度も熱

源を押しつけた点の集合体で、まさかと思いつながらも克哉はそこに煙草を押しつけてみた。すると同じような焦げ痕ができたではないか。

煙草を消すとちようど手の届くところにごみ箱があった。空だった中身に煙草を放り投げる。

屋根裏に棲んでいた住人に思いを馳せてみる。

もしも煙草を吸う人物だったとしたら、灰皿くらい用意しろと思うところだ。不精者が何かだったのだろうかと思いつながら、克哉は自らの顎に生えた無精髭を撫でた。

屋根裏の住人の人物像を探るにはまだ情報が少ない。

さつそく家具などを調べて見ることにした。

机には幾つもの引き出しがあった。全部鍵穴がついている。さらに鍵も掛かっていた。

筆筒も調べて見よう。

こちらにも鍵穴があった。そして、どれも開かない。

こんな場所、滅多に人の来る場所ではない。屋根裏なんかにある家具に鍵など必要だろうか。

それほど重要な物が中に入っている　としても、この全部にだろうか。

本当に重要な物がたくさんあるのか、それとも相当用心深いのか。

灰皿も用意していない人物が？

開かない以上はどうしようもない。壊してもいいが、価値が生まれるかどうかは壊してみないとわからない。それに壊すに

は一苦勞どころではない苦勞をしそうだ。

克哉は別の物を調べることにした。

置かれていた寢具はベッドだ。埃が酷くて今すぐ寝る気にはなれない。

どのくらいこの屋敷にいることなのか。それはまだ克哉にもわからなかった。

そう考えると休む場所が必要だ。

静かにベッドの埃を払うことにした。なかなか骨の折れる作業だ。

だいぶ時間が掛かった。目で見える上に乗っていた埃払うことができたが、寝た瞬間に埃が舞い上がりそうな気がする。両手も酷く汚れてしまった。手を洗いたいところだが、屋根裏には水道までは用意してなかった。

そもそも、この屋敷自体に水道が通っているとは考えづらい。克哉は普段の生活を思い出した。

三流ルライターで狭い共同住宅に住んでいるとはいえ、水道くらいはちゃんとある。食べ物だって自給自足ではなく、お金を出して買う物である。

とは言っても、幼い頃は田舎に住んでおり、水はいつも井戸からくみ上げていた。そのくみ上げを仕事をさせられていたのが克哉だ。

克哉は煙草を再び吸おうとして、どうにか堪えた。あと二本しかない。

「……まあ、住めば都か」

こんな屋根裏でも、長く住めば都かもしれない。

ただ、そんなに長居をしたいとは思わないが。

克哉はほかの場所に移動することにした。この場所は生活空間だろう。屋根裏のほかの場所には、またなにか別のものがあるかもしれない。

手に持てる蠟燭台を見つけた。蠟燭も設置してある。雨戸を開けて日が入ってきたが、奥はまだ暗闇だ。蠟燭台を持って行くことにした。

雨戸はほかの場所にもあった。

今度は慎重に開ける。また大音を立てて肝を冷やすのはごめんだ。

徐々に屋根裏の全貌が明らかになってくる。

本当に広い屋根裏だ。おそらく屋敷とほぼ同じ大きさだろう。もしかしてと克哉は思った。

屋根裏への道は意図的な作られていた。果たしてあの場所だけが出入り口なのだろうか？

この屋根裏からすべての部屋に行けるような気がしたのだ。埃が邪魔で足下がよく見えない。

さすがにこの広い屋根裏を掃除する気にはなれなかった。

出入り口がほかにあったとしても、これでは探すのに苦労しそうだ。

這いつくばって床を調べるなら、掃除したほうが楽そうだ。とりあえず足で少しづつ埃を払いながら進んでいく。

しばらくして、何やら床に書かれた白い模様を見つけた。

縦に三本の線。文字だとしたら“川”だろうか？
向きを変えて改めて見た。そうすると“三”のようにも見える。

さらにほかにも模様が描かれていた。ただの丸だ。これは見る方向を変えても丸は丸だろう。

目を凝らして丸を眺めていると、まるで夜空で微かに輝く星のような物が見えた。光が漏れている。埃を払って目を近づけた。

それは間違いなく穴だった。大きさは針穴よりは大きいがい、
だいたい錐で開けたくらいなものだろう。

さらに穴に目を目を近づけた。

見える！

かなり見づらいが部屋の中を見ることができた。

しかも部屋には誰かいるではないか！

物音一つ立ててはいけない。

克哉に緊張が走った。

なんとそこは浴室だった。

裸の女がひとり。歳はおそらく二五前後くらいに見える。

女はたらいの湯を肩から流した。

流れた湯の色が朱く染まる。

それを見た克哉は出そうになった声を慌てて呑み込んだ。

まさかと思いいながら確かめようがない。

怪我をしているのか？

綺麗な肩をしている。背中にも傷はない。では朱いそれはいつたい何なのか？

女は浴槽から湯を汲もうとした。

それを見た克哉は気づいた。

湯船が朱い。

その湯船につま先をつけた女。そのままゆっくりと朱の中へ全身を沈めていく。

このとき克哉ははじめて女の顔を見た。

顔の半分を埋め尽くす痛ましい痣。

その痣を持つ者がこの屋敷にいることを克哉は事前に知っていた。

この屋敷の当主　鬼塚静枝だ。

事前に持ち合わせている情報がいくつもある。そもそも情報の一つも無ければ、こんな場所でこんなことをしているはずもない。

鬼塚静枝は女だてらにこの家の当主であるという。噂によれば、そもそもこの家には男がひとりもないらしい。少なくとも見たと話は聞かなかった。

奇妙なこの屋敷の話。里の者が不気味がり、噂でも伝え聞いた情報によれば、屋敷の者はひとりを覗いて屋敷の敷地から出てこないのだという。

妖しげに思った者が何度かこの屋敷を調べた結果、庭先で何人かを見ることができたという程度。ただし、屋敷の中に入ったという話は聞かなかった。

敷地から出ないという行為は徹底しているらしく、住人が垣根越しに外の者と話しているのが目撃されたことがある。外に出ないだけではなく、外からも中に入れないという決まりもあるのかもしれない。

中に入ったという話は聞かないが、実際こうして克哉は入ることができた。敷地に侵入するだけなら、あんな垣根くらい簡単に越えることができる。恐ろしがって今までだれも入ろうとしなかったのか　いや違う。

今回、克哉がここに来た理由の一つ、それが行方不明者の捜索だった。

数週間前、克哉の友人のルポライターが失踪した。克哉に言い残した最後の取材場所は、ほかならぬこの屋敷だったのだ。

克哉が調べて見ると、過去にも同様の事件が起きていることがわかった。事件と言っても表沙汰にはなっておらず、噂程度のものであったが。

知り合いのルポライターは、取材に来たのだから屋敷の中に入っているはずだ。正面から行って断られても、きつとあいつだったら忍び込むだろうと克哉は思っている。

克哉はこの屋敷で知り合いのルポライターの痕跡、そして足取りを見つけ出したかった。

おそらく今すぐそこにいる当主である静枝がなにか知っているだろう。来たのであれば、そういう人物が来たという話くらいは聞いているはずだ。

しかし、正面を切って克哉は静枝と話したいとは思わない。

穏やかな噂を聞かないこの屋敷。不気味な屋敷の取材に来た知り合いが実際に行方不明になっている。

実はまだほかに克哉がもつとも危惧している悪い噂がある。屋敷の中に入ったという話を聞かないというのは、屋敷に入った者を見たという話ではなく、屋敷の中に入ったことがある者の話という意味だった。

つまり屋敷の中に入る者は目撃されているのだ。

ひとりを見て出入りをしていないということだが、もちろんその者のことを言っているのではない。

月に一度ほど、この屋敷にまとめて若い少年が入って行くのが目撃されている。何度も何度も屋敷の中に入って行く。だが誰も出てこない。今では屋敷の中は若い少年で溢れかえっているはずだ。

克哉がここに来てそんな気配しただろうか？

まとめてどこかにいるにだろうか？

噂によると、中に入った少年の数は優に百を越えているらしい。最近ではさらに加速して多くの少年が中に入って行くという話だ。

そんな多くの少年を集めていったい何をしているのか？

克哉は再び穴を覗いて湯船を見た。

朱い湯が揺れている。

静枝は腕をもみほぐしながら、その湯を練り込むようにしている。

その悦に入る表情がなんと艶やかなことか。痣までも美しく

見えてくる。

それ以上見ることを克哉はやめた。

気配を消して静かにその場から離れる。

しばらく次の行動に移らず、ただじつと立ちすくんでいたが、

一〇分ほど安いで再び動き出した。

床を注意深く探す。すぐにそれは見つかった。

横に線が二本。おそらく、「二」と書かれているのだろう。そ

してまた丸で囲われた穴があった。

次の穴を覗くのは少し勇気がいった。

意を決して覗くと、そこは脱衣所だった。ちょうどそこには

静枝の姿があり、着物に着替えている最中だ。

すぐに静枝は着替えを終えて出て行く。誰もいない脱衣所を

見ていても仕方がないので、眼を離そうとしたとき、また新た

な人物が入ってきた。

小柄な少女だ。おそらく格好からして侍女だろう。勝手口で

見た侍女とはまた違う少女だ。

艶やかな黒髪に陶磁器のような白い肌。仕事だからかもし

れないが、表情が無機質に乏しい。

なぜか克哉はその侍女に心惹かれた。

理由はさっぱりわからなかった。このような少女に何か思い

入れがあるわけでもなければ、今まで付き合ってきた女も年上

だけだった。それもだいたい年上の女が多かった。

侍女は服を脱がずに浴室へ入っていった。克哉は浴室の天井

に移動した。

先ほどは感じなかつた後ろめたさ。

静枝のときは嫌なものを見たという気持ちだつたが、今は悪いことをしているという感情が湧いてくる。

侍女はとくになにををしているというわけではない。浴室の清掃をはじめただけだ。それでも目が離せなかつた。

やがて清掃も終わり、脱衣所へ、そして廊下へ。移動する侍女を追いかけようとした。

新たな穴を探す。

穴はそこら中にあつた。おそらく全ての部屋にあるのだろう。侍女を追つて穴を覗いたが、そこは誰もいない部屋だつた。

次に見つけた穴は廊下を見ることができた。けれど侍女の姿はもうなかつた。

先を予想して穴を覗いたが、そこも人気のない廊下だつた。

克哉は侍女を追うことを諦めた。

まずはいったん生活空間まで戻ろう。

収獲は覗き穴の存在だ。それもおそらく屋敷のすべてを見ることができる。

わざわざなぜそのような穴をつくつたのか？

覗くという行為は相手に知られないように観察するため。

特定の人物を覗くのであれば、特定の部屋の上にだけ穴があればいい。これだけ網羅していると、この穴を作つた人物は屋敷のすべてを把握しようとしていたのだろう。

その目的と、それを使用していた人物の特定はさておき、まずは穴の位置を把握することからはじめよう。

克哉は懐から手帳とペンを取り出した。

まずは大まかな屋敷の平面図を描く。そこに先ほど見た穴の位置と番号、部屋の見取り図を書き込む。

この作業を続ければ屋敷の見取り図が完成するはずだ。

屋敷の輪郭を調べようと壁沿いに歩いた結果、離れが三つ存在していることがわかった。ありがたいことに、離れに続く廊下にも天井裏が存在しており、どうやら本当にすべての部屋を網羅しているらしい。

輪郭を描き終えたら、いよいよ一つ一つの穴を調べる作業だ。これはじつに骨の折れる作業である。

ここで一服するか克哉は迷った。

あと二本。

吸いたくて堪らない。後先のことを考えるよりも、今だ、

克哉は煙草を咥えライターで火を付けた。

「ふう……」

残り一本になってしまった。

最後の一本は屋敷を出たらと思っただが、その思いも長く続くとはいえない。

煙草を吸い終わるとさっそく作業に取りかかる。

まずは近くにある穴からだ。

埃を払い番号を確認して、穴を覗く。

眼。

「わっ!？」

短く叫んで克哉は腰を抜かした。

穴の先に見えた目玉。誰かがこちらを覗いていたのだ。

凍えるほど寒く、全身が震える。

汗が噴き出してきた。

今のいつたい？

確かめるために再び覗く気にもなれない。

偶然か？

屋根裏の穴を知っている者がいたのか？

しばらくすると天井を叩く音がした。何度も何度も天井を叩いている。先ほどの穴があつた部屋だ。鬼気迫る勢いで猛烈に叩いている。

音は移動している。棒か何かで部屋を歩き回りながら叩いているのか？

確実に克哉の存在を気づかれている。そうでなければ、あんなにも威嚇するように天井を叩くものか。

克哉は静かに後退った。

その場を離れ、生活空間まで戻ると、机の上に登った。

そして背は壁に付ける。

克哉を捜しに屋根裏に誰かが来るか？

瞬きの回数が減る。

耳も研ぎ澄まされる。

心臓の鼓動は加速して止まらない。

「大丈夫だ……大したこつたない」

小さくつぶやいた。

早くも最後の一本を口に啜えた。まだ火は付けない。啜えて

いるだけでもだいたい安心していい。

屋根裏は静まり返っていた。

誰も来ない。

時間だけが過ぎていく。

まだ誰も来ない。

このまま誰も屋根裏に現れないのか？

克哉は淡い期待を抱く。

もしかしたら自分の存在を知られていないかもしれない。

屋根裏は暗がりだ。向こうから覗いても、こちらのようすは

よく見えなかつたはず。

克哉は首を横に振った。

あのとき叫んでしまつたし、腰を抜かしたときに尻餅までつ

いて音を立ててしまつた。

ではなぜ屋根裏に來ない？

屋根裏の入り口がわからないのか、それとも向こうも怯えて

確かめに來られないのか。

克哉はばれたことを前提に考えることにした。用心をして対

策は練っておくべきだ。

まずはいつ誰かが來るとも知れない屋根裏を抜け出したい。

それには下のようすを探る必要がある。

穴を覗いて確かめるのか？

それとも確かめもせず下りてみるのか？

下りられない。

これは物理的にとつといふより、精神がこの場に縛られてしまつ

た。

軟禁状態になってしまったのだ。

下りられないなんて言つて、一生ここに居るわけにはいかないのは明らかだ。

ここには水も食料もないのだ。数日も保たないだろう。数日も待つ必要はないかもしれない。その前に誰かが屋根裏に登ってくる。

すべては時間の問題だ。

なにをそんなに恐れている？

相手はたかだか人間だ。

本当に人間なのか？

噂を思い出せ。

風呂場で見た静枝を思い出せ。

そして、あの眼だ。

あの目玉はいつたい誰だったのか？

今まで見た人物の中にいただろうか？

勝手口で見た侍女。

美花と呼ばれた少女と瓜二つのもうひとりの少女。

当主である静枝。

なぜか心を惹かれた侍女。

あと何人くらいこの屋敷にはいるのだろうか？

連れて来られている若い少年たちはどこに？

また時間だけが過ぎていく。

このまま屋根裏に誰も来ないのか？

来ないのならそれに越したことはないが、来ないのならばつと緊張が解けない。

机の上でじっとしたまま、恐怖を思い描きながら時間が過ぎていく。

長い時間だった。

やがて陽も落ちはじめた。

このまま夜更けまで待つて住人たちが寝静まるのを待つか？ いや、逆にこちらが寝静まったのを見計らつて、そのときこそ屋根裏に登ってくるかもしれない。

いつになったら屋根裏から下りられるのか？

このまま見つかつてしまえば気も楽になるかもしれない。

もしも見つかるなら誰がいいのか？

静枝には見つかりたくない。

ほかの者だつて見た目にはわからない狂気を秘めているかも知れない。

「……すべて俺の妄想か？」

じつは恐怖など存在していないのか？

克哉が煙草に火を付けることはなかった。

ただただ時間だけが過ぎていった。

夕焼けが蒼く染まるうとしている。

ついに克哉は動き出した。

まだ穴を覗く気にはなれない。そこで音を頼りにすることにした。

床の埃を払い耳を近づけ澄ませる。

音が聞こえた。規則正しい何かを叩く音だ。

もうしばらく聞いていると、女の声が聞こえてきた。

「菊乃さんまだですか？　わたしお腹が空いてしまったわ」

「申しわけございません慶子様。今日は捌く量が多かったですから」

「静枝さんのせいね」

会話の最中だつたら覗いても平気かもしれない。

克哉は意を決して穴を覗き込んだ。

そこにいたのは心惹かれた侍女とはじめて見た女だ。眼鏡を

掛けたこの女は二〇代後半くらいだろうか。

どうやらここは台所らしい。

「静枝さんはすぐに玩具を壊してしまうものだから、わたしはもつと楽しみたいのに」

声から察するにこちらが慶子と呼ばれたほうだろう。だとすれば侍女のほうが菊乃だ。

二人はまだなにかを話している。だが、克哉の耳には遠い声に聞こえた。克哉の意識は別の場所にあつたのだ。

まな板に乗せられたあれはまさしく……。

「こんな物のどこが美味しいのかわたしには未だにわからないわ。わたしは殺すのが楽しみだから」

慶子はそれを見てそう言った。

身体の芯から克哉はぞつとした。

菊乃はなんの躊躇いもなく、それから肉をそぎ落として調理

する。

それ以上は見ていられなかった。

恐怖はあったがこの調子で別の穴も覗く事にした。

まずは音を確かめる。物音と気配がした。けれど天井近くからではない。

そつと穴を覗き見ることにした。

どうやらここは食堂のようだ。

勝手口で見た侍女が配膳の用意をしている。その脇に寄り添うようにいる幼女。克哉はその幼女の頭に目を凝らした。

角だ、角が二本生えている。

まるでその姿は鬼だ。

角に見えるだけで瘤かもしれない。それにしても異様な位置にある瘤だ。

ふつと角の少女が天井を仰いだ。

克哉は眼があつたような気がした。だがこんな小さな穴で眼が合うはずがない。

「どうしました、るりあ？」

勝手口の侍女が角の少女　るりあに尋ねた。

「……………」

るりあは何も言わず首を横に振って、天井から眼を離した。気づかれたのだろうか？

ほかの住人は克哉に気づいているのか？

気づいていて知らぬ振りをしているのか？

まだ誰も屋根裏には来ない。

油断を誘っているのか？

不安はいくらでも生まれる。

克哉は次の穴を覗いた。この穴は前に覗いたことがある廊下だ。

廊下の向こうから少女の影がやってくる。

美花が美咲、どちらかだろう。

そのとき、廊下の横の部屋から激しい物音が聞こえてきた。

「うるさいわよ！」

美花が美咲の少女は物音のした戸に向かって叫んだ。

音は静かになる。

克哉はさらに目を凝らした。

物音がした部屋の戸に赤い札が貼られている。

封印されている部屋に誰かいたのか？

いたからこそ物音がしたのだろう。そして、美花が美咲の叱咤で静かになったのだ。

ここで克哉はふつふつと恐怖が湧いてきた。

蘇る恐怖。

こちらを覗いていた眼。

あの眼を見てしまった部屋だったのだ。

赤い札のあった部屋はもう覗くまいと誓った。

そして、屋敷の中を歩いたときの記憶をたぐり寄せた。

赤い札のあった部屋はどこどこにあったのか？

正確には思い出せない。

穴を覗く前に赤い札の部屋を把握する必要があるそうさ。

今の時点でほかに覗けそうな穴はないか？

この屋根裏の入り口があった部屋だ。

さっそく克哉はその部屋の穴を探した。

屋根裏の来たばかりのころは気づかなかつたが、やはりこの部屋にも穴があった。

克哉は気配を探った。人の気配がするような気がする。話し声や物音は聞こえない。覗くか覗くかまいか迷うところだ。

なにがあるうと驚かないと心に決め、深呼吸をしてから克哉はその穴をそっと覗いた。

少女が机に向かって読書をしているようだった。美花か美咲か、瓜二つなので見分けは付かない。

先ほど見た少女とこちらの少女。たしかに雰囲気が違う。姿勢は同じでも、そこでどうにか見分けられるかもしれない。

しばらくようすを伺っていると、戸の奥から声が聞こえてきた。

「美花さま、失礼してよろしいでしょうか？」

「どうぞ瑠子さん」

「はい、失礼します」

勝手口で見た少女　瑠子は部屋に入ってきた。

「お菓がまだのようなのでお持ちしました」

瑠子はそう言って盃が美花に渡そうとした。

本にしおりを挟んで美花は怪訝そうな顔を瑠子に向けた。

「もう飲みたくありません」

「そんなことをしたらお体が……」

「本当にそうなのか、試してみなくてはわかりません」

「美咲さまも静枝さまも飲んでいらっしやるのですよ？」

「そうですね、それが当たり前のように。わたしはこの家で生まれ、この家で育ち、何の疑問を抱かずそれを飲み続けてきました。しかし最近になって思うのです。それを飲む行為は正しいことなのか」

「そうおっしゃらずに」

瑠子は盃に朱い液体を注いだ。

「飲みたくないと言っているでしょう。これからは食事もお母様やお姉様とは別の物にしてください。食事を摂るのもこの部屋です」

「そんなこと静枝さまがお許しになるはずが……」

「今日のところは具合が悪いとでも伝えておいてください。あとでお母様と話をしてみようと思います。どうぞそれを持って行ってください」

「失礼いたします。しかしこれは部屋の隅に置いておきますから」

瑠子は部屋を出て、正座をしてから一礼して戸を閉めた。

部屋の隅に置かれままたった盃と銚子。美花はそれを見つめ続けている。克哉も同じように見つめた。

あの朱い液体はなにか？

美花の躰が震えはじめた。

視線は盃に注がれたまま美花は何かに葛藤しているようだった。

拳を強く握り、歯を食いしばっている。
それも長くは続かなかつた。

美花は盃と銚子に駆け寄つた。

そして注がれていた盃に手を掛けたのだ。

美花は泣いていた。

泣きながらその朱い液体を一気に飲み干した。

さらに銚子から盃に朱い液体を注ぎ、銚子が空になるまで飲み干した。

美花の口元から朱い液体が垂れている。

指でそれを拭つた美花は、しばらく眺めたあと、指事それをしゃぶつた。

「……できなかつた……我慢できなかつた……意志ではどうにもならない本能なのね」

美花はぐつたりと壁にもたれかかった。

あの朱い液体が克哉の想像するものであれば、それはおぞましい行為であつた。

しかし、今目の前で泣いている少女は、すぐにも抱きしめてあげたかつた。

美花の葛藤は克哉にも伝わつたのだ。

静かに克哉はその穴をあとにした。

陽が落ち、空は月明かりに照らされていた。

椅子に腰掛け休憩をしていた克哉は蝋燭に火を点けた。

克哉はその場を移動して食堂の穴を覗く事にした。

食事の頃合いを狙うつもりだった。その時間であれば、この屋敷の住人が多くその場に集まっているはずだ。まだ知らぬ住人がいるかもしれない。

まずは耳を澄ませてようすを探る。小さな物音がいくつか聞こえる。女の話声も聞こえてくる。

克哉はそつと穴を覗いた。

食卓を囲っていたのは静枝、美花か美咲のどちらか一方、前に聞いた話から察するに美咲のほうがかもしれない。それに慶子を加え、侍女の菊乃と瑤子は傍でじつと立っている。新たな顔ぶれはない。

当主の静枝、それを母とする美咲と美花の双子、侍女の二人。すると慶子とはいったい何者なのだろうか？

それになるりあとという角の生えた少女の姿もない。

赤い札の部屋の住人。

まだ姿を見ない少年たちの行方。

そして、友人のルポライターはどこに？

しばらく見ていると瑤子はいったん奥へと消え、再び戻ってくるとお盆に食事を乗せて戻ってきた。そのままほかの部屋へと移動する。

克哉は先を見越して美花がいると思われる部屋の天井裏に向かった。

そつと穴を覗く。

美花は壁にもたれかかりうずくまっている。まだ泣いているのかもしれない。

すぐに廊下から声がした。

「美花さま、失礼してよろしいでしょうか？」

「どうぞ瑠子さん」

「はい、失礼します」

やはり瑠子の行き先はここだった。

「お食事をお持ちしました」

白米と山菜、果物などで肉はない。

「ありがとうございます。あなただけ、あなただけ……本当にわたしのことを心配してくれるのはあなただけです」

「そんなことはありません。静枝さまだつて美咲さまだつて、

慶子先生も、るりあちゃんも菊乃さんもきつと心配してます

よ」

「……そうね」

「大丈夫ですか美花さま？」

「大丈夫、なにも心配いらぬから、あなたも自分の仕事に戻つて」

「……はい」

瑠子はちらりと盃と美花を見て、なにも言わずそれらを盆に乗せて部屋をあとにした。

独りになった美花は沈んでいるようだった。

机に向かつて本を読もうとしているが、頁がいつこうに捲られない。

すぐに美花は本を閉じて机に顔を伏せた。

「……外の世界にことなんて知らなければよかった」

美花はそつと本を自分から遠ざけた。
噂を克哉は思い出した。

この屋敷の住人は外に出ない。唯一出入りをしているのはひとりの侍女だけ。

出ない、それとも出られないのか？

この屋敷が世界のすべてでだつたらと思つたと克哉はぞつとした。
突然、戸が開き美咲が入ってきた。

「瑶子に聞いたわ、どういふことか説明して」

「お姉様！」

「ねえ死にたいの？」

「そんな……死にたいだなんて」

「だつてそういうことでしょう。死にたいのなら今ここで殺してあげましょうか？」

克哉は戦慄した。美咲のその言葉が本気だと感じたからだ。
狂つてる。

胸を締め付けられるような狂気を美咲は放っている。

美花は美咲を見つめたまま黙っていた。

美咲もなにも言わず睨んでいる。

しばらくして美咲が美花に向かって歩き出した。

そして、細い手が美花の首へと伸ばされる。

「お姉様!？」

眼を丸くして息を詰まらせる美花。

美咲は嗤いながら美花の首を絞めていた。

「苦しいでしょう、死ぬのは苦しいのよ、死に近付くにつれて

もつと苦しくなる」

「うつつ……やめ……お……」

「綺麗な顔……世界で一番綺麗なあなたの顔……大好きよ美花」

「く……うつ……くはっ！」

首を解放され、一気に呼吸を取り戻した。

美咲は背を向けた。

「死にたいのなら勝手になさい」

そう言つて美咲は咳き込んでいる美花を尻目に部屋を出て行ってしまった。

美花の首にはくつきりと指の痕が残っていた。

殺す気はなかったというのか？

だとしても尋常な行為ではなかった。

美花はじつと動かない。克哉は別の穴を探ることにした。

廊下の穴を覗くと美咲と静枝がなにやら話しているようだった。小さな声でまったく聞き取れない。険しい顔をする美咲と

涼しげな顔をする静枝。

「わたくしの部屋においでなさい」

と、いう静枝の声だけは聞き取れた。

廊下を歩き出す二人。

見失わないように克哉は次々と穴を辿った。ほかの穴を覗かぬように、慎重に二人のあとを追わなくてはならない。

そして、ついに静枝の部屋を突き止めた。

部屋の中に消えた二人。克哉も部屋の天井の穴を覗いた。

正座をして向かい合う二人。先に話を切り出したのは美咲だった。

「放っておけばそのうち死ぬわ。どうする気？」

「どうもしないわ。そうなればそれが定めなのよ」

「定めなんてくだらない」

「くだらなくても従わなければ生きていけないのよ、我が一族は」

「本当に嫌気が差す。わたしの代で全部終わらせてやる」

「それならなおのこと、あの子が死んで貴女が次の当主になればいいわ」

「……当主なんて興味ない」

美咲の眼は相手を殺さんばかりの眼だった。

艶やかに微笑みながら静枝は受け流している。

「貴女の意志なんて関係ないのよ。必ずどちらかが当主になる。

そして、この屋敷と共に生き続ける」

「今だってこの屋敷に縛られてるじゃない！」

「そう、それが続くだけ。貴女も、貴女の子も、貴女の孫も、永遠に……」

「子供なんて生まないわ！」

「……わたしもそう思っていたわ」

静枝は哀しそうな表情をした。

「もういい！」

美咲は立ち上がり部屋を飛び出した。

残された静枝はひとりつぶやく。

「困った子だこと。でもああいう子が次の当主になるのよ、お前のようにな……」

お前とは誰だ？

克哉は静かに穴から目を離した。

夜は更けて、草木も眠りはじめた頃、克哉は再び活動をはじめた。

廊下の覗き穴の近くを入念に探す。

もしかしたらここにあるかもしれないという勘が的中した。

天井の板が動いたのだ。

開いた入り口に手を掛けてぶら下がった。床との距離はさほどないが音を立てないように慎重に。床に落ちたと同時に屈伸して衝撃を和らげた。

どうにか廊下に出た克哉は天井を見上げた。

入り口が開いたままだ。

下りるのは容易だったが閉めるのは一苦労だ。

何度か飛び跳ねながら板を元に戻す。棒かなにかあれば楽だっただろう。

板を戻し終えた頃には息が切れた。

美花と静枝が寝ていることは穴を覗いて確認済みだ。おそろくほかの者も寝てると思うが、用心には用心を重ねて慎重に行動しなくてはならない。

克哉は迷っていた。

いつ屋根裏から脱出できたのだ。

このまま搜索を続けるのか？

それとも屋敷から逃げてしまおうか？

心が揺れ動く。

とりあえず懐から蠟燭を出し、ベルトに挟んであった蠟燭台に乗せて火と点けた。

さらに手帳とペンを取り出した。

部屋の見取り図を描きはじめて克哉。まだ調べる気なのだ。

注意しなくてはいけないのは赤い札のある部屋だ。

廊下を歩きながらしばらくして、なにやら気配がした。

蠟燭をすぐに消して、静かに息を潜める。

何も見えない闇だ。

微かな光さえない。

神経が研ぎ澄まされた。

気配はない。

気のせいだったのだろうか？

蠟燭を灯して再び歩きはじめる。

細い廊下だ。両端に部屋はないらしい。きっと離れに続く廊下だろう。

行き止まりにあったのはドアだった。純和風の屋敷の中で、この扉は西洋風だった。やはりここは離れなのだ。

この先に何かがあるのか、興味はあっても今は開ける必要はない。危険に自ら飛び込む必要もあるまい。

引き返そうと振り返ったとき、克哉は言葉を失った。

巨大な何かがそこにいる。

天井に逆さになつてそれはいくつもの眼でこちらを見ている。その眼の持ち主は一匹だ。

なんと天井には克哉の躰を越える巨大な蜘蛛がいたのだ。

克哉は背に手を回してドアのノブを回した。鍵が掛かっている。

逃げ場を塞がれた。

もし逃げられるとしたら、大蜘蛛の下を駆け抜けるしかないだろう。

それとも　大蜘蛛を仕留めるか？

克哉は隠し持っていた短剣を抜いた。

「つたく、こんな奴とは出くわしたくなかつた」

物音を立てない　そんなこと構っていられなかつた。

克哉は床を蹴り上げ全速力で走った。

大蜘蛛が落ちてくる。

紙一重で大蜘蛛よりも先に抜けた。

だが、大蜘蛛の尻から糸が噴き出された。

なんと強力な糸か！

糸は克哉の腕に絡みつき、さらには壁にまで固定されてしまった。

封じられた腕は短剣を握っていた右手だ。

力を込めて引つ張るがびくともしない。もし外れても肉ごと持って行かれそうだ。

大蜘蛛が迫ってくる。

迷っている暇などなかつた。

克哉は蠟燭の火で絡みついた糸を燃やした。
腕が焼ける。

苦痛を浮かべながら克哉は耐えた。

酷い火傷を負おうとも、生きたまま食われるよりはましだ。

糸が焼けて取れた瞬間に克哉は走った。

大蜘蛛が大きく跳んで襲い掛かってきた。

状況など確かめてもいられない。

とにかく克哉は逃げた。

廊下に響き渡る足音。

恐怖が追ってくる。

振り向かずにはただひたすらに逃げる。

確実に迫ってくる気配。

玄関が見えた。

克哉は焦りながら玄関の鍵を開けて外に飛び出した。

当然靴など履いている暇などなかった。

庭を駆け抜けて垣根を目指した。

あの垣根を登れば外に出られる　そう信じていた。

だが！

「わっ!？」

なにが起きたのか理解できなかった。

垣根を眼と鼻の先としたとき、なにか見えない力によって克

哉は押し飛ばされたのだ。

「嘘だろ……本当に出られないっていつのかっ！」

地面に倒れながら克哉は振り返った。

いなかっただ。

見通しのよい庭のどこにも大蜘蛛の姿はない。

庭までは追ってこなかったの……か？

見えないからと言って安心はできない。

一刻も早く逃げ出したい。

克哉は立ち上がると空間を調べた。

手を添えるとそこには見えない壁があった。

移動しながらその壁を触ってみるが、延々と垣根に沿って続いているように思えた。

「来る者は拒まず、去る者は逃がさずか……中に入ったという話を聞かないはずだ」

それが目の前の現実。

克哉は地面に胡座を搔いて、残してあつた最後の一本を吸うことにした。

煙草を口に啜え、手を添えながらライターで火を付ける。

「ふう……煙草は吸いたいときに吸うに限るな、本当は」

空を見上げると星が輝いていた。

「いつも見る星は綺麗なもんなのになあ。今は不気味に見える」

最後の一本を短くなるまで味わい、克哉は決意を固めた。

「さて、仕事の続きでもするか」

煙草を地面に投げていつも癖で足で消そうとしたが、靴を履いていないことに気づいてすぐにやめた。

さつき見えない壁にぶつかった拍子に落としてしまった蠟燭

台を拾う。消えてしまっていた蠟燭に火を点け直した。

今ままで月明かりで明るいが、灯が灯っていた方が気持ちの足しになる。

本当に外に出ることはできないのか？

克哉は見えない壁を触りながら歩き出した。

途切れることなく続く見えない壁。

高さはどのくらいあるのだろうか？

試しに克哉は小石を拾い上げ、天高く投げ飛ばしてみた。

放物線を描いた小石は垣根の遥か上を越えて屋敷の敷地を飛び出して行った。

「上は平気なのか？」

再び小石を拾った克哉は、今度は垣根に向かって投げしてみた。

小石は垣根の隙間を通って外に飛び出して行った。

今度は蠟燭台を壁に見えない壁に近づけてみた。

壁のある場所を蠟燭台は通り抜けたのだ。

「生きてる者が駄目ってことか……死んでから出られてもな。

死んでも出られるかわからんが……」

しばらく進んでいると小さな鳥居が見えてきた。その先には祠がある。

「神様と言っても八百万、友好的とは限らんからな」

静かに鳥居に近づく。

気配など微塵もなかった。

「お前誰だ？」

「っ!？」

克哉は驚きの余り蝋燭台を落としそうになった。

鳥居の影から出てきた幼女。謎の角を持つるりあだ。

克哉は冷静に振る舞った。

「お嬢ちゃんこそ誰ですかい？」

「聞いたのはおらだ」

「名乗るほどのもんじゃありませんよ。お嬢ちゃん……もしかして鬼？」

「……………」

急にるりあは走り出してしまった。

すぐさま克哉は腕を掴んだ。

「待ってくれ！」

「離せ！」

「離れたら俺……私のことほかのみんなに告げ口するでしょう？」

「お前なんかに興味ない！」

るりあは克哉の腕に噛み付いた。

「いたっ！」

克哉の手を逃れてるりあが走って逃げた。

あまりの痛さに克哉は蹲った。噛み痕もまるで牙でも生えていたような深い傷だが、なによりも噛まれた場所が火傷を負った傷痕だった。

「つくそ、餓鬼のくせに……けど邪気は感じなかったな。本当に鬼だったのか？」

ここで克哉はこの家の名字を思い出した。

鬼塚。

塚とは土を盛って気づいた墓。

首塚とは首を埋葬した塚。

鬼塚とは？

「やっぱり鬼だったのか？　あの餓鬼が何者にせよ、逃がしたのは失敗だった。家中に俺のことが知れるのも時間の問題……もう知れている可能性もあるが」

このあと垣根沿いを一周回ったが、見えない壁が途切れている箇所は見つからなかった。

屋敷に戻るか？

祠もまだ詳しく調べていない。

克哉は隠し持っている短剣を確かめた。

父から受け継いだ短剣だ。父は祖父から受け継ぎ、その祖父はまた曾祖父に……から受け継いだらしい。

武器はこの短剣のみ。

克哉は屋敷に戻ることにした。

玄関は開きっぱなしになっていた。

屋敷の中に入り、玄関を閉めて鍵も掛ける。

神経を研ぎ澄ませる。

廊下は静かだ。

怖いくらい静かだ。

「出たな大蜘蛛」

克哉は囁いた。

闇の向こうに潜んでいた大蜘蛛。

短剣が抜かれた。

大蜘蛛が飛び跳ねた。

一撃で深手を負わさなければ、次の相手の攻撃で逆に深手を負うことになる。

腹だ。跳んだ大蜘蛛が腹を見せている。

短い刃でどこまで貫けるか！

克哉が大蜘蛛の腹に潜り込んだ！

「つく、そ」

大蜘蛛の足のほうが長い、このままでは短剣が届かない！

しかし大蜘蛛の本能か、獲物を足で抱え込んで捕らえようとしたのだ。

捕らえられたことが逆に功を奏した。

世にも恐ろしい叫び声。

軟らかい肉に刺さった短剣。

大蜘蛛の口が克哉の目の前で蠢いている。

克哉は短剣を上げて腹を裂いた。

大蜘蛛の足から力が抜ける。

その隙に克哉は逃げ出して難を逃れた。

大蜘蛛の糸が宙を翔ける。

「怯んだだけで、弱ってないってのか！」

克哉は紙一重で糸を躲した。

初手と同じ手は使えないだろう。あれは一か八かの賭けだったのだ。

「俺は誰よりも死が怖いんでね」

無我夢中で克哉は逃げ出した。

目に入った戸を開けて中に飛び込む。
すぐに戸を閉めた。

冷静でなかったと克哉はやったあとに後悔する。部屋に逃げ込んで逃げ場を失うだけではないのか？

さらに部屋の中には誰かが寝ていた。

その顔はどちらだ　　美花の部屋だったのか!?

大蜘蛛は来ない。

気配はまだ外にある。

なぜ来ない？

美花が寝返りを打った。

「うん……うん……」

起きてくれるなと克哉は願った。

やはり大蜘蛛は来ない。

あんなモノと同居している住人たち。そう考えると、住人たちは襲われないのかもしれない。そうでなければこんな無防備に寝ている筈がない。

「うん……ん……」

美花がゆっくりと目を覚ました。

「きゃっ!？」

飛び起きた美花は掛け布団を抱きしめた。

克哉はすぐに短剣をしまった。

「お嬢ちゃん、俺……じゃなかった、私は妖しいもんじゃありません。この状況じゃ、物取りか変質者に思われるかもしれません

んが」

「誰か！」

「静かに！」

慌てて克哉は美花の口を塞ぎ、仕方がなく短剣を首元に突きつけた。

「静かにしてくださいよ。あなた美花お嬢様ですよね？」

「……………」

口を塞がれたまま美花はうなずいた。

「あなたに危害を加えるつもりはないんですよ。その証拠に今から手を放しますから、絶対に騒がないてくださいよ」

そつと手を放した。

「……………」

美花は騒ぎもせず、無言のまま約束を守った。と言っても、短剣を突きつけられたままでは、相手に従うほかないだろう。

「人間相手に、ましてやお嬢ちゃんにこんな物騒な物を突きつけたくないんですが、状況が状況でして」

「殺したいのならどうぞ」

「死を覚悟している人間にこんな真似しても無駄か。俺もあなたのこと殺したくないですし」

克哉は短剣をしまった。

美花の視線を克哉の腕に向けられていた。

「酷い怪我ですね、今はこれで我慢してください」

そう言うと美花は引き出しから手ぬぐいを取り出し、簡単な傷の手当をはじめた。

「まさか侵入者の俺がこんな手厚く手当をしてもらえるなんて、ありがとうございます美花お嬢様」

「悪い方には思えませんから」

「あつはは、よく言われます」

「それにあなたが誰であれ、外の方とお話しできたのは久しぶりで、本当に嬉しくて」

「やっぱりあなたも外に出られないんで？」

「ご存じなのですか？　そうですね、わざわざこのような場所に出向くのですから、なにも知らないというわけではないのでしょうか」

傷薬などはなかったため、傷口を縛ることしかできなかった。そのままにするよりは幾分かましだろう。

「どーも」

「どういたしました」

克哉と美花は顔を見合わせた。

静かな面持ちをしている美花と不思議な表情をしている克哉。

「本当に騒がないんですね、あなたは」

「騒いだ方がよろしいですか？」

真顔で尋ねてくる美花に克哉は大きく首を振って見せた。

「とんでもない、騒がれたら困ります」

「騒げば人が来ますものね、呼ばれたら困りますか？」

「それはもう」

「なら黙って置いてあげます」

「本当に？」

「ええ、ただしわたしの話し相手になってもらえたら……」
「もちろん！」

大きく返事をした刹那に感じた気配。

突然、ふすまが開き、隣の部屋から美咲が顔を見せた。

「どうかしたのかしら美花？」

「いいえ、お姉様」

「そう、幻聴だったのかしら。本当にうるさい奴らだわ」

美咲は怒った顔をしてふすまを閉めて自分の部屋に戻った。

ふとんに潜っていた克哉がゆっくりと首を出す。

隣が美咲の部屋だったとは迂闊だった。絶対に見つかると思

ったが、寝起きで観察力が散漫になっていたのかもしれない。

どうにか美咲に見つからずに済んだ。

美花が克哉の耳元で囁く。

「また明日話しましょう」

同じく克哉も美花の耳元で答える。

「ではまた明日。実は俺、屋根裏に棲まわせてもらってるんで、

いきなり現れても驚かないでください」

「まあ、屋根裏に!？」

「それから、何も食べてなくて、その果物少しもらってよろ

しいでしょうか？」

「ええ、全部持つて行って構いませんよ」

それは美花の夕食だった。まったく手を付けていなかったら

しい。美咲とのが尾を引いてのどを通らなかったのかもしれない。

れない。

克哉は果物をお盆ごと取った。

食料を調達するにしても、台所を漁る気にはなれなかった。変な物が出てこないとも限らない。ここで食料をもらえたのは本当によかった。のどが渴いているところに果物というのも嬉しい。

克哉は頭を下げ、押し入れを開けた。

それを見た美花は目を丸くしている。

克哉は声を発さずに「おやすみなさい」と挨拶して押し入れを閉めた。

陽が昇った。

屋根裏にも日が差し込む。

克哉は一睡もしてなかった。こんな屋敷で寝られるわけがない。

不気味な住人たち、屋敷を徘徊する怪物、屋根裏とて安全ではない。

そんな中で、美花の存在は克哉にひと時の安らぎを与えた。

常識に照らし合わせれば、美花とて……それでもこの屋敷に染まりきっていないと感じた。

克哉は美花のようすを見に行くことにした。

穴を覗く。

安らかに眠る美花の姿。

この屋敷で育てばそれが普通か。恐怖など微塵も感じさせず、深い眠りに就いている。

克哉は隣の部屋も確認することにした。隣は美花の部屋と繋がった美咲の部屋だ。

余り気を入れず覗いたせいで、少し克哉は驚いてしまったが、声は呑んだ。

美咲はすでに起きていた。

なにをしているのか？

よく見えない。

克哉は目を凝らした。

それでもよく見えない。

机の上でなにか細かい作業をしているような感じだ。

小さなものが動いた。

美咲の手についているのは朱いものはなにか？

駄目だ、細かい上に美咲が影になつて余計に見えない。

美咲はなにかを壺の中に詰めはじめた。

一瞬、朱いなにかが見えたような気がする。

詰め終わると壺にふたをした。

そして、机の上を手ぬぐいで拭くと、何事もなかったように片付いてしまった。

壺は押し入れの奥へと仕舞われる。

それがなんであるか疑問は浮かぶが、克哉はあえて見ようとは思わなかった。

この屋敷には見なくてよい多すぎるのだ。

次に美咲は鏡台で髪を梳かしはじめた。これは得に変わったようすもない光景だ。と思ったのも束の間だった。

鏡に一瞬、部屋にいないはずの女の顔を映ったような気がする。

あの顔は誰かに似ていたような気がする。

「おはようおば様」

美咲が独り言を言った。

いや、それは本当に独り言なのだろうか？

まさか鏡に一瞬映ったなにかに言ったのではあるまい。そうならば、本当に映っていたことになる。

「今日はどうしたのかしら？　なにか心配事でもおありになられて？」

美咲の独り言は続いていた。もちろん答える者などいないのだ。そう、いないのだ。

「さようならおば様」

美咲は櫛を置いて鏡に布を被せた。

独り言だとしても、そこに登場した“おば様”とは、いったい誰のことを言っていたのだろうか。

美咲は部屋を出た。

克哉も移動することにした。

次は静枝の部屋を覗いた。

静枝は部屋のどこにもいなかった。

場所を移動して食堂、台所と続けて覗いた。

食堂には誰もいなかった。台所では菊乃が朝食の準備をしているようだった。

台所での作業はあまり見る気がしない。きのうのことを思い

出してしまふ。

念のため脱衣所と風呂場も覗いたが、誰もいなければ変わった点もなかった。

そして、廊下も見た。

これで覗ける場所は全部だろうか？

昨晚のうちに赤い札のある部屋を把握するつもりだったが、大蜘蛛の襲われただけで作業はなにもはかどらなかつた。

そう言えば、大蜘蛛に追い詰められたとき、離れの入り口まで行つた。あの部屋にはなにがあるのだろうか？

さつそく克哉は離れの一つを覗くことにした。

その部屋は西洋風の作りであつた。置かれている家具も足のある椅子やそれに合わせたテーブルなどである。ベッドから何者かが起き上がった。

手元の眼鏡を探して、掛けた姿は慶子だつた。

部屋を見回して克哉は舌を巻いた。それにしても多い本だ。

壁一面が本棚になつており、それが天井まで伸びている。本棚に入りきらない本なのか、山積みになつている物もある。

膨大な本だが、この屋敷から出られないのなら、読む時間はいくらでもあるのだろう。

慶子は着替えをはじめた。

服を脱いだその姿は、全体的に肉付きがよく健康的で、胸は豊満で柔らかさうだつた。

克哉は生唾を呑み込んだ。

年上の女性は克哉の好みだ。あの躰付きも好い。

この屋敷で唯一洋服を着用している姿も、見慣れていて安心できる。

慶子は下着を一切身につけず、スカートを穿いた。

これでこの屋敷の住人でなければ……と克哉は溜め息を吐いた。

町で会えば声も掛けたくなくなるいい女だが、今はあまり深い関係にはなりたくない。

克哉は穴を覗くのをやめた。

そろそろ美花のところへ戻ってみよう。

美花の部屋を覗くと、すでに布団が片付けられていた。当の

美花は着替えの最中だ。克哉は穴から目を離した。

しばらくして覗き直すと、美花の姿が部屋から消えていた。

機会を逃したと思つて克哉が穴から目を離そうとしたとき、

ちようど美花が部屋に戻ってきた。

すぐに克哉は屋根裏から下りることにした。

布団を掻き分けて押し入れを開ける。

そのとき見た美花の表情は少し眼を丸くしていた。

克哉は小声で話しはじめた。

「驚かせてすまないですね。美花お嬢様おはようございます」

「おはようございます、そう言えばまだお名前を伺っておりませんでした」

「立川と言います。ここで話すのもなんですから、お時間があ
るなら屋根裏に参りましょう」

「はい、朝食までの時間なら」

こうして二人は屋根裏に向かった。

美花は屋根裏にはじめて登ったらしく、だいぶ驚いたようだ。まさかこんなところに家具が置いてあるとは、さらにその家具から察するに、だいぶ昔にここを使っていた者がいたということだ。

克哉は椅子を勧めた。

「汚いところですが、今は私の城です。どうぞ椅子に腰掛け
て」

と、克哉はベッドに腰掛けた。椅子は一つしかなかったのだ。椅子に座った美花は、自分から話を切り出した。

「あなたはいつたいいどこのどなたで、どのような目的でこの屋敷にいらっしゃったのですか？」

当然の質問だろう。美花は忍び込まれた当事者だ。

「改めて自己紹介といきましょう。立川克哉、歳は二七、職業はルポライターをやってます」

「ルポライター？」

「平たく言えば雑誌記者ですよ」

「取材などをなさる？」

「そう、それで飯を食ってます」

「それにしては、色白であまり日に焼けてないのですね」

「体力がなくて外回りが苦手なもんで」

克哉ははにかんで見せた。

「それで目的はなんでしょうか？」

先ほどの質問を美花は促した。

「この屋敷を記事のネタにしようと思ひまして、だいぶ常識から外れていると噂を聞いたもんで」

「記事にされるのは困ります。多くの人に晒されたら生きていけなくなりませう」

「でしようね。俺も記事にするつもりはありませんよ」

「ならほかに目的があるのですか？」

「ずばり言いますよ。友人がこの屋敷の取材の最中、行方不明になりました。ほかにもこの屋敷に関わつた者が何人も行方不明になってます。この屋敷に住んでるあなたなら知つてるでしょう？」

「……ごめんなさい、なにも知りません」

嘘か誠か、言葉は辛そうな表情をしている。

美花はうつむいて口をきつく縛つてしまつた。話題を変えた方がいいかもしれない。

「なら、赤い札が貼つてある部屋はなんですか？」

「幼い頃から決して開けてはならないとお母様などにきつく言われてきましたが、それ以上のことはなにも知りません。お母様に聞けば、もしかしたらお姉様、菊乃さん……知らないのは私だけかもしれません」

もしかしたら行方不明者がそこにいるのではないかと克哉は考えていた。

「じつは、あの部屋の中を見たんですよ」

「そんなこと、どうやって？」

「この屋根裏には穴がありまして、覗き穴です。おそらくすべ

ての部屋が覗けるようになってるんですよ」

「私の部屋も？」

「いやいやいや、決してあなたの着替えやそういう場面は見てませんよ！」

「私の着替えがなにか？」

「いや、べつに」

着替えを見られると恥ずかしい。という感覚がこの閉鎖された屋敷で育ったせいでないのかもしれない。

「どこにありますか、開かずの間の覗き穴は？」

「見る気ですか？」

「はい」

「本当に？」

「はい、あの部屋になにがあるのか私も気になっていましたから」

「そこまで言うのなら教えてあげますよ」

あのときの恐怖はまだ拭えていない。それを人に勧めることも躊躇われる。しかし本人が見たいと言っているのだ。

克哉は穴を指差した。

「その丸の中に小さな穴があります」

「わかりました」

美花は手と膝をついてその穴を覗いた。

「……薄暗くて……なにかあるようには……ただの部屋……みたいですよ」

「本当に？」

替わってもらい克哉が穴を覗き込んだ。

薄暗くて何も見えない。だが、徐々に部屋が蒼白く見渡せるようになってきた。

部屋に誰がいる。

部屋の中心で蹲っている男の姿。

あの男はいつたい誰だ？

行方不明者なら声を掛ける方法を考えたほうがいいのかもしいない。

そのとき、男が鬼の形相で振り向いた！

「久しぶりだな克哉」

おぞましく頭の中に木霊した声。

克哉は声を詰まらせそのまま後ろに倒れてしまった。

「どうしましたか？」

「……い……だれか……いた……しかも俺の名前を呼びやがった」

「本当ですか？」

美花は穴を再び覗いた。

「なにも見えませんし、だれかいるような気配もありませんけど？」

「そんな馬鹿な。あんなだつて俺の名前を呼ぶ声を聞いたる？」

「いいえ、なにも」

「嘘だ……たしかに俺の名を……」

なぜ克哉の名前を知っていたのか？

もしかしてあれが知り合いのルポライターだったのか？

克哉はそんなことはないと言った。首を横に振った。あの形相は人成らざるモノだった。怪物だ、怪物の顔だった。

蒼い顔をする克哉に美花は心配そうに寄り添った。

「大丈夫ですか？」

「もう駄目だ。もうこの屋敷を出たいよ。じつは記事の話も、行方不明者捜しも、全部表向き理由なんだ。本当はもっと大切な目的があったんだが……それも命あつてのことだ」

「本当の目的？」

「ちよつと口を滑らせちまった。言えないんだ、ちよつと風に当たるか」

克哉はよろよろと歩きながら開いた雨戸に向かった。

美花もついてきた。少し厳しい顔をしている。

「本当の目的とはなんでしようか？」

「なあ、美花ちゃん。もしもこの屋敷から出られたらどうする？」

「絶対にありえないことですから」

「俺も今は出られない。でも出られたらどうするって考えたことないのか？」

「そんなこと考えても悲しくなるだけですから……。もし出られたとしても、別の呪いが私を……。外では生きていきません」
外に出るだけでは救われない。

「呪いのこと聞いていいかい？」

「……………」

「なんだか薬飲まなきゃいけないみたいだけど、飲むのを拒んでるんだろ？」

「そこまで……そうですね。私いくつに見えますか？」

いきなりの質問に克哉は少し戸惑いを浮かべた。

「いきなりなんだ……うん、一五前後だろう？」

「お母様は？」

「三〇はいつてない。もしかしたら二五前後か」

「私とお姉様は七歳です。そして、お母様は一九歳です」

「それが呪いか……」

「あまり驚かれないのですね」

「世の中にはもつと驚くことが多いもんで」

さらに克哉は続ける。

「早死にするとわかってて、それを食い止める方法がわかってたらすがりたくなるよな」

「わたしはいつ死んでも構いません。でも薬への渴望が抑えられない」

美花は今にも泣きそうな表情をしていた。

克哉は手を差し伸べて抱きしめてやりたいと思った。

だが、美花は背を向けて歩き出した。

「もうすぐ朝食の時間です。私がいないとわかれば、家の者が探すことになるでしょう。そうなる前に行きます」

「朝食のあと話せるかい？」

「朝食後は授業がありますから、午後過ぎなら時間があると思います」

「授業？」

「慶子先生に勉強を教えていただいているのです」

「じゃあ、また」

「はい、失礼します」

美花は屋根裏から去っていった。

朝食の風景を覗いた。

集まっているのは静枝、美花、美咲、慶子、菊乃、瑤子とるりあの姿はなかった。

食事を終わると美花と美咲は、あの本に埋もれた離れで慶子の授業を受けた。

授業の内容は年齢相応ではなく、見た目相応。七歳という年齢は、見た目からも知能からも感じさせない。美花の言葉を信じるほか決め手がない。

克哉にとって退屈な授業だったため、別の場所を覗く事にした。

朝食が終わり、三人が同じ部屋にいるとなると、なにかありそうな部屋も限られてくる。

静枝の部屋を選んで覗いた。

部屋の中には二人が向かい合って座っていた。静枝と菊乃だ。先に聞こえてきた声は菊乃のものだった。

「はい、るりあが発見しました」

「状態は？」

「深手を負わされたようですが、そこまでする必要はございません」

せん」

深手を負わされた？

そこまでする必要？

どちらも引つかかる言葉だ。

少し間を置いてから静枝が口を開いた。

「屍体の痕跡は見つかつたのかしら？」

「それはいつものことでございます。あれは骨まで食い尽くします」

「しかし、まさか深手を負わされるなんて……るりあは何か知らないのかしら？」

「知っていても答えません」

「そうね、とりあえずいつものように何事もなく済ませましょう。けれど、少し気がかりな点もあるから、美咲と美花はしばらく部屋から出さないように、慶子の部屋で見えてもらいましょう」

「畏まりました」

菊乃が部屋を出て行く。

克哉にとつて嫌な予感のする会話だった。

頭に浮かんだのはあの大蜘蛛だ。

さらに侵入者の存在が知られたのだ。

今まで何度も存在を知られたと思ひ恐怖してきた。

はじめは赤い札の部屋の眼だ。

次は大蜘蛛との遭遇。

さらに同じ晩にるりあ、美花。

住人たちに幾度も見つかつてきたが、幸運にも事は大きくならずに済んできた。

しかし、静枝に知られた今、事は動き出した。

屋根裏にいて平気なのか？

いや、決してここは安全とは言えないが、ここ以上の場所が今はないのだ。

もしも静枝が大蜘蛛を使って侵入者を殺させているとしたら、見つければ克哉も殺されるのだ。

屋根裏から脱出するときは、屋敷からも脱出するときだ。屋敷から出られなければ、なにも解決しないのだ。

情報が足らない。

美花は屋敷から出ないのではなく、出られない。ほかの者も同じで、出る方法を知らないかったとしたら、どうすればいいのか。

そうだ、唯一出入りをしている侍女がいるらしい。菊乃か、瑤子か、ほかにいも侍女がいるのか。

何かを調べるにしても、これ以上住人に顔が知れるのはまずい。侍女と話をするのなら、出入りをしている者を特定して話したい。

美花と話ができれば情報がもらえるかもしれない。その美花は授業のあと監視がつくことになってしまった。

このままにも手を打てずに時間だけが過ぎていくのか？

克哉は煙草の箱を出して、溜め息を吐くとそれを握りつぶして放り投げた。

「くそっ」

深い呼吸をしてから克哉は机についた。
手帳を広げる。

屋敷の見取り図はまだ完成していない。まだ見ぬ部屋に希望を見いだすというのも、まるで藁をも掴むことだ。

手帳には名前がひらがなで書いてあった。

しずえ、みはな、みさき、きくの、けいこ、ようこ、るりあ。

そこに赤い札のある部屋の“謎の男”を書き加えた。

克哉は“しずえ”に丸を付けた。

守るか、攻めるか。

屋根裏に隠れているのは限界がある。

静枝に丸をつけたのは、この屋敷でもっとも力を持っていると考えたからだ。

手帳に新たな文字を加えた。

人質。

もっとも力のある権力を人質に取る。

手帳を閉じて懐にしまう。

すぐに克哉は静枝の部屋を覗いた。

静枝はそこにいた。

部屋で静かに正座をしながら佇んでいる。

本当に作戦を実行するなら独りである今しかない。

床を這いつくばって克哉はある物を探した。この部屋への入り口だ。きっとこの場所にも天井板が動く場所があるはずだ。
がたっ。

板が動いたが音を立ててしまった。

慌てて克哉は開いた隙間から部屋を覗いた。

静枝は動かない。どうやら気づかなかつたらしい。

そして、克哉も動けなかった。

克哉は断念したのだ。

動かした板すら戻せなかった。

しばらくして静枝も部屋を出て行った。

機会を失った。

忘れていた呼吸を思い出して克哉は息を吐いた。

「……できるわけないんだよ」

克哉は椅子に向かって歩きはじめた。

陽はまだ高い。

椅子に腰掛けた克哉は机の上に短剣を乗せた。

鞘からゆっくりと抜かれた刃。

陽が落ち夜が更けた。

ずっと克哉は動かさず椅子に腰掛けていた。

短剣は再び鞘に収められた。

ついに動き出した克哉。

まず覗いたのは離れの部屋だ。

部屋は暗く静かなものだ。

早々にその部屋を覗くことをやめ、次は美花の部屋だ。

薄暗い部屋。

静かに眠る美花の姿。

すぐに天井裏から下りることにした。

板を動かし、押し入れから、美花の部屋へ。

そつと美花に近付き、肩を揺さぶった。

「美花お嬢様」

「……ううん……」

「起きてくださいお嬢様」

「……っ!？」

声を上げそうになった美花の口を急いで克哉は手で押さえた。

「私です。声をあげないようにお願いしますよ」

そつと口から手を放した。

「こんばんは克哉さん」

「寝ているところすみませんね、ほかに機会がなかったもので」

「わかっています」

「お話できますか？」

「はい、屋根裏に参りましょう」

二人は押し入れから屋根裏へと上がった。

ベッドに腰掛ける克哉と椅子に腰掛ける美花。朝と同じように、違うのは克哉から口を開いた。

「夜……ですね」

「それがなにか？」

「夜になると何かがこの屋敷を徘徊してますよね？」

「わかりません。夜に限らず、この屋敷は四六時中のことなので」

四六時中　住人たちは当たり前のこととして、そういうものを感じていいるということだろう。

「あれをご存じない？」

「あれとはなんですか？」

「巨大なあれですよ。屋敷を守る狩人です」

「わかりません。ただ、夜は決して部屋を出てはいけないうきつく言われています。おぞましい声が聞こえてくるのも、昼よりも夜のほうが多いようです」

それがこの屋敷なのだ。当たり前前のように、美花はおかしなことを口にする。本人には自覚がないのだろう。

克哉はうなずいた。

「捜していた行方不明者の一部はどこに行ったか、だいたい検討がつかしました」

「やはりこの屋敷で消えたのですか？」

「どうやら夜になるとこの屋敷には大きな蜘蛛、大きさは俺の跡よりも大きい蜘蛛です。それが人を喰らっているらしい。あなたのお母様の話を盗み聞きすると、まあそんな感じでした。それが行方不明者のすべてだとは思えませんが」

「そんなものが屋敷の中にいるなんて信じられません」

「なら、あなたのお母様が人を殺しているほうが現実的ですか？」

「……………」

「黙りましたね？」

追求されて美花は椅子から立ち上がった。

「もうお話することはありません」

「俺がここに来た本当の理由……話しましょうか？」

美花は立ったまま、そこから動かさず克哉を見つめた。

黙る美花を見つめながら克哉が続ける。

「殺しに来たんです」

「だれをですか！」

屋根裏中に響き渡る叫び声だった。

「それが来るまではわからなかったんですよ」

間が抜けたような口ぶりだった。

普段は穏やかな表情をしている美花が怖い顔をして克哉を見つめている。

克哉は宙を仰いだ。

「来てからも未だに判断が難しく、あなただって可能性も捨てきれませんが、俺にあんたは殺せない」

「私を……殺す？」

まさか自分の名前が挙がるとは　　美花は青ざめて言葉を詰

まらせた。

さらに克哉は言い続ける。

「あなたを殺すなら、当然あなたのお母様もお姉さんも殺すことになるでしょう」

「そんなことさせない！」

今の美花はまるで美咲のようだ。恐ろしい鬼気を纏っている。落ち着いてくださいよ。今はもうあなたの家族を殺す気なんてありませんから」

「どうして、どうして、殺されなければならぬんですか！」
「だから落ち着いてください。可能性があったというだけで、
もしそうだったとしても、もう殺す気はないと言ってるんですよ」

その言葉を信じたどうかはわからないが、美花は静かに椅子に腰掛け直した。

美花と克哉の視線が並んだ。

克哉は頭を掻いた。

「どうして殺さなくてはならないのか……という質問でしたよね？」

「……はい」

「死にたくないからですよ」

「私の家族が殺されなくてはならない理由と繋がりません」

「自分では手を下さないまでも、あなただって生きるために多くの命を奪っているはずだ」

お互い沈黙した。

克哉の言葉は通常の意味以上の意味を美花に問いかけたのか
もしれない。

時間が過ぎる。

その沈黙を破ったのは克哉だ。

「まあ、その話は今はどうでもいいんですよ。俺が今望んでる
ことは、この屋敷から逃げ出すこと、それが叶えば今はそれで
いい」

「できないことです」

きつぱりと言い放った美花に克哉は笑って見せた。

「そんなことはやってみなきゃわからないさ」

「できますか？」

「それはだからやってみなきゃわからないさ」

「……そうですね」

美花はうつむいてしまった。

「だからあなたに協力して欲しいんだ」

それに美花は答えず、うつむいたまま。

克哉は返事を待った。

静かな夜更け。

「……っ？」

急に克哉は驚いた顔をして辺りを見回した。

「美花ちゃん、なにか臭わないか？」

「なんでしょう……焦げ臭い」

「火事……なんてことはないよな？」

「そんな、早く皆に知らせないと！」

本当に火事なら屋根裏に隠れているわけにもいかない。

すぐに出口から。

「きゃっ!？」

美花が叫んだ。

暗がりで見えなく巨大な怪物。

「大蜘蛛だ！」

叫んで克哉はすぐさま短剣を抜いた。

大蜘蛛が飛び上がった。

飛び上がったのは克哉のほうがい！

大蜘蛛の上に飛び乗った克哉は、その勢いで短剣を背に突き立てようとした。

克哉の足下が揺らいだ。

「くっ」

短剣を刺す前に躰が振り落とされそうになる。

大蜘蛛の背を滑り落ちながら克哉は短剣を突き立てた。

恐ろしい物の怪の絶叫。

克哉は膝に両手をつけて床に立っていた。

「はあ……はあ……仕留めたのか？」

短剣を突き立ったままの大蜘蛛はびくりとも動かない。

「……これで俺は生きられるんだ」

心からしみ出した克哉のつぶやき。

克哉は震えて動かない美花に顔を向けた。

「俺が殺さなきゃいけないかったのはこいつなんだ。ほかにもいるかもしれないが、今はどうでもいい。これで俺はしばらく生き延びることができる」

「どういう……ことでしょうか？」

「俺の親父も同じだった。人外を殺して全国を回ってたんだ。理由は死にたくないからさ」

「殺さなくても、わざわざ危険な目に遭わなくても、ひっそりと暮らしていればいい！」

「ひっそりと暮らす。それは自分に向けられた言葉だったのだろっ。」

「そういうわけにはいかないんだ。定期的にこういうモノを殺さないで、明らかに体調が悪くなっていくんだ……本当にそのまま死ぬかどうかわからない。けど、試してみるなんて真似、怖くてできるわけないだろう、俺は死にたくないんだよ、誰よりも」

刹那、まだ息のあつた大蜘蛛が克哉に飛び掛かってきた。

武器はない。大蜘蛛の背に突き刺さったまま。逃げる隙すらもなかった。

ぶんと何かが風を切った。

血を噴き出しながら大蜘蛛のが吹っ飛んだ。

そして、斧を持った少女の姿。

「お逃げください。もう長くは保ちません」

克哉を救ったのは菊乃だった。

「どうぞこちらです」

菊乃は二人を隠し階段まで案内した。屋根裏には隠し階段も備わっていたのだ。菊乃ははじめからその存在を知っていたのか？

屋根裏の一部が崩落し、煙が一気に昇ってきた。

本当に火事だった。

屋敷全体が燃えているのだ。

階段を駆け下り、廊下から雨戸を開けてすぐに外へ出た。

克哉に手を引つ張られていた美花が立ち止まった。

「皆が、皆を助けないと！」

燃えさかる屋敷。

菊乃は屋敷か出ようとせず、そこでじつと佇んでいた。

「火の手は皆様から上がりました。もう助かりません」

「どういうことだ？」

「誰が火を放った!？」

美花は膝から崩れた。

克哉は菊乃に手を伸ばした。

「あなたも来い！」

「はじめの言いつけを守り、わたくしはこの屋敷に残ります」

「なにを言ってるんだ早く！」

その目の前で屋敷が崩落した。

瓦礫と共に炎の中に呑み込まれた菊乃の姿。

克哉は齒を食いしばって美花の手を強引に引っ張った。

火の粉が風に流れる。

屋敷から離れ庭を走っていると、後ろから少女の影が追いつ

てきた。

「美花！」

それは美咲だった。

美咲は克哉から美花を奪って抱きしめた。

「捜したのよ美花。どうして部屋にいなかったの！」

「お姉様……みんな……な……炎の中に……」

「そうね、みんな焼け死んでしまったわ」

「どうして……」

そんな二人に克哉は声を掛けようとした。

しかし、美咲に睨まれたのだ。

「あなたが侵入者ね。でもあなたのことなんてどうでもいいわ。だからあなたもわたしたちに構わないで、一生ずっと……」

美咲は美花を支え歩き出した。

その方向は正面門。

美咲の手によって門が開かれた。

そして、二人は出て行ったのだ。 外の世界へ。

何が起き、何があったのか、克哉がそれを知ることにはなかった。

第三之世界 土蜘蛛

それは運命の糸で編まれた住処。

誘われた者、囚われた者は、捕食者によって今宵も狩られる。来る者は拒まず、去る者は逃さず。

その幾つもの眼で獲物を捕らえ、その幾つもの足で獲物を追う。

里の青年はそこで働く奉公人の少女に興味を持った。

大人たちは無闇に近付きたがらない。

しかし、青年はまだ心が幼かった。

それは無知か無垢なのか。

惹かれるとは引かれること。すなわち手繰り寄せられるということ。

誰もが恐れる屋敷に青年は忍び込んだのだ。

住人たちが寝静まったであろう夜更け。

会いたいがために。

屋敷の敷地には難なく忍び込むことができた。

問題は屋敷の中にどのようにして入ることができるのか。

この屋敷は普段から雨戸が閉め切られ、傍目からは閉鎖されているように見える。

しかし、玄関の戸に手を掛けると、静かに開いたのだ。

まるで誘われている。

青年はそれを幸運と思った。

逸る気持ちを抑えられず、青年は足早に廊下を進んだ。
気配がした。

闇の向こうで何か蠢いている。

手招きしていたのは、大蜘蛛。

「ぎゃあああああつ!!」

青年は肝を潰し尻餅をついた。

大蜘蛛がようすを伺いながら迫ってくる。

生きたまま食い殺される。

逃げなくて、逃げなくては、青年は床を掻きながら逃げようとした。

しかし、その糸に一度絡め取られれば、逃げることなど叶わない。

すでに青年の四肢は蜘蛛の糸によつて捕らえられてしたのだ。
青年の眼前で触肢が蠢いている。

声も出せず口を開けていた青年の口腔に蜘蛛の消化液が流れ込んできた。

大蜘蛛の接吻。

まるでそれは生き血を啜るように見えるが、蜘蛛のは消化液によつて獲物を体内から溶かし、それを飲み込み食事をするのだ。

まるで躰が内側から焼けるよう。

胃が腸が、じゆくじゆく焼けていく。

のどが爛れ、もう声すらも出せない。

恐怖を味わい、苦しみなながら、糸に囚われ暴れることもでき

ず。

最期の瞬間まで青年は悶絶しながら喰われて死んだ。

やがて残された搾り滓。

大蜘蛛が闇の中へと消えていく。

しばらくして、その場に侍女の菊乃がやってきた。

淡々と掃除をし跡形もなく、何事もなかったように終わる。

やがて、朝を迎えれば、家族は何も知らず一日がはじまるのだった。

眼を開けると、ぼんやりと人の顔が見えた。

「お目覚めでございますか？」

すぐ近くでしゃべられているはずなのに、意識がはっきりとしないためか、遠くに聞こえる。

「あなたの名は瑠子。姓は土田、土田瑠子という名でござい
ます」

「よ……う……こ」

「お上手です。そして、わたくしの名は菊乃」

「き……く……の」

「焦らずともすぐに喋れるようになります。三日もすれば前
のように生活できるようになるでしょう」

瑠子は躰を起ここそうとした。

うまく力が入らず、起き上がれない。手足の感覚も少し麻痺
したように、鈍感になってしまっている。

「焦らずとも申し上げた筈です。無理をなさらず、もうひと

時お休みなさいませ」

菊乃は瑤子を寝かしつけた。

虚ろな目をしてうなずいた瑤子。

姿形は少女なのに、その表情はまるで赤子のよう。

まん丸な瞳を瑤子は閉じた。

まぶたの裏に広がる暗い暗い闇。

その先に何かがいる。

八つの眼。

違う。

それは青年の瞳に映った光景だった。

眼の中に映り込んでいた八つの眼。

そして、世にも恐ろしい表情をしている青年。

「きゃあああああ！」

叫びながら瑤子は飛び起きた。

「どうかなさいましたか？」

静かな声で菊乃は尋ねた。

瑤子は震えたまま答えない。

菊乃はそつと瑤子の手を握った。とても冷たい手だった。そ

れでも握られていると安心です。

記憶の糸を辿る。

今見た光景はいつたいなんだったのか？

思い出せなかった。

それどころか瑤子にはなにも思い出せない。

自らの名前でさえ。

ようこ。

呼ばれた感覚は違和感なく馴染んだ。
きくの。

傍にいる少女の名も違和感がない。

「あ……たし……は……だれ？」

舌が回らない。

「名は土田瑶子」

「よ……う……こ」

「ご自分の顔をごらんになりますか？」

瑶子は小さくうなずいた。

すつと立ち上がった菊乃は引き出しから手鏡を取って来た。

鏡面が瑶子に向けられる。

「だ……れ？」

見知らぬ顔。

「それがあなたの顔でございます」

「よ……う……こ？」

「そのお顔が瑶子の顔」

「ようこ」

「発音がお上手になってまいりました」

言葉を覚え、言葉を発音できる度に褒められる。まるで言葉を覚えた手の赤子のようだ。

瑶子は再び起き上がることに挑戦した。

今度は上半身が起き上がった。

菊乃はすぐに瑶子の背に手を添えた。

「素晴らしい。そのまま立ち上がる気でございますか？」

立ち上がるうとする瑤子に手を貸す。

しかし、膝が震えすぐに瑤子は倒れてしまった。

菊乃は瑤子の長い脚を揉んだ。

「焦らずともすぐに立てるようになります。歩けるようになって

たら、この屋敷を見て回りましょう」

「やしき」

「これからあなたが暮らす屋敷でございます」

「やしきでくらす」

「生まれたときからあなたはこの屋敷の奉公人。そして、使命は違えどわたくしも同じ奉公人。わからぬことがあれば、なんでもわたくしにお聞きください」

生まれたときから。

以前からということか？

ならば失われた記憶もここにあるのか？

目覚めてから一日目は寢床で過ごした。

二日目の朝、何気ない動作で瑤子は立ち上がり布団から出た。

まだこの部屋の外に出たことがない。

躰が動くようになって、外に出ようかと迷っていると、菊乃がやってきた。

「わたくしがいない間にお目覚めになりましたか」

「はい、目が覚めてしまいました。とっても気持ちいい朝ですね」

言葉もすんなりと出た。

「わたくしたちはご家族の誰よりも早く起きねばなりません。早く目が覚めることをよいことでございます。まずは着替えを済ませてしましましょう。その姿でご家族の目に触れるのは失礼にあたります」

菊乃は箆笥の中から瑤子の服を取りだして手渡した。

少し粗末な着物と前掛け。

瑤子は自分ひとりで着替えはじめた。

寝衣を脱いだ裸体は手足が細くしなやかに伸びていた。

「きゃっ！」

瑤子は短く叫んだ。

躰に触れた冷たいもの。

それは濡れ布だった。菊乃によって躰が拭かれる。手足の先から、顔まで、隅々まで拭かれるがまま。

「お躰を拭いて差し上げるのは今日まででございます。お躰が自由に動くようになった今、お一人で入浴して汗を流してください」

躰を拭き終わると、着物に着替えるのも菊乃が手伝ってくれた。

袖にその長い腕を通し、帯を締める。

最後に前掛けを付ければ、すっかり姿はこの屋敷の侍女だ。

菊乃は鏡台の前に瑤子を座らせた。

「髪を梳かし結いましょう。今はまるで乞食のような汚らしい髪です」

鏡台の掛け布が取られた。

正座をする瑤子の後ろで膝立ちをしながら菊乃は櫛を手を取った。

瑤子の髪は細く艶やかで、それでいて弾力性が強い。

小枝が折れたような音。

「あつ」

と、瑤子は声を漏らした。

櫛の歯が欠けたのだ。

「ご心配なさらずに、よくあることでございます」

それほどまでに瑤子の髪は強かったのだ。

梳かされた髪は一本に大きく三つ編みにされた。

瑤子は菊乃を姉のように感じた。

鏡に映る菊乃の姿は、淡々と作業をこなしているだけ。それでも瑤子は嬉しく思う。

ふつと鏡に何かが映り込んだ。

「菊乃さん……見えましたか？」

「なにかございましたか？」

「綺麗な女の方が部屋にいました」

しかし、部屋のどこを見渡しても、ここにいるのは瑤子と菊乃だけだ。

「ご心配なさらずに、よくあることでございます」

身支度を済ませると、瑤子は部屋の外に連れ出された。

「まずは静枝様にご挨拶をしましょう。静枝様はこの家の当主、何があるうとも、静枝様のおっしゃることが絶対ということを

肝に銘じておくように」

「はい」

瑤子は思った。静枝とはいったいどのような方なのだろうか？

とある部屋の前に来ると、そこで菊乃は正座をし、瑤子の同じように座らされた。

「失礼いたします、菊乃でございます。瑤子を連れて参りました」

そう言うと、部屋の中から声が返ってきた。

「お入りなさい」

戸を開けると、その先にひとりの女が正座をしており二人を出迎えた。

すぐに菊乃は頭を下げたが、瑤子は呆然として、その女の顔を見つめてしまった。

年の頃は一〇代後半。瑞々しい肌と整った綺麗な顔立ち。しかし、顔の半分を覆う痛々しい痣。

そして、瑤子はこれとそっくりな顔を見ていた。

「さつき見た顔」

つぶやいた瑤子に菊乃は静かな目をして耳元で囁いた。

「そうであるなら、決して静枝様のお耳には入れないように、絶対でございます」

内々に話す二人に静枝は声をかける。

「なにかあったのかしら？」

「いえ、なにもございません」

すぐに菊乃が答えた。

まだ瑤子は呆と静枝の顔を眺めてしまっている。

鏡に映ったあの顔を瓜二つ。違うのは痣があるかないかくらいだ。

痣の他にも気になる点があった。

大きく膨れた静枝の腹。

その視線に静枝も気づいたようだ。

「もう半月もせず生まれるわ、双子の姉妹よ」

瑤子は驚いた。

「双子、それも姉妹とわかるのですか？」

「そういう定めなのよ」

「旦那様は？」

一瞬、空気が凍り付いたような気がした。

菊乃は無表情のまま口を結んでいる。

静枝は妖しく微笑んだ。

「此の世にはいないわ。それも定めなのよ」

よく瑤子には理解できなかった。

とりあえずは一見させたので、菊乃は早々に去ることにしたらしい。

「わたくしどもはあさげの準備がございます。これにて失礼いたします」

「あ、失礼します」

慌てて瑤子も頭を下げて、先に出て行ってしまった菊乃を追いかけた。

部屋を出て廊下を歩き出すと、瑤子は不思議そうな顔で菊乃にあることを尋ねる。

「ほかのご家族にご挨拶をしなくていいのですか？」

「今この屋敷で暮らしておられるのは静枝様だけ、わたくしたちを加えるなら三人だけでございます」

「だってほかにも家族が？」

なぜほかにも家族がいると思ったのか？

そうだ、菊乃がいつだったか「ご家族」という言い方をしたのだ。ひとりしかいないのであれば、そのような言い方はしないだろう。

「もうすぐ双子のご息女がお生まれになります。そして、しばらくしたら家庭教師を向かい入れるともおっしゃっております。わたくしたちの仕事も増えることになりましょう」

と菊乃は言ったが、家族はこれから増えるのであって、今いるわけではない 筈だ。

言葉を細かく気にしすぎなのだろうか？

二人は台所がある土間に向かっていた。これから朝食の準備をするためだ。

侍女としての勤め。

当たり前のように事が進んでいく。

瑤子は今になって疑問に思った。

「ところで、なぜあたしはここにいますか？」

「それはこの屋敷の奉公人だからでございます」

「そういうものなのですか？」

「あなたが生まれた時からそう決まっております」

「生まれたとき……そう言えば昨日以前のことを覚えてないの
ですが？」

「それは特に気にするほどのことではございません。あなたは
ここで自分の勤めに精を出せばいいのです」

「そういうものなのですね」

とても不思議だが、なぜか納得してしまった。

こうして二人は朝食の準備をした。用意したのはもちろん静
枝の分。ほかにあとで頂く物として、自分たち二人分も別に用
意した。

やはりこの家には三人しかないのか？

朝食が終わると、次に瑤子は屋敷の中を菊乃に案内された。

屋敷は広く、たった三人にはあまりある大きさだ。これから
家族が二人増え、家庭教師も来ると言う話だが、それでもあま
りある。

「あの、この赤い札のお部屋は？」

瑤子は不思議そうに尋ねた。

「開かずの間でございます。あなたも決して開けてはなりません
」

「なぜですか？」

「そのうちあなたも感覚が磨かれ、おのずとそれでなんである
かわかるでしょう」

突然、赤い札の部屋の中で物音がした。

さらに戸が激しく揺れる。

驚く瑤子。

「なんですか!？」

「戸を開けさえしなければ、強風と同じでございます」

部屋の中から低い唸り声が聞こえてきた。

それに対しても菊乃は涼しげな顔で応じる。

「風も同じような音を立てるでしょう?」

「はあ、そうですね」

「少し騒がしいかもしれませんが、馴れば気にも留めなくなります」

「そういうものなのだろうか?」

屋敷の端から端までやって来て、壁の前で菊乃は足を止めた。

「近い将来、この壁が壊され、廊下が造られる予定でございます」

「そういうことは、この先に部屋ができるのですか?」

「家庭教師を迎えるための離れになります。洋風とのご注文で、今回は少し建設に時間が掛かっているようで」

「今建設中ということですか?」

「ええ」

「なら大工さんたちのお世話もあたしたちの仕事ですね!」

はりきって仕事に精を燃やそうとした瑤子だったが、菊乃の次の一言は思わぬものだった。

「それに関してわたくしたちの仕事はなにもございません。なぜなら、建設はわたくしたちの知らぬところで勝手に進んでい

くからでございます」

「勝手にですか？」

「わたくしたちはわたくしたちの仕事をすればいいのです」

「まだ自分の仕事についてよくわからないのですか？」

「常時するべき事はご家族のお世話。それには掃除洗濯炊事などの家事が含まれております。加えて静枝様のお言いつけを守る事。そして、自分自身のなすべき事をやる事。最後の事は自然と見えてくるもので、あえてわたくしがお教えする必要のないこと」

また「ご家族」と言った。

瑤子は菊乃の言葉をすべてなぜだか納得できた。

過去の記憶がなくとも、やはり瑤子もこの屋敷の住人。外の者が不可思議に思う内容の話でも、そういうものなどすぐに納得してしまう。

二人は来た道を引き返した。

「次はどこへ行くのですか？」

瑤子は興味津々の顔で尋ねた。

「機織り室に参りましょう」

「あたし機織りは大好きです！」

「今日のところはあなたに任せられる仕事は夕げまでございません。それまでの間、機織りでもしているとよいでしょう」

部屋に向かって歩いていく途中、ふと菊乃の足が止まった。

そこにあつたのは赤い札が貼られた部屋。

「近々、この部屋を開放することになります」

「開けてはいけないって？」

「双子のご息女のお部屋が今はございません。ここと、隣の部屋が間取りもよいのです。解放の際にはあなたにも手伝ってもらいかも知れません」

「手伝うってなにを？」

「それはそのときにお話しします」

二人はこの場をあとにした。

織機のある部屋にやって来た瑤子はさっそく織物をしようとしたが。

「あの、どうやって使うのでしょうか？」

たしか機織りが好きと自分で言った筈だが？

とくに不思議がることなく、菊乃は淡々と説明をはじめた。

「まずここに踏み板がございます。踏み板を踏むと」

この後、説明を一通り聞き終わると、瑤子はすぐに織機が扱えるようになった。その動きは手慣れたものだ。

機織りを瑤子に任せ、菊乃は自分の仕事をするため去っていった。

調子よく鳴り響く織機の音。

緊張をほぐして、瑤子は童謡を歌いはじめた。

歌いながらそれがなんの歌だったか、どうして自然に口ずさんでしまったのが疑問に思う。

とおりゃんせ とおりゃんせ

ここはどここの細道じゃ

はりてい様の細道じゃ

ちよつと通してくだしゃんせ

ごようの無いもの通しゃせぬ

この子の七つのお呪いに 御札を納めに参ります

いきはよいよい かえりは怖い

怖いながらも とおりゃんせ とおりゃんせ

その歌詞は一般的なものとは違うものだった。自然に口ずさんだ瑤子は、それをそうとも知らぬのであろう。

しばらく機織りを続けていた瑤子だったが、次第に疲れしてきたので休憩するのにした。

自然と足は庭の外へと向かっていた。

清々しい空。

瑤子は青空を見つめた。

「とつても綺麗」

まるで始めて空を見たような感嘆。

昨日、この屋敷で目を覚ましてからはじめて庭に出た。

あれ以前の記憶は失われている。

そもそも記憶などはじめからなかったように、何もかもが目新しい。それでいて、何もかもすんなりと受け入れることができる。瑤子はすでにこの屋敷に溶け込んでいた。

屋敷に沿って周りを歩くと、木材などが置かれている、建設中の離れを見つけた。

静かなもので、だれもその場にはしなかった。

今日はたまたま建設が休みなのか？

菊乃は言っていた。

建設はわたくしたちの知らぬところで勝手に進んでいく。それはいつなのか？

瑤子は建設現場をあとにした。

屋敷の裏手のほうまで来ると鳥居が見えてきた。

小さな鳥居から伸びる細道 その先には祠がある。

鳥居の前に立った瑤子は不思議なものを見つけた。

黄金に輝く細い糸。

その糸は鳥居からずつと先の祠まで伸びていた。

瑤子はその糸を握った。

ぴんと張り詰められた糸。

少しずつ手繰り寄せる。

重い。

何かが糸の先にある。

動かないものではない。

しかし、重い。

重いというより逆側から引つ張られているような感覚だ。

やがて糸の先に何かが見えてきた。

蠢いている。

それは塊だった。

毛のない猿のようなものが、糸その先に群がって引きずられてくる。

そんな不気味なものを自ら手繰る者がいようか？

しかし、瑤子は手繰り続けたのだ。

その群れの中に微かに見えた少女の顔。

少女はしっかりと糸を掴んでいる。不気味なものどもは、少女の躰にしがみついているのだ。

瑤子は糸を手繰り寄せながら、その場を動かない。自ら糸の先に近付くことはしない。そのほうが早く糸の先にたどり着けるだろう。だが、瑤子は鳥居の手前から手繰り寄せ続けたのだ。おそらく瑤子の行動は本能的なものであったのだろう。

不気味なものの一匹が、少女の躰からずり落ちそうになった。それでも不気味なものは、あがいて少女の髪に捕まった。

少女が浮かべる苦痛の表情。

髪が引つ張られ、その髪を掴む不気味なものも、細道の先になにやら引つ張られているようだった。

少女の躰にしがみついているなければ、来た道を戻されてしまう。そんな感じが見受けられた。

あと少しで少女の躰が鳥居をくぐる。

瑤子は足に力を入れ、地を踏みしめながら最後の力を振り絞った。

少女の上半身が鳥居をくぐった。

不気味なものどもは、まるで見えない壁に阻まれるように、ずるずると脱落していく。

少女の躰から落ちた不気味なものは、瞬く間に還される。その先には祠は見えず、代わりに真つ暗な闇があった。

奇声をあげながら、一匹、また一匹と、闇の中に不気味のも

のが吞まれていくのだ。

少女の躰はあと足のみを越して鳥居をくぐった。

最後の一匹となった不気味なものは、少女の足首に捕まり、最後の最後まで抵抗するのだ。

不気味にものに掴まれている足首は血まみれだった。

鋭い爪が足首に食い込み、今にももがれそうなほど痛々しい。

瑤子にできることは糸を手繰り寄せること。

足首の皮膚が削げ落ちる。

不気味にものが落ちていく。

深い闇へと落ちていく。

ついに少女は鳥居をくぐり抜けた。

瑤子の手元から糸は消えていた。

そして、細道の先には闇などなく、小さな祠が元のように存在していた。

か細い息をしている少女を瑤子は抱きかかえた。

「だいじょうぶですか？」

「……………」

返事はなく、少女は睨むような眼で瑤子に訴えている。

この少女の髪の間からは、二つの角のようなものが生えていた。

「お名前は？」

「……………」

やはり返事はない。

瑤子は少女を背負うことにした。それに対して抵抗はなかつ

た。

「傷の手当てをしてあげます。だいじょうぶですよ、怖がらなくても」

少女の躰は酷く震えていたのだ。それが背から伝わっていた。ゆっくりと歩き出す瑤子。

その背中で小さな声がした。

「……………りあ」

「えっ、なんですか？」

「るりあ」

「それがお名前ですか？」

「……………」

また無言になってしまった。

少女 おそらく「るりあ」という名の少女の手当てを済ませ、

瑤子はとりあえず菊乃を探すことにした。

るりあの手を引き屋敷の中を歩き回る。

廊下を歩いていると、急にるりあが瑤子の背に隠れた。する

と、すぐに菊乃がやって来た。

「あなたの背に隠れている“それ”は？」

「すみません菊乃さん。祠の近くで見つけたのですが、怪我を
していて、それで……………」

どう説明していいのか瑤子は困った。

「祠……………で見つけたと？」

「はい、そこで見つけた糸を引っ張ったら、この子が引きずら

れてきて……」

「今までに類を見ない出来事が起きてしまいましたね」

この謎めいた屋敷にあつて、類を見ないとは。

菊乃はるりあを静かな瞳で見つめた。

睨まれていた。

背に隠れるという動作は怯えだが、その眼は好戦的だ。

菊乃は睨まれたことは気にも留めていないようだ。

「“それ”がなんであれ、まずは静枝様にご報告いたしまし
よう」

三人は静枝の元へ向かった。

静枝は自室で大きな腹を摩りながら、静かに時を過ごして
いた。

部屋に入ってきた三人を見ても、静枝は特に表情を崩さない。

「その子は？」

静枝が滑らせた視線の先で、先ほどと同じように睨んでいる
るりあ。

「瑶子は慌てて口を開こうとしたところ、菊乃が先に口を開い
た。」

「祠で瑶子が見つけたそうでございます」

「あの場所に……里の子……ではなさそうですね」

静枝の視線はるりあの方に向けられていた。

「どうなさいますか？」

何をとほ言及せず菊乃は尋ねた。

少し間が置かれた。

未だにるりあは瑤子の背に隠れている。

「客人としてもてなし、お世話は瑤子に任せましょう。頼んだわよ」

静枝の言いつけを守ることに。

その言葉に従い瑤子は、目覚めてはじめての言いつけを承けた。

静枝は言葉が続けた。

「さあ、客人を連れてお行きなさい」

瑤子はそそくさとるりあと部屋を出て行った。だが、菊乃は部屋に残った。残れと直接言われていないが、菊乃は静枝の視線でそれを察していた。

「なんなりとお申し付けください」

「まずは、あれがなんであるか……菊乃も知らないの？」

「はじめて見ました。しかし、おそらく鬼女の子。だとするならば、この家にまつわるモノかと思いますが、古い資料を調べて見ましょう」

「禍わざわいとは、鬼のなす業わざのさま。なにかの前触れかしらね」
「……………」

菊乃は黙っている。

静枝は菊乃を見つめている。なにかを菊乃に促しているのは明らか。だが、菊乃は口を開かず。

沈黙を破ったのは静枝だった。

「下がちなさい」

「失礼いたします」

静かに菊乃は部屋を出て行った。

残された静枝は大きな腹を摩った。

「何か変わるのかしらね。あなたたちはどう思う？」

腹の中からはなんの反応もなかった。

瑤子は呆然と眺めていた。

「あれっ、工事が進んでるような？」

その視線の先にあつたのは、離れの建設現場であつた。

昨日よりも工事が進んでいる。

いつの間？

今日も大工らしき姿は見当たらない。

瑤子は地面をまじまじと見つめた。

大量の足跡だ。地面には大量の足跡が残っていた。

足跡はひとりのものではなく、その大きさの違いから複数人
いることがわかる。

いや、そもそもこの足跡を人と呼ぶべきものなのか。

残された足跡は大きなものともなると、瑤子の顔が収まって
しまうほどもある。

謎の多い建設現場だ。

瑤子はここから移動した。

散策目的で歩き続けていると、微かな羽音が聞こえてきた。

辺りを見回した瑤子は屋根近くの壁にそれを見つけた。

「きゃっ」

見る見るうちに瑤子の顔色が悪くなる。

そこにあつたのは蜂の巣だつた。まん丸く太つた蜂の素だ。瑶子の顔などよりも遙かに大きい。

巣の周りには無数の蜂が飛び交っている。

獐猛かつ凶暴なスズメバチだ。

すでに蜂は警戒行動を取りはじめ、瑶子の周囲を忙しく飛び交っている。

かちかちと堅い物が連続して打ち鳴らされている。それは蜂の大顎だ。すぐにこの場を離れた方がいい。

しかし、瑶子は足がすくんでその場を動けなかつた。

蜂の群れが瑶子に襲い掛かつてきた。

「きゃーっ！」

もう駄目だと思つたとき、小柄な影が瑶子の前に立つた。

それはるりあだつた。

なんと、るりあは襲い来る蜂を素手で次々と叩き落としはじめた。

驚く瑶子。

角を覗けば童女であるるりあが、今はまるで大熊のように見える。

るりあに群がる蜂。無傷で済むはずがない。すでにるりあは体中を刺されているはずだ。それでもるりあは怯むことなく、暴れ狂いながら蜂を殺していくのだ。

瑶子はるりあの中に鬼神を見た。

蜂の襲撃は際限ない。いくらるりあが強くとも、多勢に無勢だ。瑶子のこともひとりでは守りきれない。

「逃げる」

るりあに命令されるも、瑠子は膝が震えて立っていることもできなかつた。

そんなるりあを抱きかかえた冷たい手。

「逃げましょう」

菊乃は瑠子を強引に引きずつた。

「でもるりあちゃんが」

「今はあなたのほうが心配です。天敵の蜂の気配すら気づかないなんて、まだあなたは本調子ではないのです」

るりあを残してはいけなさと瑠子は思いつつも、震えていることを利かない躰では抗うこともできず、菊乃に引きずられるがまま。

るりあの姿がどんどん小さくなっていく。未だ蜂と果敢にも戦い続けている。

群れから離れた蜂が執拗に瑠子をたちを追ってくる。

菊乃が蜂を素手で握りつぶした。毒針など気にも留めてない

動作だ。

やがて蜂を振り切つた二人は屋内へと逃げ込んだ。

菊乃は瑠子をその場に残し、戸締まりをして再び蜂の元へ向かつた。

ひとり残された瑠子の躰はまだ震えていた。

「躰がすくんで何もできないなんて……ああ、るりあちゃん……」

るりあのことがか心配だ。

今からでも助けに行きたいという気持ちはある。けれど気持ちとは裏腹に躰が動かないのだ。

今でも羽音や顎を鳴らす音が蘇ってくる。

血の気が引いて、手足から痺れが全身に伝わり、やがて動けなくなるのだ。

酷い恐怖だ。

蜂に刺されれば死に至ることもある。それにしても瑤子の恐怖は尋常ではない。

玄関先でぐったりとしてしていると、菊乃がるりあを連れて戻ってきた。

るりあの姿を見た途端、瑤子は声をあげた。

「るりあちゃん大丈夫！」

「……おら強いから平気だ」

るりあは小さくうなずいた。

体中には蜂に刺された痕がある。とは言っても、その傷は蚊に刺された程度にしか見えなかった。

菊乃が瑤子に尋ねる。

「もう自分の足で歩けますか？」

「はい、どうにか」

「ならば、ご自分の部屋でお休みください」

「あの、るりあちゃんの手当を！」

「それはわたくしがやって置きましょう」

言った途端、るりあは駆け出して逃げしまった。

「あっ、るりあちゃん！」

瑤子が名前を呼ぶが、その姿はもうなかった。菊乃もわざわざ追うことはなかった。

まだ調子がすぐれないが、瑤子はるりあを探そうと歩き出した。それを見透かされたのだろうか、菊乃が声を掛けてきた。

「お部屋までご一緒にしましょう」

「あの、あたしは……」

口ごもる瑤子に菊乃は間髪入れなかった。

「無理をされては困ります。あなたひとりの問題ではないと覚えておいてください」

「あたしひとりの問題ではない？」

「そうです、あなたにはあなたのやるべきことがあります。体調を崩され、それがおろそかになれば、皆が困るのですよ」

「……はい」

少し沈んだ返事をした。

菊乃に連れられて部屋に戻る。

瑤子の部屋は六畳一間で、同じ奉公人である菊乃とは別々の部屋になっている。

「しばらく部屋で大人しくしててください」

と言って、菊乃は部屋を立ち去ろうとする。

「あの」

「なんででしょうか？」

菊乃が振り返った。

「あたし……お役に立ててますか？」

「どういう意味ですか？」

「仕事もあまりさせてもらっていないし、逆に迷惑を掛けているような」

「此の世に存在する以上は、なんらかの役割を担っております。あなたにはあなたのするべきことがございます。自然に身を任せていればいいのですよ」

「……はい」

沈んだ返事。気分が晴れない。

再び立ち去ろうとする菊乃をまた瑤子は呼び止めようと口を開いた。

「あの」

「まだなにか？」

「どこに行くのですか？」

「蜂の巣の駆除をしなくてはなりません」

「……あ……っ」

瑤子は立ち眩みを覚えた。すぐさま菊乃が抱きかかえる。

「大丈夫でございますか？」

「……すみません。さっきにことを思い出してしまって、蜂が怖くて怖くてどうしてこんなに怖いのでしょうか。菊乃さんにもなにか怖いものありますか？」

「ございません」

その返事を聞いて瑤子は肩を落とした。あると言ってくれれば、少しは気分が晴れたかもしれない。さらに瑤子は落ち込んでしまった。

三度立ち去ろうとする菊乃。今度は呼び止めることなく見送

った。

ひとりになった瑶子は物思う。

このまま奉公人として仕事をまっとうできるのだろうか。

現状では仕事の多くは菊乃がひとりでこなしていた。瑶子がいなくても、家事や静枝の世話は菊乃だけでこなせるだろう。

なにかをしなくてはいけないという焦りが瑶子の中で生まれてきた。

早くこの場に馴れたい。屋敷の住人として溶け込みたい。ここが自分の居場所だと強く瑶子は感じたいのだ。

なぜそう思うのか？

瑶子はふと思い付いた。

過去の記憶がないからではないかと。

今まで過去の記憶がないことにたしいて、なぜか自然と受け入れてしまっていた。本来であれば、もっとそれについて思い悩むだろう。瑶子にはそういう考えがなかった。

それが今やっと大きな疑問として育ちはじめたのだ。

記憶を失う前のこと。

どこで、なにを、していたのか。

菊乃の態度や言動から、記憶がない以前の瑶子を知っているように思える。

「記憶を失う前も……同じ生活をしたのかな？」

だとしたら、役立たずの自分が余計にもどかしい。過去にも同じことをしていたはずなのに。

そうだ、菊乃は瑶子が“本調子ではない”と言っていた。

記憶を失う要因があり、それによって目覚めても調子が悪い。その要因を知りたいと瑤子は思った。尋ねるとしたら菊乃が静枝の二つしか選択肢がない。話しやすいのは菊乃だが、過去に似たような質問をしたときも、具体的な答えは得られなかった。静枝はどうか？

菊乃が具体的に答えない答えを、主人たる静枝が答えるだろうか？

それに瑤子はなぜ静枝に尋ねることが怖かった。

怖いというのは畏怖、もしくは恐れ多いとでもいうのか、静枝に尋ねることはなぜか躊躇われるのだ。

瑤子は考えることをやめた。

休めと言われたのだ、部屋でじっとして心身を休めることにした。

必要最低限の家具しかなく、部屋での楽しみはとくにない。

けれど、瑤子はじっとしていることが嫌いではなかった。

まるで悟りでも開くかのような瞑想に近い状態。

部屋と一体化するように、ただじっとなにもせず、に気配すら消す。

ゆるやかに時間が流れた。

翌日になり、まだ蜂のことを引きずっていた瑤子は、外に出ることをためらっていたが、午後になり決心をした。

本当は近付くのも嫌だ。足がすぐんでしまう。けれど、菊乃からは駆除したと聞いている。この目で確かめなければ、いつ

まで経っても恐怖に苛まれたままだ。

昨日と同じ道のりを歩む。

工事現場で足を止めた。

やはり昨日よりも工事が進んでいる。

瑠子はさらに先へと進んだ。

動悸がしてくる。

耳を澄ませば羽音が聞こえてくるような気がする。

足が震えて思うように動かない。

これ以上もう歩けない。

瑠子は立ちすくんでしまった。

また蜂に襲われたら今度こそ駄目かもしれない。

足がすくんで逃げることもできないのだ。

そつと瑠子の手が温かさに包まれた。幼い小さな手だ。小さ

くともとても心強い。るりあの手。

「るりあちゃん」

「……………」

るりあは口を閉ざしているが、その気持ちはちゃんと伝わってきた。

「ありがとう、心配してくれてるのね」

「……………」

つんとるりあはそつぽを向いてしまった。けれど、その頬は少し赤く染まっていた。

歩み出す瑠子。

あの場所に蜂の巣はなかった。

安堵感で全身の力が抜けそうだった。

気持ちも晴れやかになり、足を弾ませながら瑶子はるりあと手を繋いだまま、この場をあとにした。

屋敷の中へ戻ろうとしていると、るりあが遠くを眺めた。

庭よりも遙か先、屋敷の敷地外に微かに見える人影。

急にるりあは瑶子の手を振り払い駆け出してしまった。

「あつ」

瑶子は小さく声を漏らしただけで、また追いかけることができなかつた。るりあは一度駆け出すと、あつという間に消えてしまうのだ。

るりあのとこも気になったが、それ以上にあの人影が瑶子は気になって仕方なかつた。

垣根は高く侵入者を拒むように見えるが、目は粗く外からも中からも互いにようすが伺える。

瑶子が垣根に近付いていくと、その青年は明らかに敵意を持って睨みつけてきた。

「どうかしましたか？」

瑶子は笑顔で尋ねた。

けれど青年の表情は変わらない。

「おい、弟さどこにやったんだ！」

突然怒鳴り掛かってきた。

瑶子はなにがなんだかわからない。

「はい？」

「弟さどこやったか聞いてるんだ！」

「なにを言われているのか、よくわかりませんか？」

「おめえ、この家のもんだろ！」

「はい、この屋敷で奉公人をさせていただいている瑤子と申します」

さらに青年の顔つきは憤怒し、垣根を掴んで揺さぶってきた。

「おめえが瑤子か！ この尼、弟を返せ!!」

「何か勘違いか人違いをなれているのでは？」

「弟をたぶらかして、弟は……弟は……」

急に青年は齒を噛みしめて涙を流した。垣根を掴んだまま、力が抜けていき、地面に両膝をついた。

瑤子は背を低くして青年を見つめる。

「大丈夫ですか？」

「おめえに心配なんかされたかねえ。そうやって弟のことも騙したんだろ！」

「ですから、なにを言われているのか……」

「弟は毎日に毎日おめえに会いに行ってたんだ。おらがもうよせと言ったのも聞かねえで、あいつ……弟を返せ！」

垣根の隙間から青年の手が入ってきて、瑤子の服を掴んだ。

「きゃっ、なにを！」

「弟をどうした！ やっぱり……やっぱり……もう……殺されちまったのか！」

「えっ!？」

「弟を弟を返せ！」

両の手で服を掴んで青年は激しく揺さぶった。

瑤子は恐怖した。

「いやっ、やめてください！」

「殺してやる！」

「ですから、なにを言っているのか、もうやめてください！」

瑤子はどうか青年の手を振り払ってその場を離れた。

青年は垣根の向こうで喚き続けている。

恐怖を背にしながら瑤子は屋敷の中へと逃げ込んだ。

来る者は拒まず、去る者は逃がさず。

またも誘われた若者がひとり。

このまま囚われれば、捕食者によって狩られるだろう。

弟が謎の失踪を遂げた。

その当日の昼まで、連日に及び弟はある場所に通い詰めていた。

里の者は無闇には近付かない。

親から子へ、子から孫へ、幼い頃から言い付けられてきた。

里の者が謎の失踪をしたと知れたとき、確証も証拠もなかったが、暗黙の了解として皆それを認識した。

そして、兄の言葉によつて、弟と屋敷の関わりが明らかになると、失踪した弟が咎められて自業自得とだれも口を揃えた。

ある者は『なんてことをしてくれた』と、兄や残った家族を罵った。

触らぬ神に祟りなし。

累が及ぶことを恐れている。特に迷信深い老人たちは、残っ

た家族を里から追い出せと言う者もいた。

若かった兄はそれらに納得できなかった。

弟がいなくなつた悲しみや不安はだれも心配してくれないのか。それどころか、迫害まで受けている。

あの屋敷がなんだというのだ。

やがて兄の感情は怒りに染まり、ついに屋敷へ忍び込む決意をさせた。

夜も更けた。

垣根は難なくよじ登つて越えることができた。

問題は屋敷の中にとのように入ることができるのか。

勢いに任せてしまったため、なんの準備も下調べもしてこなかった。

しかし、玄関の戸に手を掛けると、静かに開いたのだ。

それがまさか弟のときを同じとは知らず、兄は屋敷の中へと誘われた。

弟をなんとかしても連れて帰る。

住人に見つかつてしまつたら仕方がない。住人と揉み合いになつても、住人を人質にしても、弟を捜し出す決意を兄はしていた。

周りの者にはなにも言わせない。弟の心配をしてくれなかつた者たちの心配などしない。ほかの者のことなど構いはしない。弟さえ無事に帰つてきてさえくれればそれでいいのだ。

青年は廊下を進んだ。

そして、妖しげな部屋を見つけた。

赤い札で閉ざされた部屋。

不自然なその部屋を見つけて、兄はこの中に弟が閉じ込められているのではないかと考えた。

赤い札を剥がそうと手を触れた瞬間、火花が散って兄は大きく後ろに吹き飛ばされた。

部屋の向こうから恐ろしい風の音が聞こえた。がたがたと激しく戸が揺れる。

腰を抜かした兄は床を掻くようにして逃げ出した。

しかし、前に進まない。

藻掻けば藻掻くほど躰が何かに絡め取られる。

恐ろしい気配で兄は寒気を覚えた。

闇の向こうで何かが蠢いている。

八つの眼がこちらを見ている。

「ぎゃあああああつ!!」

兄は弟と同じ運命を辿るのか。

大蜘蛛が兄のようすを伺っている。

今宵の餌食はすでに巢に捕らえられ、逃げることも叶わない。

「た、助けて、助けて……」

ぐしゃぐしゃの顔で涙を浮かべて兄は懇願した。

大蜘蛛はすぐそこまで迫っていた。

蠢く触肢。

このままでは消化液が体内へと流されてしまう。

「この虫野郎……こうやって……こうやって弟のことも喰い殺したのか!!」

大蜘蛛の動きが一瞬止まった。

刹那、赤い札が破け飛び戸が開くと同時に強風が吹き荒れた。大蜘蛛が叫び声があげながら切り刻まれる。

かまいたちだ！

大蜘蛛は天井まで飛び上がり張り付いた。

廊下の闇の中で“何か”が蠢いている。

禍々しい鬼気を兄も感じていた。

大蜘蛛にも勝るとも劣らない、“何か”恐ろしいモノがいるのだ。

その“何か”と大蜘蛛が目の前で敵対している。おちらが勝つのか兄にはわからない。そして、どちらが勝つても運命は同じだと悟っていた。

死に手招きされている。

廊下の先から静かな足音が響いてきた。普段なら聞こえなかつただろうが、死を目前にした兄は感覚が研ぎ澄まされ、それを知ることができたのだ。

やって来たのひとりの少女　菊乃。

「侵入者……まさか封印まで解けるとは厄介ですわね。本来なら解けるはずのない封印が解かれるとは、以前から綻んでいたとしか考えられない。だとするならば、それに築かなかつたわたくしはなんたる過ちを犯したのか……ご主人様に申し訳が立ちません」

菊乃は大蜘蛛と“何か”よりも先に、兄の前に立った。

「助けてくれ！」

無意味と承知で兄は懇願した。

しかし。

振り下ろされた斧。

そして、鮮血が廊下を彩った。

顔に迸った血など気にも止めず、菊乃は廊下の先に広がる、

何か”を見つめた。

「どの道、近々あの部屋は開ける予定でございましたが、道理、すなわり理には道があるとのご主人様の教えでございました」

斧が大きく振られた。

束の間。

その出来事は束の間で終わりを迎えたが、収集までには至らなかった。

やがて時は経ち、朝を迎える。

そこに「何か」の気配も大蜘蛛の姿もない。

しかし。

起きてきた静枝はそれを見つけた。

ぐったりとして死んだように動かない菊乃の姿。眼を見開き、瞬きすらしなかったが、その口が言葉を紡ぎ出す。

「申しわけございません静枝様。お見苦しいものをお見せしてしまつたことは深くお詫び申し上げます」

「酷い有様ね」

「躰がまつたく動きません」

「そうね、少しでも動くのなら、こんなことにはなっていない

ものね。こんなに散らかった廊下、はじめて見たわ」

静枝の視線の先に広がる光景。

血みどろ廊下と、生首を抱きかかえたまま動かない瑶子の姿。その瑶子の瞳が濡れていたことにはだれも気づかなかつた。

その部屋は少し湿気を帯びていた。

「素晴らしいわ。もうすぐ生まれそうね」

嬉しそうに言ったのは慶子だった。

「ええ、もうすぐよ」

答えたのは静枝。

しかし、静枝の腹は大きくはなく、生まれるのは別のモノ。

部屋に張り巡らされた糸。

巨大な繭玉がいくつもそこにはあり、ときおり中で何かが蠢いている。

そこは巢ともいうべき場所だった。

一番大きな繭玉が激しく動いた。

「嗚呼、生まれそう！」

慶子の声とほぼ同時だった。

みしみしと内側から破られる繭玉。か細く蒼白い人の手が出てきた。まだ精気を感じられない手だ。

その手は紛れもなく人間の手だが、このような繭から生まれ出るものが人間なのか？

不気味な繭の中から裸の少女が這い出してくる。

生まれたときにはすでにその姿　　瑶子。

蘭玉の中から生まれ出たのは、姿形は紛れもなく瑶子だった。静枝は近くで待機していた菊乃に目をやった。

「生まれたばかりでお腹がすいていることでしょう。餌をやつてちょうだい」

「畏まりました」

菊乃は大きな麻袋を引きずり瑶子の近くまで移動した。そこで麻袋の中から大きなものを引きずり出した。

出されたのは血の気を失っている裸の少女。

その少女も 瑶子。

まさかこの世に瑶子が二人？

そして、おぞましい出来事が待ち受けていた。

瑶子が瑶子を喰らう。

無我夢中で生まれたばかりの瑶子は自分と同じ姿形の餌を喰らった。

血みどろになりながら、むしゃむしゃと音を立てながら、肉を喰らっている。

その光景をうつとりした目つきで静枝を見ていた。

「わたくしも肉が食べたくなってきたわ。ねえ慶子さん、これからすぐにやりませんか？」

「もう少し調教したかったけれど、あなたがそういうなら仕方がないわね。うふふ、欲望に忠実なあなたが大好きよ」

「わたくしも貴女と知り合えた本当によかったわ。貴女がやって来るまでは本当に虚しいばかりの生活だったもの」

二人は連れ添って部屋を出て行くとした。その途中で、静

「枝は菊乃に顔を向けた。

「落ち着いたら娘たちに悟られないように運んでおくのよ。あのことはわかるわね？」

「すべて心得ております」

「ならいいわ」

菊乃にあとのことはすべて任せ、静枝は部屋を出た。

慶子と廊下を二人で歩いていると、前から幼い少女が駆け寄ってきた。

「おかあさま、おかあさま！」

「どうしたの美花さん？」

「ようこはまだ帰ってこないの？」

「もうすぐ元気になって帰ってくるわ。けれど、病気のせいで記憶を失ってしまったみたいなの」

幼い美花は驚いた顔をして、すぐに悲しい顔をした。

「わたしのこともわすれちゃってるの？」

「そうよ、しばらくすれば昔のようにこの屋敷で働けるようになるけれど、記憶だけはどうしても戻らないのよ」

美花は今にも泣き出しそうだ。

慶子がそつと美花の頭を撫でた。

「記憶を失うなんて本当に些細なことではないわ。またいっぱい遊んでもらって、たくさん楽しい思い出をつくればいいだけの話よ」

「……けいこせんせい……うん、わたしそうするね！」

「うふふ、本当に美花は良い子ね。さあ、行きなさい」

慶子は美花の背中を軽く押した。

駆けて行った美花の姿が見えなくなると、慶子は静枝と話をはじめた。

「ところでお肉を捌くとき、まずはわたくしに任せてくれないかしら？」

「なにかおもしろいことでもあるのかしら？」

「どこまで生かすことができるのか、挑戦してみたいのよね」

「それは楽しそうだわ。いつも殺すことばかりで、思いつきもしなかったわ」

二人は笑いながら廊下を歩いて行った。

荷物を麻袋の詰め終えた菊乃は、それを台車に乗せて瑤子に顔を向けた。

「捨ててきてください」

「はい、わかりました！」

元氣よく瑤子は返事をした。

瑤子が記憶を失った状態で目覚めたのは数年前のこと、今では屋敷での仕事をなんでもこなすことができる。

台車を押しながら屋敷の外に出ると、ちょうど出くわしてしまつた。

すっかり成長して、このごろは女らしくなってきた双子の姉妹。歳は七つだが、その見た目は一五前後で瑞々しい。

「す、すみません！」

慌てて瑤子は来た道を引き返そうとした。

「気を遣わなくていいわ。美花は嫌がるでしょうけど、私はなんとも思わないから」

美咲の視線は麻袋にあった。

「そうですか、それでは失礼します」

瑠子は頭を下げて急いで台車を押した。

屋敷の裏手には大きな穴がある。

その中に瑠子は麻袋の中身を放り出した。

大量に積まれていたその山が崩れる。

骨骨骨、血がついたままの頭蓋骨。

穴から溢れんばかりの骨がそこにはあった。

「わあ、もうすぐいっぱいになりそう。静枝さまにお知らせしておかなきゃ」

ごみ捨てを済ませて、急いで戻ろうとすると、その袖が何者かによって引かれた。

瑠子が振り向くと、そこにはるりあの姿があった。

「どうしたのるりあちゃん？」

「……………」

るりあは心配そうな顔をしてなにも言わない。

「もしかしておやつですか？」

るりあは首を横に振った。

「なにか悩み？」

「ようこ心配」

「あたしのことが？」

「……………嫌な感じがする」

「またですか？」

瑠子はこれまでのことを思い出した。

るりあが『嫌な感じがする』と言うと、必ず何かが怒る前触れなのだ。

先月は大雨で庭の真横にある崖が大きく崩れた。被害がこれといってなかったのは幸いだった。

今回は瑠子と具体的な名前まであがっている。

「あたしなら平気ですよ。病氣一つしませんし、いつも元気いっぱいですから！」

「禍はどんな状況でも起こる」

「そういう不吉なこと言ってると呼び込んでやうですよ」

「……………」

「ああつ、ごめんなさい。別にるりあちゃんのこと責めてるわけじゃなくて、心配してくれるのはありがたいとございます。でも本当に平気ですから！」

「……………ようこのばか」

るりあは駆け出して行ってしまった。追おうと思ったときには、もう姿がない。

「ああ、るりあちゃんに嫌われちゃった。あとでこっそり果物をあげて機嫌を直してもらおう」

肩を落としながら瑠子は台車を押した。

屋敷に戻ってきた瑠子は台車を片づけて台所に向かった。るりあにあげる果物を探しにきたのだ。

台所までやってくると、目を丸くした美花と目が合った。

「美花さま……こんなところでどうかなさいましたか？」

「えっ、べつに……なんでもありません！」

慌てたようすで美花は背中になにかを隠した。

じいつと瑠子はその背中に視線を向ける。

「なにか隠しましたよね？」

「だからべつに……あの……」

口ごもる美花。

瑠子は美花の背中に回ってそれを見た。

「あ、おなかすいちゃいました？」

瑠子が見たのは果物の山だった。今にも落ちそうなほど持たれていた。

見つかってしまった美花は、果物の山を胸に抱きかかえ直した。

「すみません……盗み食いみたいな真似をしてしまって……」

「ぜんぜん気にしないでください。美花さまは育ち盛りなのですね」

「お返しします」

「ここにある物はすべて美花さまたちご家族の物なのですから、どうぞ自由に持ってってください」

「ありがとうございます」

頭を下げた美花は慌てたようすで走り去ってしまった。

「あんなにいっぱい美花さまひとり……あつ、美咲さまといっしょに食べる気だ。やっぱりなんだかんだ言っても仲のよい姉妹なんですね！」

ひとりで納得して瑤子は大きくうなずいた。

夕食の準備が済んだころになると、続々と食堂に住人たちが集まってくる。その中に、いつも比較的早くやってくる美花の姿がないことに瑤子は気づいた。

瑤子は美花を呼びに行くことにした。

廊下を歩き、美花の部屋の前までやって来た。

「失礼します」

と、いつものように言うと同時に戸を開けた。

いつもなら『どうぞ』と声が返ってくる。返ってくるとわかっているから、返事を確認する前に戸を開ける癖がついているのだ。それが今日はどうだろうか。

「あれ、美花さま？」

部屋にはだれもいなかった。

ほかの場所をあたることにした。

屋敷の中には瑤子が入れない部屋がいくつかある。赤い札の貼られている部屋。離れの一つである鍵の掛かった部屋。ほかにも瑤子その存在を知らない部屋があれば、入るといふ発想すら一生浮かばないだろう。

廊下を歩いていると、るりあとはぼったり出会った。

「るりあちゃん、美花さま見ませんでしたか？」

「……見てない」

と、言いながらるりあは天井を見上げた。

釣られて瑤子も天井を見る。

「またなにか見えてるんですか？」

「聞こえる」

「天井からは物音がするのはじめてですよ。ねずみですかね、今まで一度も見たことありませんけど」

「もつと大きい」

「大ねすみですか？　そう言えば最近食料の減りが早いような……あ、それは美花さまが……そうだったんだ、今気づきました」

ひとりで納得する瑶子をるりあは不思議そうな顔で見つめている。

慌てて瑶子は顔の前で手を振った。

「な、なんでもありませんよ。まさか美花さまがるりあちゃんみたいに盗み食いしてるなんて、そんなこと……あっ」

口に出してしまっていたことに自ら気づいた。

ひとり慌てる瑶子を置いて、るりあは天井を見ながら歩きはじめた。

気になった瑶子はそのままるりあについて歩く。

天井の気配は屋敷の道に沿って進んでくれるわけもなく、るりあの視線は真上ではなく遠くを見つめたりしている。

やがてるりあがやって来たのは美花の部屋。

躊躇いもせずるりあは何も言わず戸を開けた。

同時に開かれた押し入れの中にいた美花と目が合った。

瑶子と美花は互いにはっと目を丸くしている。

るりあはまだ天井を見続けていた。ちょうど押し入れの上あ

たりだろうか。

慌てて美花は押し入れから出てきた。

「あの……その……」

焦って言葉に詰まっているようだ。

瑠子はあるりあと共に部屋に入り戸を静かに閉めた。

「美花さま、どうしてそんなところから？」

「探し物を……」

こちらの探し物は移動したようだ。るりあの視線は真上へと向けられた。

るりあが走り出した。

押し入れの二段目に飛び乗り、すぐに天井板が動く事に気づいた。

美花は必死になつてるりあを止めようとした。

「るりあちゃん！」

声は掛けるがそれ以上はなにもできなかつた。

瑠子も不審に思いながらるりあのとを追つた。

天井裏への入り口。

そこを登つていったるりあ。あとを追つて天井裏についた瑠子はその男を見つけた。すぐに美花もやって来た。

男は頭を掻いた。

「見つかつちまつたなあ。決して美花お嬢様のせいじゃありませんよ。運が悪かつただけですよ」

視線を送られた美花は沈痛な面持ちをしていた。

るりあは瑠子の背に隠れた。男を睨む視線を外さない。

謎の侵入者。

「だれですか？」

瑶子が尋ねた。真剣な表情だ。

すぐに美花が割って入った。

「決して悪い方ではありませんから、皆には黙っていてくれませんか。お母様やお姉様に見つかったら……ああ、どんなことになるか」

「美花さまがそこまでおっしゃるなら……まずはお話を聞こうと思います。美花さまはお食事の時間ですから、早く行ってください」

「でも……」

「美花さまの姿を見えないと、怪しまれるかもしれませんよ。この方を悪いようにはしませんから」

「……本当に頼みましたよ」

自分が去ることは心配であったが、瑶子の意見も一理ある。美花はこの場を瑶子に預けることにして、食卓へと向かって行った。

美花がいなくなると、さらに緊張の糸は張り詰めた。

だが、この男の物腰は柔らかかった。

「まあまあ、立ち話もなんですから、どうぞこちらで話しましょう」

男は無防備にも背を向けて歩き出す。

瑶子は無心しながらあとをついていく。るりあは瑶子の背に隠れたままだ。

案内されたのは屋根裏の一角にある部屋のような場所。

家具一式が揃っていることに瑤子は驚いた。

「屋根裏にこんな物が……いつからここに住んでるのですか!?」

「ここに来たのは三日ほど前ですよ。家具は元々ここにありました」

「家具があつた?」

瑤子の知らないことだつた。そもそも屋根裏の存在すらしらなかつた。

男は椅子に腰掛け、二人にはベッドに座るように手を向けて促した。

「椅子が一つしかなくて、ベッドで我慢してください」

ベッドに腰掛けると埃が舞つた。

落ち着いたところで男が話しはじめる。

「名刺は切らせてるんですが、ルポライターをやつてる立川克哉つていう者です」

「るぽらいたー?」

瑤子は首を傾げた。

「ルポライターつていうのは平たく言えば記者ですよ。雑誌記者をやつて飯を食つてます」

「雑誌はあまり読んだことがありません。慶子先生に貸してもらつたことがあるのですが、あまりおもしろいと感じなくて」「書いてる俺自身もつまらないと思いますよ。うちの場合は三流雑誌なせいですが」

克哉は何かを探すそぶりを見せて自分の服のあちこちを探った。

そして、溜め息を落とした。

「はあ……そうだ切らしてるんだった。煙草なんてもってませんよね？」

「慶子先生なら吸ってますけど」

「あのひと煙草吸うのか！一本でいい、たつた一本でいいからもらつて来てくれませんか？」

「無理に決まってるじゃありませんか」

「だよな。食料を調達するだけでも大変なのに、煙草は無理だよな。でもあると知つたら吸いたくて堪らなくなつてきた」

瑤子のはつと気づいた。

「もしかして美花さまが持つて行つた大量の果物つて……」

「美花お嬢様にはよくしてもらつてるよ。彼女に見つかったときが駄目かと思いましたが、水や食料は運んできてくれるし、俺のことばらさずにいてくれたし……なのに、あんたらに見つかつちまうなんてな。そつちのちつこい嬢ちゃんには警戒してたんだ」

視線を向けられたるりあは瑤子の袖を掴んだまま、未だ克哉を睨みつけている。

「るりあちゃんは勘が鋭いですから」

と、傍にすることが多い瑤子が言った。

さらに瑤子は話を続ける。

「食料が必要なら、これからはあたしが持つてきてあげます」

「ありがたい！」

「美花さまにやらせるわけにはいきませんから」

「ということは、あなたも俺……いや、私のことをほかに者は黙っていてくれると？」

「いいですよ、るりあちゃん？」

自ら返事をする前になるりあに確認を取った。

るりあは黙ったままにも答えない。

瑶子はるりあの顔を正面に捕らえて覗き込む。

「美花さまのためです。るりあちゃんも美花さまのこと好きですよね？」

「……ようこのほうが好き」

「あはは、でも美花さまのこと嫌いじゃありませんよね？」

「……………」

るりあは小さくうなずいた。

「だったらこの方のことは秘密です。約束ですよ、指切りしましょう」

瑶子は強引にるりあと小指を結んだ。

「指切りげんまん、うそをついたら大^{ダイケウワクンデゴク}叫喚地獄におーちる」

「やだやだ、あんな怖いところに落ちたくない！」

るりあは真っ青を顔をして心から震えた。

大^{ダイケウワクンデゴク}叫喚地獄とは八大地獄の一つ。大^{ダイケウワクンデゴク}叫喚地獄は主に殺生、盗み、邪淫、飲酒、妄言などを犯した者が落とされ、さらに小規模な地獄があり、細かく罪が分けられている。大^{ダイケウワクンデゴク}叫喚地獄の十六小地獄の一つ、吼々^{くくしよ}処は自分を信頼する古くからの友人にた

いして嘘をついた者が落とされ、罪人の顎に穴を開けて舌を引きずり出し、毒を塗って焼け爛れた舌に蟲がたかると云う。

二人のようすを見ていた克哉は小声でつぶやく。

「この嬢ちゃん笑顔で酷い約束させるな」

どうやら仏教の知識があつて理解できたらしい。

こうして克哉は一つの安心を得た。はじめに見つかったのが美花で本当によかったと思う。そうでなければ、この二人の口止めはどうなっていたのか？

ここでさらに克哉は厚かましくお願いをすることにした。

「そうだ、食事件なんです、私じつは菜食主義者なんで……」

……

「さいしょくしゅぎしゃ？」

また瑤子は首を傾げた。

「つまり野菜や果物しか食べないんだ」

「神の教えですか？」

「まあ、そんなところだな。だから運んできてくれるなら、肉類は避けて欲しい。でも魚は食べていいことになってるから、たまには魚も食べたいもんだ」

「わかりました。食事の件も承知しましたけど、どうしてあなたここにいますか？」

それがもつと重要なことだった。

「取材で山に入ったら道に迷ってしまって、この屋敷に入ったら出られなくなっちゃったわけですよ」

「道に迷ったなら、こんなところに隠れていないで、家の者に……」

道を尋ねればいいのに……あつ、もしかして今のうそですか？
うそをついたら地獄に堕ちますよ？」

「まいったなあ。家のひとにこんなこと言いたくはありませんが、この屋敷、地元では鬼屋敷と呼ばれてまして、大変恐れられてるそうなんですよ。なんでそんな噂をされるのかなって思ひまして、記者として取材に来たわけなんですよ」

「鬼屋敷？ 恐れられている？」

どちらの言葉も瑤子には実感できなかった。

突然、瑤子は何かを感じ取った。

「あ、お客さんが来たようです」

「客？ どうしてわかったんですか？」

克哉は驚いた。なにも感じなかったからだ。

「すみません、急用ができましたので、お話はまたあとで」

瑤子は軽く頭を下げて屋根裏を下りた、るりあもいっしょに屋根裏を下りたが、すぐに別れた。

ここからまず向かったのは菊乃のところだ。

菊乃は食堂にいた。

「あつ、菊乃さん、どなたか来たみたいですよ」

「宅配でしょう。今日はずいぶん遅い時間のようですが」

二人は早足で玄関に向かい、屋敷を出ると正面門まで急いだ。門を開くと数人の男がリアカーから荷物を下ろす作業していた。

菊乃が門を出た。

「ご苦労様でした」

と言つて菊乃は男の一人に小袋を渡した。金品かなにかが入っているのだろう。

大量の荷物を下ろし追えた男たちは逃げるように去っていく。まずは菊乃が門の中へと荷物を一つずつ運び入れる。その荷物を今度は瑤子が台車に乗せて運ぶ。

二人が作業を進めていると、この場に美花がやって来た。

「私の荷物もあるから、丁重に私の部屋に運んで頂戴。ほら、その箱とその箱、印がついているでしょう？」

美咲はいくつかの箱を指差した。箱には“咲”という文字が書かれていた。

その荷物を台車に乗せながら瑤子は尋ねる。

「いつの間に美咲さまの荷物なんて、あたし聞いてませんでしたけど？」

菊乃は知っているのか知らないのか、黙々と作業を続けて答えない。

自ら美咲が答える。

「別にあなたたちに関係ないでしょ」

「中身はなんですか？」

「だから関係ないって言ってるでしょう、しつこいわね！」

「……すみません」

瑤子は肩をすくめた。

美咲は自分の荷物が運ばれる一部始終を見守った。部屋に荷物が運び終わると、艶やかに微笑んだ。

結局、荷物の中身は教えてもらえなかった。

瑤子は再び荷物運びの作業へと戻った。

荷物はまだたくさんある。屋敷の中へ運んだあとは、仕分けの作業なども残っている。仕事が終わらせるのには、まだ時間がかかりそうだ。

正面門まで戻ってくると、菊乃はまだ黙々と作業を続けていた。

瑤子が戻ってきたのは確認した菊乃は別のことを頼んできた。「ここはもう大丈夫ですから、夕げの片付けをお願いいたします。それが終わったらもう今日は休んでよいですよ」

「はい、わかりました」

いつも瑤子は夜の仕事が少ない。菊乃は瑤子が部屋に戻ってからも仕事をしているらしいが、なぜか毎日瑤子だけ早く仕事が終わり、部屋で休むようにと言い付けられている。一〇時ごろになると、一切部屋を出ずに寝るようにと、きつく言い付けられていた。

瑤子は多少疑問に思うが、この屋敷には決まり事も多く、それらの理由は教えられないことが多いので、その一つとして特に気にせず過ごしていた。

瑤子の一日の仕事が終わり、入浴をすると就寝の準備をする。そして、夜は更ける。

激痛と共に瑤子は目覚めた。

自然と腹に手を伸ばすと。

「きゃっ、血!？」

じゆくじゆく痛む腹の傷。深い傷はまるで刃物で斬られたようだ。

そして、これはいつのことなのだが、寝る前に着た服が朝になると脱げてしまっている。菊乃に相談すると、寝相の悪さを指摘されたが、この傷は寝相の悪さだけでつくようなものではない。

「ううっ……とりあえず菊乃さんを探そう……」

薄衣を羽織った瑤子は廊下に出た。

菊乃は瑤子よりも早く起きているらしく、今の時間も自室ではなくどこかで仕事しているはずだった。

とりあえず台所へ向かっていると、その途中で菊乃を見つけたことができた。菊乃は廊下の拭き掃除をしている最中だった。

「おはようございます菊乃さん」

「おはようございます」

「あの……」

「血でございますね」

菊乃の視線は瑤子の薄布に滲んだ血に向けられていた。

ぱたりぱたりと、瑤子の足下に血が落ちる。まだ血が止まっていないらしい。

菊乃は瑤子の足下を拭きはじめた。

「掃除したばかりなのですが……」

「ご、ごめんなさい！ 自分で拭きますから！」

瑤子は菊乃が持っていた雑巾を奪うように借りて床を拭きはじめた。けれど、拭いている最中も血が床に落ちてしまう。

いつも表情の乏しい菊乃だが、今はその無表情さが呆れている顔に合致している。

「切りがございません。まずは傷の手当てをしましょう」

「ご迷惑おかけしてすみません」

「いつものことでございます」

瑤子は菊乃に連れ添われて自室に戻った。

全裸にされ横になった瑤子の傷口を菊乃は観察した。

「寝ながら料理でもしたのでしょうか？」

「あたしそんなに器用じゃありません」

「器用ではないから怪我をしたのでしょうか。本当にあなたは寝相が悪い」

寝相が悪いことは自覚をしている。起きると自室から離れた廊下などにいることはしょっちゅうだ。だとしても「斬られた傷」がつくだろうか。

「本当に寝ながら料理してたのでしょうか？」

「なにを料理するつもりだったかは存じ上げませんが、きっとそうでしょう」

「そうですかあ？」

「そうです」

納得はできないが、菊乃は言い切っている。真面目なような表情をいつもしているの、冗談なのかもわからない。

瑤子の傷口に薬が塗られる。

「いたたた、それ染みます」

「傷が染みるのは当たり前でございます。傷は塞がりはじめ

いるので、薬を少し塗り込んで布を当てておくだけにしまし
う」

「痛いですが、とつても痛いですが、なにもしないほうが痛くな
ったですよ」

「傷口が化膿するよりはよいでしょう？」

「……はい、そうですね」

瑠子は押されるとなんでも認めてしまふ。そういう性分だっ
た。

傷の手当てが終わると、早々に菊乃は部屋をあとにしよう
とした。

「それでは失礼いたします」

「もう行っちゃうのですか？」

「ご家族が起きてくる前に廊下を掃除しなくてはなりませんか
ら」

「それならあたしが……うっ」

立ち上がるうとした瑠子だったが、傷口がずきりと痛んだ。

「痛みが治まるお休みください」

「いえっ、でも掃除させてください！」

「仕方がありませんね。しかし、あさげの支度はわたくしひと
りで行います」

「すみません」

こうして菊乃は朝食の準備を、瑠子は廊下の掃除に向かった。
床に残っている血痕をすべて拭き取る。

まだ乾いてない新しいものだ。

しかし、その中にすっかり乾いて大きな血痕があった。

「あれ……これってあたしの血？」

瑠子は濡れた舌を伸ばして、床の血痕を舐めた。

「やっぱりあたしの血じゃないなあ」

血の味でわかるものなのだろうか。もし本当に瑠子の血でないとしたら、いったい誰の血なのだろうか。

掃除を終えた瑠子は雑巾を洗って干すと、やることもなくなり部屋に戻ろうとした。

その途中で美花と出会った。

「おはようございます美花さま」

「おはようございます」

そのまますれ違おうとしたが、急に瑠子は腹が痛んだ。

「うっ」

小さな声だったが、美花は気づいたようだ。

「どうかしましたか？」

「いえ……ちよつと怪我をしてしまつて……」

「怪我!? それは大変、少し見せてください」

「もう菊乃さんに手当はしていただいたので平気ですよ」

「自分で手当てできないほど酷い怪我だったのですか、どうしてそんな怪我を……」

「どうしてなんででしょう……起きたら怪我をしていて、寝相が悪いのはいつもことなのですけど」

怪我の原因はまだはつきりしない。

美花は心配そうな顔をしていた。

「お部屋でお休みになってください。早く良くなってくださいね」

「菊乃さんからも休みようにいわれてますから。美花さまは本当にお優しいですから、そんなに心配しすぎないでくださいね、本当に平気ですから。それでは失礼します」

長く話し込んでも美花を心配させるだけだと思って、瑤子は笑顔でその場を早々に立ち去った。

自室に戻ってきた瑤子は、布団で横になることにした。

じつとしていることは嫌いではないが、菊乃に仕事をすべて任せてしまったり、だれかに心配をかけることは申し訳なく思う。かと言って無理をして元氣に見せ、もし悪化してしまったり逆に周りに迷惑をかけることになってしまう。瑤子は静かに休むことにした。

まぶたを閉じると広がる闇。

視覚が閉ざされると聴覚が研ぎ澄まされる。

気配がした。

屋根裏からの気配だ。

その気配は移動を続けながら、押し入れて静かな物音を立てた。

瑤子は目を開けてそちらを見た。

「おはようございます、克哉さん……でしたよね？」

「休んでるとこすみませんねえ。なにか病気ですか？」

「ちよつと怪我をしてしまって」

「寝こむほどの怪我？」

「そんな大したことないですよ。ただみなさんが休むように言うので、心配をお掛けしたくないので安静にしてして早く直したいだけです」

克哉は一定の距離を保ちながら、その場で立つたまま話を続けてきた。

「それでどこを怪我したんで？」

「お腹が切れちゃってて、なんで切れてしまったのかわからなくて、菊乃さんは寝相が悪いからだなんて言うんですよ」

「ちよつと傷を見せてもらってもいいですか？」

「嫌ですよ」

「ですよ。怪我人なら休んでくださいよ、ではまた」

克哉は再び押し入れから屋根裏に戻ろうとした。

そのとき、瑠子は克哉が手に巻いている布がふと見えた。朱い何かが染みていた。きつと血だろう。

不思議に思いながらも、瑠子は深く考えずに目を閉じた。

躰が傷を治すためだろうか、なんだかとても眠くなってきた。

そのまま瑠子は自然に身を任せることにした。

アツイ、アツイ、アツイ。

そして、無数の叫び声。

泣き叫んでいる。

何かが何処かで絶叫をあげている。

大量の汗を掻きながら瑠子は飛び起きた。

部屋は暗い。

胸騒ぎがした。

瑠子は蝋燭台を持って廊下に出た。

静かな廊下。

すでに夜更けになってしまったらしい。

タスケテ、タスケテ。

瑠子の頭の中で言葉が木霊した。

呼ばれている。何かに呼ばれている。

廊下の先で轟々と燃え揺れる灯り。

それが火事だと瑠子はすぐに悟った。

「なぜ、どうして……火事なんて……」

アツイ、アツイ、カラダガモエル。

また声が聞こえた。

目の前の火事も気になつたが、呼ばれている場所はそこではない。

瑠子は廊下を駆ける。

火の手は一つや二つではなかった。屋敷のあちらこちらから

火がついている。

普段は近付かない細い廊下。その先には離れの一つがある。

鍵の掛かっている筈の扉が、今は開かれ中が赤く輝いていた。

すぐさま瑠子は部屋の中に飛び込んだ。

そこら中から絶叫が聞こえた。

部屋中に張り巡らされていた糸が火の橋を描いている。

繭玉が燃えている。

いくつもある繭玉が燃え、中から黒こげになった何かが這い

出してくる。

それは這つて瑤子の足下まで来た。そして、溶けて崩れかけている顔を上げたのだ。

「きゃあああああつ!!」

瑤子は絶叫をあげた。

見てしまった。

醜く崩れた自分そっくりな顔。

他の繭からも「瑤子」たちが燃えながら這い出してくる。

業火に焼かれ苦しみ悶える自分と同じ少女たち。

瑤子は助けることも見ていることもできず、その場から必死に逃げ出した。

絶叫が木霊する。

イカナイデ、イカナイデ。

呪詛のように降りかかってくる言葉。頭の中でいつまでも響く。

なにが起きたのかわからない。

ただ、屋敷中に火が放たれ、このままでは屋敷が崩れ落ちるだけはわかる。

瑤子はこの場所からもつとも近かった静枝の部屋に向かった。

まだ静枝の部屋までは火の手が回っていないかった。

「静枝さま！」

叫びながら部屋に飛び込んだ。

そこで待ち受けていたのは瑤子には信じがたい光景であった。包丁を握った美咲が怯える静枝の元へにじり寄っている。

静枝は眼を剥いてわなわなと唇を振るわせている。

「嗚呼、やはりお姉様はわたしのことを……静香お姉様、お姉様、お姉様ーっ!!」

静枝は息を呑んだ。

心臓をひと突きした包丁。

傷口から垂れてきた血が美咲の手を穢した。

ぶしゃあああああつ!

包丁が抜かれると同時に迸った黒い血。

血に彩られた美咲は振り返った。

「あなたも今すぐ殺してあげる」

「ど、どうして……美咲さまが……」

後退る瑶子。

酷く躰が震えた。それは内からの振動。鼓動が激しく脈打っている。

瑶子は心臓を押さえた。

熱い。

打ち震える心臓が熱い。

呼吸もだんだんと荒くなっていく。

耐え難い動悸。

美咲は艶やかに嗤いながら近付いてくる。

「来ないで……ください……い」

今、自分を殺そうとしている者への恐怖ではなかった。

瑶子が恐れていたものは。

まるで内側から喰い破られるように、瑶子の躰から毛の生え

た八本の脚が飛び出た。

美咲が飛び掛かってきた。

しかし、脚の数でも、その長さでも瑶子が優っていた。

美咲の躰は宙に持ち上げられながら八本の脚で捕らえられていた。

今の瑶子には人間の二本の手と足が残っている。だが、もうそれらに感覚や機能は残っていない。

それはまさに脱皮であった。

瑶子の背が開かれ、中から巨大な大蜘蛛の尻が出た。

それが元の躰のどこに収まっていたのか、瑶子の躰を遥かに凌ぐ大きさの大蜘蛛が姿を見せた。

美咲は必死な抵抗を見せた。

「この化け物めっ！」

振りかざした包丁が大蜘蛛の脚を一本落とした。

怯む大蜘蛛は美咲を解放してしまった。

すかさず美咲は再び大蜘蛛に飛び掛かるうとした。

だが、そのときだった！

燃える小蜘蛛たちの群れ、群れ、群れ。

全身を赤く燃やした小蜘蛛たちが美咲の躰に群がった。

「ぎゃああああああっ！」

小蜘蛛と共に炎に吞まれた美咲の断末魔。

それを聞きつけ部屋に飛び込んできたのは克哉と美花だった。

「出たな大蜘蛛！」

「そんな……お母様、そこで燃えているのはまさか……」

美花は立ち眩みがして床にへたり込んでしまった。

短剣を抜いた克哉が大蜘蛛に襲い掛かる。

糸が吐かれた。

嗚呼、糸までも燃えている。

炎を纏った糸が克哉の腕に巻き付いた。

「くつ、こんなやられ方つて……」

克哉を捕らえようとしたのは糸だけではなかった。

足下から躰に登ってくる燃える小蜘蛛たち。

大の大人の人影が燃え上がる。

それは影絵か陽炎か。

炎による虐殺の終幕。

生き残った美花はその場から動けない。動かなければ、いつ

かは火に焼かれる。

不気味な絶叫が木霊した。

それは大蜘蛛の叫び。

大蜘蛛のが背中に激しい衝撃を受けて床に腹をついた。

噴き出す血が天井を彩る。

大蜘蛛の背は巨大な刃によって叩き斬られていた。

「美花様さえ生き残れば、因果は続くのです。まだここで糸を断ち切られるわけには！」

斧を振りかざす菊乃。

だが、まるで刃のように鋭い大蜘蛛の脚が菊乃の胸を貫いた。

菊乃は表情ひとつ変えなかった。

そのまま斧は大蜘蛛の脳天を割った。

大蜘蛛は息絶えた。斧が脳に達した刹那だった。

菊乃の胴には脚が突き刺さったまま。どうにか抜こうとするが、引つかかって抜けない。

火の手は広がり続けている。

手を伸ばして菊乃は斧を握った。そして、胴に刺さる大蜘蛛の脚を切断した。

そして、すぐさま美花に掛けようとしたときだった。

「美花様！」

焼け落ちた天井が美花を押しつぶした。

菊乃の瞳の奥で赤い炎がゆらゆらと揺れている。

もう助からないかもしれない。瓦礫の衝撃、身を焼く炎、そうだとっても菊乃は美花を助けようとした。

炎の中に手を突っ込み、瓦礫を退かして放り投げる。

「美花様、美花様！」

瓦礫の隙間から美花の顔を見た。

ここまで来て菊乃は思わず手を止めてしまった。

美花の顔半分を覆う火傷　それはまるで静枝の生き写し。

動きを止めた一瞬が命取りになった。

再び崩れ落ちてきた炎に包まれた瓦礫。

菊乃までも潰され炎の餌食となった。

それでもなお、微かな声が響いてくる。

「み……は……な……」

屋敷が崩れ落ちる。

炎が焼くのは住人だけではない。

この屋敷の歴史も焼き払う。

庭から業火に包まれる屋敷を見つめている女がひとり。

「結局、いつも最後は破壊で終わってしまうのね」

つぶやいたのは慶子だった。

その手には透明な小瓶が持たれており、その中には小蜘蛛が一匹入っていた。

いつの間にか、この場にはるりあの姿もあつた。

るりあの視線は小瓶に注がれている。

慶子は微笑んだ。

「欲しいならあげるわ」

「……………」

るりあは奪うようにして慶子から小瓶を取り、そのまま駆け出して姿を消した。

「大事にするのよ」

と、慶子の眩き声が響いたが、そこにはすでに慶子の姿はなかった。

炎はまだ燃え続けていた。

第四之世界 紅い世界

それは運命の糸が繋ぐ時の流れ。

幼女は今日も髪を梳く。

鏡に映り込んだ瓜二つの幼女。

髪を梳いていた幼女は鏡越しに尋ねる。

「どうしたの静香^{しずか}？」

鏡に映っていたのは妹の静香。

そして、髪を梳いているのは姉の静枝。

二人は三つになるが、その見た目は六歳程度。

「お母様がお姉様を呼んでお部屋にいらつしゃいって」

「嫌よ、忙しいの。見ればわかるでしょう？」

「なにか大事なお話があるそうなの」

「大事な話？」

不思議そうな顔を静枝はした。

部屋に第三者が入ってきた。

「失礼いたしますお嬢様方」

現れたのは表情に乏しい侍女姿の少女 菊乃。

菊乃はすぐに言葉を紡いだ。

「智代様がお二人をお呼びになっております。早く智代様のお

部屋へ」

静枝は鏡に顔を向けたままだった。

「嫌よ、忙しいの」

いつも静枝は時間さえあれば身だしなみを整えていた。はじめは母の真似をしたごっこ遊び。それがいつしか、女を目覚めさせた。

歳は三つ、見た目は六つ、しかしその表情はすでに女の片鱗を覗かせている。

一方の静香はまだ幼い表情だ。

見た目は一卵性双生児だが、中身はどうやら違うらしい。

菊乃は静香を見つめた。

「では静香だけでもお出てください」

「うん」

静香は不安そうな顔をして、後ろ髪を引かれながら菊乃と共に部屋をあとにした。

ずっと鏡を見ていた静枝だったが、静香がいなくなってしまう途端、素早く後ろを振り向いて唇を噛みしめた。

そして再び、鏡に顔を向けて髪を梳かしはじめた。

「きゃっ！」

短い悲鳴をあげた静枝。

鏡に一瞬、影が映り込んだような気がした。

女の顔。

おぞましい顔をした女の顔。

「だれか、だれか来て！」

叫んだが誰も来ない。

急に恐ろしくなってきた静枝は部屋を飛び出した。

鏡に映った女の顔が頭を過ぎってしまう。

その女の顔には大きく醜い痣があった。

「だれなのあれ……」

見覚えのあるような顔だった。

閉鎖された世界で過ごす彼女にとって、見覚えのある顔は少ない。

すぐに静枝は首を横に振った。

「違う……お母様じゃない。ぜんぜん別人……でも似ていたわ」

考えても静枝にはわからなかった。

部屋を飛び出した其の足で静枝は母の部屋に向かった。

固く閉じられたふすまを開けると、そこは蛻（もぬけ）の殻。すでに母の姿も、静香の姿もなかった。

静枝は廊下を見渡した。

気配はない。

それから屋敷中を探し回ったが、誰もいなかった。

まだ探していない場所は、そう赤い御札が貼られた部屋たち。札を貼られ、固く閉じられた部屋を前にして、静枝は動けな

かった。

部屋の中に何かがいることは知っている。

それがなんであるかは知らない。

恐ろしいものだということはわかる。

静枝は駆け出した。

「菊乃！ 瑶子！ だれかいないの！」

玄関まで走っていくと、ちょうど外から智代と菊乃が帰って

きた。

智代はまだ十代の容姿であつたが、物腰は落ち着きを払っていることから、妙な妖しさを兼ね備えていた。

「どうしたの静枝さん？」

母に微笑みかけられた静枝は身を強ばらせた。

静枝は知っていた。

目の前の女は笑つていても、静かな物腰をしていても、目の奥にはいつも不気味な輝きを湛えていることを。

「なにもありませんわお母様」

「そう」

短く言つて智代は歩き去つていた。

菊乃も同じく静枝の横を通り過ぎようとしたが、静枝は素早くその腕を掴んで制止させた。

もう母の姿はない。

「どこへ行つていたの？ 静香は？ 瑤子もないなんて、あの馬鹿」

「瑤子は急病で伏せております。静香様はこの屋敷を出て行かれました」

「え？」

静枝は理解できずに驚いた。

すぐに静枝は怒りの表情を浮かべた。

「嘘をつかないで、私のことを馬鹿にしているの？」

「いえ、静香様はこの屋敷を出て行かれました」

「私を置いて静香が……そんな、だつていつも静香はどこに行

くにも私にくつついて来て」

「どちらかおひとりか屋敷を出て行かなければならなかったの
ございます」

「嘘嘘嘘っ！ 信じない、だって出ていこうにも庭の外には出
られないじゃないのよ！」

「嘘ではございません。智代様にお聞きになってくださいま
せ」

「嘘つき！」

静枝は強烈な平手打ちを菊乃に喰らわせた。

しかし、菊乃は表情ひとつ崩さない。

それを見た静枝はさらに怒りが増したが、どうしていいのかわからずとにかくその場から駆け出した。

自室に引きこもると、畳の上に俯せになって唇を噛みしめた。

「嘘っ、嘘に決まっっているわ」

静香のいない世界。

想像もしなかった世界。

嘘か真か、母の元へ確かめに行かねばならない。

静枝はその場を動けなかった。

もし本当に静香がこの屋敷を出て行ってしまったとしたら。

静香から血の気が引き、孤独な凍えが襲った。

急に立ち上がった静枝は、目元を拭って部屋を呼びだした。

早足で母の部屋へと向かう。

「お母様！」

ふすまを開けると同時に大声で叫んだ。

「大声を出してどうしたの静枝さん？」

智代は座布団に座りながら、顔だけを静枝に向けた。

「静香はどこへ行ったの？」

「この屋敷を出て行ったわ」

同じ答えが返ってきてしまった。

さらにあるうことか、智代は微笑んでいたのだ。

静枝の心に渦巻く怒りと悲しみ。

なのになぜ目の前の母は笑っているのだ！

「嘘よっ！」

激しい静枝とは対照的に、智代は静かな物腰を崩さない。

「嘘ではないわ。親戚に子供のいない夫婦がいて、前々から貴

女たちのどちらかを養子に出来ないかと懇願されていたのよ」

「どうして静香が！」

「あの子、ここでの生活のすべてが嫌だったのよ。特に貴女に

姉面されるのが嫌だったみたいね。同じ双子なのに、どうして

静枝はわたしに姉面をするのか。あの子は進んでこの屋敷を出

て行ったわ」

「なんでそんな嘘をつくの！」

「嘘ではないわ。あの子は自らの意思でこの屋敷を出て行った

のよ。でもわたしはそれで良かったと思っっているわ。だって

わたくしが本当に愛している子は貴女だけ、貴女させ傍にいて

くれればそれでいいわ」

「嘘嘘嘘っ！」

涙を振り乱しながら静枝は部屋を飛び出した。

廊下を駆けながら呪詛のように呟く。

「信じない信じない……嘘嘘……全部嘘……」

そして、子供とは思えない狂気の形相を浮かべた。

「すべて滅んでしまえ」

女は今日も髪を梳く。

鏡には厚布が被されている。

その前で静枝は髪を梳いているのだ。

静枝は髪の毛をまとめ上げて結わくと、ゆらりと立ち上がった。

その瞬間、風もないのに鏡の布が落ちたのだ。

紅い世界。

血塗られた鏡の中に映った女の顔。

「きゃーっ！」

映ったのは誰の顔だ？

静枝は畳を這った。

「誰か！ 誰か！」

すぐに瑤子が急いでやって来た。

「どうかなさいましたか静枝さま？」

「嗚呼……が見てる……いやああああ」

取り乱す静枝。

答えは得られなかったが、瑤子は理由をすぐに見つけたようだ。

掛けられた布が落ちている鏡。

鏡は血塗られていた。

大量の血はすでに乾いている。

その血はいつ付けられたものなのか？

鏡には誰も映っていないかった。

すぐに瑤子は鏡に布を被せて鏡面を隠した。

「こんな鏡処分してしまつてはどうですか？」

髪を梳くときに布は被されたまま。鏡として機能していない

鏡。さらに静枝は鏡に怯えているようだ。瑤子の意見は至極ま

つとうである。

しかし。

激怒の形相を浮かべながら静枝は、無言で瑤子の頬に平手打

ちを喰らわせた。

「痛いっ！」

瑤子は頬を抑えながら床に崩れた。

そんな瑤子には気遣いもせず静枝は部屋を出て行く。

「菊乃！ どこにいるの菊乃！」

広い屋敷に静枝の叫び声が木霊した。

「ここにおります静枝様」

菊乃が廊下の影から姿を見せた。

すべては嘘だったと言わんばかりに、静枝は静かにそこに立

つて艶やかに微笑んでいた。

「なんでもないわ」

と、静枝は言つたのだ。

菊乃が姿を消した途端に静枝は床に膝をついて、胸を鷲掴み

にして玉の汗を額から流した。

苦しげな姿をする静枝だったが、その顔は嗤っていた。

「無駄な抵抗はやめなさい」

戦慄すくほど冷たい口調で静枝は言った。

「……早く……わたしの躰から出て行きなさい……」

今度は苦しげな口調で静枝は言った。

「これはわたしの躰よ。それをお姉様が奪った」

同じく口から発せられている言葉。

「静香の振りはやめなさい……わたしは絶対に……お前を追い出してやる！」

独り言とは思えない。

「わたしは本物の静香。お姉ちゃんに殺されなければ、この血も肉もわたしのものになっていたのに」

多重人格か、それとも？

「うるさい！」

静枝は叫んだ。

すぐに菊乃が駆けつけてきた。

「どうかなさいましたか静枝様？」

「なんでもないわ」

静枝は何事もなかったようにしていた。

さらに瑤子も駆けつけてきた。

「ど、どうかなさいましたか静枝さま！」

「なんでもないわ」

表情はそう言っているが、大量の汗は隠せない。

菊乃もその汗を一瞥したが、特に触れようとはしなかった。

「そうでございますか、それならよろしいのですが」

一呼吸置いて菊乃は口を開く。

「もうすぐ美花様が到着する頃合いでございます」

「嗚呼、やつと娘と逢えるのね。この日をどんなに待ちわびたことか」

恍惚とした表情で静枝は艶笑した。不釣り合いな表情に思える。

瑤子は張り切った様子で笑顔を浮かべた。

「お屋敷にお掃除はばつちりです！」

菊乃が瑤子に顔を向ける。

「るりあを探してどこかに押し込めておいてください」

「えっ、るりあちゃんをどうしてですか？」

「美花様に粗相をしてはなりません」

「るりあちゃんはそんな悪い子じゃないですよ」

「早くるりあを探してください。わたくしは美咲様にお知らせしたのち、外で美花様をお待ちいたします。静枝様はご自分のお部屋でお待ちくださいませ」

菊乃は早足で去ってしまった。

仕方なく瑤子はるりあを探しに行く。

静枝は自室へと足を運ばせた。

足取りは重い。

静枝は足を引きずるように歩いていく。

「抵抗しても無駄。この躰はもうわたしの物なの。お姉様のこ

とを消さないであげているのは、最後の仕上げが残っているから。運命は変えられない、殺されるのはどちらかしら……キヤハハハハハハ楽しみ！」

自室に戻ってきた静枝は、部屋の中心に座布団を敷き、静かに正座した。

静けさが部屋を満たす。

音はとても静かだ。

しかし、空気は違う。

一見して静かに座っている静枝だが、その顔は込み上げてくる嗤いを抑えられないようだった。

まさに般若。

般若面を被ったような静枝がそこにはいた。

時が刻まれる。

どれほど経った頃だろうか、すぐ近くの廊下に足音が響いた。ふすまの向こうにある気配がある。

少しふすまが開いて声が出た。

「失礼いたしますお母様」

部屋に入ってきたのは美咲だった。

「こちらに座りなさい。もうすぐ貴女の妹がこの屋敷に帰ってくるわ」

「いつにこの日が来たのね」

「わかつているわね美咲さん？」

「……………」

美咲は無言で座布団に座った。

「いったい何がわかつているというのか？」

愛おしそうな表情で静枝は娘の横顔を見た。

「わたくしが愛しているのは貴女だけ。わかつているわね美咲さん？」

「……………」

美咲はなにも答ええない。

そこから二人は無言だった。

端から見れば気まずい空気だが、二人がどう思っているのかはわからない。

それからだいたい時間が経ち、廊下から気配が部屋に近付いてきた。

ふすまが開かれた。

「は、はじめまして……………」

美咲と同じ顔がそこに現れた。

少し驚いた様子の美咲だったが、それ周りに悟られぬ前に表情を固くした。

自分の痣に目を奪われている美花に静枝は静かに笑いかけた。

「さあ、こつちへいらつしやい美花」

戸惑いながら近付いてきて、目の前に座った美花の手を静枝は優しく握った。

「逢いたかったわ」

「わたしもです」

「そちらのいるのがあなたのお姉さんの美咲よ」

「こんにちはお姉さま」

美花が笑いかけると、姉の美咲は不機嫌そうな顔した。

不安げな表情をする美花の手を静枝は愛でた。

「綺麗な手……美咲にそっくりだわ」

そう言いながら静枝は美花の手を自分の頬にこすりつけた。

そこはあの醜い痣がある場所。

艶やかな舌を伸ばして静枝は美花の手を舐めた。

「わたくしが食べてしまいたいくらい」

囁いた静枝。

その口は大きく開かれ、美花の指を呑み込もうとした。

咄嗟に美花は手を引いて逃げた。

なぜだか静枝は嬉しそうな表情だった。

「まだ来たばかりで戸惑うのはわかるわ。でも大丈夫、あなたはわたくしの娘なのですから、すぐにこの家にも慣れるでしょう。」

う。美咲、この屋敷を案内してあげなさい」

「はい、わかりましたお母様」

「わたくしは用事があります。夕食の時にまた会いましょう」

背を向けて静枝は部屋を出る。

二人の姉妹に見えないその顔で、静枝は込み上げる嗤いを必死に抑えていた。

そして、部屋を出て廊下を出すと、小さく小さく呟いたのだ。つた。

「残念だったわねお姉様。姉妹はもう出逢ってしまったわ。運命の筋書き通りに」

クツクツと静枝は嗤った。

少女は今日も髪を梳く。

鏡に映った顔は少女と大人の狭間を彷徨っている。

静枝は七つとなった。

見た目は一五歳前後になっていて、肉体的にも女らしくなつて来ていた。

静枝越しに菊乃の姿が鏡に映り込んだ。

「智代様がお待ちでございます」

「長年離れていた妹に逢えるのだから、時間をくれてもいいでしょう。静香よりも綺麗じゃなきゃ嫌なの」

普段から上等な着物しか身につけていないが、町から届いたばかりの下ろし立てだった。

黒地に紅い花をあしらつた着物。

櫛を置いた静枝は艶やかな髪を揺らしながら立ち上がった。

「できたわ」

「それではわたくしは外で静香様をお待ちして、智代様のお部屋までご案内いたします」

菊乃は会釈をしてその場を去つた。

静枝は母の部屋へと向かう。

四年ぶりに逢う妹。それを思うと気持ちが高揚する。

母の部屋の前に立ちふすまを開ける。

「失礼いたします」

「遅かつたわね」

「まだ静香が帰ってきていないのだからいいでしょう」

つんと静香は顔を背けた。

智代の横と前には座布団が一枚ずつ。静枝は智代の横に正座した。

呼吸を整えながら静枝は瞳を閉じて高鳴りを鎮めた。

どんな顔をして静香を迎えればいいのか？

どんな第一声を発しようか？

いろいろと静枝が考えていると、智代が声をかけてきた。

「わかつているわね静枝さん？」

「……………」

「わたくしが愛しているのは貴女だけ。生き残るのは貴女なのよ」

「……………わかつているわ」

視線を合わせずに静枝は答えた。

少ししてから悟られぬように静枝は横目で智代を一瞥した。

恐ろしいまでに不気味な笑みを浮かべている。

眼の奥が狂っている。

昔から母の眼は狂っていた。そこにあるの狂気だ。狂気は年々膨らみ、今では静枝が直視できないほど狂気で妖しく輝いていた。

そんな母と静枝はある一定の距離を保ってきた。

離れすぎず近すぎず、母の機嫌を害さないように慎重に、この世界に蝕まれないように。

静枝はこの箱庭の世界を信じていない。

外の世界のことは知らない。

知らなくとも、この世界を信じていない。

比較の結果　つまり、外の世界とこの世界を比べて導き出された結果ではなく、目の前にあるものすべてを信じない結果だった。

母の眼は狂っている。

静枝が生まれたときから同じ眼をしている。

当たり前のこととして、疑問を抱くということすら、頭を過ぎらないはず。だが、静枝は信じないことによつて、比較対象をなしに狂っていると判断した。

この屋敷でごくごく当たり前の事。

そのすべてが静枝にしてみれば狂っている。

当たり前のことを受け入れない。

瞳には疑惑しか映らない。

静枝の瞳がそうなつてしまったのはあの時から　そう、静

香がこの屋敷から出て行つてしまつたあの時からだ。

なぜ静香が屋敷を出て行つたのか？

母の言葉を静枝はすべて嘘だと否定した。

根拠などいらない。

静枝は自分の想いをかたくなに信じ、それを通してこの世界を見てきた。

だから静枝は恐ろしさを感じずにはいられなかった。

あの時からこうなつたのだとしたら、それ以前のもの、その原因となつたものが、現れたとしたら、価値観が一気に変わつてしまうことがあるのではないだろうか。

そうなのだ、静香と逢うことが静枝は怖かった。

嘘だとしていたものが、静香によって肯定されてしまったとき、すべてが崩壊するのだ。

静香はなぜ屋敷を出て行かなければならなかったのか？

悶々とする静枝を見透かしたように、智代は微笑みを投げかけてきた。

「わかつているわね静枝さん？」

「……………」

「静香が何を言おうと信じては駄目よ。あの子はわたくしこの屋敷、そして貴女を捨てて自らの意思で行ったのよ。帰ってきた理由はわかるわね？」

静枝は以前から聞かされていた。

一族の呪い。

母の語った内容が真実とは限らず、少なくとも静枝は信じていない。

だが、静枝は現実と受け入れているものがある。

それは糧。

通常の食物だけでは生きていけない。

智代が急須から液体を湯飲みに注いだ。

「貴女も飲むかしら？」

尋ねてきた智代の顔が紅い水面でゆらゆら揺れた。

赤い葡萄酒よりも濃厚な色彩。

「いらぬわ」

にべもなく静枝は返事をした。けれど、のどは渴いていた。

緊張のせいかもしれない。

静枝は思い出す。

妹はこの液体があまり好きではなかった。

それとは正反対の感覚を静枝は持っていた。ゆえに静枝はその気持ちや態度を妹の前はあまり出せなかった。

智代ののが元が動いた。

それを見て静枝はうつとりしてしまふ。

飲みたい。

あえて静枝は我慢をした。

静枝は静かに目を閉じることにした。

まぶたの裏に浮かぶ妹の姿。

そこに浮かぶの自分と瓜二つの姿。

妹の姿は別れたときから見ていなかった。にもかかわらず、

想像の中の妹は静枝と共に成長した。

鏡台の前に座る度に妹に想いを馳せた。

瓜二つの双子。

いつも妹は傍にいた。

姿形を見れば、双子だということを疑う余地はなかった。

しかし、静枝は静香を真に理解できずに、ときに苦悩することもあった。

ただの姉妹であったなら、それは大きな問題にはならなかっただろう。双子であり、姿形が似ていることが問題になった。

なぜ性格が大きく違うのか？

近くて遠い存在。

この屋敷で共に暮らしていたにもかかわらず、姉妹には性格の差違があった。

双子であり、環境も同じでありながら、性格を分ける要素はなんだったのか？

四年ぶりの再開。

妹はべつの環境で育てられた。

これによってさらに姉妹の差違は広がらないだろうか。

静枝は変化を望み、変化を恐れた。

まるで同じ日々が延々と繰り返しているような箱庭の世界。

外の世界から帰ってきた妹は箱庭の世界にどんな変化をもたらずのだろうか？

時間は刻々と過ぎ、廊下から足音が聞こえてきた。

ふすまが少し開いた。

「静香様をお連れいたしました」

深々とお辞儀をした菊乃の後ろから静枝と瓜二つの顔が現れた。

静枝は自然と安堵の溜め息を漏らしていた。

離れていても顔も髪型も同じ、違うのは着物くらいなものだ。静香が着ていたのは白い布地に鞠の描かれた着物。顔は同じでも、衣装のせいで受ける印象はまったく異なる。

「お久しぶりですお母様、ただいま帰りました」

智代の前に正座した静香は深々と頭を下げた。

「元気にしていたかしら？」

「はい、お母様」

「長旅で疲れたでしょうけれど、大事な話があるので聞きなさい」

静香は不思議そうな顔をした。

静枝は無表情のまま母を見つめた。そして、あの眼が妖しく輝いたことに気づいた。

「貴女たちに残された寿命はあと三年」

「っ!？」

衝撃的な母の言葉に静香は驚いた。

そして、そんな表情をした妹を見て静枝は訝しむ。

静香は言葉も出ない様子で母の顔を不安そうに見つめている。だが、娘の不安をあざ笑うように智代は口元を歪めるのだ。

「生き残る方法はただひとつ。そのために静香さんは帰って来たのでしよう」

「初めて知りました。あと三年なんて、でも……どうして、嘘つて言ってください」

「お黙りなさい！」

怒号が轟いた。

眼を丸くした静香は涙を浮かべて声を失った。

静香はじつと口を挟まず動向を窺っている。

どこか狂気を孕んだ柔和な笑みを浮かべて智代は口を開く。

「白々しい嘘はお止めなさい」

嘘なんて！

叫びそうな顔をしているが静香は声が出ていない。

さらに静香は訝しんだ。

歯車が噛み合っていない。

静枝の疑惑の眼差しは母へ。

この世界を信じずに生きてきた。

もしも信じるものがあるとしたら……。

静枝の視線は妹へ。

そして、母と妹を同じ視界に収めた。

閉めきられた部屋に風が吹いた。

生ぬるい嫌な風だった。

人の皮を被った物の怪がいる。

その物は渦巻く狂気を口から吐くのだ。

「生き残る方法はただひとつ 片割れを殺し、肝を喰らいなさい」

静枝はぞっとした。

すでに静枝は母から聞かされていた。だからここでの話を驚かなかつた。しかし、今という瞬間は、恐怖を感じたのだ。

恐怖はどこから来た？

静香も怯えている。その怯えと、今、静枝が感じているものは少し違う。

急に静香が立ち上がった。

「それは静枝を殺すということですか！ そんなこと、そんなこと……ましてや……嫌、嫌嫌ーっ！」

部屋を飛び出す静香の背中に智代の怒号が飛ぶ。

「殺すのよ静枝！」

般若の形相をする母を尻目に静香も部屋を飛び出した。

廊下で蹲っている美花の肩を美咲がそつと抱いた。

「できるわけ……」

美花は涙ぐんでいた。

その泣き声は静枝の部屋まで聞こえてきた。

畳に這いつくばり悶える静枝。

「嘘つきめ……静香の真似は止めなさい……なにが美花さんのように外で育てられたから……よ」

静枝はつい先ほど双子の娘に告げたのだ。

片割れを殺し、肝を喰らいなさい。

過去に母が口にした言葉を自らも口にする事になった。

「残念だったわね静枝。運命には逆らえないと認めて受け入れるの、そうすれば楽になるわ」

苦しんでいた声音が一変して、どこかあざ笑うような声音に変わった。

そして、再び苦しそうな顔をするのだ。

「娘たちには決してわたしたちと同じ運命は辿らせないわ。それが例え寿命を縮めることになったとしても」

片割れの肝を喰らわねば、寿命が尽きる。

呪いの話は嘘か真か。

少なくとも娘たちが通常よりも早く年老いていくのは事実。

そして、静枝も同じだった。

いつから通常の早さで年老いるようになったのか？

それは静枝自身がよく知っている。

では、十で死ぬというのは本当か？

もしもそれが嘘であつたら？

老化現象は治まらなくとも、姉妹が殺し合いをせずともよくなるかもしれない。

倍の早さで歳を取るとしたら、よければ四〇年は生きることができるかもしれない。

姉妹二人がそれでもよいというのなら。

だが、静枝は知っていた。

「娘たちには長生きして欲しいわ。それとは裏腹に十で死んで欲しいとも願うわ」

苦惱。

親として、これほどまでに残酷なことがあるうか。

静枝が笑った。

「けれど、それはあの子たちの願いかしら？ 死は恐ろしい、恐ろしさはひとを変える。どちらか一方が長生きをしたいと願つたらどうなるかしら？」

苦痛。

「死よりも、死んだのに生かされていることのほうが恐ろしいわ。わたしも、娘たちも、わたしはそれを身を以て知つたわ。すべてはわたし過ちだった」

「いったいなにを言っているのか？」

「静枝の過ちは運命を受け入れないこと」

「すぐに否定する。」

「弄ばれるのが運命ならわたしはあらい続けるわ。早く年老

い、姉妹で殺し合い、たとえ姉妹の血肉を喰らっても六年あまりで寿命は尽きる。さらに死しても生かされ、わたしの目の前で娘の運命をも弄ばれる。こんな運命を受け入れるというの！」

六年？

話が違うのではないか？

倍の早さで年老いる運命。

七歳で殺し合った姉妹は片割れの肝を喰らう。

それから六年しか生きられないというのか？

十歳で 三年で死ぬ運命が、六年に伸びる。

三年のために姉妹を殺すのか？

そのことを姉妹は知っているのだろうか？

当時の静枝は知らなかった。

だからこそ静香は……。

静枝の叫び声を聞きつけて菊乃が部屋に入ってきた。

「どうかなさいました静枝様？」

部屋に入ってきた菊乃が見たものは、蒼い顔をした静枝だった。

「なんでもないわ。少し疲れているようね、いつの間にか寝てしまつて悪夢を見るなんて」

静枝の顔は蒼いだけではなかった。少し頬がこけている。目の下には隈がある。疲労は今にはじまったことではなく、蓄積されているものようだ。

「あまり無理をなさらぬように、生まれてくる子供のために
も」

そう言ってお辞儀をして部屋を出て行くこととする菊乃に、少し驚いた顔をして静枝が呼び止める。

「貴女には冷たい印象を受けていたけれど、そういう気遣いも
できるのね」

「静枝様に冷たい態度を取った覚えはございませんが？」

「表面的にはそうかもしれないわ。仕事をそつが無くこなし、
わたしの身の回りの世話もしっかりしてくれている。気が利く
ほうだとも思うわ。けれどそれらすべては、感情を交えず規則
どおりに物事を処理しているように感じていた」

「不愉快な思いをさせてしまったのなら、申しわけございませ
ん」

「別に謝らなくてもいいわ。貴女はそういうものとして見てい
るから。けれど先ほどの貴女からは感情が伺えたわ」

今の菊乃は無表情だった。

「仕事がございますので失礼いたします」

それはまるで逃げるような立ち去り方だった。

静枝は微笑んだ。

「菊乃にも照れると言うことがあるのかしらね、知らなかった
わ」

静枝は机の本を少し持ち上げ、その下に隠してあった手紙を
そつと滑らせ抜き取った。

手紙は最近書かれたものではなく、静枝が書いたものでもな

い。記されてした署名は智代の名だった。

同じ家にいながら手紙を書く理由は、口頭では伝えづらい、あるいは伝えられないことを形として残すため。

いったい智代は何を伝えたかったのか？

この手紙は誰に宛てた物だったのか？

手紙の文末には署名。冒頭には宛名が書かれていた。

生まれてくる娘たちへ。

冒頭にはそう書かれていたのだ。

つまりこれが書かれたのは、静枝が生まれる以前である。そして、双子が生まれることを承知していたことになる。

手紙の上に置かれた静枝の指の間から見える文字。

これを読んでいるのが娘たち、もしくはその子孫で。

私は此の世に。

呪縛から逃れる術を。

手紙は数枚に及ぶ長いものだった。

静枝は手紙を元の通りに折りたたんで、本の間に挟んだ。そして本は机の引き出しへとしまわれた。さらに引き出しは鍵を嚴重に掛けられ封じられた。

大きく膨らんだ腹を抱えて、静枝はゆっくりと膝を伸ばして立ち上がった。

おぞましい寒気。

恐怖に顔を引き攣らせながら静枝は素早く振り返った。

「きゃあっ！」

短く悲鳴をあげた静枝が見たものは、畳にできた血溜まりだ

った。

それは決して幻覚などではなかったが、血溜まりにはほかにない。血を流したモノがないのだ。

静枝は目を閉じ、ゆつくりと目を開けた。

「よくもわたしを殺したなッ！」

眼前に飛び込んできた血みどろの狂気に駆られた女の顔。

思わず静枝は腰を抜かして尻餅をついてしまった。

その一瞬の間に女の顔は消えた。

脂汗を拭った静枝は急いで立ち上がり部屋を飛び出した。

そのまま屋敷も飛び出し、壁に立て掛けてあった鍬くわを土などを運ぶ深型の荷台がついた一輪車に乗せ、ある場所へと向かった。

屋敷からだいぶ離れた場所 広大な庭の片隅に七五三繩しめなわの巻かれた岩があった。

静枝は両手で力一杯岩を動かし、その地面を鍬で掘り起こしはじめた。

なにかに取り憑かれたように、妊娠した躰に鞭打ちながら静枝は黒土を掘り起こす。

鍬が硬い物に当たった。

黒土の隙間に見える白いもの。

次々と出土するそれを静枝は掘り出した。

それは骨だった。

人間の骨 いや違う。

放り出され転がっている頭蓋骨が人外であることを示してい

た。

角だ、額から小さな角が二つ生えている。

そして、この人外の死因はおそらくこれだろう。側頭部にあ
る陥没した打撃痕だ。

静枝は一輪車に骨を乗せて屋敷へと戻る。

勝手口の前に一輪車を止めた静枝は屋敷の中に入り、しばらくすると大風呂敷と鉄槌を持って帰って来た。

骨は大風呂敷の上にぶちまけられた。

鉄槌を振り上げた静枝が一心不乱に骨を砕く。

砕く！

機械的にその作業をこなしているわけではない。

ぞつとするような強烈な恐ろしさを込めながら鉄槌を振り下ろしているのだ。

作業は数時にも及んだ。

その間、静枝はひと時も休まず重い鉄槌を振り続けた。

砕いた骨は台所へと運ばれた。

かまどに火が付けられると、骨の欠片がその中に焼べられた。

火は古来から破壊と清浄の象徴である。

骨は灰とまではならなかったが、それでも静枝は満足したようだ。炎の消えたかまどから骨を取り出して風呂敷に包んだ。

「まだよ」

呟くと静枝は駆け出してどこかへ向かった。

静枝の消えた台所に現れる影。

「存在していないモノへの怯えは、灰にしようと変わらない」

女の眼が眼鏡の奥で妖しく輝いた。

「慶子様、夕餉ゆうけの準備はまだしてございませんか？」

菊乃の声が響き、慶子は柔和な顔をして振り返った。

「少しお腹が空いてしまつて。育ち盛りなのかしらねえ」

おどけて見せる慶子は自らの豊満な胸を持ち上げた。

軽い足取りで台所を出ようとす慶子。

「やっぱり夕飯まで我慢するわ。では」

慶子の背中を見つめる菊乃の瞳は無機質だつた。

そして、すぐに静枝が壺を抱えて戻つてきた。

「そこを離れなさいすぐに！」

いきなりの怒声。

「申しわけございません」

頭を下げた菊乃は素早くその場から離れた。

少し離れた場所から静枝を見守る菊乃。

一心不乱の静枝は先ほどの風呂敷包みを壺に押し込めていた。

すでにこのとき、静枝の眼中に菊乃はなかつた。

壺のふたが閉められると、そこに御札で封をされ、さらに布

で壺を覆うと麻紐で嚴重に縛られた。

これで終わりではない。

壺を抱えた静枝は再び外へと向かつたのだ。

行き先は先ほどと同じ場所。

盛り上がった土の横に穿たれた地の底に壺が収められた。

壺に土が次々と被せられる。

重労働を苦ともせず、休まず静枝は穴を埋めた。

埋めた穴は全力を持って踏み固められた。それほどまでに力が走っていた。いや、蹴り固められた。それほどまでに力が走っていた。

夕暮れの朱色が静枝の顔に差す。

何時間にも及んだ作業はついに終わりを迎えようとしていた。

静枝は全身の体重を掛けて岩を動かした。

岩は埋められた穴の上へ。

七五三縄の巻かれた岩が最後の封となった。

大きく息をついた静枝。

歩き出した静枝は屋敷には戻らず、鳥居に向かっていた。

石で築かれた鳥居の先には祠がある。

祠の中は広く、天然の洞窟を元に作られたらしい。

静かで冷たい空気に満たされている。

静枝は祠の奥へと進み、祭壇までやって来た。

祭壇は石造りで、その上には銅鏡と香木が備えられていた。

よく見ると祭壇の脇には引きずったような跡がある。この祭壇は動くのだ。

静枝は祭壇を力一杯押した。

その下に現れた空洞。子供がひとり膝を曲げて入れるくらいだろうか。

中にはいくつかの物が収納されていた。

額に入れられたセピア色の写真。そこに映っていたのは和服を着た一〇代後半とおぼしき女。なんと女の額には二本の角が生えていた。

屋敷の閉ざされた部屋に貼られている御札と同じ物の束。

そして、なぜか入っている煙草の空き箱。

ほかにもいくつかの物が入っているが、静枝はその中から短剣を取りだした。

祭壇の上にある香木を短剣で削ぐ。欠片は手ぬぐいで包み懐に収められた。

短剣と祭壇を元に戻すと、静枝は早々にこの場から立ち去った。

祠を出ると、東の空が蒼く染まっていた。

屋敷へと戻った静枝は自室に籠もり、香を焚く準備をはじめた。

香炉に入った灰の中心に穴を開け、そこに炭団たどんを熾した物を入れ灰を被せる。

銀葉と呼ばれるものを灰に乗せ、さらにその上に香を乗せる。銀葉とは雲母の板で、雲母は絶縁体であるために、香が燃え上がらないように直接熱を伝えにくくする。銀葉と炭団の位置を調節することで、香りの量を決めることが可能だ。

香は不浄を払い、心を鎮めるために用いられることがある。西洋では振り香炉が宗教で用いられている。

静枝の表情は鎮まりとはほど遠く、恐ろしく歪んでいた。

「母の皮を被っていたモノは死んだのに、一族の呪いは未だ続いていっているのはなぜ？」

自らに問う独り言。

「なぜ双子が生まれ、なんのために……繰り返す運命の糸をどこかで切らなくては。すべては生まれてくる愛しい子らのため

に」

静枝は机に向かつて筆を執った。

書こうとしているものは手紙であった。

宛名は 生まれてくる娘たちへ。

その書き出しは智代からの手紙とまったく同じだった。

手紙を書いていると、廊下から声がした。

「失礼いたします静枝様。夕餉の準備が整いましてござい
ます」

「すぐに行くわ」

筆を置いて書き途中の手紙をその場に残し静枝は立ち上がった。

香り纏いながら静枝は部屋を出た。

食卓に着くと食事の準備はひとり分 静枝の物だけ。

「慶子さんは？」

と静枝が尋ねると菊乃が、

「忙しいので自室に食事を運ぶように仰せつかりました」

「そう」

短くうなずき静枝は席に着いた。

その後ろではなにやら瑤子が菊乃に耳打ちをしていた。

「あの……急に気分が優れなくなってしまつて」

顔色が悪く今にも倒れそうだ。

「わかつております。もう今日は仕事をせず、部屋で休んでく
ださい」

「ありがとうございます。では一足先に休ませてもらいます」

菊乃に言われ部屋を出て行く瑤子。

そして、静枝が咳く。

「香に当てられたのね」

美咲は自室に美花を連れてくると香を焚きはじめた。

香りが部屋に漂いはじめると、美花は少し眉をひそめて苦しうにした。

「どうしたの美花？」

「急にのどが苦しくなったような気がして。ごめんなさい、この匂い苦手です」

「私もよ」

「え？」

「私もこの匂いを不快だと思うわ。好きで焚いているわけではないのよ。邪魔者を寄せ付けないため」

邪魔者とは何か？

「美花も気づいているでしょう？ この屋敷に棲み着いた得体の知れないモノどもがいることを」

「物音や気配のことですか？」

「ほかにもいるわ この香に反応するモノたちが。瑤子もお母様も鬼の子も、この匂いが苦手みたい。唯一なんともないのは菊乃だけみたいね。慶子先生はわからないけれど」

「それではほとんどみんな反応することになるのではないですか？ だって、わたしやお姉さまだって」

「香にたいしてどのような反応を示すのが正常なのか、それは

わからないわ。無反応の菊乃は明らかに可笑しいと思うもの。重要なのはどの程度の反応をするかよ」

香を嫌う得体の知れないモノども。

香を嫌う表の住人たち。

だれもが嫌うものならば、それが正しい反応だと思えてしま
う。

美咲は薄ら笑いを浮かべて静かな面持ちで美花を見つめた。

「お母様や瑤子は、得体の知れないモノたちと同じくらいこの匂いが嫌いみたい。この意味がわかる？」

意味はわかるが美花は否定せずにはいられなかった。

「そんなこと……瑤子さんやお母様は普通の人間……もしそうだとしたら、子供である私たちはいったいどうなるのですか！」

「私はこの屋敷ですっと育ってきたわ。外の人間のことなんて知らない。私は私でしかない」

「……………」

美花は外の世界と接してきた。

周りの人間たちと自分との比較を美花はしてきた。

疎外感や恐怖心、自分がいったい何者であるのかという疑問が付き纏わない日はなかった。

美咲は机の中から一通の手紙を取りだし、それを美花に手渡した。

「読むといいわ」

手紙の宛名は 生まれてくる娘たちへ。

生まれてくる娘たちへ

この手紙を読んでいるのが娘たちであることを願います。

そして、この手紙がまだ存在しているということは、未だ一族は呪われたままであり、私の抵抗も成就せず、最悪の結果の代償として私は此の世にいないでしょう。

万が一、あなたたちの前に母と名乗る存在がいたとしたら、今すぐにそいつを殺しなさい。そいつは私の皮を被った物の怪だからです。

私の母もそうでした。私が生まれた時にはすでに遅く、母は母の皮を被った物の怪だったのです。そうと気づく前から私は母を疑っていました。それが確信へと変わったのは、本物の母が残した手紙でした。私は母に習い、あなたたちの手紙を残すことにしたのです。

私は母と同じ場所にこの手紙を残しました。その場所がこの屋敷の中でもっとも安全な場所だからです。物の怪たちは例え手紙があつたの祠にあると知ることができても、直接手を出すことはできません。しかし、私の危惧するところは、間接的な方法を用いてこの手紙が物の怪の手に渡ってしまうことです。そうなれば、この手紙を残す意味も失われ、さらに最悪な事態を招いてしまう。過酷な運命をさらに私の娘たちに背負わせてしまうのではないかと、心が痛むと共に恐怖を感じるのです。

あなたたちも知つての通り、我が一族は呪われています。それが自然によるものではなく、意図的なものであることは明白

ですが、誰が何の為に呪いをかけたのかまではわかりません。原因を究明しようと今も奔走していますが、何の糸口も見つからない状態です。

あなたたちが現在、どのような状況に置かれているか、それは現在の私にはわからないことです。しかし、この手紙があなたたちの手元、あるいはどちらか一方の手という可能性もありますが、そうであった場合、私の計画の一つは失敗した可能性が高いと言うことです。そこから導き出される未来の可能性は、一族が歩んだ道の繰り返しであろうということです。

姉妹で殺し合いを命じられてはいませんか。もしそうであるならば、絶対それはしてはならないことです。それは呪いを繰り返すことにほかならないと私は考えるからです。呪い云々よりも、我が子が殺し合いをするなど私には耐えられない。どうかお願いですから早まった真似はしないでください。母の切なる願いとしてどうか聞き届けてください。

双子の片割れを殺し、その肝を喰らわなければ数年と生きられないと脅されたと思います。残念ながらそれは事実です。死期を受け入れることが酷であることは十分承知しています。それでも姉妹で殺し合うなどということがあって良い筈がないのです。

殺し合いを命じた者はあることをあなたたちに告げていないと思います。万が一、殺し合いが現実のものとなってしまう場合、生き残ったひとりはどうなのでしょう。私はそれを知っています。急激な老化は治まりましたが、決められた死期は

数年延びたにすぎなかったのです。たとえ殺し合いをしても、六年も生きることができないと忠告しておきます。

なにもしなければ三年、殺し合いをしても六年。それが一族の呪いなのです。なぜ死期が決まっているのか、そこまではわかりません。もしかしたら、それこそが呪いを解く糸口なのかもしれません。だからあなたたちには最後まで諦めないで呪いを解く方法を探して欲しい。それを成就できなかった母を許して欲しい。この手紙が存在しているということは私の代で呪いを断ち切れなかったということ。本当に本当にごめんなさい。

口頭でこの思いを伝えられていないということは、さらに早く六年も経たずに死んでいることになります。

偽物の私があなたたちの前にいることを想像すると、悔しくて悔しくて

静枝は書き途中の手紙を涙で滲ませた。

「こんな手紙！」

破り捨ててしまおうかと思つたが、すぐに思いとどまった。

「こんな手紙……書きたくないわ」

手紙は最悪の事態が起きた未来へ託すもの。まだその未来は訪れていない。抵抗の最中に、悲観的な未来へ事を綴ることに静枝は憤りを感じたのだ。

しかし、静枝は手紙を書かなくてはいけないことを承知していた。母がそうしたように。自分にもしもことがあつた場合、手紙を残しておかなければ未来は過去と同じ道を辿ることにな

つてしまふ。

「静枝さん、いるかしら？」

部屋の外の廊下から慶子の声がした。

静枝は書き途中の手紙をそつと隠した。

「どうぞお入りになられて」

廊下に向かつて投げかけると、慶子が部屋の中に入ってきた。机に置かれている墨の入った硯すずりと筆に慶子は気づいたようだ。

「また手紙を書いていたの？」

「ええ」

「今度の文通相手は誰ですか？」

「こないだも話した古本屋の店主よ」

「あなたに気があるつていう？ 送ってきた写真を見る限り、いい男ですわよねえ。あたくしもまた文通をはじめようかしら」

「それなら古本屋の店主は慶子さんに譲るわよ」

「嫌ですわ、静枝さんよりもいい男を見つけてみせますもの」

慶子は笑って見せた。

この屋敷の呪縛がある限り、外の人間とのやりとりは文通が有効な手段だった。

笑顔の慶子とは対照的に、静枝は悲観的な瞳をしていた。

「聞いてもいいかしら？」

「世界の終わりみたいな顔をして、嫌ですわあ。なんですか？」

「なぜこの屋敷に来てくれたのか今でも信じられないわ。あなたのようなひとが」

「手紙にも書きましたでしょう。どんな犠牲を払おうと、研究者として探求の欲望に勝てなかったからですわ」

「私は手紙にしつかりと、一度この屋敷に足を踏み入れれば決して外の世界には戻れないと。外の世界で育つたあなたにとっては、不便以上に過酷であつた筈だわ。それでもあなたは来てくれたわ」

手紙のやり取りによつて慶子はこの屋敷に來た。

研究者と自ら言つていたが、その目的はなんだろうつか？

慶子は春の木漏れ日のような笑顔を浮かべていた。

「あなたには騙されましたわ。一生出られないと覺悟してきたら、それが嘘だつただなんて」

「たしかに容易ではないとはいえ、外に出る方法は存在しているわ。けれど外に出られない覺悟を持つほどの方ではなければ、この屋敷ではやつていけないと思つたのよ」

「あたくしからも聞いてよろしい？」

「なにを？」

「なぜ静枝さんはこの屋敷を出ないんですの？」

静枝は度肝を抜かれたように困惑した。

俯いた静枝は数秒黙り込んだのち、口を開いた。

「一刻も早くこんな屋敷から逃げ出したいわ。けれどわたしは外の世界が怖いわ。わたしを受け入れてくれるのか、それよりもわたし自身が受け入れることができるのか」

「あたくしが連れ出してあげますわよ」

「なにもかも捨てられるものなら捨てて逃げ出したわ。けれどもわたしにはこの屋敷でやるべきことがあるわ。そのためにあなたにも来て貰ったのですもの」

慶子は自らの意思でこの屋敷に来たが、呼んだのは静枝だった。

表向きの理由として静枝は菊乃や瑤子にこう話していた。生まれてくる子供たちの家庭教師よ　と。しかし、慶子を呼んだ真の目的は別にあつた。

「何か用事があつてわたしに会いに来たのでしょうか。もしかしてなにか進展があつて？」

文通の話から広がつてしまつたが、慶子が静枝の部屋を尋ねてきた理由があるはずだつた。

「正直、手詰まりですの。過去の文献や手紙など、この屋敷に何も残つていないのが不思議で仕方ないですわ。だつてこんな重大な事、何かしらの形で後世に伝えるのが普通ですわよね？」

何も残つていない。静枝は母からの手紙のことを慶子に伝えていないのだ。

「一族の呪いについては口伝でしか伝えられていないわ。それも偽物の母からしか」

そう答えながら静枝も疑問を持つていた。

母　智代と同じように後世に伝えようとした者はほかにいなかったのだろうか？

いた可能性はあるだろう。ただし、智代がそうしたように、公に伝えることはできなかったはず。未だ見つからないままになつてゐる過去からの手紙が存在しているかもしれない。

もしくは。

「処分されたと考えるのが妥当だわ」

と、静枝は囁いた。

偽りの母。それは真実を隠そうとする存在。そのような者が過去の手紙などを残しておくはずがなかった。

静枝は唇を噛み絞めた。

「殺さないでもつと聞き出せばよかつたわ。でもあの時はそんな余裕なんてなかつたのよ」

アレが一族に呪いを掛けた張本人だつたのか？

未だ呪いは解けず。

母に成りすましていたアレを殺しても、なにも変わっていない。

屋敷で生き残つてゐる静枝は妊娠をした。

なにも変わらないのであれば、双子を出産すると決まつてい

る。
「過去を悔やんでも仕方がありませんわ。静枝さんは過去に干渉することができて？」

「過去は変えられないから未来を変えろといいたいのかしら？
そうね、そうするつもりよ、生まれてくる娘たちのために」

大きなお腹に手を置いた静枝を見つめる慶子。

「まだ聞いていないことがありますわ」

「なにかしら？」

「なぜ双子の姉妹が生まれるかわからないんですの？」

「わからないわ」

「そこに呪いを紐解く糸口があると思いませんか？ 父親は

誰ですの？」

「……父親」

静枝は呟いて黙り込んだ。

この屋敷に男はいない。

文通相手や屋敷に町からの荷物を運んでくる者たち、その程度でしか静枝は男を知らなかった。

静枝にとって男は非現実にも等しい存在だった。

では、どうやって妊娠をしたのか？

「父親はいないわ。ある日突然妊娠したのよ。それが外の世界では考えられないことで、おろらく不気味な事とされるのは承知しているわ。けれど、この屋敷で過ごしてきた私にとって、外の常識など関係ないの。この屋敷で起こっていることがすべてなのよ」

照らし合わせる常識がなければ、疑問の余地もない。

「本当に父親はいないんですの？」

「それは……」

「本当は何か心当たりがあるのではなくて？」

「……」

静枝は黙ってしまった。

そして、苦悶の表情を浮かべたのだ。

「生まれてくる子供が人間の子だと思う？」

不安そうな眼差しで静枝は尋ねた。

瞳に映っているのは慶子だったが、問うたのは自分自身かもしれない。

「なぜそう思うんですの？」

「外の常識なんて関係ないと言ったのは嘘よ。わたしは外の常識を恐れているだけ。だってわたしは人間なのよ、誰がなんと言おうと得体の知れないあんなモノたちとは違う。自分の子供が自分の子供とは思えない。わたしの躰から生まれてくるにも拘わらずよ。恐ろしいわ、なにが生まれてくるのか恐ろしくて堪らない。それとは裏腹にお腹が大きくなる度に、娘たちを愛おしく思うの。誰の子かなんて考えたくもない。わたしの子というだけでいいの。父親なんてはじめから存在しないほうがいいわ。もしも父親が……考えたくもないわ。そんなことあってはならないことなのよ」

静枝の視線は泳ぎ、挙動不審になっていた。

慶子は静枝の顔を押さえて自分に向けさせた。

「目を背けては何も変えられませんかことよ。父親は誰ですの？」

「……わからないわ。本当にわからないの。ある朝起きたら、紅い血で汚れていたの。なにがあったのかは覚えていないのよ。わたしは怖くて、できる限り考えないようにした。でも月日が経って、妊娠を認めざるを得なくなつた」

「父親は誰ですの？」

「わからないわ！」

静枝は大声を張り上げて慶子突き飛ばした。

畳に腰を打ち付けた慶子を見ても静枝は治まらなかつた。

「出て行きなさい、あなたの顔なんて見たくないわ！ 消えなさい、消えるのよ！」

鬼の形相をして怒鳴り散らした静枝。

慶子は何も言わず部屋を出て、背中を向けてふすまを閉じた。
「父親が誰かなんて重要ではないわ。だってあんな顔をする女から生まれた子供が人間だと思つて？ うふふふつ」

小さく小さく呟いた慶子は嗤いながら廊下の闇へ消えた。

美花は読み終えた手紙を震える手で美咲に返した。

「信じられません」

「何がかしら？」

「全てです」

「それが外の世界で過ごしてきた美花の反応というわけね」

美咲は艶やかに笑い言葉を続ける。

「私もよ」

「え？」

「美花とは違う意味でしょうけれど」

「どういう意味ですか？」

「何が信じられないか具体的に言つてご覧なさい」

少し高圧的な言い方だつた。

「何よりも母が物の怪だなんてそんなこと」

「私はありえないことではないと思うわ。私が疑っているのはそこでなく、手紙を書いたのが本物の母かどうかという根本的な話。母ではないのなら、誰が書き、私たちに何をさせようとしているのか。ねえ、美花は自分のことを人間だと思っているのかしら？」

「……わたしは」

「外で過ごしてきて、感じるものがあつたでしょう？」

「人間です」

「嘘ばっかり。そんな自信のなさそうな顔しないで頂戴。私は別に自分が何者であるうと関係ないの。もしも母が物の怪で、その腹から生まれたのが私たちだとしても、何か困ることがあるかしら？」

生まれながらずっと美咲はこの屋敷で過ごしてきた。

片や美花は外の世界で過ごし、この屋敷という世界に戻ってきたのだ。

黙り込む美花。

美咲は物悲しい顔で美花から視線を逸らした。

「私はこの屋敷での生活が嫌で嫌で堪らないわ。でもこの屋敷ですっと過ごしてきた私よりも、外の世界を知ってしまった美花のほうがずっと不幸だわ。ねえどうして戻ってきてしまったの？」

「お母様から大事な話があると手紙が届きました。とにかく実家に帰ってくるようにと。わたし嬉しかった、だってずっと想像してきたお母さまやお姉さまに初めて会えるのですもの。そ

れがこんなことになるなんて」

双子の姉妹の殺し合い。

「私も美咲のことを想像していたわ。双子というだけで何も知らないのに、なぜか大切に思っていたわ。きつとお母様のお陰ね」

美咲の浮かべた笑みは苦笑と艶笑の狭間だった。

「お母さまのお陰？」

尋ねてきた美花を鋭い視線で美咲は睨んだ。

「教えてあげるわ、お母様になんて言われて来たか。殺せ、殺せ、殺せ、双子の妹が目の前に現れた殺しなさい！ 気が狂いそうになるほど、何度も何度も言われ続けてきたわ。私はその度に、洗脳されるどころか、反発心を覚えていったの」

「嘘ですそんなの！」

あまりの美花の勢いに美咲は息を詰まらせ後退った。

次の瞬間、美咲は急にどつと笑ったのだ。

「あはははは、なぜか安心してしまったわ」

「えっ、なぜ笑うのですか？」

「気にしないで……うふふ……本当に安心したわ。よかった、本当によかった」

そして、表情を一変させて美咲は真顔になったのだ。

「何があるうと美花のことは私が守るわ。美花はただひとりの双子の姉妹。私の一部と言ってもいい存在だと確信したわ」

「お姉さま……」

「だから美咲は私のことを信じなさい、何があるうとも、何が

起ころうともよ」

それは「何か」をする宣言とも取れた。

「私はお母様を殺すと決めたわ」

美咲の衝撃的な発言に美花は言葉を失ったのだった。

静枝は臨月を迎えたお腹を摩りながら、祠の中で香を焚き、待ち人が姿を見せるのを眺めていた。

祠にやって来たのは菊乃だった。

「お待ちせいたしました。このような場所で、どのような用件でございますか？」

「誰にも邪魔されない場所で、あなたと向き合って見たかったのよ。この場所なら大丈夫でしょう、あなたが知つていることをすべて聞かせて頂戴」

「……………」

「黙りね。あなたはわたしが生まれた時にはすでに屋敷にいたわ。それを言うなら、瑤子も同じだけれど、あなたと瑤子は明らかに違う目的で存在していると思うのよ。この屋敷の中でもっとも異質なのはあなただと思つてゐるわ。おそらくあなたは多くの秘密を知つてゐる。にも関わらず、あなたは黙して語らず。でもそれを許すのも今日までよ。もう背に腹を変えられないの。どんな手段を講じようとあなたの口を割らせるわ」

「……………」

菊乃は黙つたまま。

静枝はそつと菊乃に近付き、その首に手をゆっくりと伸ばし

た。

まったく動じない菊乃。顔色一つ変えない。

か細い首が静枝の手によつて絞められた。

菊乃の黒瞳に映る女の顔。

「いやっ！」

静枝は怯えて菊乃から離れた。

蒼い顔をして脂汗を滲ませた静枝は咳き込んだ。立場が逆の
反応だ。

「大丈夫でございませうか静枝様？」

「うっふふ……わたしのほうが心配されるなんて。あなたが動
じないことはやる前からわかつていたわ。あなたは例え躰をば
らばらに切り刻まれようと、絶対に口を割らないでしょう。だ
からあなたから何か訊くことを諦めていたのよ。でもお願いよ、
お願いだから、あなたの知つていることを聞かせて頂戴。生ま
れてくる娘たちのためなのよ！」

「……………」

無機質な表情のまま菊乃は何も返さなかつた。

「あなたしかもう頼れないのよ！」

必死さは痛いほど伝わってくる。

静枝は肩を落とした。

「あなたは何を頑なに守っているの。なにが目的なの？」

「わたくしに与えられた使命は、生まれてくる子供たちを見守
り続けることでございます」

「双子の姉妹が殺し合いをしようと、見守り続けるだけなのか

「しら？」

「はい、わたくしは能動的に干渉することができません」

「あなたの行動は制限されているということ？ 誰の意思で？」

「……………」

また黙ってしまった。

静枝は考えた。

「能動的と言ったわね。とても意味深な言葉だわ。誰かの働きかけがあれば、あなたは行動することが可能ということよね？ けれど、私がいくら頼んでも口を割ってくれない。わたしの命令では駄目なのね。あなたにとってわたしは仕える主人ではないということでしょう？」

「わたくしの主人は静枝様でございます」

「でも何でも言うことを聞いてくれるわけではないのでしょうか。名ばかりの主人だわ」

屋敷にいることが当たり前のように菊乃は存在していた。静枝が生まれたときにはすでにいた。いつから菊乃が屋敷にいるのかはわからないが、それはあまりに当たり前前すぎる流れの中で、静枝はいつしか菊乃の主人となっていた。

菊乃はいつ静枝を主人と認めた？

それは智代が此の世からいなくなってからか？

「わたしはいつからあなたの主人になれたのかしら？」

「此の世に生を受けた瞬間からでございます」

「えっ」

静枝は驚いて息を呑んだ。彼女が予想していた答えとは違つたのだろう。

「わたしはてつきり母が死んだときだと思つていたわ」

「そのとおりでございます」

「あなたの答えでは矛盾が生じるわ。けれどあなたが嘘をついているとは思えない。……母はいつ死んだの？」

その質問は静枝にとつて認識の崩壊をもたらすものだった。

この目で見えてきた母、自分を育ててくれた母、生まれた時にそこにいた母。菊乃の言葉によつて、思い出したように理解してしまつたのだ。あれは母ではなかつたと。

静枝は大きな誤解をしていた。

主人となつたのは母の皮を被つたアレが死んだときではなかつた。

「先代の智代様は静枝様と静香様をご出産して間もなく、お亡くなりになりました」

菊乃の答えに静枝は戦慄した。

「なにが原因で死んだのか言いなさい！」

出産による死亡事故と考えるのが普通だが、この屋敷で起きていたこと 母が母ではなかつたことを考えると、そこに因果関係を見いだそうと考へてしまう。

答えない菊乃をさらに静枝は大声で問い詰める。

「あの化け物に殺されたのでしょうか！ そして母はあの化け物に取つて代わられたんだわ！」

「それは断じて違います」

「だってそうでしょう、そうとしか考えられないじゃない！
何が目的なの、あなたもあの化け物の仲間なの！」

「それも断じて違います」

取り乱す静枝と、淡々とする菊乃。

あまりの温度差の違いに静枝も冷静さを取り戻そうと、顔を
押さえて瞳を閉じた。

「そうね、わかっているわ。あなたがあの化け物の仲間ではな
いことは、化け物に殺されそうになった静香を救ってくれたこ
とを考えれば。本当に嫌な世界だわ、なにを信じていいのかわ
からないわ。仇なす者と当たり前のようにいつしよに暮らして
るなんて。あなたも瑤子も、明確に仇なす者とわかつたら殺し
ているところよ」

静枝は呼吸を置いた。

「話を戻しましょう。母がなぜ死んだのか答えて頂戴」

「自らの意思でございました」

「生んだばかりの我が子を残して死ぬなんてわたしには考えら
れないわ」

「そうしなければならなかったのでございます」

「なぜ？」

「……………」

「大事なところでは黙ってしまうのね。それは生まれて来た子
供に関係することかしら？」

「……………」

「本当に隠そうとするのなら、黙さずに嘘をつけばいいわ。そ

れがあなたにできる最大限の譲歩と受け取ればいいのかしら」

ふつと静枝は静かな笑みを浮かべた。

急に哀しげな表情をした静枝は自らの大きくなった腹を擦った。

「わたしが生まれたばかりの我が子を残して死ぬとしたら、それは我が子のためだわ。こんなにお腹が大きくなっているのに、まったく動かないのよ……不思議よね」

「……………」

「生まれてくる娘たちが死産であることと関係があるのかしら？」

「……………」

静枝の衝動的な発言。表情を崩さない菊乃は、知っていたのかいなのか。

懐から手紙を出した静枝はそれを菊乃に手渡した。

「母がわたしたち姉妹に残した手紙よ。この祠で見つけたわ

“香る枝”の下で」

菊乃は受け取った手紙の中身を確認しはじめた。呼んでいる最中も表情は変わらない。手紙に書かれている内容、果たして菊乃はどこまで知っているのか。

手紙を読み終えた菊乃はそれを静枝に返した。

「ここに書かれているとおり、智代様も出産を不安がり、死産を恐れておりました」

「それで実際に死産だったのかしら？」

「お聞きになられたらどうなさいますか？」

「あなたにしては珍しい返答ね。わたしはそれでも娘たちを生

むわ。そして、もしものがあれば最善の方法を探すでしょう。これで満足なら訊かせて頂戴」

「死産でございました」

静枝は驚くことはなかった。悲しい表情もしなかった。受け入れる覚悟はできていたのだろう。冷静だった。

「生まれてきたわたしたちは死産だったのに、なぜわたしは生きているのかしら。なぜ母は死ななければならなかったの、なぜ母の化けの皮を被ったモノが現れたの、それらは糸で結ばれるのかしら？」

菊乃は何も答えず静枝は言葉を続ける。

「ここであなたの知る全てを聞き出せれば、呪いは解くことができるのかしら？」

「残念ながら、静枝様に呪いを解くことはできません」

「断言するのね。できないと言えると言うことは、あなたはやはりいろいろと知っているのね。そして、知っているにもかかわらず、あなたの知ることを聞き出しても解くことができない。それは絶対に呪いは解けないという事かしら？」

「わたしは解けると信じております」

「でもわたしには無理なのね。だとしたら、誰なら解けるのかしら？」

「わたくしに与えられた使命は、生まれてくる子供たちを見守り続けることでございます」

「あなたの目的が見えてきて良かったわ。ありがとう。もっと早くあなたと向き合えば良かったわ。ここでの暮らしは本当に

嫌になるわ、毒されていくことにも気づけなければ良かったのに」

静枝は優しい笑みを菊乃に送った。

菊乃は相変わらずいつもと同じ表情だったが、今の静枝には別人のように映っていた。

「静枝様に呪いを解くことはできませんが、その行動が未来を変えることになるのでございます」

「そんな言葉をもらわなくても、わたしは最期まで抵抗を続けるわ。けれど、わたしに万が一のことがあった場合、頼まれて欲しいことがあるの……うっ！」

静枝の腹が波打ちように揺れた。

地面に落ちた大量の水。

それは静枝の股から垂れ流れてした。

静枝が動こうとすると、再び股から水が 破水だった。

すぐに菊乃が静枝の体を支えた。

「出産の準備をいたします」

「まだよ、話が先よ、絶対に今言わなければ手遅れになるかもしれない！」

「これだけの破水の量、時間はあまりございません」

「わたしに万が一のことがあった場合、娘たちを」

たゆたうと揺れる紅い海。

その海はとても浅く、海面からは横たわる静枝の顔や乳房や足先が見えていた。

産まれたままの姿で眠る静枝。

紅い海に揺られながら。

世界を突如覆う黒い影が渦巻いた。

“渦巻くモノ”は静枝の肢体に覆い被さった。

鋭く静枝は瞳を開いた。

嗚呼、目の前でそのモノは世にも恐ろしく嗤っていた。

影に覆われた顔。

なのに嗤っているのが伝わってくる。

やがて“渦巻くモノ”は静枝の躰を犯しはじめた。

股ぐらをまさぐられ、乳房を乱暴にこねくり回される。

初めてではなかった。

そのことに気づいて静枝は恐怖した。

そうだ、あの時と同じだ。

夢か現か。懐妊の夢。喪失の朝。

「わたくしの顔、思い出せたかしら？」

“渦巻くモノ”はそう言った。静枝にはそれが女の声のよう

に聞こえた。

静枝は思い出してしまった。

思い出したくはなかった。

そうと気づいたとき、“渦巻くモノ”は見覚えの姿に変わっ

ていた。

「慶子!？」

「やっと思い出してくれたのね……わたくしの愛しい子」

慶子と呼ばれるモノは静枝と躰を重ね交わり合った。

大きく揺れる慶子と呼ばれるモノの乳房。

そして、下半身でそそり立つ狂気。

狂気は静枝の躰に侵入しようとしていた。

「いやっ！」

「これは夢、これは切っ掛けに過ぎない、妊娠したときもそうだった」

「いやっ、いやっいやっ！」

「貴女に新たな道を与えましょう」

「嗚呼っ！」

狂気が静枝の躰を貫いた。

渦巻く奔流が静枝の内を満たしていく。

静枝の躰を包み込む影。

どこからともなく聞こえてくる声。

「一つの糸から逃れようと、別の糸に絡め取られる。全ては箱庭での出来事」

嗤い声。

赤子、子供、大人から年老いたモノの声。

大勢の嗤い声が世界を包み込んだ。

紅い海に沈む静枝。

夢か現か。

再び目覚めた世界が果たして現実と言えるのだろうか？

廊下に転がっている少女の首。傍らには巨大な蜘蛛の脚が落ちていた。

床に滴る血痕は玄関まで続いていた。

開かれたままになつてゐる玄関から闇が覗いてゐる。

布に包くまれた産まれたばかりの双子。

屋敷の門をくぐり抜けた菊乃は、そこで赤子を向かいに来た男に手渡そうとしていた。

「これは前金でございます。無事に届けることができれば、届け先で残りをお支払いいたします」

金の入った袋と一人目の赤子を渡したとき、闇夜を我が物のように纏くつた女が現れた。

「わたくしの屋敷で勝手な真似をしてもらつては困るわ」

妖しく嗤う静枝。

静枝の乱れた着物から覗く乳房に男が眼を奪われた瞬間、菊乃の首は高く飛んでいた。

般若の形相を浮かべる静枝。その手で妖しく光るのは、隠し持つていた肉切り包丁。

菊乃の首が口を開く。

「早く逃げなさい。赤子を届ければ、届け先であなたの命は保証されます。さあ早く逃げなさい！」

恐怖で顔を歪めた男は赤子を抱えて必死に逃げた。

たったひとりの赤子を連れて夜の山道を無我夢中で逃げた。

残された赤子は 菊乃の躰が優しく抱きしめていた。

運命が分かつ双子の姉妹。

静枝は菊乃の躰から“美咲”を奪い取つた。

「ひとり残れば十分よ。貴女たちのやろうとしていたことは、

半分成功半分失敗。しかし結局は、屋敷を出るのが早まったに過ぎないわ。ねえ、こんなことしかして気が済んだかしら？」

「……………」

無言の菊乃。

静枝は鼻で笑った。

「本当に愛想のない子。瑶子を見習ったらどう？」

背を向けて屋敷へと歩き出しながら、静枝は言葉を続ける。

「自分の躰は自分で直せるでしょう。貴女は明日から何事もなく寡黙にこの屋敷に仕える運命なのよ。だって貴女は産まれてきた子供を見守らなくてはいけないのだから」

夜に木霊する女の嗤い声。

静枝よ、おまえは何者だ？

るりあは廊下で天井を見上げていた。

そこへやって来た瑶子。

「どうかしました？」

瑶子と目を合つたるりあはそっぽを向いて逃げるように走り出した。

その途端、るりあの顔が何かにぶつかった。

「ちゃんと前を見て歩きなさい」

顔を上げたるりあの瞳に映つたのは機嫌の悪そうな静枝だった。

静枝はるりあを押しつけて歩きはじめた。

その背中に瑤子の声が投げかけられる。

「お休みなさいませ静枝さま」

あいさつも返さず足早に静枝は自室へ向かう。

ふすまをぴしゃりと閉めた静枝は、敷かれていた布団の上に正座をした。

そして、袖に隠し持っていた肉切り包丁を布団に突き刺したのだ。

「抑えるのよ、抑えなさい。血の繋がった双子の姉妹が殺し合うことに意味があるのよ」

寝そべった静枝は悶えるようにして、布団に爪を立てながら涎を垂らした。

「この衝動に今まで耐えてきたのよ、あと少しくらい」

静かな部屋に時計の針の音が鳴り響く。

刻々と過ぎていく時間。

廊下の向こうから大きな物音が聞こえてきた。

不気味に嗤う静枝。

甲高い悲鳴。

そして、再び夜は静けさを取り戻した。

「ついに熟れた柘榴ざくろが収穫されたのね」

立ち上がった静枝は部屋を出る。

蠟燭の薄明かりが仄暗く廊下を照らす。

脈打つ鼓動。

静枝は胸の高鳴りが表情にまで表れていた。

狂喜の形相。

だが、その感情は裏切られることとなった。

静枝が悲鳴があつた場所に着くと、そこにあつたの干からびた屍体。下男らしい粗末な服を着ていた。

歯ざしりの音が響く。

紅蓮の炎が世界を包む。

それは静枝の瞳の色だった。

真つ赤に血走つた眼で静枝は屍体を滅多刺しにした。

肉切り包丁を振り下ろし振り下ろし、振り下ろし。

幽鬼のように蒼白い顔でゆらりと柳のように立ち上がった静枝。

歩き出そうとした静枝だったが、その足が急に掴まれたように動かなくなつた。

鋭い眼光で足首を見たが何もない。

「……まだ抵抗する力が残っていたのね。ここまで抵抗をするということは、どこに向かうのかわかつたのね？」

それは誰に語りかけているのか？

静枝は重い足を引ぎずるようにして歩き出した。

肉切り包丁が柔肉を切り刻みたがつている。

女の肉。

若い少女に肉が好いよ。

静枝は眼を剥いた。

己の手が糸で引かれるように動き、なんと太股を肉切り包丁で突き刺したのだ。

「くく……う……おのれ……」

顎が碎けるほどに静枝は齒を食いしばった。

肉切り包丁を持つ手はさらに動き、捻るように回された。

「ギエあアツ……」

はらわたから絞り出したような悲鳴。

ぼとりぼとりと冷たい床に墜ちる黒血。

肉切り包丁を太股から抜き、脂汗を垂らす静枝は構わず歩きはじめた。

「抵抗が大きければ大きいほど、その反発も大きいというもの。全ては無駄だったと嘆き悲しむがいい！」

廊下に血の痕を引きながら静枝はついにその部屋の前まで来た。

この部屋は美花の部屋だ。

ふすまの先はとても静かだ。

静枝は紅く濡れた織手でふすまを開けた。

部屋の中心に敷かれた布団で眠る少女。静かな寢息を立てている。

静枝は肉切り包丁を握り直し、その刃を少女の細い首筋に突き立てようとした。

その瞬間！

布団が大きく跳ね飛ばされ、黒髪を乱しながら少女が静枝に襲い掛かった。

「痺れを切らせて、いつか来ると思っていたわお母様」

その口調。

「美花ではないわね！」

少女は妖しく微笑んだ。

「私は美咲よ」

美咲は静枝に馬乗りになり、肉切り包丁が持たれた手首を床に押さえつける。

そして、自らも隠し持っていた包丁で静枝の首を突こうとした。

「殺さないで……愛しい愛しい美咲、母を殺さないで」
涙ぐむ静枝。

だが、美咲は容赦ない冷たい瞳をしていた。

「どこに母なんているのかしら？」

「やめて美咲！」

切っ先がのどに触れた瞬間、部屋に美花が飛び込んできた。

「やめて！」

響く美花の嘆き。

美咲の動きが止まり、その隙を突いて静枝は美咲の躰を押し飛ばした。

足を引きずり這って逃げようとする静枝。

体勢を直した美咲が静枝の背中に包丁を突き立てた。

「ギャアアアアッ！」

包丁で刺されながら静枝は鋭い爪で美咲を振り払った。

美咲の頬に奔った血筋。

重傷を負いながらも静枝は立ち上がり、鮮血を乱しながら逃走した。

すぐに美咲は後を追おうとする。

「逃げられたわ、止めを刺してやる！」

「嫌やお姉さま！ そんなことをしてはいけない！」

「どうして！ あの女は美花を殺そうとしたのよ、それでも庇うの！」

「わからない、わからないけど、お姉さまにそんな真似をさせられない！」

「だったら美花が手を下すの？」

「っ！」

美花は息を呑んで固まった。

そんな美花を美咲は構わずに、蠟燭を用意すると仄暗い廊下を歩きはじめた。

血の道しるべが示す先。

それは静枝の部屋へと続いていた。

血塗られた襖の引き手。

美咲は襖を力強く開き部屋の中を見た。

部屋を中心に敷かれた布団の上で正座する静枝の姿。あまりに静かな面持ちが不気味だった。

「殺しなさい」

と、顔を上げた静枝は静かに言った。

警戒心を強めながら美咲は摺り足で静枝に近付いた。

一步、一步と二人の距離が縮まる。

静枝の形相が刹那に変わった。

「死ねーっ！」

般若の形相をして静枝が肉切り包丁を振るった。

咄嗟に庇って出した美咲の手のひらが血を噴いた。

怯んだ美咲の腹を刺そうと肉切り包丁が鈍く光った。

部屋に飛び込んできた美花。

「お姉さま！」

美花はそのまま美咲を肩で突き飛ばした。

肉切り包丁が柔肉を裂く。

畳に倒れた美咲が叫ぶ。

「美花！」

同じく床に倒れていた美花が手にしていたのは、美咲が落とした包丁。

肉を裂かれたのは静枝だった。

包丁を伝わって美作の手を彩る紅い息吹。

よるめいた静枝は後退り包丁を腹から抜き、そのまま畳の上に倒れた。

風もないのに、鏡台に掛かっていた布が落ちた。

眼を見開く静枝。

鏡に映った女の顔。

「嫌っ、嫌よ、こっちを見ないで静香、静香、しずかあああッ！」

鏡に映った顔は一つ。

己自身の顔にほかならない。

美花は眼を剥いたまま震えて動けずにいる。

狂い躍る静枝が肉切り包丁を持って美花に襲い掛かる。

美咲が微笑んだ。その口の端から溢れた紅い命。

同時に二人が倒れた　　美花の目の前で。

そう、美咲は美花を庇つたのだ。その腹は背に達するまでの傷を負っていた。

全身を紅く化粧した静枝も立つ気力も残されていなかった。

美咲は美花にもたれ掛かった。

そして、耳元で囁いた。

「どうせ死ぬのなら、美花に喰らって欲しい。この血肉は美花の物よ」

「お姉……さま」

眼を開いたまま美咲は事切れた。

「いやあああああつ！」

叫び声をあげたのは美花ではなかった。

静枝。

鏡を見ながら静枝は泣いていた。

「ごめんなさい……ごめんなさい」静枝”。でもこれでやっと……」

鏡に映る顔は一つ。

その顔は誰のものか？

呆然とする美花の手を大きな手が握った。

「すまない出るのが遅くなっちゃった」

沈痛な表情をした無精髭の男　　克哉は美花の手を引き、美咲の亡骸を背負って走り出した。

化けの皮が剥がれた幽鬼が絶叫する。

「逃がさぬぞ！」

叫んだ首は床に転がった。

傍らに立っていたのは斧を持った菊乃の姿。

「申しわけございません……さま」

菊乃は火のついた蠟燭を布団に向かって投げた。

遠く庭先から振り返った屋敷から煙が上がっていた。

やがて屋敷は紅蓮に包まれるだろう。

美花は地面に膝をついて泣きじゃくっていた。

「お姉さま……お姉さまが……」

「すまない、俺がもっと早く出てれば」

美咲の亡骸を背負う克哉は苦しげに言葉を吐いた。

そして、克哉は夜空の星を見つめた。

「親父が交わした約束、半分しか果たせなかった。本当にすまなかった、もっと早く迎えに来ればよかったんだ」

涙を流しながら美花は克哉を見つめた。言葉は出なかった。

克哉が語り出す。

「数年前、俺の親父はある女性と手紙でやり取りしてたんだ。

それであるとき、その女性から自分に双子が生まれたら、その子供を預かって欲しいと頼まれていたらしい。けど、まあその子供は結局うちに来ることはなかったんだ」

驚いた瞳をした美花。

「親父は数年前に死んだ。それで息子の俺がその後どうなったのかと思って、こうしてやって来たわけなんだが……」

結果は……。

克哉は懐などを手で探って潰れた煙草の箱を取り出した。
 「そっぴや切らしてゐるんだつた。煙草でも吸わねえとやってらんねえつてのにな……？」

少し驚いた克哉は自分の傍らに角の生えた少女が立っているのに気づいた。

るりあは無言で何かを克哉に押しつけた。克哉がそれを受け取ると、るりあは走って姿を消してしまつた。

煙草の箱。

克哉が受け取つたのは煙草の箱だつた。しかも、もう片手で握りつぶされているのと同じ銘柄だつたのだ。

「なんで……？」

疑問に思いながら克哉は箱の中を見た。

残されていた最後の一本。

克哉はそれを口にくわえて火と点けようとしたが、つかない。

「湿氣つてやがる」

それでもその煙草を捨てることなく、口に啜えてまま手を美花に伸ばした。

「行こう、お嬢ちゃん。の面倒は俺が見る。嫌なら別にいいんだが、とにかく俺の住んでる町まで行こう」

見知らぬ男にも等しい克哉。

美花は克哉の手を取つた。温かい手だつた。

いつしか止まっていた美花の涙。

崩れゆく箱庭の世界を背に、手を繋いだ二人は歩き出したのだつた。

第五之世界 異界の少女

それは運命の糸が辿り着いた先。

結ばれている限り、そこで必ず出逢うのだから。

彼の面かのは呼ばれて此処もに来た。

屋敷の中を案内し終わつた瑤子は、次に庭を案内することにした。

遠くに見えてきた鳥居を指差す瑤子。

「あそこに見える鳥居の先には祠があります」

「どんな祠ですの？」

と、慶子は尋ねた。

「すみません、鳥居にはあまり近づかないですし、祠にも入ったことがないので、具体的には答えられないんです」

「なら今日は一緒に祠に入つてみましょう。それがいいわ」

「そ、それは……なんだか怖いですし」

「大丈夫よ、一緒に入りましょう」

慶子は不安そうな瑤子の背中を強引に押した。

鳥居から続く細道の先で、祠が口を開けている。

背中を押され、瑤子は鳥居をくぐろうとしていた。

「駄目です、これ以上は……あれっ？」

「どうなさいましたの？」

慶子は背を押していた手を離した。

何かを見ている瑤子。

その何かとは？

「……糸」

つぶやいた瑤子。

慶子は瑤子の背で妖しく微笑んでいた。

「どこに糸なんてあるのですの？」

「えっ、見えませんか？ 眩しいくらいに輝いている糸があるじゃないですか？」

その糸に瑤子は手を伸ばした。

細道のずつとずつと先まで伸びている糸の先。

糸の先には何がある？

瑤子は瞳に色を宿さず糸を手繰り寄せた。

引き寄せようとすると、張り詰められる糸は、その先に何かがある証拠。

ぐいつと瑤子の躰が逆に引つ張られた。

向う側からも力が掛かっている。

糸の先で空間が歪んでいる。

その先で蠢く塊。

あの先にいるのはいったい何か？

慶子がつぶやく。

「まるで芥川龍之介の小説。糸が切れないように、今度こそしっかりと手繰り寄せてあげなさい」

糸の先に群がる亡者ども。

まるで地獄から極楽を目指す罪人たち。

その光景は芥川龍之介の描いた蜘蛛の糸。

糸の群がる者どもは、老人のような顔をした毛のない猿のような者ども。

かの小説では、カンダタは己だけが助かるうと、糸にぶら下がりが下から群がってきた者を落とそうとした。そして、糸は切れてしまうのだ。

しかし、ここにカンダタはいない。

先頭で糸を掴んでいるのは、角の生えた少女。

少女は他の者を蹴落とすこともせず、ただ黙々と糸にしがみついている。

不気味なものどもは、少女の服や腕や首、髪までも、掴めるところならばどこでも掴んだ。

必死なのだ。

こちら側にしようと必死なのだ。

そこまで必死にさせる理由は何か？

こちら側に来たいからか？

それともあちら側を出たいからか？

兎にも角にも、必死に藻掻いている。

髪の毛を引っ張られた少女の顎が上を向く。苦痛の表情をするが、声は出さない。

瑤子は糸を手繰り寄せ続ける。決して自ら糸の先に近づこうとはしない。境は鳥居。鳥居が隔てる境界線。

少女の腕が鳥居をくぐり、そこに掴まっていた枯れ木のような手が崩れ落ちるように離れた。

墜ちていく。

次々と不気味なものどもが墜ちていく。

少女の頭や肩が鳥居をくぐると、さらに墜ちた。ぼろぼろと剥がれ墜ちていくのだ。

あと少し、あと少しで少女の足が鳥居をくぐる。

不気味なものは執念深く少女の足首に爪を立てしがみつく。呻くような声が聞こえてきた。

「極楽……極楽……」

不気味なものが念仏でも唱えるように呻いている。

慶子は微笑んだ。

「こちら側も地獄ですよ」

少女は完全に鳥居をくぐり、最後に残っていた不気味なものもついに墜ちた。

もう糸はない。

歪んだ空間もなかった。

はっとして我に返る瑶子。

足下には今にも絶えてしまいそうな息づかいの少女。慌てて

瑶子は少女を抱きかかえた。

「だいじょうぶですか？」

「……………」

返事はなく、息も果てそうだが、少女の眼は業火を宿したように、瑶子を睨みつけていた。

慶子は瑶子の肩越しに少女を覗き込んだ。

「角がありますのね、この子。まるで人を喰らう鬼のよう」

「きゃっ」

急に少女は瑤子を押し飛ばし、髪の毛を振り乱しながら、駆け出してこの場から逃げてしまった。

素早い動きでもう少女は影も形も無い。

啞然とする瑤子。

慶子が声をかける。

「早く探さなくて宜しいのですの？」

「あつ、はい！ 案内の途中ですけど失礼します」

お辞儀をして瑤子は駆け出した。

残された慶子も瑤子が消えてしばらくしてから、ゆっくりと歩き出した。

「あたくしの手を煩わせるなんて、瑤子、あなたはなんのために此処にいるのかしら」

呟いた慶子はなぜか愉しそうな顔をしていた。

髑髏の丘。

地面に掘られた大きな穴は、いつしか骨で埋まり、なにかの拍子に頭蓋骨が頂上から転がり落ちるほど、骨が積み上がった。いた。

「ここにいたんですか、探しちゃいました」

後ろから声を掛けられて少女は振り返った。

立っていたのは瑤子。

「もう逃げないでくださいね。取って喰ったりなんてしませんから」

冗談なのか、瑤子にはこやかに笑って見せた。

少女は瑤子を睨んだまま動かない。警戒しているのは間違いない。

髑髏の丘。角生えた少女。詰め寄る瑤子。

角生えた少女は異様と言えるが、ここにあるモノたちはさらに異様だった。

静かに瑤子が近づいてくる。

「だいじょぶですよ、だいじょぶですよからねえ」

近づいてくる瑤子を前にして、少女は左右に目をやり確かめた。

地面を蹴り上げ、一気に駆け出した少女。

しかし、腕が掴まれた！

逃げようとした少女の腕は、瑤子によって強く握り締められていた。

「だいじょぶですから、ね。逃げないでくれますか？」

少女が己の姿が見えるほど、瑤子の瞳が近くにあった。

腕を掴まれ、こんな間近まで詰め寄られても、少女はなおも

逃げようとした。

激しく腕を振り解こうとする。何度も何度も振った。思いのほか瑤子の力は強く、まったく振り解けそうになかった。

このままでは逃げられないと知るや、少女は己の腕を掴む瑤子の手に噛み付いたのだ。

「痛っ」

顔をしかめて短く漏らした瑤子。それでも少女の腕を放さなかった。

「だいじょぶですよ。ほら、怒ったりしませんし、あなたに危害を加えたりしませんから、ね？」

手の甲から滲む鮮血。

傷を負いながらも瑤子にはっこりと笑っていた。

緊張の糸が極限まで張り詰める。

睨む少女。

微笑む瑤子。

表情こそ違えど、二人はせめぎ合いた。

しばらく二人は動かなかった。決して眼を離さず、その瞳の奥から相手の心を探るように。

そして、勝ったのは瑤子だった。

少女の全身から無駄な力が抜けるのがわかり、瑤子は腕を解いた。

「お名前は？」

「……………」

腕を解いても逃げることはなかったが、警戒は解けたわけではないらしい。少女は未だに睨みを利かせている。

「傷の手当てをしてあげます。だから一緒に行きましょう？」

瑤子の目の前にいる少女は躰中に傷を負っていた。それはあのものたちが付けた傷だ。この少女と共にこちら側へ来ようとしていた不気味なものども。彼らは肉を抉るほど強く少女にしがみついていたのだ。

少女からの返事はなく、動こうともしない。

「今朝届いたばかりの果物もありますよ？」

食べ物で釣ろうとする瑤子。

「それとも野菜にしますか？ 新鮮なお肉もありますよ」

少女の唇が微かに動く。

「……み……」

よく聞き取れない。

瑤子は少女の唇に耳を傾けた。

「もう一度お願いします」

「……み……ず」

「みず……お水ですか？」

尋ねる瑤子に少女は頷いて見せた。

嬉しい気分を現すように瑤子は満面の笑みを浮かべた。

「喉が渴いているんですね。井戸ならすぐそこです、一緒に行きましょう」

瑤子は少女の手を差し伸べた。

しかし、手を繋ぐことは無視された。

寂しそうな顔をしながら、瑤子は前を歩きはじめた。後ろからは少女が子鴨のようについてくる。

井戸はすぐに見えてきた。すると少女は瑤子を追い抜いて駆け出した。

「あつ」

小さく漏らしながら瑤子が手を出すが、少女は止まらず井戸まで駆けた。

井戸についた少女はすぐさま滑車を回して水を汲んだ。

地下深い水面から桶で運ばれてきた冷水を、被るようにして

少女は飲んだ。口の端から溢れ、全身に掛かるが気にしていな
いようだ。よっぽど喉が渴いていたのだろう。

喉を潤した少女は瑤子に顔を向けた。

「るりあ」

短く呟いた。

首を傾げる瑤子。

「るり……あ？」

少女は頷いた。その瞳は依然として鋭さを持っているが、恐
ろしいという感じはしない。瑤子に対する敵意はないが、まだ
常に周りを警戒しているようだった。

瑤子も頷いた。

「それがお名前ですか？」

「……………」

「ああつ、また黙らないでくださいよ。るりあちゃんではいい
ですよね？」

「……………」

「ええつと、あたしの名前は瑤子です。今からるりあちゃんと
あたしはお友達です。だから仲良くしましょう？」

少女は難しい顔をした。なにを考えているのだろうか？

しばらくして、少女は握った拳を瑤子に向け、小指だけを立
てた。その仕草と言えは。

同じように瑤子も小指を立てた拳を出して、少女の小指と自
らの小指を絡めた。

「指切りげんまん、うそをついたら閻魔えんま様に舌をぬかれる」

「やだやだ、舌を抜かれたら餓鬼道くらい辛い」

閻魔の裁きによつて下る六道りくどうのひとつ餓鬼道がきどう。罪人が常に飢えと渴きに苦しめられる場所。

「指切つた」

強引に瑤子は指を切つた。

少しるりあは怯えているようだ。

瑤子は笑顔を送つた。

「これで絶対にお友達です。仲良くしなげや駄目ですよ？」

「……うう」

るりあは弱つた声を漏らした。

このとき、るりあからはあの鋭さが消えていた。そこにいるのは幼い少女。警戒もいつの間にか解けたようだ。

るりあの手が瑤子によつて握られた。振り払うことはしなかつた。手を繋いで歩き出す二人。

「傷の手当てしましょうね」

「平気」

「え？ あつ本当だ。もう治つちやってますね、良かった」

滲んだ血の痕は残っていたが、傷痕は残っていない。人とは思えぬ治癒力だつた。

一目見ただけでは人と変わらぬが、すぐに角に気づくだろう。その角も動物のそれとは違い、瘤こぶと言われれば瘤とも言える。

ただ、二本はあまりにも綺麗に生えそろつている。

そして、るりあいったいどこからやつて来たのか？

謎多き少女だが、瑤子はあまり気にしていないようだ。

「なにか食べます？ それとも……そうだ、まずは静枝さまにご報告したほうがいいですよ。静枝さまはこの屋敷で一番偉い方です」

「釈迦よりもか？」

「お釈迦様はこのお屋敷には住んでおられませんから、お屋敷で一番は静枝さまです。あたしは屋敷でお仕事をさせてもらっていて、静枝さまの身の回りのお世話をさせていただいています」

歩きながらしゃべり、二人は勝手口から屋敷に入った。

台所の土間でポンプから水を汲み、履き物を履いていなかったるりあの素足を濯いだ。

草履を脱いだ瑠子はるりあと共に床に上がった。

冷たい廊下。

屋敷の中は静まり返っていた。

そこに響いた大きな声。

「だれか！ 早くだれか来て頂戴！」

幼い少女の声だ。

瑠子はるりあの手を引いて早足で歩いた。

開いた襖ふすまから廊下に顔を出しているのは、美咲だ。歳は五つだが、見た目は十とおほどに見える。

駆け寄ってきた瑠子と美咲は目が合った。だが、目はすぐるりあに引かれた。

「だれその子？」

不機嫌そうな声だ。

「るりあちゃんです。さっきお友達になりました。それでご用はなんですか？」

瑶子は尋ねた。

「虫ピンを切らしてしまったの。新しいのなかったかしら？」
「うゝん、探してみないとわかりません。でも今はるりあちゃんを静枝さまのところへ連れていかなきゃいけないので、あとでよろしいですか？」

「あとでもいいから急いで」

無愛想に言うのと、美咲は自室に入って襖を閉めてしまった。閉まった襖に瑶子は声を掛ける。

「菊乃さんにも伝えておきます。それでは失礼いたします」

軽く頭を下げた瑶子。

再びるりあは瑶子に連れられ歩き出した。

「お入りなさい」

静枝の声に導かれ、るりあは瑶子と共に部屋に足を踏み入れた。

床の間の中心に静枝はいた。車椅子に拘束され。

車椅子に座る静枝はベルトで肯定され、首から下の一切の自由を奪われていた。不自由な躰は安定感に掛け、車椅子から落ちないように躰を固定することはあるが、これは違う。ベルトの数は何本にも及び、肉に食い込むほどきつく固定されているのだ。

静枝の傍らには菊乃が立っていた。このような状況だ、誰か

傍についていなければ、静枝はなにをすることもできないだろう。

静枝はるりあを見るなり話を切り出した。

「慶子さんからすでに聞いているわ」

その瞳はるりあよりも鋭い。

負けじとるりあは静枝を睨み返すが、小さな躰は瑶子の後ろに隠れてしまっている。

意にも介さず静枝は話を続ける。

「自由になさい」

「はい？」

と、瑶子は首を傾げてしまった。

静枝は言葉を紡ぐ。

「その子はこの屋敷で自由にすればいいわ。ただし、面倒は瑶子が見てあげなさい」

「は、はい。ですが、それでは家事や静枝さまのお世話が至らなくなりそうで……」

「手が回らなくなつた分は菊乃が負担すればいいわ。常にその子の面倒を見ると言っているのではないのよ。必用最低限の世話をすればいいわ。貴女もあまり構われたくないでしょう？」

目を向けられたるりあは、さらに瑶子の後ろへと隠れた。

話はこれ以上なかった。静枝もるりあを深く追求することなかった。

菊乃に虫ピンの件を伝え終えた瑶子と共に、るりあは静枝を睨み続けながら部屋をあとにした。

廊下に出ると瑤子が声を掛けてきた。

「これからまた美咲さまのところに行きますけど、るりあちゃんはどうします？」

尋ねられたるりあは首を横に振った。

しかし、るりあは瑤子の手を握ったままだ。

「困りました」

瑤子がつぶやくと、背後から気配がした。

「あたくしが見ていてあげましょうか？」

るりあは素早く瑤子の背に隠れた。

現れたのは慶子だった。

「嫌われているのかしら？」

慶子は微笑んだ。

るりあが瑤子の顔を見上げた。

「よーこといっしょにいく」

「これから美咲さまのところに行きますよ？」

「いっしょにいく」

「だそです」

と瑤子は慶子に顔を向けた。

「その子がそう言うなら仕方ありませんわね。あたくしに出来ることがあったら、いつでも声をかけてくれて宜しいのですよ」

「ありがとうございます。では失礼します」

頭を下げて瑤子が歩き出すよりも早く、るりあが手を引いて歩き出した。

手を引かれ、少しつまずきそうになりながら瑠子は歩き出す。二人は廊下を進み、再び美咲の部屋の近くまでやって来た。そこで瑠子は足を止めた。

「美咲さまのお部屋のお隣の部屋が美花さまのお部屋です。今はもう使われていないんですけど、ずっとそのままにしてあるんですよ」

瑠子の話にりあからの相づちもなにもなかった。

再び少し歩き出し、隣の美咲の部屋までやって来た。

「美咲さま、失礼いたします」

瑠子が部屋の中に声をかけると、急に襖が開いた。

「遅いじゃない！」

いきなり美咲が凄じ剣幕で出てきた。

静枝のところに行くといくと伝えてあったし、美咲自身があとでもいいと言ったにもかかわらず、理不尽な怒りである。けれど、瑠子は反論せずにくさま頭を下げた。

「申しわけございません」

「虫ピンはちゃんと持ってきたのでしょうか？」

「それが、菊乃さんにも聞いたんですけど、もうないとのことなので、来月分の定期便で注文しておくそうです」

「それでは遅いのよ、今すぐ買い出しに行くように菊乃に言いなさい！」

瑠子の鼻先で襖が音を立てて閉められた。言いたいことだけ言つて、美咲は自室に閉じこもってしまった。

溜め息をついた瑠子をるりあを見つめた。

自分を見つめる視線に気づいた瑤子は笑顔をつくった。

「今から菊乃さんに会いに、静枝さまのところに行かなくては
いけなくなりました」

るりあは瑤子から手を離れた。行きたくないという意味表示
か？

瑤子は膝を曲げてるりあと同じ視線に立った。

「ひとりで遊ぶなら良い子しててくださいね。無闇に物を壊
さない、いたずらはしない、それから赤い札の貼つてある部屋
は……あつ！」

瑤子が話し終わる前にるりあは駆け出した。

特に追ってくる気配はなかったが、瑤子はるりあの背が見え
なくなるまで見つめていた。

廊下を走っていたるりあの足が止まった。そこは赤い札の貼
られている部屋の前。

るりあの視線は部屋の奥を見透しているようだった。

物音が聞こえた。部屋の奥からだ。風の悪戯だろうか 窓
が開いていればの話だが。

「どんな悪さした？」

るりあは言った。

誰に尋ねているのか？

るりあの顔は閉ざされた襖に向けられたまま。

強い衝撃を受けたように激しく揺れる襖。まるでそれは“何
か”が怒り狂っているようだ。

るりあはその場から駆け出した。

屋敷中が揺れる。

廊下をるりあが駆け抜け赤い札の部屋を通り過ぎようとする
と、屋敷が激しく揺れるのだ。

立ち止まったるりあが叫ぶ。

「うるさい！」

静まり返る屋敷。

るりあは再び駆け出した。屋敷に響くのはるりあの足音のみ。
屋敷はどこどころ色が違った。

色というのは視覚的な意味でもそうだが、建築の雰囲気も違
うようだった。

廊下の床板の色が変わる。それは増築の跡だった。

るりあがここまで来る間にも、いくつか色が変わっていた。

少しまた進むと、また床の色が変わった。

先に続いている長い廊下。

突き当たりまで走ったるりあ目の前には、木製の扉が現れ
た。ノブのある西洋様式だ。

るりあは急に振り返った。

「あたくしの部屋によっこそ」

現れた慶子を押し飛ばしてるりあは逃げた。

背後から突き刺さる視線。慶子の視線。るりあは振り返らず
走った。

また床の色が変わった。

長い廊下。

まっすぐと続く廊下の途中に部屋はない。

その先にあつたの頑丈そうな扉。木製だが、縁などは金属板や鉄がつかわれている。錠も金属製だ。

るりあは扉に耳を押し当てた。

常人では聞き逃してしまいそうな小さな物音。

枯れ葉が擦れ合うような音がした。

がさがさ。

扉の奥には何があるのか？

るりあは錠を持つていない。

錠を握つたるりあ。

そこに慶子がやつて来た。

「中が見たいのなら錠を壊さなくとも、あたくしが案内して差上げますのに」

今度は慶子を押し飛ばして逃げるようなことはなかった。る

りあは慶子を睨みながら、扉の前の道を空けた。

慶子はどこからか太く長い錠を取り出し、それを錠の鍵穴に

差し込んだ。

錠が外れるとるりあは重い扉を押した。

薄暗い室内。

天井近くの小さな格子窓から光が漏れている。

入ってきた扉が慶子によつて閉められた。

「ここにいるのは、みんなあの子ですよ」

蠢くモノたち。

部屋中に張り巡らされた白い糸。

いくつもの巨大な繭の中で何かが蠢いている。

繭に触れようとしたるりあの腕を慶子が掴んで止めた。

「駄目ですよ。この状態のあの子は、とてもデリケート……いえ、虚弱ですよ」

慶子は途中で言葉を言い直した。

静かにるりあ繭を見つめ続けている。

ときおり、繭の中で何かが動く。まるで母胎で眠っているようだ。

慶子はこの部屋の鍵をるりあに握らせた。

「差し上げますわ。これでこの部屋はあなたの自由。何をしても構わないけれど、この子たちに万が一のことがあったら、あの子がこの屋敷に帰ってこられなくなりますわ。それはそれで愉しげかもしれませんが」

「……………」

るりあは慶子を見つめたまま黙っている。

妖しく微笑んだ慶子はるりあに背を向けた。そして、そのまま無言で部屋を出て行ってしまった。

残されたるりあは部屋を見回し、この部屋をあとにすることにした。

部屋を出て重い扉を閉めると、錠で鍵をかける。

鍵を強く握り締めながら、再びるりあは屋敷の中を駆け出した。

廊下の向こうにいる瑤子と目が合った。

「探しちゃいました」

安心するような顔をする瑤子にるりあは飛び込んだ。

手を握る。

るりあの空いた手に鍵が握られていることに瑤子は気づいた。「その鍵はどうしたんですか？」

尋ねられたるりあは奪われると思ったのか、恐い顔をして鍵を持った手を遠くに伸ばした。

瑤子は笑った。

「取ったりしませんよ。その大切なものなんですネ。るりあちゃんの物なんですか？」

るりあは頷いた。

「そうですか、なら無くさないようにしましょうね。ほら、鍵にひもを通す穴が開いてますから、ひもを通して首からぶらさげることにはしましょう。それなら無くしませんよ？」

またるりあは頷いた。

さっそく瑤子はるりあの手を引いて、自らの部屋に案内した。部屋についてさっそく鍵にひもを通し、るりあの首から提げられた。このときに、裁縫道具を見た瑤子はあることに気づいた。

「まち針で代用できないでしょうか？」

独り言をつぶやいた。きつと虫ピンのことを言っているのだらう。

針刺しを手を持って瑤子はるりあに顔を向けた。

「美咲さまのところに行きますけど、いいですか？」

るりあは頷いた。

二人は再び美咲の部屋に向かった。

しばらく歩き、美咲の部屋まで来た瑠子は声を掛ける。

「美咲さま、失礼いたします」

少し無言で立ったままの瑠子。返事は返ってこなかった。そこで再び声を掛ける。

「美咲さま、いらつしやいますか？」

しかし、やはり返事はない。

「美咲さま？」

念のためもう一度。だが返事はなかった。

そこで瑠子は静かに部屋の襖を開けることにした。

「美咲さま、いらつしやいますかあ？」

部屋の中に顔を伸ばした瑠子。そのまま辺りを見回すが人影はない。どうやら美咲は部屋にいないらしい。

「いないみたいですわね」

つぶやいた瑠子の服をるりあが引つ張った。

「知ってる」

短く言つたるりあ。

「知ってる？」

瑠子は聞き返した。

るりあは小さく二度頷いた。

「美咲さまの居場所ですか？」

返事を返さずになるりあは瑠子の手を引いて駆け出した。

廊下を駆け、途中の部屋を素通りして、るりあは瑠子を屋敷の外に連れ出した。

もう空は夕暮れだ。

るりあは本当に美咲の居場所を知っているのだろうか？
どこかを探しているそぶりはない。るりあは迷わず進んでい
る。

やがて前方に鳥居が見えてきた。

そして、夕日を浴びる鳥居をくぐる少女の影。

瑶子たちを目をした美咲は不機嫌そうな顔をした。

「あなたたち、こんなところでなにをしているのかしら？」

軽く尋ねたように聞こえない。問い詰めるような声だ。

すぐさま瑶子が答える。

「美咲さまを探していたんです。これ、虫ピンの代わりになり

ませんか？」

差し出された針刺しを見た美咲。

「一応もらっていくわ」

「よかった」

安堵して瑶子は笑顔になった。

しかし、美咲はまだ不機嫌そうな顔だ。

「ねえ、瑶子はある中に入ったことがあるのかしら？」

美咲が祠を見ながら尋ねてきた。

「祠ですか？ なんだか恐くて近づくのもちよっと……。中は

どうなってるんですか？」

「“入れない”のならそれでいいわ。ただの穴よ、奥はただの

行き止まり」

「そうなんですかあ」

瑶子はそれで納得したようだ。

さらに美咲はるりあに視線を向けた。

「お前は入れるのかしら？」

「……………」

無言のままるりあは美咲は見つめているだけ。

瑶子が口を挟む。

「それがどうかしたんですか？」

美咲は冷ややかに視線を外した。

「あなたたちには関係のないことよ。それよりもこんなところで油を売っている暇はないでしょう、瑶子？」

夕暮れに向かつて美咲は顎をしゃくった。

はつとする瑶子。

「す、すみません。夕食の支度をしなきゃ！」

急に慌て出す瑶子は握っていたるりあの手を離れた。

「るりあちゃん、これからあたしは夕食の準備をしなきゃいけないんです。だからまたあとでね！」

忙しくなく早口で言つて瑶子は屋敷に向かつて駆け出した。

美咲も鼻を鳴らしてそっぽを向き、るりあを置いて行ってしまった。

残されたるりあは鳥居の先にある祠を見つめた。

「待つてくださいいよお！」

廊下を走る瑶子は息を切らせながらるりあを追っていた。

瑶子のことなど構わずに、るりあは前も見ず駆け回っていた。るりあが顔面から何かに飛び込んだ。

見上げると不機嫌そうな美咲の顔。

「前見て歩きなさいよ！」

瑶子もるりあも、その姿形は二人が出会ったときから変わっていない。

しかし、美咲はどうだ？

その容貌は色艶が出てきて、外見はだいたい一五に行くか行かないかだろうか。まだ少女も色濃く残っていて、妖しい色香を纏っている。

瑶子は美咲の上等な着物姿を見て感嘆した。

「美咲さま、本当にお似合いです。うっとりしちゃいます」

この日、はじめて袖を通した着物だ。晴れ姿と言ってもいいだろう。美咲がこんな姿をしているのには理由がある。

るりあの腕が急に掴まれた。

掴んだのは菊乃だ。

「瑶子さん、すっかり見張っていてくれなくては困ります。美花様に粗相があつてはなりません」

菊乃は瑶子にるりあを預けて玄関に向かつて歩き出す。

そのあとを美咲も付いていこうとした。だが、菊乃が振り返つて美咲の足を止めさせた。

「美咲様は静枝様にお部屋にいるようにと、聞いておりませんでしたか？」

「聞いたわ。お母様の言うことなんて聞く必用なんてないわ。私は一刻も早く美咲に会いたい、悪い？」

反抗的な態度が伺える。

菊乃は瑠子に目を移したが、すぐに美咲に視線を戻した。

「静枝様にご報告してまいります。それから美咲様を迎えに正門に向かいます」

早足で菊乃は姿を消した。

美咲は玄關に向かう。

それに付いていこうとしたるりあの腕を瑠子が引つ張った。

「駄目ですってば、今日はおとなしくしてくださいって頼んだじゃないですか」

「やだ」

「そんなこと言わないでくださいよ」

「やだ」

「うう」

困ってしまった瑠子。

るりあは瑠子に掴まれた腕を引つ張って行くこうとする。

しばらくの間、二人はその場を動かさず引つ張り合いをした。

ここで綱引きを続けているわけにもいかない。なぜならこの廊下を美咲が通るはずだからだ。なので瑠子は折れることにした。

「ちょっとだけですよ、影からこっそり見るだけですからね？」

譲歩した瑠子にるりあが向けた顔は、唇を尖らせた不服な態度。

眉を八の字にして瑠子はほとほと困ってしまった。

「お願いします。今日はご家族の久しぶりの再会なんですから、

邪魔をしちゃいけないんです。ご家族の対面が終わったら、それからりあちゃんも紹介してあげますから、ね？」

「……………」

「あとで柘榴をいっばいあげますから、ね？」

「……………わかった」

返事はしたが、まだ唇は尖ったままだ。

「まだここにいたのですか」

この場に戻ってきた菊乃に言われた。

瑶子は慌てた。

「大丈夫です、ちゃんとりあちゃんは大人しくできますからねっ、るりあちゃん？」

同意を求めて瑶子は顔を向けたが、るりあはつんと唇を尖らせている。

菊乃は静かな瞳で二人を見つめていた。

「言うことを聞かないのなら縄で縛ってください」

「そこまでしなくても」

弱々しく瑶子は言った。

隙を突いてるりあは瑶子の手を振り払い、菊乃に向かってあつかんべーをした。

そして、るりあは逃げた。

慌てる瑶子。

「ああっ！」

菊乃の冷たい視線が瑶子に突き刺さる。

「早く追ってください。私はもう行きます」

足早に菊乃は姿を消してしまった。

瑠子は頭を抱えて重たい溜め息を漏らした。

逃げ出したるりあだったが、結局は瑠子に掴まってしまった。けれど、縄に縛られることはなかった。そして、影から見るということもできそうだった。

屋敷の縁側から遠く正面門をるりあは見つめた。

横にいる瑠子も懸命に目を凝らしている。

「ここからじゃ、あんまり見えませんね」

「よく見える」

「るりあちゃん目はいいんですね。あたしは動体視力だったらいんですけど」

しばらく二人は正面門を見つめていたが、先になるりあが集中力を切らせてしまった。視線があちらこちらに泳ぎ回り、今にも躰が動きそうだった。だが、るりあの服はしっかりと瑠子によって握られている。

るりあに気を配りながらも、瑠子は集中力を切らさずにじつと正面門を見つめている。

やがて正面近くにいる美咲や菊乃に動きがあった。この位置からは垣根が邪魔して、屋敷の敷地外の状況を見ることはできないが、美咲たちの動きを見るに何かがやっ来て来たようだ。

「美花さまが帰っていらっしやっみたいですよ」

瑠子に声をかけられたるりあが急に駆け出した。

「あっ！」

急いで止めようとしたが間に合わない。るりあは虚しく伸ばされた瑤子の手の遙か先。

一直線にるりあは正面門を向かった。

向かってくるるりあにいち早く気づいた菊乃。

「やはりこうなりましたか」

予想をしていたようだ。

菊乃は素早くるりあを捕らえた。

美咲はるりあなどに目に入っていないかった。

山を切り開いた道を走ってくる軽自動車はスバル360だ。

ゆつくりと走ってきたスバル360は、正面門に入る手前で止まった。

運転席から顔を出した無精髭の克哉。

「どこに止めればいいですかねえ？」

すぐに菊乃が応じる。

「ここまでで結構でございます」

「そんなこと言わずに、お茶の一杯でも飲ませてくださいよ。

もうくたくたで、喉もからからで、美花ちゃんからもなんか言
つてやってよ……あっ！」

克哉の視線の先で美花は車を降りようとしていた。

逸る気持ち抑えられなかったのだろう。車を降りた美花は一
目散に美咲の前に行った。

「お姉さま、お久しぶりです」

「元氣そうね美花。あのころとなにも変わっていない、見慣
れた顔”だわ”」

双子の姉妹は瓜二つ。服が違わなければ、まったく見分けが付かないほどだ。

再会に浸る姉妹の横をスバル360がゆっくりと走る。菊乃が止める間もなかった。

門をくぐったスバル360は停車して、再び克哉が窓から顔を出した。

「適当に停めさせてもらいますんで」

断りを入れたが、強引には変わりない。

ハンドルを握って再び顔を前に向けた克哉が眼を丸くした。

「おおつ、なんだガキか!？」

フロントガラスにるりあがべったりと顔を付けていたのだ。

驚くのは当然だ。

また克哉が窓から顔を出した。

「どけどけ、どかないと轆ひいちまうぞ」

注意して暮るりあは退こうとしなかった。

仕方がなく菊乃がるりあを引っ張って捕まえた。そして、深

々と頭を下げた。

「申しわけございません。幼い子のしたことでございます。どうか許してあげてくださいませ」

と、顔を上げた菊乃は遠く縁側にいる瑤子に眼をやった。

見られた瑤子は度肝を抜かれ固まった。るりあを追いかけて

出るか出まいか戸惑っていたのだ。

「許すもなにも気にもしてませんよ。それじゃあ冷たいお茶でも用意しててください」

そう言い残して克哉は車を走らせて屋敷に向かつて行つてしまつた。

姉妹はなにやら話し込んでいたが、どうやら一段落したよう
で、美花は菊乃とるりあに顔を向けた。

「お久しぶりです菊乃さん。そちらにいる女の子は？」

「るりあ様でございます」

「るりあちゃんと言うのね」

美花に見つめられたるりあは急に駆け出した。

正面門から戻つてきたるりあは瑤子に抱きついた。

瑤子は少し困つた顔をした。

「ああ、ああ、素足のまま外に出て、そのまま上がつちや駄目
じゃないですか。すぐに台所で流しましょうね」

自分を抱きかかえて歩き出す瑤子をるりあは見つめた。

「あいつ冷たいお茶飲みたい言つてた」

「あいつつて美花さまのことですか？ 駄目ですよ、美花さま

のことあいつだなんて」

るりあは首を横に振つた。

「男言つてた」

「男の方ですか？ もしかして車を運転して来た方ですか？」

今度は首を縦に振つた。

台所に着き、足を流していると、勝手口から何者かが入つて
きた。

「お茶用意してくれました？ って、さっきの子じゃないの
か」

入ってきたのは克哉だった。

驚いた顔をした瑤子だったが、すぐに気を取り直して笑顔になった。

「こんにちは、運転手の方ですよね？」

「運転手つつたら運転手ですけど、職業は運転者じゃなくてルポライターなんで」

「ルポライター？」

「三流雑誌の記者ですよ。あと美花ちゃんとの関係は、美花ちゃんを預かっていた家の息子です」

「そうだったんですか！ 美咲さまがお世話になりました」

「いえいえ」

満更まんばらでもない様子で、克哉は無精髭を触りながら笑った。

克哉はなにかに気づいて顔を下に向けた。服をるりあに引っ張られていたのだ。

「どうしたお嬢ちゃん？」

「男、男」

「男に決まってるだろ。俺が女に見えたらそりゃ重傷だ」

瑤子はすぐにもるりあがなにを言いたいか察したようだ。

「るりあちゃんはきつと男の方が珍しいんですよ。あたしもですけど。この屋敷には男の方がいないので、男の方と言えば定期便で荷を運んで来てくださる方を遠くから見ると、るりあちゃんの場合は」

「男を知らないなんて可哀想だな。そりゃ、男が女を知らないのと同じくらい可哀想なことですよ」

克哉が笑った。

靴を脱いだ克哉が土間から床に上がった。

「おじやましますよ」と。さてと、美花ちゃんたちはどこかな」

「それなら屋敷に入ったらすぐに静枝さまのお部屋に向かわれたと思います」

瑤子が克哉の背に声を掛けた。

振り返った克哉は愛想よく笑った。

「どうも。ちょっと探して来ますんで、お茶用意してもらえます？ 冷たいやつ。あとで取りに来ますんで」

台所を出て行く克哉にるりあはついて行つた。

しばらく廊下を歩いていると、角を曲がって現れた三人が前を歩いて行くのが見えた。

克哉はすぐに声をかける。

「美花ちゃん！」

すぐに美花が振り返つた。

「克哉さん、どこに行つていたのですか？」

「車を停めてたんだよ。これからお母さんに会いに行くんだろ？ 俺も行くよ」

だが、その前に立ちはだかる菊乃。

「静枝様は美咲様と美花様だけをお呼びでございます。静枝様にご挨拶なさるのなら、ご家族での話が終わってからになさつてください」

そして、るりあに顔を向けて話を続けた。

「るりあ様も決して邪魔をなさらぬように」

すぐさまるりあは克哉の背に隠れた。

克哉はるりあを抱きかかえた。

「そういうことなら俺らは退散しますか。台所で茶でも飲んで待ってますよ」

るりあは駄々をこねるように足をじたばたさせたが、克哉は構わず抱きかかえながら歩き出した。

しばらく歩き、三人の姿を見えなくなったところで、克哉が悪ガキのような顔をして口を開いた。

「お前も気になるんだろ。俺も気になるよ、静枝さんとやらも早く見たいし、帰って来た娘にどんな話をするかもな」

「降ろせ男」

「降ろしてもいいが、秘密の場所に連れてってやんないぞ？」

「なんだそれ？」

「いつしよに来ればわかるさ」

克哉は屋敷の中を歩き出した。まるで道を知っているようだ。廊下を歩き、なにかを探るように克哉は辺りの壁を調べた。

「見取り図は頭に入ってるんだが、地図と実際の道は違うからなあ。あつた、あつたこれだ」

木目の壁が開く。一見してただの壁だが、実は隠し戸になっていたのだ。

「お前なんで知ってる？」

るりあは克哉を睨みつけた。

「恐い顔しなさんな。企業秘密ってことで勘弁な。お嬢ち

「やんと俺だけの二人だけの秘密だぞ、そういう秘密ってわたくするだろ？」

「……………」

「しないのか。まあいい、とにかくほかの奴らに見つかからないうちに、さつさと上がっちゃおう」

上へと続く階段。この屋敷に二階はない。そこにあるのは屋根裏だ。

埃だらけの屋根裏部屋。長らく使われていなかったらしく、積もった埃に足跡一つ無い。

克哉は唇の前で人差し指を立てた。

「静かにな。下にいる奴らに気づかれないように」

屋根裏を歩きながら克哉は古びた手帳を取り出した。そこに書かれた何かを頼りに、ここで何かを探しているようだ。

克哉の足が止まった。

静かに床に這いつくばり、床の埃を払った克哉は、なにかを指差した。

近くでしゃがみ込んだりあはそれを見た。小さな穴だ。天井に開いた小さな穴。

まず克哉がその穴を覗き込んだ。すぐに顔を上げて、指でその穴を覗き込むように仕草で示した。

「るりあは穴を覗き込んだ。見える。」

「屋敷の中だ。」

そこはちょうど静枝の部屋の真上だった。

驚いた顔をする美花。

平然としている美咲。

車椅子に拘束された静枝は沈痛な面持ちだった。

「しかし助かる方法はあるわ」

その方法を静枝が口にする前に、美咲が口を挟む。

「そんな方法があるなら、なぜ叔母様はこの世にいないの？」

「その方法のために妹の静香は死んだのよ」

かつて静枝も美咲と美花のように双子の姉妹だった。

しかし、生き残っているのは……。

「ひとりしか生き残れないのよ」

重く静枝は口にした。

美咲は衝撃を隠せない。

「どうしてですか！」

「わたくしの言うことをしかと聞きなさい。生き残る方法は、双子の片割れを殺し、その肝を喰らわねばならないからなのよ」

「よ」

「ッ!？」

静枝の話に美咲は絶句した。

まったく美咲は表情を崩さなかった。

静かに静枝は話を続ける。

「かつてわたくしも静香と殺し合いをすることになったわ。思いついたくもない記憶。そして生き残ったのはこのわたくし。思

急速な老いは実際に止まり、話は本当だったのだと実感した

わ」

「そんなことわたしにはできません！」

正座をしていた美花が急に立ち上がった。我慢ならなかったのだろう。そんな辛い運命、受け入れろというほうが無理だ。

静枝は頷いた。

「姉妹を殺し、喰らった母を軽蔑する？」

「軽蔑するわ」

と吐き捨てたのは美咲だった。そしてさらに続けた。

「自分が生き残りたいがためにそうしたなら」

「まさか美咲さんからそんな言葉を聞くとは思わなかったわ」

少し静枝は驚いたようだ。そして微笑んでいた。

「過去についてわたくしは何も弁解することはないわ」

口を閉ざす静枝に美花が身を乗り出した。

「お母様はそんなひとではありません。だってわたし覚えてます、叔母様との思い出を大切にしていることを」

美花がこの屋敷を出る以前のこと。瞳に映っていた母 静

枝との思い出。それは櫛で髪を梳いてくれる母の姿だった。髪

を梳きながら母はこんなことを言ったのだ。

この櫛は元々静香の物だったのよ。

遺品。

それを手元に残して真に理由はなにか？

静枝の心の内はわからない。

「事實はどうあれ、わたくしは喰らったのだから。しかし、それは大きな過ちだったわ。なぜなら……」

急に静枝の目つきが変わった。

狂気。

狂気。

狂気。

血走った狂った瞳。

静枝は乱杭歯を剥き出しにして激しく身を乗り出した。

「姉妹の血肉を喰らえば、その先に待つているにはさらなる地

獄よ！」

身を拘束しているベルトが軋む。

激しく身を揺さぶる静枝は車椅子ごと転倒した。

「キャハハハハハハ、殺し合いなさい！ さあ殺し合うの

よ！」

静枝に駆け寄ろうとした美花を美咲が手を出して制止させた。

「狂人の発作になんて構う必用ないわ。行きましょう」

「でも……」

「車椅子なら外で待つてる菊乃が直すわ」

美咲は無理矢理に美咲の腕を引っ張って部屋をあとにした。

るりあが覗き穴から目を離すと、横で聴診器を使って聞き耳を立てていた克哉が立ち上がった。

克哉は屋根裏部屋の奥にある椅子や机などを指差して移動を促した。

埃だらけの椅子に腰掛けた克哉。るりあは前でじっと立つて
いる。

屋根裏の小窓を開けた克哉は懐から煙草を出して口に啜えた。「ありや完全に狂ってるな。妹と殺し合いをした挙げ句、その肉を喰らったら嫌でも狂うか」

火を付けた煙草から煙が舞う。

るりあは嫌そうな顔をして煙を払う。

意地悪をして克哉は煙をるりあに吹きかけた。

るりあは逃げ出した。

屋根裏に響く足音。

克哉は慌てた。

「おい！」

あまり声は張れなかった。

それでもるりあは立ち止まってくれた。いや、克哉の声に反応したのではなく、別の声に反応したのだ。それは天井下から聞こえてくる声。

るりあは近くにあつた覗き穴を覗いた。

そこは美咲の部屋だった。

同じ顔を持った少女が二人、向かい合って座っている。

「お母さまの話、どこまで本当なのでしょう？」

この口調は美花だ。

「本当だとしたら美花は私を殺す？」

「そんなこと！」

「姿形は同じでも心の内では、私は違うことを思っているかもしれないわよ？」

「まさかつ！」

美花の瞳に映る美咲。その瞳に映る美花。まるで映し鏡。けれど、鏡は表面しか移さない。

怯える美花に美咲は妖しく微笑んだ。

そして！

伸びる織手。

か細い首を絞める少女の小さな手。

「お、お姉さま……みさき……う……」

美咲によつて首を絞められる美花。

しかし美花は抵抗しなかった。

すつと首を絞められていた手から力が抜けた。

「げほつ……うっ……」

咳き込みながら美花は呼吸をした。

まさか姉に殺され掛けようとは、そんな恐ろしいことが起こるうとは。

しかし、なぜ美咲は途中で手を緩めたのか？

美咲は眉をひそめて美花を正面から見つめた。

「どうして抵抗しないの？」

「わたしが美咲お姉さまに手を出すなんて、そんなこと絶対にできません」

「……………」

美咲は苦しげな表情で目を伏せ視線を逸らした。そして、喉から声を絞り出す。

「私に殺されていいの？」

しばらくの間が合った。

真剣な面持ちで美花は美咲から目を離さない。

「それが美咲お姉さまのためになるのなら」

「馬鹿ね、美咲は本当に馬鹿者よ。でも……私は美咲を心から愛しているわ」

「ごめんなさい」

「なぜ謝るの？」

「お姉さまが本当にわたしのことを殺そうとしたのだと、少しでも疑ってしまいました」

「謝るのは私のほうよ」

二人は沈黙した。

見つめ合い、言葉を交わす代わりに目を交わす。

だいぶ時間が流れ、美咲が話を切り出した。

「お母様と叔母様は殺し合いなんてしていないわ」

「姉妹を喰らわなければいけないというのは嘘なのですか？」

「いえ、その点についてはなんとも言わないわ。殺し合いはしなかつた　いえ、正確に言えば形だけの殺し合いをしたそう

よ。そして、最後はお母様が叔母様を喰らった。叔母様がそう仕向けたのよ、自分が殺されるように、そしてお母様が生き残るように」

「そんな話どこで……」

驚きながら囁いた美花は、あることに気づいた。

先ほどの出来事。なぜ美咲はあんな真似をしたのか。心から想う美花を手に掛けようとした理由。

「わたしを殺そうとしたのは……っ！」

「それはもう過ぎた事よ。ただ一つ約束して頂戴」

「なにをですか？」

「美咲は私のために命を落とさないで。私も美咲のために命を落としたりしないから」

「はい」

美花は深く頷いた。

そして、美咲は先ほどの問いに答える。

「あの話はお母様からの手紙で知ったのよ」

「手紙？ なぜ手紙で？」

「お母様がいつから狂ってしまったのか、あのような姿で拘束されるようになったのはいつか、わかる？」

「わたしたちが生まれたときには、お母さまは車椅子に縛られていました」

「でも私たちが生まれて間もない頃は、まだ今ほどは狂っていませんでしたわ。お母様は年々狂っているのよ、美咲が屋敷を出てからはさらに酷くなったわ」

いつから静枝は狂いはじめた？

克哉の言葉を借りるなら 妹と殺し合いをした挙げ句、その肉を喰らったら嫌でも狂う。

姉妹殺しのその日に狂ったのか？

美咲が口を開く。

「手紙は私たちがお母様のお腹にいた頃に書かれたものよ。まだそのときは狂っていなかったのでしょうね。でもお母様は自

分が狂うことを予測していたわ。手紙に書いてあったのよ、私たちが生まれてすぐに自分を拘束するように指示をしたと」

「それではわたしたちが原因なのですか!？」

「少なくとも私たちの出生が関わっていることは間違いでしょうね。そして、手紙には正常な振りする可能性もあるから、自分の言葉はすべて疑って掛かりなさいですって。でもその手紙だって本当か怪しいじゃない。だから私はすべてを疑うことにしたわ、それなら間違いないもの」

姉妹が生まれた時に、いったい静枝の身になにが起きたのか？

美咲の口ぶりから、その詳細については触れられていなかったようだ。

自分を見つめる美花に美咲はこう付け加えた。

「美咲以外は」

鏡には心がない。けれど、ひとには心ある。姿形だけを映すなら、鏡にもできること。

美花は不安が拭えていなかった。

「わたしたちはこれからどうしたら？」

「私たちの家系はずっと姉妹で殺し合いをしてきたそうよ。だけれも運命に諍あらがい逃れることができなかったのね。でも私は違う、絶対にそんな運命なんて受け入れるものですか。一〇になれば死ぬ？ それが本当かどうか、今までだれか試したことがあるのかしら？ なにが真実なのか、それは私にもまだわからないわ。けど流されるままに死ぬ気はないわ。美咲もよ、私と

生き続けるのよ。この先、何十年もずっとずっと一緒よ」

「わたし……生きたい。美咲お姉さまとずっといつしよに」

美花は美咲に抱きついた。

「大丈夫よ美花。お母様は抗ったけど負けてしまった。けれど手紙を残してくれたわ。書かれていたことが事実とは限らないけれど、もう一人に聞けば道が開けるかもしれないわ」

「もうひとり？」

美花は顔を上げ、潤んだ瞳を美咲に向けた。

「そうよ、お母様は運命に抗い、そのために多くのことを調べていたい。けれど一人では限界であつたのね。そこで呼ばれたのが慶子先生だつたのよ」

「慶子先生が？ だつて慶子先生はわたしたちの家庭教師として呼ばれたはずでは？」

「それは表向き。夕食のあと、慶子先生の部屋を尋ねて問い質してみるわ。美花も来るでしょう？」

「はい」

るりあが顔を上げると、克哉は階段に向かって歩き出していた。

こつちに来いと克哉が手で合図してきた。

るりあは克哉と共に屋根裏を降りた。

戻ってきた廊下に気配はない。

「あんまり姿を晦くますと不味いからな。まだ静枝さんにも挨拶してないし」

克哉はるりあの頭に手を置いて、軽くぼんぼんと叩いた。

「今見聞きしたことは俺とお前の秘密だぞ」

と、言いながら克哉は懐から出した柘榴をるりあに差し向けた。

るりあは奪うように柘榴を取った。

それを見た克哉は悪ガキのような笑みを浮かべた。

「受け取ったからには約束守れよ。なんとたって、それさっき台所でくすねたもんだからな。これで俺とお前は盗みの同罪ってわけだ」

何が気に掛かったのか、るりあは柘榴を克哉に返そうと差し出した。

だが克哉は受け取らなかった。

「だいじょぶだって、盗んだの俺だよ。お前はなにも悪くない、だから受け取っておけよ」

るりあは少し考え込んだようだが、結局受け取ることにしたようだ。

また克哉はるりあの頭を軽く叩いた。

「よしよし、いい兎だ。俺はこれから静枝さんにあいさつしてくるから、またな」

克哉は立ち去った。

るりあは逆方向に走り出す。

足音を立てながら廊下を走り、るりあは台所に戻ってきた。

台所では瑤子が夕食の準備を忙しなくしている。

「るりあちゃん、その格好どうしたんです？ 真っ黒ですよ」

瑠子に指摘されてもるりあは気にしていないようだが、その服は埃塗れになっていた。屋根裏にいたせいだろう。

辺りを見回して瑠子は首を傾げた。

「あの方はいつしよじゃないんですか？ お茶冷めちゃいますよ」

「冷たい飲みたい言ってた」

「そうでしたっけ？ ならいつか」

るりあは台所から駆け出した。

勝手口を飛び出して屋敷の外に出る。

鳥居が見えてきた。

この場所であるりあはこちら側に来た。

特に恐れることもなく、るりあは鳥居をくぐって細道を駆ける。

かつてこの場所で、るりあは美咲に問われたことがある。

それはいつたいなんだったか？

答えはすぐそこにある。

るりあは細道を通り祠に足を踏み入れたのだ。

薄暗く冷たい祠。

入り口から奥に行くにつれ、光が失われていく。

るりあは暗い道を進み、突き当たりの手前で止まった。暗い中でも見えているのだ。

この場所には祭壇があった。何が祭られているのか、何の為に祭られているのか、それはわからないが、ここには秘密がある。

石造りの祭壇をるりあは動かした。その下から現れた空間。るりあはその中に手を突っ込み、なにかを取り出すと懐にしまった。

そして、るりあは光に向かって駆け出したのだった。

陽はまだ東よりに昇っている。

克哉は開かれた正面門の前に立ち、なにかを調べているようだった。

「覚悟はしてだが、本当に出られないんだな」

叩く仕草をした克哉の手は、なにもない空間にまるでぶつかったようだ。ぶつかると言っても、硬いものではなく、柔らかく弾力性のものに当たった感じだ。

煙草の箱を出して克哉だったが、中身を見てすぐに握りつぶした。

「しまった、長居するならもっと持ってきてくりゃよかった……ん？」

視線に気づいて克哉は振り返った。

そして、少し視線を下に向ける。

立っていたのはるりあ。なにかを克哉に差し出している。

克哉は驚いた顔をしてそれを受け取って、まじまじと目と鼻の先で眺めた。

「同じ銘柄だ。どこで見つけた？」

それは克哉が握りつぶしたのと同じ銘柄の煙草の箱だった。

「あっち」

と、るりあは短く。

これだけではわからない。

「あつちまで案内してもらえると嬉しいんだが」

急になるりあが走り出した。

「おいおい！」

慌てて克哉も走り出す。

るりあが克哉を連れてきたのは、あの祠だった。

祠に足を踏み入れた克哉はライターの火を点けた。

「ずいぶん暗いな、ライターよりも蠟燭のほうが良さそうだ」

細いライターの火を頼りに奥へと進む。

銅鏡と香木が備えられている石造りの祭壇。

るりあは祭壇の下辺りを指差した。

「この下」

克哉は祭壇を力一杯押した。大の男でもかなり重たい作業だ。

一息漏らした克哉。

祭壇の下に現れた空間に火を向けた。

「護符だな。それにこれは……」

克哉が手にしたのは鞘に収まった短剣だった。

ふっと克哉は笑った。

「信じてなかったわけじゃないが……これはこのままにしてお
くか」

短剣を戻し、ほかの物も調べた。

額に入れたらセピア色の古ぼけた写真。

和服を着た一〇代後半とおぼしき女。

「えらいべっぴんだな。立派な角が生えてるのはあれだが」

写真の女には二本の角が生えていたのだ。

克哉は視線に気づいて振り返った。角の生えた少女が見ていた。

「べつに角が生えてるのが悪いって言うんじゃないぞ。角が生えてようが、べっぴんには変わりないからな」

額を収めると、今度は額にも入っていない写真を手を取った。振り袖を着た双子の姉妹が写っている。一目見ただけでは美咲と美花に見えるが、写真の裏には万年筆で『静枝』『静香』と書かれていた。

さらにもう一枚、二人の顔をがよく写っている写真があった。よくよく目を凝らすと、双子の片割れの目の下あたりに二つのほくろがある。ほくろがあるほうが、静枝か静枝か、それは今となつてはわからない。なぜなら現在の静枝はほくろの場所に酷い傷痕があるからだ。

克哉は写真を収めると、祭壇を動かして元に戻した。

「出るぞ、火がもつたない」

出口に向かって歩き出す克哉。るりあもついて歩いた。

暗い祠から出ると、外が眩しく感じられる。

そのまま玄関に向かって歩いてみると、誰かが玄関から出てきた。

美咲だろうか？

美花だろうか？

「探したわ」

恐ろしい顔をして少女をつぶやいた。
首を傾げる克哉。

「俺になんか用ですかい？」

少女は克哉を押し飛ばして、後ろにしたるりあに飛び掛かった。

陽を浴びて反射した凶器。

包丁がるりあに突き刺さろうとしていた！

慌てて克哉が凶器を持った少女の手首を押さえた。

玄関から聞こえる悲鳴。

「やめてお姉さま！」

だとしたら、るりあに襲い掛かったのは美咲だ。

しかしなぜ？

包丁の切っ先はるりあの胸の先で震えていた。

克哉は手首を握る手に力を込め、美咲に包丁を落とさせた。

すぐに美花が駆け寄ってきた。

「どうして！ どうしてお姉さま！」

「答えはわかっているでしょう美花！」

「だからと言って、その子の命を奪うことは」

「構わないわ！ 私たち以外なんて、どうなるうと知ったことではないもの！」

喚き散らす美咲は手首を掴まれながら暴れた。

るりあは逃げた。

渦巻く狂気から逃げ出した。

無我夢中で逃げた。行く当てなど考えていなかった。この閉

ざされた世界に逃げ場などあるのだろうか？

るりあは勝手口から屋敷の中に逃げ込んでいた。

そして、自然と足が運ばれていたのは、繭玉の世界。

いつか慶子から与えたらた鍵で、るりあはこの場所に逃げ込んだ。

扉の鍵は錠だ。ここには内鍵もなく、窓は天井近くにある嵌め殺しの格子窓。追いつめられれば逃げ場はない。

「助けて……よ……」

るりあは呟いた。

部屋中の繭玉が蠢く。

中でも片隅にあつた繭玉は、ほかの物よりも激しく蠢いていた。

嗚呼、繭が割れる。

内側から破られた繭玉から、か細く粘液にまみれた人の手が出てきた。

なんとということだ、それは人の形をしているが、人とは呼べない。

肉は爛れたように崩れ落ち、眼球が床に転がった。

ぐしゃり。

不気味な音と立ててそれは床に落ちた。

それは泥だ。

肉の色をした泥だ。

あまりに不完全なままこの世に出てきてしまったモノ。

その末路。

か細い呻き声が木霊した。

息絶えた。

そこに残ったのは吐瀉物としゃげつのような肉塊。

「可哀想に」

女の声がしてりあは振り返った。

こんなに間近にいたのに、声を聴くまで気配がしなかった。

そこに立っていたのは慶子だった。

「無理をさせるからですよ。ほかの子にはくれぐれも無理をさせないように」

この一部始終はりあのせいだというのか？

りあは残酷な悲しみを顔にした。

ここにはいられない。

逃げ出そうとした小さな背に声を投げかけられる。

「この世界に逃げ場なんてありませんことよ」

その言葉を無視してりあは部屋を飛び出した。

屋敷は広い、庭も広大だ。それでも外の世界に比べれば、な

んと狭い箱庭の世界なのだろうか。

どこへ逃げる？

どこに隠れる？

残された選択肢はどのくらいあるのだろう　この箱庭の世

界で。

りあが逃げ込んだ場所は屋根裏だった。

昨日、りあと克哉が足を踏み入れるまで、長らく使われていなかった屋根裏部屋。住人たちもこの存在を知っているの

かないのか。

この場所に逃げ込んだるりあだったが、すでに先客が待ち構えていた。

身を強ばらせたるりあ。視線の先にいたのは克哉だった。

「俺は敵じゃあない。無闇に動き回るとすぐに見つかっちゃうぞ」

その言葉、信じてよいものだろうか？

るりあがこの屋敷に来て、およそ二年。美咲に刺されそうになつたのは、今日がはじめてだ。

一寸先は闇。

二年間起こらなかつたことが、今日起きたのだ。

「捨てろ」

るりあは克哉を睨んで言った。

「なにをだ？」

心当たりがないような言い方で返した。

「短刀捨てろ」

「そんなもの持つてない」

無いと答えた克哉をるりあは射貫くように睨んだ。

溜め息を漏らした克哉は根負けした。

「わかつたよ捨ててるよ。でもな、これは短刀じゃなくて短剣だ。

些細に思えるが、俺にとつちや重要なことなんだ」

克哉は隠し持っていた短剣を鞘ごとベッドに放り投げた。

るりあはその場を動かない。克哉もその場を動かない。

先に痺れを切らせたのは克哉だ。

「敵じゃあないって言っても、はいそうですか、なんていうのはお人好しのすることだ。でも問題は証明する術がないってことなんだよ。とりあえず俺の言えることは、ずいぶん昔に死んだ野郎の遺言で、死んでもお前を守れって言われてるんだよ、しかもお前も死ぬなだよ。矛盾してるだる言ってることが。遺言は遺言なんだが、俺がお前を命張ってまで守ってやる義理はないってのは先に言っておくぞ。でもなるべく助ける」

語尾を強めて一気に言い切った。

るりあはまだ克哉を睨んで離さない。

構わず克哉は歩いた。

るりあは目で追ったが、それ以上の行動をすることはなかった。克哉がなにをするのか最後まで見守った。

椅子に腰掛けた克哉は、顎をベッドに向けてしゃくった。

「お前はそこに座れ、短剣もお前が持つてていいぞ」

言われたとおり、るりあは埃立つベッドに座った。だが、短剣は手にしなかった。

二人はなにも言わず時間が過ぎた。その間、克哉はるりあから目を離して、床を見たり天井を仰いだりしていた。

しばらくして、再び克哉はるりあに顔を向けた。

「まず、お前が狙われた理由からだな。美花ちゃんから聞いたんだが、姉妹の片方を喰らわずに助かる方法は、母親とお前を喰らえばいいと助言されたそうだ。美花ちゃんは当然それに反対だそうだ、普通はそれが当たり前だよな、外の常識なら。問題は美咲お嬢様のほうだ、あれはやるぞ、母親も殺すかもしれ

ん」

助言をしたのは誰だ？

るりあは黙って聞いていた。

口を挟まないるりあを確認して、克哉はさらに続ける。

「殺される前に美咲お嬢様をやるか？」

「……………」

「お前がうなずいても、それをやらせるわけにはいかない。遺言でな、美花ちゃんと美咲お嬢様も頼むって言われてるんだ。

最終的に選ばなきゃいけないとなったら、お前を優先しろとも言われてるんだが、俺は死人が出ることには反対だ。だからこの案は却下だ。別の方法でお前を助ける」

なぜるりあが優先させるのだろうか？

そして、遺言の主はいったい誰か？

少し克哉は黙り込んだ。また床を見たり天井を仰いだりしている。しばらくして、るりあを見て口を開けたが、その口を閉じて再び別の方向を見はじめた。

またしばらくして、克哉はるりあに顔を向けた。真剣な眼差した。

「俺はこの屋敷から出る方法を知っている」

さらに言葉を続ける。

「この屋敷の中にも何人かそれを知っている奴がいるはずだ。出られないんじゃない、出ないんだ。そして出さないんだ」

屋敷の敷地を覆う見えない壁というべき何か。かつてその壁を越えた者がいる　　美花だ。

克哉は前に美花を預かつていた家の息子だと説明した。

「美花ちゃんがあうちに来たのは彼女が三歳のときだ。美花ちゃんの話によれば、姉妹が三歳を迎えたあとの特定の日、その日に限って外に出ることができると説明されたらしい。実際は大嘘なんだがな。この屋敷の住人は、あることをすることによって外に出ることができる。例外も一人だけいるそうだが」

「あいつ姿たまに見えない」

「菊乃だろう？」

るりあは首を振った 横に。

驚いた顔をする克哉。

「違うのか？」

「もうひとり」

「それは知らなかった。もうひとりいるのか？」

「あいつ」

「あいつじゃあ、わからないだろう。それはだれなんだ？」

「女」

「この屋敷は女しかいないだろう」

静枝、美咲、美花、瑤子、菊乃、慶子。

克哉は小さく頷いた。だれかわかったのだろうか？

そして、今度は大きく頷いた。

「この話はあとにしよう。肝心な出る方法なんだが、それは……」

るりあが克哉に飛び掛かった。

「言うな！」

大の大人が押し倒された。天井に響く物音。

克哉は苦しげに顔を歪めた。掴まれた胸が肉ごと持っていかれそうだ。

「離せ、言わないから離せ！ これ以上やるとガキでも承知しないぞ！」

怒号が響く。

るりあは克哉を睨みつけながら飛び退いた。

肌着に滲む血。爪の痕だとすぐにわかる。克哉は傷を押さえた。

「お前、知ってるな？」

「……………」

「わかった、この方法はなしだ。そうなると、俺もどうやって外に出るか。さっきの話に戻していいか、もうひとりって誰なんだ？ そいつに話を聞けば外に出る方法がわかるかもしれない」

「せんせい」

「先生って呼ばれてるんだな？ やっぱりあの女先生か。意外というか、あの先生の情報はほとんどないからな、鍵を握ってるとは……たしか美花ちゃんと美咲お嬢様が話していたな」

運命を抗う術を調べていた静枝が一人では限界を感じ、そこで呼ばれたのが慶子だった。

克哉は手帳を広げてなにかを確認した。

「女先生の部屋はあっちだな。お前も来るか？」
るりあは首を横に振った。

離れにある慶子の部屋を克哉は覗いた。

西洋風の作りになっていている部屋で、眼鏡を掛けた慶子が本を読み耽っている。

克哉はるりあに耳打ちをする。

「お前は穴から覗いてる、俺一人で話を聞いてくる」

天井裏にあるのは覗き穴だけではなかった。天井板が外れ、部屋に侵入できるようになっていたのだ。

克哉はそこから慶子の部屋へと降りた。

慶子は息を呑んで目を丸くした。

「まあ、どこから入っていらしたの？」

「ちよつと緊急だったもんですみませんね」

克哉はわざとらしく頭を掻いた。

「急用ですの？」

「そうなんで直球でお伺いしますが、姉妹にるりあを喰えば助かると吹き込んだのはあなたでしょう？」

「あたくしはただ研究の成果を教えただけで、吹き込むという言葉は悪意を感じますわ」

「研究の成果とおっしゃいましたが、証拠や根拠はありますか？」

問い詰める克哉。

本を閉じた慶子は眼鏡を直した。

「あの子は鬼ですわ」

「るりあですか？」

「ほかにいます？」

「あの子はこの屋敷でもっとも鬼らしくないと思えますがね」

「おほほほ、おもしろいことをおっしゃいますのね」

慶子は破顔した。

そして、慶子は妖しい笑顔で克哉を眼鏡の奥から見つめた。

「あなたは鬼をどのようなモノとお考えですか？」

「禍わざわい、疫病、見えざる力、死んだ人間、靈魂がそうなら、生

き返った動物もすべて鬼ということになりますかね」

「あなたご職業はなんですか？」

「ただのルポライターですよ。名刺は切らせちまつてるんで勘弁を」

二人とも柔和な顔をしているが、眼の奥は少しも笑っていない。

慶子は話の続きをする。

「鬼を喰らうのはあくまで緊急処置に過ぎませんわ。鬼の妖力を得ることによって、呪いを騙すとも言つのでしょか」

「つまり、美花ちゃんたちが衰えていくのは、なにかが欠けているからだ？ それを補うために本来は姉妹を喰らわなければならぬ。しかし、今回はるりあでそれを代行しようとしていると？」

「それで足りなければ静枝さんを。もしかしたら、静枝さんを二人で分けるだけでも、平気かもしれせんわ。ただこればかりはやってみなくては、わからないのですの」

「仮説を実験で立証するわけですか。無駄死にもありえる

と？」

「一つの生命を生かしているのは、多くの死ですのよ。今朝の朝食には卵がありましたわね。姉妹二人の命を長らえさせるのに、一人か二人の死でいいのなら、安いと思えますわ」

食物連鎖と死の尊厳。

克哉は冷たい汗を拳で握った。

「あなたも信じてるんですか、美花ちゃんや美咲お嬢様が、このままなにもしなければ数年で死ぬって」

「さあ、それは立証されてませんもの。過去にそれをやったという記録は、残念ながらこの屋敷には残っておりませんでしたわ」

そして、慶子は妖しく笑って話を続ける。

「もしかしたら、急速な老いも七歳から八歳ごろになると、自然と回復するのもかもしれませんわ。姉妹で殺し合って、血肉を喰らう行為は無意味。時期的な偶然が重なり合っているとすることも考えられますわ」

「もしもそうなら、馬鹿げた迷信に振り回されていることになりますね」

「ええ、本当に哀れな一族ですわ」

「本当なら」

「ええ、本当なら」

ただただ残酷だ。すべてが無意味なら、なんと残酷なことをしてきたのか。取り返しのつかぬ過ちだ。

慶子はこの上なく妖しく微笑んでいた。

「しかし、双子の女兒が代々生まれ、老いが常人よりも早い怪異は事実。姉妹の肉を喰らわなくても平気という証拠もありませんのよ」

「克哉はだんだん苛立ちはじめていた。」

「女先生、呪いを解明しに来たんでしょう？　なんでもかんでも証拠や確証がないって言うんですか？」

「いくら理屈をこねても、実験をしなくては立証できませんの。そして、実験が行われた結果、一族の血脈が途絶えても、やり直しはできませんのよ？」

「その通りですよ、女先生。だからるりあの命も奪わせるわけにはいかないんですよ。たびたび女先生は屋敷の外に出られているそうですが、どうやって出てるか教えてくれませんかね？」

「あの子を外に連れ出すつもりですか？」

「話の流れからしてそうと思われるの当然。実際そうなのだから。」

「俺としたことが感情的になっていたようで、るりあの話から切り出しちまいましたけど、そうですよ、るりあを外に連れ出して逃がします」

「あたくしが協力すると思いですの？」

「それは難しいところですね。るりあを喰えと吹き込んだのはあなたですし」

「難しいとわかっていて聞きに来るなんて、図々しいのか、切羽詰まっていらいっしやるのかしら。あたくしの口から言えるの

は、そんな方法など存在していないということ」

言葉の真意は？

克哉は問い詰める。

「外に出る方法は、重要な秘密なのはわかってますよ。あなたがうそをつくのも当然です。が、俺は一つの方法を知ってるんですよ」

「ならその方法をお試しになられて」

「別の方法を探してるんです」

「別の方法なんてありませんわ」

急に慶子は克哉に背を向けた。

克哉は慶子に手を延ばす。

「まだ話は終わって！」

「この家の氏は鬼塚^{うじ}」

慶子は克哉を無視して勝手に話をはじめてしまった。

「鬼塚とはつまり、平たく言えば鬼の死体安置所ですの。代々この家が鬼を使役しているのはご存じかしら？」

「さあ、知りませんね」

「うふふ」

なぜか慶子は笑った。

そして、また唐突に別の話をはじめた。

「洋燈^{ランプ}の魔神をご存じ？」

「大抵の場合は、罪を犯した魔神がランプに閉じ込められ、次々と変わる所有者の願い事を規定数叶えないと、自由の身になれないってあれですかね」

「あなたが言う通り、死んだ人間が鬼なら、鬼塚に鬼は増える一方ですわね」

「さつきからあなたはなにが言いたいんですかい？」

「かえるべき場所があるのなら、そこにかえさないと鬼は増える一方と言っておりますの」

二人が話していると、部屋の扉が大きな音を立てた。扉を叩くというより、激しく殴っているようだった。

扉の向こうから声が聞こえる。

「大変です！ 静枝さまが静枝さまが！」

瑶子の声だ。

落ち着いた物腰で慶子は歩き扉を開けた。

部屋に飛び込んで来た瑶子が慶子にぶつかった。だが、謝罪の言葉はなかった。

「静枝さまが……ッ!？」

眼を剥いた瑶子が口から血の泡を吐いた。

ゆっくりと倒れた瑶子。

その背後には血のついた包丁を握る少女が立っていた。

慶子は平然と いや、この場合は平然ではなく冷酷といえるだろう。表情ひとつ崩さず狂気に染まる少女を見据えていた。

「どうかしましたの、美咲さん？」

「美花は？ るりあもないわ」

「いつしよに探しましょうか？ でもその前に、お口は綺麗に拭いたほうが良いですわ」

言われて少女は真っ赤な口を袖で拭った。

「さらに不味いことになったらしい」

克哉は屋根裏でるりあに耳打ちした。

屋根越しの足下には、まだ慶子と美咲がいる。二人が目を見合わせた隙を突いて克哉は屋根裏に戻ってきたのだ。

「ここも時間の問題だ。急いで逃げるぞ」

克哉はるりあを背負おうとしたが、それを拒否してるりあは先に進んだ。

屋根裏を降りて、美咲と出くわさないように、廊下を急ぐ。

「こつちだ」

と、克哉はるりあを誘導しながら走った。

二人は屋根裏を出た。

向かったのは屋根敷の脇に停めてあった克哉の車だ。

るりあは克哉によつて助手席に押し込まれた。

「いや！」

「俺だつて嫌だ。美花ちゃんを置いていくことになるんだからな。だが美花ちゃんに殺される心配はない。となるとお前をどうにしなければならんだろ！」

「……………」

大人しくなつたるりあを助手席に乗せ、スバル360は走り出した。

すぐに正面が見えてきた。固く閉ざされている。一度車から降りなくては先に進めない。

下車した克哉は門を開く。扉が中心から左右に口を開け、外

の世界が見えた。

再び車に戻った克哉はゆっくりとアクセルを踏んだ。

「うっ！」

呻いた克哉。横では同じくるりあも苦しそうにしていた。

胸を締め付けられる感覚。

見えない壁と座席に板挟みにされ、押しつぶされる。

「馬鹿な……外に出られる筈じゃないのか……」

車ごと後ろに引きずられていく。正確には、るりあと克哉を釣り針にして、車ごと動いているのだ。

まるで屋敷に手繰り寄せられている。

屋敷を囲う見えない壁など存在していなかった。

そこにあるのは引き戻す見えない力だ。

座席との隙から解放されたるりあは車から一目散に飛び出した。

克哉がるりあの背に手を延ばす。

「待て！」

るりあは待たなかった。

向かったのはあの鳥居だ。

すぐ後ろから克哉が追ってくる。

細道を進み祠の中へ。

闇に灯る明かり。祠の中には先客がいた。二人の影。

燭台を持つ菊乃と、壺を大事そうに抱える。

「美花ちゃん？」

と、克哉はつぶやいた。

少女は鋭い眼をして首を横に振った。

「美咲よ」

克哉はすぐにもるりあの手を引いて祠から出ようとした。

しかし、るりあはその場から動かない。

「逃げるぞ！」

再び克哉は手を引いて、出口に首を向けた。

遠い向こうになにか見える。

鳥居の先で小さな影がうついついてる。その手元でなにかが妖しく輝いている。よく見えないが、おそらく刃物。

驚いた克哉は祠の中と外にいる少女を見比べてしまった。

同じ。

外にいる少女がこちらを向きそうになり、克哉はるりあを押して祠の奥に飛び込んだ。

るりあの目の前に美咲。だが、美咲はるりあに手を出そうとしない。

克哉は眉をひそめながら美咲を見つめた。

「ほんとに美咲お嬢様か？」

額いたのはるりあ。

美咲は微笑んだ。

「お前を殺そうとした相手の顔は見分けられるようね」

やはり美咲はるりあを狙っていた。

菊乃が三人を奥へと促す。

「まだ出ない方が良さそうでございます。どうぞ中へお進みくださいませ」

四人は祭壇のある突き当たりまで進んだ。

美咲を警戒しているのは、るりよりも克哉だった。その物腰と雰囲気、向けられている視線に美咲も気づいたようだ。

「私を警戒しているの？ そんなに私は殺気めいたものを放っているかしら？」

「るりあを殺させはしないぞ」

「もうどうでもいいわ、そんなこと」

「ん!？」

克哉は驚いた。

るりあが逃げ出さなかった理由はこれかもしれない。襲われたときは違う、美咲の雰囲気を感じ取っていたのかもしれない。

なにが美咲に心境の変化を与えたのか？

外にいる美花が関係しているのかもしれない。

克哉は美咲と菊乃に視線をやった。

「静枝さんになにかあったそうだな？」

「死んだわ」

美咲が冷たく言い、さらに続ける。

「美花に殺されたの」

それを聞いた克哉は驚かずに、複雑で、悲しげな表情をした。
「まさかと思ったが……瑠子ちゃんを殺したのもそうすると……」

その言葉と重なるように、美咲もなにかをつぶやく。

「美花だったものに……」

だったもの？

ここで菊乃が口を挟む。

「見抜けなかったわたくしにも責任がございます」

「なあ、いったい美花ちゃんになにがあつたんだ？」

と、克哉は美咲と菊乃の顔を交互に見た。

美咲は祠の外へ向かいながら口を開く。

「美花の皮を被った化け物がいるということよ。いつからあれは美花ではなかったのかしら。この屋敷に美花が帰って来てから、それとも外の世界で、あるいは生まれた時にはすでに？」

克哉は美咲を追う。

「馬鹿な、俺の知ってる美花ちゃんは！」

「演技だったのかもしれないわ。双子の私を騙すくらいですもの！」

激しい怒り。美咲は怒号を祠に残し外に出た。

細道を進み鳥居をくぐると、美花が待っていた。手には血塗られた包丁。

美花が向けてきた凶器を受け流す美咲のこの上ない妖しい笑み。

「これが欲しいのでしょうか？」

そう言つて美咲は持つていた壺のふたを開け、逆さまにして中身を地面にぶちまけた。

ぼと、ぼとぼと……。

不気味な音を立てて落ちた肉。

薄紅色のそれはまだ動いていた。

幾つもの、幾つもの心臓。

壺の中に入っていたのは生きた心臓だった。

美花が限界まで眼を剥いた。

高く上げられた足が心臓をひと思いに踏みつぶそうとしている。

菊乃が叫ぶ。

「それは危険でございます美咲様！」

だが 遅かった。

耳を塞ぎたくなるほどの絶叫。

それとほぼ同時、屋敷が天から巨大な足で踏みつぶされたように潰れた。

屋敷の一室で崩れる天井を見上げながら横たわり、全身の殺傷痕から染み出した血で彩られた慶子は、艶笑を浮かべながら

呟く。

「嗚呼、魔法の洋燈ランペンが甘美に喘ぎながら壊れる」

屋敷の外では突風が吹き荒れた。

禍々しいほどの風。

かまいたちがるりあの頬に朱い一筋を奔らせた。

吹き荒れる風が呪詛めいた音を鳴らしている。

眼を剥いたまま仰向けになって息絶えている美花。

克哉、美咲、菊乃は地面に這いつくばって、なにかに身動きを封じられているようだった。

無理矢理に立ち上がるうとした菊乃の肩が外れた。一度立ち上がったが、片膝をついてしまった。全身が重く重力に引っ張

られているようだ。

それでも菊乃は歩こうとしていた。

「狙いはやはり……怨念がるりあ様に……」

菊乃の声は芯こそしつかりしているが掠れている。

どうにか顔だけを動かせた克哉は、その視線をるりあに向けた。

「どうなってやがる!？」

いったいなにが起きたのか？

あまりのも突然で、あまりにも理不尽な力。

るりあと菊乃の眼が合った。

ひねり潰すという言葉があるが、今起きたことは言葉一つ一つの意味のまま。

るりあによって菊乃の腕や脚や胴体がひねり引き千切られ、一瞬のうちに丸めて潰された。なんと無残なことを。だが血は一滴も出なかった。そして、ひねり潰されてもなお、菊乃は生きていた。

「……さま……やつらの……うを……」

途切れ途切れだった言葉は、完全に途切れた。菊乃はもう動かない。

恐ろしい眼をしたるりあは跳躍し、美咲に飛び掛かり心臓を手でひと突きにした。

美咲は絶命した　心臓を喰らわれながら。

血だらけの手と口で肉を貪る幼女の姿。

まさにそれは鬼だった。

克哉はるりあと眼が合った。

行っている業に反する哀しげな表情。るりあは泣いていた。

「嗚呼、記憶が蘇る……おらは……なんとということ……」

血に染まった両手を涙が落ちる。

今のが嘘だったように、るりあは眼を血走らせて憤怒の形相を浮かべた。

「お前の苦しみはわたしたちの慰めじゃ！」

その声はたしかにるりあの喉から発せられていた。だが、るりあには似てもぬつかない、野太く嘎れた声だった。

屋敷から猛烈な速さで巨大な影がやって来る。

巨大な蜘蛛だ。

ひとを喰らえるほどの大蜘蛛がるりあに向かって糸を吐いた。

「おのれ、化け物の分際で小癩な！」

またあの声でるりあが叫んだ。

その間に克哉は地面を這いながら落ちている心臓の山に向かっていった。

「こいつをどうにかすれば……あと少し」

あと少しで心臓に手が届く。

糸に藻掻きながらるりあが憤怒する。

「ぬううう……そうはさせるかあああっ！」

まるで時が止まったようだった。

風が静まり。

その場にいた全員が息を呑んで動きを止めた。

焦りを浮かべるりあは振り返った。

動き出した時の流れ。

鳥居の先で空間が渦巻いている。

それはるりあがこちら側に来たときに似ていた。いや、それよりも大きく巨大な渦だ。

風が泣き叫んだ。

吸いこまれる。

小さな屋敷の破片が空間の渦に吸いこまれた。

次にるりあが　　！

最後の瞬間、るりあは克哉と瞳を交わした。

「克哉！」

それは儚げな女の声。

克哉は地面に爪を立てた。下半身はすでに浮いてしまっている。持ちこたえることはできなかった。

渦は克哉をも呑み込んだ。

そして、大蜘蛛も、巨大な屋敷すらも。

なにもかも、なにもかも。

やがて静まり返った世界に残されたのは、広大な荒野にぼつりと佇む鳥居のみ。

第六之世界 黙して語らず

それは運命の糸が紡がれはじめた刻。^{とき}
自らの尾を飲み込んだ蛇に始まりも終わりもない。

今や出口はなく、この地に囚われて、何度目の朝焼けを迎え
ただろうか。

開いた小窓から屋根裏に差し込む光は、横たわる冷たい少女
の頬を照らした。

まるでその少女は屍体 否、ただの人形のようなだ。

男は力強く問うた。

「自分の名前がわかるか？」

少女は瞳を閉じたまま、ぴくりともしない。

「生きる、お前は生き物だ。目を開ける、お前は生きている」

さらに男は力強く言ったが反応はなかった。

突然、赤子の泣き声が屋根裏に響いた。

目を丸くした男は慌てて、ゆりかごで寝かされていた赤子に
駆け寄った。

赤子は二人。双子の姉妹だった。

「なんだ、どうしたどうした？ なんで泣いてるんだ？」

男は双子を交互に持ち上げながらあやす。

「漏らしてはないな……ただの夜泣きか？」

考えていると、ぴたりと赤子が泣き止み、男は首を傾げた。
心配がする。

双子の赤子、自分自身、そして第四の気配。強ばった真顔で男は振り返った。

男の瞳に歓喜と共に起き上がる少女が映った。

「や……つたぞ。まさか本当に……まだだ、重要なのはこれからだ」

急いで駆け寄った男は少女の手を力強く握った。

冷たい少女の手が男の温かい手で温められる。

「自分の名前がわかるか？ 思い出すんだ、重要なことだ。生きているお前には生きている名前が必要だ」

「……………」

「お前の名前には花の名が使われている。どうだ、思い出せないか？」

「……………」

「名前のはじめは『き』だ」

「……………」

少女の瞳には光が差しているが、とても弱い。

男は少女を抱きかかえ、顔と顔を間近で向き合わせた。

「生きている記憶が必要だ。なんでもいい思い出せ、頼むから生きてくれ」

懇願。

だが、虚しくも少女の瞳から色が消え、ふっと魂が抜けたように力が抜けた。

「菊乃！」

魂の雄叫び。

男は其の名を呼んだ。

少女の名は菊乃。

瞳を彩る色が輝きはじめた。

少女がつぶやく。

「……菊乃」

半信半疑で確認するように、少女は自分の名すら覚えていないようだった。だが、反応したと言うことは、記憶の琴線に触れたのだ。

記憶は神経が張り巡らされた糸ように構成されている。記憶から記憶へと伸びる糸の数、太さ、それらによって一つの記憶から、多くの記憶を呼び起こせるかもしれない。

「そうだ、お前の名前は菊乃だ。ほかになにか思い出さないか？」

「………」

少女は首を振り言葉が途切れる。男は急いで言葉を紡ぐ。

「思い出さなくても良いこともある。重要なのは今生きていることかもしれないな。俺の名前は克哉だ」

「……克哉……克哉様？」

「思い出したかっ!？」

「いいえ、けれどあなたのことを知っているような気がする」
なぜか克哉は気まずそうな顔をして、菊乃から視線を外した。そして、話題を変えるように、双子の姉妹に歩み寄る。

「娘たちのことは覚えているか？ 右にいるのが姉の美咲、もうひとりが妹の美花だ。俺の名前は忘れてもいい。二人の娘の

「名は心に刻んでおいて欲しい、いつか……」

言葉は切られた。

菊乃がじつと克哉を見つめている。なにか話したそうにして
いるのではなく、ただじつと見つめているだけ。

迫られたように克哉は口を開く。

「ほかに話すことは……そうだな、妻は死んだ。娘を生んで死
んだんだ……」

うつむいた克哉の表情は、悲しみではなく怒りに満ちていた。
顔を上げたときには、その表情は消えていた。

「いろいろと考えてみると、説明することも多いな。どれから
順を追って話せばいいのか、なにか聞きたいことはあるか？」

「……ありません」

「聞かれても困るか。まず話すことは、もっとも重要なことだ
が、無闇に屋根裏を出さないで欲しい。ここは屋根裏部屋なんだ
が、この屋敷でもっとも安全な場所なんだ。今は静まっていて、
ほかの場所もそれほど危険ではないと思うが、それでも無闇に
歩き回れば危険を招く」

「なにが危険なのですか？」

聞かれて克哉はすぐに答えなかった。

言葉に詰まったのではなく、なにやら考え込んでいるようだ。

「……鬼だ」

と、克哉は短く言い放った。

「鬼？」

少女は少し驚いたような声を出したが、表情は乏しい。

「鬼と一口で言ってもいろいろいる。死人しびとをすべて鬼という場合もある。この場合はそれだろうな。やつらは悪霊の類だ。死んでこの地に取り憑よいている 俺に殺されて」

やつらと呼ばれた者たちは、克哉によって殺された。

なぜ殺されなければならなかったのか？

なぜ悪霊になったのか？

そんなモノがこの屋敷に本当にいるのか？

克哉は真剣な顔をしていた。

「俺のこと、気が狂ふれていると思っただか？」

「いいえ」

「いや、俺はきつと気が狂れている。だが、やつらは本当に存在している。そして俺はやつらに呪われている。呪われているのは俺だけじゃない。やつらは末代まで呪う気であるだろうな。正確に何代先の子孫かはわからないが、だいぶ先の子孫もおそらく呪われていたんだろうと思う」

少しおかしな言い方がされた。菊乃がそこに触れることはなく、克哉の言葉は流された。

そして、菊乃が相づちを打つこともなく、克哉は話を続けることにした。

「まさか呪いの原因が俺だったとはな。けど、不思議だと思わないか？ 元を辿ればその呪いのせいで俺はここにやって来て、呪いを生み出すことになった。例えるならこうだな。自分が生まれる前の過去に遡さかのぼって、自分が自分の両親を殺すとする。そうすれば俺は生まれなくなるから、両親は死なずに済む。両親

が死ななければ自分が生まれて、過去に行つて両親を殺す。時間というのは不可逆であるはずだから、初まりと終わりがちゃんとなる。今の例えはありえないものの例えだが、もし本当に起きてしまったとしたら、初まりと終わりはどこへ行つてしまうのか？」

克哉と菊乃は顔を見合わせた。

しばらく見合せていた。

急に克哉は嘖き出して笑つた。

「すまない、変な話をしちまつたな。昔はこうじゃなかつたんだが、いつの間にか小難しく考える質たちになつたんだ。いろいろあつたせいだろうな」

「いろいろですか？」

珍しく合いの手が入つたことで、克哉はすぐに答える。

「いろいろとあつた。多くの謎や疑問、これから自分はどうするべきなのか。過去は未来に干渉できる……のか。未来もまた過去に干渉できるとしたら、それはもはや未来が過去を変えたのではなく、予定調和だつたのではないか。ああ、すまない、また変な話をしてしまった。この話は時期を見て少しずつしよう、今はそうだな、これからの生活について、俺と二人の娘たち、そして菊乃を入れた四人で、この屋敷で生きていく話をしよう」

克哉が屋根裏部屋の机に向かい雑記を書いていると、階段を何者かが上がってきた。

振り向いた克哉。そこには菊乃がいた。

「早すぎるな。買い出しに行く前になにかあったか？」

「庭先に女が紛れ込んでおりました」

「里からも遠いし、屈強な男でも恐れて近づかないような土地だ。そんな場所に女なんて、おかしい話だな。で、その女はどうした？」

「発見したときには気を失っていたので、庭にある木に縛り付けて置きました」

「困ったな。気を失ったまま、里に捨ててくるのが最良だが……」

克哉は椅子から立ち上がって、机の引き出しからなにかを出した。

「縛り付けた木まで案内してくれ」

屋根裏を降りて玄関に向かう。

廊下を走る物音が響いた。足音は二つだ。

克哉が振り返った。

「大事な用があるから、絶対について来ちゃ駄目だぞ。お父さんがいいって言うまで屋敷の中から出て来ても駄目だ。わかったね？」

言って聞かせたのは双子の姉妹だった。見た目で判断するなら、年の頃は四歳くらいだろうか。

「おそとであそぶのー」

駄々をこねたのは美花のほうだ。

困った顔をする克哉。

救いの手は美咲から伸ばされた。美咲は美花の着物の袖をつかんだ。

「おとうさまをこまらせてはだめよ。あっちであそびましょ」

双子だが、妹の美花よりも大人びている。加えて見た目よりも、口調が大人びている。

不満顔の美花が美咲によつて廊下を引きずられていく。それを見届けてから、克哉は改めて玄関を出た。

屋敷に出てすぐに二人は顔に面を被った。木彫りの恐ろしい鬼の面だ。

そして、庭の木に縛られているという女の元へ向かった。女はまだ気を失っているようだ。

克哉はその女の顔を見て息を呑んだ。女は若い娘だった。鬼の面をつけたまま菊乃が克哉に顔を向ける。

「どうかなさいましたか？」

「この子のことは知ってる。まさかここで出会うなんて思わなかった。素性の掴めない謎の使用人だったが、ここで会ったということは、少なくとも人ではないだろう」

「人にあらずなら、なにでしょうか？」

「さあ、人でないという確証も今得たばかりで、正体まではわからない。敵か味方もわからないが、少なくとも当分はこの屋敷で俺たちに仕えてくれると思う」

二人が話していると、気を失っていた娘の閉じたまぶたが微かに動いた。

「う……う……」

呻きながら娘がゆっくりと目を開ける。

目を開けた途端、視界に飛び込んだのは二匹の鬼の顔。

「きゃーっ！」

思わず娘は悲鳴をあげた。

座った状態で木に縛られている娘は、自由な足をばたつかせて砂埃を立てた。

「助けてください、どうか命だけは堪忍してください！」

怯える娘。

克哉は笑いながら面を外した。

「あははは、すまない。脅かして済まなかった、俺は鬼でもないでもない。お前を取って食う気もない」

そう言いながら克哉は娘の縄を解いてやった。

自由になった娘はまだ怯えているが、すぐに逃げようとするそぶりは見せなかった。じっと目を離さないように克哉と菊乃を見据えている。特に菊乃を警戒しているようだ。その理由は

。克哉が気づいた。

「菊乃、鬼の面を外してやってくれ、この子が警戒してる」

「はい」

鬼の面を外して素顔を晒した菊乃。表情には乏しいが、一見すればただの少女。

自分と同一年くらいの菊乃を前にして、娘は少し安心したようだ。

「なんなんですか、あなたたち？」

「それはこっちの台詞だ」

返したのは克哉。

滅多に人の寄りつかない場所にある屋敷に現れた娘。人が寄りつかない 克哉の言葉ではこの娘は人ではないが、それでもなぜここにいるのか疑問を抱かずにはいられない。

娘は困った顔をした。

「……あたし……あたしだれですか？」

普通ならしないような質問だ。そのような質問をするとしたら、考えられるのはこうだろう。

「記憶がないのか？」

と、克哉が尋ねると娘は頷いた。

「名前も思い出せません」

「そうか、ならお前の名前は仮に瑤子にしよう」

「いい名前ですね！ まるでそれが本当の名前のような気がします」

「記憶を失ってさぞ大変だろう。良かったら記憶を取り戻すまで、この屋敷にいといるといい。ただし、家の仕事などはしてもらわないと困るが」

「ありがとうございます！ あなたのような良い人に出逢えて良かったです！」

記憶を失っているというのに、落ち込むことなく明るい娘だ。菊乃が冷静な視線で瑤子を刺した。

「本当に記憶喪失でございますか？」

「本当ですよ、疑うなんて酷いですよ！」

記憶喪失が本当と嘘か、それを他人が判断するのは難しい。

菊乃に顔を向けられた克哉。

「疑っても仕方がない。人手が足らなくて困っていたところだ、ちようどいいじゃないか……ん？」

なにかに気づいて克哉は屋敷の影を見つめた。

「もう隠れても遅いぞ。困った娘たちだ……隠れてないでこっちに来なさい」

克哉に言われ、双子の姉妹がおどとしながら現れた。

「美咲がいこうって……」

涙目の美花。

「美花がそうしたがっていたからでしょう」

きつい口調の美咲。

双子でありながら性格に大きな違いがある。それは単純に姉と妹という役割のためか。その様子をじっと克哉は観察するように見ていたが、美花の瞳から涙が零れたところで口を挟むことにした。

「俺の言いつけを守らなかったのは二人とも悪い。今回は大事に至らなかったが、俺たちが生きていくためには、守らなくてはいけない決まりがある。と、言っても、実際に恐ろしい目に遭わないとお前たちもわからないだろう。よし、二人とも晩飯は抜きだ」

「そんなおとうさま！」

と、空かさず克哉に飛びついてきたのは美咲のほうだった。

「わるいことしたのだからしかたないでしょう美咲？」

姉をたしなめる妹の姿。興味深そうに克哉は二人を見つめて
いる。美咲は大変不満そうな顔を、言いつけをした克哉ではな
く美花に向けていた。

ぼさつと立っている瑤子に克哉が気づいた。

「家族を紹介しよう。俺は克哉、娘の美咲と美花、侍女の菊乃
の四人で暮らしている。彼女は瑤子だ、しばらく家で暮らすこ
とになった。仲良くするんだぞ二人とも」

「よろしくお願いします！」

頭を勢いよく深く下げた瑤子。美花は笑顔ですぐに瑤子に抱
きついてきたが、美咲は敵意のような視線を送りながら距離を
保っていた。

「二人の娘はずっとこの屋敷で育ったものだから、人が珍しい
んだ。たまに来てくれる行商人を遠くから眺める程度だから
な」

付け加えるように克哉が言った。

すっかり美花は瑤子に懐いたようだ。

克哉の微笑ましい横顔を菊乃が見つめていた。

「困ったことがある」

と、克哉が話を切り出した。相手は菊乃だ。

「どうなさいましたか？」

「屋敷の敷地から出られなくなった。菊乃はどうだ？」

「わたくしは問題なく」

「そうか……おそらく美咲と美花も出られないだろうな。昔もこの謎に直面したことがあるが、原因はわからなかった。今やつと糸口が掴めたな……おそらく瑤子が関わっているのだろう、彼女が来た時期と同じだ」

「瑤子に尋ねますか？」

「いや、本人に自覚がない可能性もある。記憶がないというのは本当だろうな。不便ではあるが問題はないと思う。菊乃と行商人がいなくなったら死活問題だが、何事もなければ未来まで安泰だ」

手製の煙草の火を克哉は机に押しつけて消した。

「話はほかにもある」

「なにでございますか？」

「そろそろ一部屋空けようと思う」

一部屋空けるとは？

このとき、無表情の菊乃の顔がよりいっそう固い物に感じられた。

「まだ早いのでは？」

「たしかに奴らの力が弱まるのを待ったほうが安全だ。しかしそれでは俺はとくに寿命が尽きて死んでいる。俺だつてすべての部屋を開放することは無理だ。だから菊乃の力が必要なんだ、未来を託せるのは菊乃だけなんだ」

「わたくしはなにをすれば？」

「部屋の開放と奴らを使役する手順を教える。口頭で伝えるだけでは不安だから、実際に俺が一部屋空けて見せる」

克哉は汗を掻いていた。冷や汗だ。それはこれから行う事は、そういうことなのだ。

突然、菊乃が瞳を見開く。

「聞こえました」

「なにが？」

「悲鳴です、すぐに向かわなければ！」

屋根裏部屋の階段を飛ぶように降りる。先を走る菊乃のあとを急いで克哉が追う。

階段を下りきって隠し扉を開いた瞬間、克哉が袖口で口を鼻を覆った。

「酷い異臭だ……生き物の臭いじゃない。まさか封印が破られたのかっ!？」

湿気が多く生暖かい。だが、背筋は凍るように冷たく感じる。克哉は辺りを見回した。

「どの部屋だ！」

「向こうから！」

叫びながら菊乃が指を差した廊下を双子の姉妹が走ってくる。蒼白の顔。なにかしらの恐怖に追われているのは間違いない。

すぐに克哉が娘たちに駆け寄ろうとしたが、新たな気配を感じて足を止め振り返った。

「どうしたんですか、怖い顔して？」

瑤子だった。

「娘たちをたのむ、すぐに屋敷の外に連れ出すんだ！」

「え？」

なにか起きたのか理解できない瑤子は嘔然とした。

次の瞬間、瑤子の首に赤い筋が横に走った。
ずるり。

「きゃーっ！」

叫び声をあげた美花と硬直した美咲を、克哉はすぐさま隠すように抱きしめた。

見せてはいけない 床に転がったモノを。

血の川が廊下を流れる。

「菊乃っ、二人を頼む！」

瑤子に任せたのは菊乃と二人がかりで奴らを対処つもりだったからだ。だが、もう一人で立ち向かうしかない。娘たち、菊乃がいなければ、未来がない。

過去は不変か？

未来は不変か？

克哉は横たる瑤子に目を配った。それが答えか？

「未来が変わるのなら、それは一種の希望だが……現状を打開しなければ絶望だ。死んでいいのは俺なんだ」

生き延びてくれ。

しかし、美花が菊乃の腕を振り解いて克哉に駆け寄ってきてしまった。

「おとうさま！」

「来るな、菊乃といっしょに逃げろ！」

気がつけば美咲も傍にして、克哉の着物をつかんでいた。

「私が美花をそそのかして……ごめんなさい、おふだをはがし

たせいで……」

「いいから逃げろ、菊乃ふた……っ」

言葉に詰まった克哉。

そこには首から下だけが落ちていた。頭部が消えてしまっている。血はまったく出ていないようだ。

克哉は廊下に膝をついて、二人の娘たちと視線を合わせた。

「いいか、俺が合図したら屋敷の外まで逃げろんだ。お父さんの言いつけは絶対だ、なにがあっても守るんだ。なにがあっても絶対に立ち止まらず逃げろ、絶対だ」

二人の娘は無言で頷いた。

「逃げろ！」

克哉は叫びながら短剣を抜き、黒い影に飛び掛かった。

「きゃっ」

短い悲鳴が聞こえた。

思わず克哉は振り返った。血溜まりに足を取られて全身真っ赤に染まった美花の姿。助けに行きたいが行けない。

美花の真つ赤な手を美咲が力強く掴んだ。

「逃げるのよ、なにがあっても絶対に立ち止まっては駄目！」

二人の娘たちが遠く離れていくのを見て、克哉はふと笑った。「それでいい。さて、牢獄の中で元気にしてたか？ その様子だと元気が有り余っているようだ、俺を殺したくて殺したくて仕方がないんだらう？」

目と鼻の先に剥かれた眼があった。

克哉を睨んでいる。怨んでいる。嫉んでいる。

目の前の眼が血走ってどんだん赤くなっていく。

生暖かい息が克哉の顔にかかった。

「ついに実体化しやがったか」

短剣を握る克哉の手首は握られ止められていた。もう片手は相手の腕を押さえつけている。

相手とは、克哉が言っていた奴らのことか？

目の前にいるモノが奴らだとしたら、なんとおぞましい悪鬼なのか。

土気色をした人形ひとがたのそれは、毛のない猿のようだが、体は猿よりも大きい。浮き出た肋骨、節々の骨が浮き上がっているほど痩せこけている。顔は直視しないほうがいい。大きく裂けた口から覗く牙や、飛び出そうなほど剥かれている赤い眼など問題ではない。

造形ではない。狂気を鋭く放っているのだ。直視すれば気が狂う。

みしみしをなにかが軋む音を立てた。

苦痛に顔を歪める克哉。

握られた手首の骨がじわじわと碎かれていく。

短剣が手から滑り落ちた。

武器を失った克哉が大きく投げられた。大の男が投げられて宙を飛ぶなど、どれほどの怪力か。

「うっ」

床に叩きつけられた克哉に悪鬼が飛び乗った。

鋭い牙が剥かれた。

すぐさま克哉が首を逸らした。

「ぐくぐくぐく……」

齒を食いしばる克哉。悪鬼の齒も食いしばられていた。克哉の肩の肉に噛み付きながら。

首から口を離れた悪鬼は血の滴る牙を再び剥いた。首を噛み切られれば絶命する。

克哉は悪鬼の頭を掴んで押し戻そうとしたが、片腕に力が入らない。肩をやられて痛みに耐えるだけで必死だ。さらに最悪なことに、悪鬼には両腕が残っている。

長く鋭い爪は研ぎ澄まされた包丁のようによく切れる。その爪で落とされたのが、克哉の横に転がっている瑤子の胴体だ。蠢いている。

胴体の中、皮膚の下でなにかが蠢いているのを克哉は目撃した。

息を呑む克哉。

瑤子の体が内側から破かれ、毛の生えた長い脚が飛び出してきた。ひとの脚ではない。それは蜘蛛の脚だった。

一種の脱皮のようだ。その胴よりも遙かに大きい大蜘蛛が這い出てくる。

「こ、これが正体か……」

不気味に光る八つの眼に映る己を見ながら克哉は呟いた。

敵か味方か、大蜘蛛が牙を剥いて襲い掛かったのは悪鬼だった。

悪鬼も大蜘蛛を敵と瞬時に判断して、克哉を解放して飛び掛

かる。

粘糸ねんしが悪鬼の体を簀巻きにする。大蜘蛛が嘖き出した糸だ。

大蜘蛛は動きを封じた悪鬼を頭からかじり付いた。

硬い物が砕ける音と柔らかい咀嚼音。

頭を食われても悪鬼は足をばたつかせ、死ぬことはなかった。

初めから死んでいるのだから、死ぬことはないのだ。

克哉は辺りを見回した。目に入ったのは御札で封じられた部

屋の戸だ。

「大蜘蛛よ、言葉がわかるなら従え！ その戸を俺が開けたらすぐにそいつを押し込める。本当にすぐだぞ、一刹那も余裕はないからな！」

すぐさま克哉は封じられた戸に駆け寄り、御札を剥がすと勢

いよく戸を開けた。

逆風だ。

部屋から強い風が吹いてくる。

大蜘蛛が前脚を器用に使って簀巻きの悪鬼を部屋の中に放り

投げた。

目の前を悪鬼が通り過ぎるとほぼ同時に克哉は戸を閉める。

がっ！

なにかが戸に引っかかった。

鷲のような鋭い爪を生やした瘦せこけたひとのような手。

「別の奴が邪魔しやがって！」

元から部屋にいた悪鬼が外に出ようとしてきたのだ。

刃が煌めいた。

次の瞬間、戸が閉められ、すぐに克哉は御札を張り直した。そして、床に落ちた悪鬼の手首を見てから、それを切り落とした者に眼を向けた。

「大丈夫か菊乃？」

「克哉様たちをお守りするのがわたくしの役目なのに、無くした頭部を探すのに翻弄されて、なにも……」

「落ち込むことはない。最後の決め手は菊乃だ。もしも奴らが二人も出てきたら……考えただけで恐ろしい。体を直すのは少し待つてくれないか、屋根裏で待つていてくれ、先に娘たちを探してくる」

「克哉様の手当も早くしなければ、さらに酷くなります」

「俺は平気だ、少し肩を噛まれただけだ」

克哉は怪我の手当。菊乃は怪我を手当するのではなく、直すのだ。

そこに立っていた菊乃の姿は異様だった。自らの頭部をわきに抱えて会話をしているのだ。菊乃もひとではなかった。

そして、そこに佇んでいるモノも。

「そこにいる大蜘蛛は？」

菊乃が尋ねた。

「瑤子だ。見てわかるとおり、俺たちに敵意はないようだし、危害を加えるつもりもないらしい。意思疎通ができるかわからないが、どこかに隠れるように言っておいてくれ。俺は娘たちが心配だ」

急いで駆けていく克哉の後ろ姿を見つめる菊乃。

「大蜘蛛と二人きりにされても困ります」

ベッドに横たわる克哉の姿。

まるで老衰。だが、顔はよく見ると若い。痩せこけた頬、目の下には隈、乾いた唇は割れてしまっている。

ベッドの周りには囲むように、双子の娘たち、瑤子、菊乃が寄り添っていた。

克哉が嚙れた声を発する。

「菊乃だけ残って、三人は席を外してくれないか……ゲフツ」
少ししゃべっただけ、よからぬ咳が出る。

後ろ髪を引かれる思いの娘たちが、瑤子に連れられて屋根裏部屋を去っていく。

残された菊乃は克哉を見つめながら、無機質でありながら、悲しげな表情を浮かべているようだった。

「克哉様……わたくしも涙を流せばよかったのに」

「その逆で菊乃に泣かれなくてよかった。全員に泣かれたら、死ぬ方も後味が悪いからな」

「死ぬなんてとんでもありません！」

「いや、俺は死ぬ。どうせ遅かれ早かれひとは死ぬんだ……すまないと思ってる」

「なにをでしようか？」

「菊乃だけを残して逝くことを……俺だけじゃない。これから先も、俺の子孫たちは菊乃を残して逝くことになるだろう。多くのものを背負わせてしまって、すまないと思ってる」

衰弱した顔は沈痛な表情を浮かべることで、より深い影を落としてさらに死人に近づけた。

菊乃は枯れた克哉の手を優しく握った。

「わたくしは克哉様のお側にお遣いできて幸せでした」

「その好意につけ込んだ俺は本当に罪深い。記憶はいつから戻っていた？」

「……………」

押し黙った菊乃。

「隠さなくていい、生まれ変わる前の記憶はすでにあるんだろっ？」

「記憶は少しずつ取り戻してました。完全に思い出したのは、克哉様がこうなってしまった原因をつくったあのとき。克哉様と瑤子が鬼と争っているとき、わたくしは首を無くして動揺しておりました。克哉様の元に駆けつけるのが遅れたのも、それが原因でございます。わたくしがもつとしっかりとしていれば、克哉様が傷を負い、こんな結果には……………」

「ならなかったとも限らない。それはわからないことだ、自分を責めるな」

「……………」

責めるなど言われても、無言の菊乃はうつむいたままだ。

涙は流せない。

しかし、菊乃のまぶたは涙を流すように震えていた。

「底知れない恐怖でわたくしは動けなかったのです。鬼に首を落とされた瞬間、あのときのことが……………」

「それは思い出さなくてもいいことだ。それだけは思い出して欲しくなかった」

「新しい奉公先のご主人様に手籠めにされた挙げ句、ほかの男たちにも……ああ、鮮明に覚えています。ついに気が狂れたわたくしは男のそれを噛みきつてやったのです。そして仲間の男が刀を抜きました」

「それ以上は話さなくていい」

「……………」

菊乃は震えながら押し黙った。

再び菊乃は克哉の手を握り直した。

「わたくしを生き返らせてくれたことを感謝しております。克哉様のこともわたくしが」

「それは無理だ」

「無理などとおっしゃらないで！」

「それができればすでに頼んでいるよ。だが無理なんだ。菊乃のを蘇らせたのは、本物の鬼の技術と道具だ。反魂はんこんに必要な道具や義体は、菊乃を蘇らせるのにもう全部使い切ってしまった」

「本物の鬼とは？ わたくしがまた死ねば、克哉様にこの躰を渡せるのではないですか？」

「菊乃が死んだら、だれが俺を蘇らせる？ 娘たちや瑤子では絶対に無理だろう。本物の鬼とはなにか、妻との出逢いの話はまだ聞かせてなかったな。妻は真正正銘の本物の鬼だった。名は……るりあと言っ」

克哉は自らの精気を燃やすように、瞳に熱を込めながら語りはじめた。

「未来の話は何度も聞かせたと思う。だがここでいうるりあはこの時代で出逢った鬼だ。鬼と云えば、凶暴で残虐な印象があるが、人間のほうがよっぽど鬼だ」

克哉の顔に浮かんでいたのは怒りだ。

ふと、柔和な顔に戻り、克哉は菊乃に手に漢字を書いた。

「瑠璃亜と書く。名前も美しかったが、その容姿は絶世の美女だった。だが、俺が瑠璃亜を初めて見たときは、見るに堪えない無残な姿だった」

また克哉の顔は怒りに染まっていた。

「人間の仕業だ。欲に駆られた人間どもが瑠璃亜に酷い仕打ちを繰り返していたんだ。相手が鬼だからというわけじゃない。もつとほかに理由があつたんだ。順を追って話していこう」

怒りを静めるように克哉は呼吸を整え、再び口を開きはじめた。

「この地には元々鬼が棲んでいた。本物の鬼たちだ。彼らはこの時代の人間たちが及ばない高度な技術と、人間を鬼に変えるほどの財宝を持っていた。

あるとき、その噂を嗅ぎつけた男たちが鬼の財宝を奪おうと考えた。男たちはなにも知らない若い娘に毒入りの酒を持たせ、鬼の里に放り込んだんだ。鬼たちは高度な技術力を持つてはいるが、欲望には忠実で酒や若い人間の娘が好きだったらしい。

娘がどうなったのかわからないが、想像はつく。

そして、遅効性の毒だったため、気づいたときにはもう遅い。毒入りの酒を飲んだ鬼たちは次々と死んでいった。中には男たちに命乞いをした鬼もいたそうだ。そんな鬼は男たちの中に術に長けている者がいて、そいつに魂を囚われて使役されることになった。この屋敷もそんな鬼につくらせたものらしい」

ここまででは、克哉も瑠璃亜も登場していない。

「瑠璃亜は仲間の鬼たちが殺されたとき、里にいなかったらしい。帰ってきたところを支配者になっていた男たちに捕らえられた。そのころ、瑠璃亜はまだ幼い少女だった。

はじめは男たちは瑠璃亜を殺そうと考えたらしい。だがすぐにその考えは変わった。怯えた瑠璃亜の流した涙が、世にも美しい宝石だったからだ。

それから、瑠璃亜はありとあらゆる拷問、辱めで枯れても枯れても涙を流すように強要された。男たちは下卑た笑いを浮かべながら、事細かく俺に話してくれたよ。はつきり言って吐き気がした。それが人間のすることかと思った。俺がこの時代に飛ばされてたときも、それは行われていたが、俺はその場には立ち会わせてもらえなかったし、俺にその気もなかった。ああ、少し話が飛んだな。

俺は未来からこの時代のこの場所に飛ばされてきた。はじめはなにがなんだかわからなかった。ここが過去で、しかも未来と同じ土地と屋敷だと気づいたのはしばらくしてからだ。

まず俺は男たちに捕まった。男たちは俺を殺す気でいた、当

然だ。恥ずかしい話だが、顔がぐしゃぐしゃになるくらい泣きじゃくって命乞いをしたんだ。奴らは笑つてたよ。それでどうにか下僕として、奴らの元に置いてもらえようになつた。瑠璃亜の世話も俺がすることになつた。大事な金づるだが俺に任せたのは、生かさず殺さず、世話をするのがずっと面倒だつたんだらうな。

それから俺と瑠璃亜は……その辺りは割愛させてくれ、気恥ずかしい話だ」

菊乃の視線が少し鋭かつた。

はつとして克哉は気づいたようだ。

「……すまない」

「なぜ謝るのですか？」

「いや、それは……」

言葉に詰まる克哉。

菊乃は無愛想にすましている。

「わかつております。わたくしがどんなに克哉様をお慕いしよう、奥様には敵わないことなどわかつておりますから、それでも良いのです」

「怒るなよ」

「怒つてなどおりません」

「なあ、俺と菊乃がはじめて出会つたときのことを覚えてるか？ 呉服問屋に奉公していた菊乃は、あの家の娘よりもはつきり言つて美人だつた」

「褒められても辛いだけでございます。克哉様に褒められても

……」

「話を戻そう」

克哉は菊乃から視線を逸らしながらまた語りはじめた。

「瑠璃亜を逃がしてやりたい。そして、沸々と沸き上がる奴らへの怒り。俺は奴らを殺した。毒殺だ、奴らが鬼たちを殺した方法と同じ方法で奴らを殺した。殺すだけでは気が収まらず、鬼の道具にちょうどいい物があって、それを使って奴らの魂を捕らえて屋敷の各部屋に閉じ込めてやった。

魂を封じ込める際、奴らと一つの契約を交わした。鬼の道具を使うにはそうしなければいけなかったんだ。それが奴らを使役して、ある程度仕事をさせたら魂を開放して成仏させるといふものだ。そのあたりの話はもう十分話していると思う」

「屋敷に閉じ込められている鬼は、元は人間だったのでございますか」

「俺が殺した……な。俺はこの地に留まって奴らをどうにかする義務がある。そして、もうひとつ解決するべきことがある」

克哉はゆっくりと眼を閉じた。

そうしていると、まるで死んだように見える。

思わず菊乃が声をかける。

「克哉様」

「……すまない」

「なぜ謝るのですか？」

「菊乃に多くのことを背負わせてしまつて」

「わたくしは己の意思でお慕いする克哉様に仕えております」

「その好意を利用することで、心が痛み葛藤を引き起こす。まだ頼み事がいくつもあるんだ」

「なんでもおっしゃってください」

なんでもという言葉に偽りはないだろう。だからこそ、克哉は菊乃を頼り、頼ることに負い目を感じる。

「美咲と美花は死産だった」

「……そんなはずは、だったら」

「瑠璃亜が自分の命と引き替えに双子を生かしたんだ。美咲と美花が急速に生長してくのは、そのせいだと思う。これは確証のないことだが、もしかしたら娘たちは十歳で死ぬかもしれない。未来でも……おそらくそのせいだろう、瑠璃亜の命一つでは足りなかつたんだ。問題はなぜこれから先、双子の姉妹だけが生まれ、娘たちと同じように急速に生長していくのか。そして、いつのころから変なときたりができて、姉妹で殺し合うなんてことが……」

克哉の脳裏になにかが浮かんだ。

霞の向こうに人影が見える。

背筋の曲がった老人の風体。顔には能楽の翁面。怪しげな者が脳裏に浮かんだ。

「なんで今まで忘れてたんだ、忘れようにも忘れられないことなのに」

「どうかなさいましたか？」

「ああ、思い出したんだ。娘たちが死産になつてすぐ、夢枕に奇妙な老人が立った。娘たちを蘇らせてやると。その夢は俺だ

けではなく瑠璃亜も見ていた。ただの夢ではなかった。現に娘たちは蘇ったのだから。俺は反対したんだ、悲しいことだった。瑠璃亜の命を使ってまで娘たちを蘇らせることを。だが瑠璃亜は老人の言うまま……あのとき、老人となにか約束をしたような気がするんだが、思い出せない。もしかして、それが未来に渡る呪いの原因なのか？」

克哉は頭を抱えた。

そして、ベッドからふらつきながら起き上がった。

すぐに菊乃が克哉の躰を支える。

「なにをなさるおつもりで？」

「俺が死んだら、俺の先祖を捜して渡して欲しい手紙がある。前々から書いてあったものだが、少し内容を書き換える必要が出てきた。」

一通は先祖に直接渡して欲しい。これから起こる歴史的なことや、投資話なんかを書いてある。それで俺のことを信用してもらえと思う。

もう一通はこれから書き直すんだが、俺自身に渡るようにして欲しい。封はあらかじめ、特殊な術で俺以外は開封できないようにしておくが、ちゃんと俺の手に渡らないと困る。俺に渡すと言っても、俺が生まれてから渡しても遅い。あらかじめ先祖に託しておいて欲しいんだ」

「畏まりました」

椅子に腰掛けた克哉は引き出しから手製の煙草を取り出した。「ついでに言っておく。俺が死んだらあの洞窟の一番奥に埋め

てくれ。あの場所に瑠璃亜も埋まつてるんだ。それから、こつちの引き出しに入つてる中身を全部、あそこにある石の入れ物の中に収めてもらえるとありがたいな。実はあの中には瑠璃亜の写真も入つてるんだ。写真と言つてもわからないか、この時代の人間たちはまだ発明していないが、鬼たちはすでに持つていて驚いたよ。実はあの石の入れ物も鬼の道具なんだ」

しゃべりながら手紙を書いていた克哉が、後ろにいる菊乃のほうを振り向いた。

「娘たちを呼んできてくれないか？ 死ぬ前に話したいことがいくつもある」

「畏まりました」

頭を下げて菊乃は屋根裏部屋をあとにした。

それが菊乃が克哉と交わした最期の言葉だった。

双子の姉妹を探してここへ連れてきたときにはもう、克哉は事切れていた。手紙は書き終えており、机でそのまま死んでいた。手に持った煙草の火も消えていた。

克哉が亡くなってからしばらく経つたある日、屋敷に客人が尋ねてきた。

客人などありえない話だった。

少なくとも、これまで客人はただの一度も屋敷を訪れたことはない。

玄関で出迎えた菊乃。出迎えたと言うより、外に出ようとしたら、そこに立っていたのだ。

翁面の老人。

「すぐにそれがいつか克哉が話してくれた老人だと菊乃は察しが付いた。」

「どなた様でございますか？」

「名乗る名前は特にない。約束のモノをもらいに来た」

このしゃがれ声は一度聞いたら忘れられない。耳障りが非常に悪い。

「約束のモノとおっしゃいますと？」

「三つになった双子の片割れをもらいに来た」

「そのような約束、わたくしは聞いておりません。どうぞお引き取りを」

「この屋敷の主人はおらんのか？ 彼と直接話せばわかること」

「……ご主人様はお亡くなりになりました」

「それは難儀な難儀な、しかし双子の片割れはもらっていくぞ」

強引に屋敷の中に老人は入ってこようとす。菊乃は両腕を伸ばして立ちはだかった。

「ここから先は通すわけにはいきません。ご息女には指一本、一目たりとも会わせるわけにはいきません」

「契約は守らねばならんぞ。抵抗など無力なり無力なりと心得よ」

と、言った老人のほうが抵抗をやめて、強引に屋敷に入ろうとすることをやめた。

あきらめたわけではなく、屋敷に入る必要がなくなったのだ。廊下の向こうから声が聞こえてきた。

「いたい、いたい、やめて瑶子」

「放しなさい、どこに連れて行く気なの！」

双子の姉妹が瑶子に引きずられてやって来る。

菊乃は瑶子の瞳を見つめた。虚ろだ。まるで魂が入っていないような眼をしている。

老人が笑う。

「ふおおおおつ、よい子よい子、久しぶりじゃったな瑶子、元気にしておったか？」

瑶子からの返事はなかった。二人は知り合いなのか。少なくとも、この老人は瑶子の名を知っていた。

目の前で双子のどちらかが連れ去られようとしている。そうとわかっていても、菊乃は動くことができなかった。得体の知れない老人が、これ以上になにをしてくるかわからない。それに克哉の望みは違うところにあるだろう。

「わかりました、強引な真似はなさらないでください。話し合いをして、ご息女の意味を最大限に尊重するというのはどうでございますか？」

「よかろう」

老人は深く頷き、屋敷の中に足を踏み入れた。菊乃の横を通り過ぎるとき、老人は巻物を手渡した。

「手土産じゃ。蜘蛛の飼い方が書いてある」

蜘蛛とはつまり、言わずとも。

老人は自分の家のように、無遠慮に荒々しく屋敷の中を進む。菊乃はあえて止めもしなければ、適当な部屋への案内もしなかつた。

「ここがよい。当主の部屋に相応しい場所じゃ」

老人が立ち止まった先には固く閉ざされた戸があつた。封印がなされている。

「そこは！」

菊乃が止めようとしたときには、老人は御札を破って部屋の戸を勢いよく開けてしまつていた。

静まり返つていた。

部屋の中は蛻もぬけの殻殻だつた。

これは嵐の前の静けさか。いや、嵐などそこにはなく、雲一つない、本当になにもない部屋だつた。

はじめからなにもいなかったのか。

「中にいた鬼はどうなさいましたか？」

と、菊乃が老人に尋ねた。

「さてさて、鬼とはなんぞや？」

惚けているのは明らか。老人は迷わずこの部屋を選んだ。追求はしたいが、材料もなく、強硬な追求は波風を立てる結果になる。菊乃はそれ以上の追求はしなかつた。

広い座敷に四人が座つた。瑤子は虚ろなまま部屋を出たすぐの廊下で待つている。美咲、美花、菊乃と横に並び、向かいにひとり老人が座つてゐる。

「わしから話そう。双子の片割れをもらいに来た。ここの主人

と奥方と約束をしておったのじゃ」

すぐに反応したのは美咲だった。

「そんなの嘘よ！」

叫びながら見たのは菊乃の顔。

「本当でございます。病床の克哉様から聞いておりました」

これは嘘だ。菊乃は克哉が老人となにかしらの約束をしたとは聞いていたが、その内容は克哉も思い出せなかったのだ。

「嘘よ、嘘よ、お父様がそんな約束するはずがないわ。私たち姉妹を引き裂くなんて、お父様が考えるはずもないもの！」

叫びながら美咲は菊乃に飛び掛かっていた。

「やめて美咲！ 菊乃に八つ当たりしても仕方がないわ」

「美花はいいの？ いいなんて思っているわけがないわよね。」

私がそう思っているのだから、あなたも同じ気持ちのはずよ！」

「わたしだって、でもそれがお父様の望みなら……」

「いいわけないでしょう！」

話し合いにもならない。

ついに美咲が部屋を飛び出してしまった。

話し合いは完全に決裂だ。

老人も席を立った。

「三日後にまた来よう。それまでに返事を聞きたい。どちらがわしの元へ来るか。一生わしの元で暮らすわけではないと付け加えておく。四年じゃ、七つになったとき、片割れを返しに来ると約束しよう」

部屋を出ようとするとする老人の背中を美花が追った。

「お話がっ……あります」

「なんじゃな？」

二人の成り行きを菊乃は口も挟まずただ見守った。

いつのころからか、その部屋は代々の当主が使う部屋であった。現在の当主は鬼塚智代。娘は姉の静枝、妹の静香、七つの誕生日を迎えたこの日、妹の静香がこの屋敷に帰ってくる。

「わかつているわね静枝さん？」

「はい、わかつておりますお母様」

向かい合つて座る母の言葉に、一切の感情を挟まない口調ですぐに静枝は答えた。

しばらくして、廊下から声が聞こえた。

「静香様をお連れいたしました」

ふすまが開き、深々とお辞儀をした菊乃の後ろから、静枝と瓜二つの静香が部屋に入ってきた。

「お久しぶりですお母様、ただいま帰りました」

智代の前に正座した静香は深々と頭を下げた。

「元気にしていたかしら？」

「はい、お母様」

「長旅で疲れたでしょうけれど、大事な話があるので聞きなさい」

静香は不思議そうな顔をした。

静枝は無表情のまま、遠く壁を見つめていた。

「貴女たちに残された寿命はあと三年」

双子の姉妹は共に一つも表情を崩さなかった。

不気味な笑みを浮かべながら、智代は話を続ける。

「生き残る方法はただひとつ。そのために静香さんは帰って来たのでしょ」

「はい、里親に聞かされております。しかし、嘘だと言ってください。姉妹で殺し合うなんて、そんなことわたしにはできません」

涙ぐんだ静香を見て、智代は笑いながら歯を剥いた。

「私にはできないと言いなながら、だまし討ちでもするのかしら？ キヤハハハ、いいわよ、どんな方法を使っても片割れを殺し、そして肝を喰らうのよ、さあ、はじめなさい！」

「できません！」

と、静香が叫んだと同時に、静枝がすっと席を立った。

無表情な静枝の手元で妖しく輝く短刀。

静香は眼を見開いて怯えた。

「お姉様……そんな、やめて……やめてください！」

短刀の切っ先が襲い来る。

智代は嗤っている。

血相を変えて静香は部屋を飛び出して逃げた。

「すぐに追うのよ！」

響き渡る智代の叫び声。

母の命令を聞き静枝が部屋を飛び出した。

息を切らせながら静香は膝に両手をついた。

「はあ……はあ……」

「大丈夫でございますか静香様？」

洋燈を片手に菊乃が尋ねた。静香は深く頷いた。

洞穴を照らす淡い光。屋敷の敷地内にこのような場所はただ一箇所。

「本当にこの場所なら大丈夫なの？」

心配そうに尋ねてきた静香に、菊乃は無表情に答える。

「この場所には加護がございます。なにがあるうと、お二人のことを守ってくださいるでしょう」

人の気配がした。

入り口のほうから手で壁を伝って、明かりも持たずだけれがこちらにやってくる。

「お姉様大丈夫!？」

「ええ、たぶん気づかれていないわ」

表情は厳しいが、そこには狂気の一欠片もない。先ほど妹を殺そうとしていた姉は、今はどこにもいなかった。ここにいるのは妹を想う姉だ。

「ごめんなさい静香、あなたに刃を向けてしまつて」

静枝は静香を力強く抱きしめた。

すべては母を欺くための演技だったのだ。

静枝は菊乃に顔を向けた。

「あとは静香が死んだことにして、鶏の血は用意できているでしょう」

「はい、ご用意できております」

そう言いながら菊乃が近づいてくる。だが、その手に持っているのは折りたたまれた手ぬぐいだった。

不意を突かれて静枝が何者かに羽交い締めになされた。

「どうということ!? 静香、どうして静香がつ!」

なにがなんだか静枝はわからなかった。まさか静香に羽交い締めになされたとは、思いも寄らないことで、理由も皆目見当がつかなかった。

菊乃がにじり寄ってくる。

逃れようと軀をよじらせながら静枝が叫ぶ。

「どうということなのっ! 二人もお母様側だったの、んぐっ!」

手ぬぐいで口と鼻を塞がれた。

静枝の意識が遠のく。手ぬぐいに薬品が染みこませてあったのだ。

力を失った静枝の軀を支えながら、静香は地面にゆっくりとしゃがみ込み、そのまま膝枕をした。

膝の上で眠る静枝の顔を愛おしく見つめる静香。自分と瓜二つの顔。姉の頬を優しく指先でなぞる。

「本当に自分の顔を見ているみたい。でも一箇所だけ違う、目の下のほくろ。ここもお姉様と同じがよかった」

静枝の頬に涙が落ちた。

「……さようなら」

廊下にぼつぼつと落ちる血の痕。その血は当主の部屋まで続く。

「お母様のお言いつけ通り、静香を殺して生き肝を喰らってやったわ」

真つ赤に染まった短刀を手に、腕には血の滴る少女の首を抱えていた。

物言いも、雰囲気も、静枝だが、その顔は。

「静香にやられたのかしら、その顔は？」

智代は尋ねながら、愉しそうに嗤っていた。

顔半分に火傷を負い、痛々しく真つ赤に腫れ上がり皮膚が爛れた。

「ええ、思わぬ反撃に遭って。傷の手当てをしてくるわ」

足早に部屋を出て行く娘の後ろ姿を見ながら、嬉しそうに嬉しそうに智代は嗤っていた。

ある日の夜更け、屋敷に叫ぶような呼び声が響き渡った。

すぐに菊乃が静枝の部屋に駆けつけると、そこでは滅多刺しにされた女が死んでいた。

「お母様を殺してしまつたわ」

「智代様だったものでございます」

「そうね、たしかにこれは母とは呼べないわ」

死んでいる女の顔はまるで般若のように恐ろしく不気味だった。

静枝の着物は酷く乱れ半裸状態で、その手には血塗られた短

剣が握られていた。

「私を抱きながら全部話してくれたわ。どうやら私たちが生まれてすぐに、お母様の肉体を乗っ取って入れ替わつたみたい。今襲われたのは孕まして双子をまた生ませるつもりだったみたいよ。そして、双子が生まれたら肉体を乗っ取って、殺し合いを仕向ける。その歴史の繰り返し。けれどこれでおしまいわ」

自分を見つめている菊乃に顔を向けて、静枝は言葉を付け足す。

「服を脱がされて躰を少し触られただけよ。それ以上のことはなにもされてはいないわ」

「本当でございますか？」

「なにを疑うの？」

菊乃の視線を静枝は追つた。

はだけた着物から覗く太股に走る一筋の赤い糸 鮮血だった。

静枝は絶句した。

「っ!? 嘘よ、本当にそんなことはなかったのよ!」

狂乱しながら叫ぶ静枝に背を向けて、菊乃は畳の血を調べていた。

「乾いている血がございます。わたくしを呼んだのは、智代様を殺してすぐにでございますか？」

「そうよ、すぐに廊下に出てあなたを呼んだのよ」

「記憶が途切れているということはございせんか？」

「そんなこと……時計が進んでいるなんてことが……四時間近くも、嘘よ」

時計を確認して静枝は驚きを隠せなかった。
まだ終わりではなかったのだ。

苦しそうな顔をして静枝が大きなお腹を抱えながら、菊乃に肩を借りて歩いて行く。寄り添っている瑤子はあたふたしているだけだ。

その場に慶子も駆けつけてきた。

「私にできることはないかしら？」

「なにもございません」

にべもなく菊乃は申し出を断った。

屋敷の外に出た静枝は台車に乗せられた。

「まさかそれで町まで？」

慶子は眉を寄せて尋ねた。

答えは返ってこない。菊乃は台車を引いて急ぐ。その方角を

見て慶子は嫌そうな顔をした。

「そういうことね、なんの悪あがきかしら」

小さく呟いた。

台車は鳥居をくぐり、そこから台車を降りて洞窟の中へと入った。

洞窟の奥は明かりで満たされており、先客がそこで待っていた。

「久しぶりね、会いたかったわ静香」

そこにいたのは静枝だった。

そして、菊乃に肩を借りているのも静枝。

「お帰りなさい、お姉様」

菊乃に肩を借りていた静香の瞳から涙がこぼれ落ち、頬の焼けの痕を伝った。

あの日から、静枝を名乗り続け、演じ続け、一時も静香に戻ることにはなかった。けれど、このときついに妹の静香に戻ったのだ。

悲しげな瞳で静枝は静香の火傷の痕に触れた。

「静香が自分の顔を焼いたと知ったとき、私も自分の顔を焼こうと思ったわ」

「やめて絶対に、お姉様にはその顔のまままでいて欲しい。だってそれはわたしの顔だから」

「わかってはいるわ。けれど、静香が私の身代わりになったことは、絶対に許せなかった」

「それはなにが起こるかわからなかったから、お姉様には安全な外の世界で生きて欲しかったの。だから、だから会いたかったけれど、帰ってきて欲しくはなかった」

「そうはいかないわ。静香が私の身代わりになったこと、今は正しかったと思っっているわ。これから話すことをよく聞きなさい、後戻りはできない、する気もないわ絶対に」

静枝の瞳は鋭かった。

姉がなにを心に決めているのか、静香は不安になって視線を泳がせ辺りを見回した。

出産の準備のため、たらいや湯などいろいろと用意されている。だが、その中には数珠や香などの法具もあり、中でも目を引いたのは肉切り包丁だ。

静香は怯えた。

「なにをする気なの……お姉様」

「今からやろうとしていることは大博打よ。けれど生き残るためにはやらねばならないわ。そのために私が死ぬわ」

生き残るために、死ぬ？

静枝はなにをする気なのか。

「私たちはもう何年も生きられない。試すまでもなく、それは事実として受け入れなくてはいけないわ。化け物が望むように殺し合いをして肝を喰らっていれば、もう少し長く生きられたでしょうね」

「まさかお姉様!？」

「私を喰らいなさい」

「そんなこと!」

「聞きなさい。どちらにせよ、ここでどちらかが死ななければ、死産の娘たちを蘇らせることはできないのよ。それはあなたもわかっていてでしょう?」

見つめられた静香は口を開かず、首を動かすこともしなかった。

仕方がなさそうに静枝は菊乃に顔を向けた。

「話してあげて」

促されて菊乃が口を開く。

「これまで死産でなかったことはございません。そして、歴代の当主たちは、誰もが己の命と引き替えに双子を蘇らせました。それが己の意味だったかどうかは定かではございません。なぜなら、歴代の当主たちはみないつの間に入れ替わっていたからでございます。入れ替わりを終えた当主は、呪縛で決められていた寿命を越すことができます」

すぐに静枝が続ける。

「けれど、今回は化け物に躰を乗っ取られていない。静香が殺したから」

さらに菊乃が続ける。

「乗っ取るという表現は正しくはございません。入れ替わったときにはすでに、躰は鬼の物になっていますからです。鬼の躰の中に当主の魂が取り込まれ、徐々に養分として取り込まれていくという表現が正しいかと」

これを聞いて静香は厳しい顔をした。

「わたしがお母様を殺したとき、まだお母様の意識　魂があったということ？」

静枝は目を伏せた。菊乃は凜として静香を見据えている。

「はい、その可能性はございます。しかし、智代様の魂を救う手立てはございませんでした」

気にすることはない　そうとも言うのが。

しばらく静香は黙り込み、そして息を吐いてから深く頷いた。「今さらだけれど、このままではわたしもお姉様も十歳で死ぬの？　なにが原因で、もしかしたら死なないのではないの、だ

つて一族の血は今まで堪えていないもの」

過去に幾人がそれと同じ疑問を抱いたのか。その疑問を抱いた者の多くは、一時外で育てられた者たちだった。箱庭で育てた片割れは、帰ってきた片割れを殺せ殺せと、疑問の抱かせぬまま育てられる。

静枝はその中では例外であつた。繰り返しの歴史の中で生まれる些細な誤差。その誤差は時を重ねるにつれて大きくなっていく。

歴代の双子たちは、あらゆる方法で運命に抗おうとしてきた。菊乃が語る。

「過去に試そうとした姉妹がいなかったわけではございません。多くの場合は当主によつて阻止されてきましたが、一度だけそれを行った姉妹がおりました。十歳になり突然死ぬわけではございません。およそ十歳を過ぎた辺りから、肉体が腐りはじめなのです。肉体が腐れば精神も腐りはじめ、最期は狂気に駆られ……一人が生き残り歴史は続きました」

この屋敷の歴史を見てきた菊乃。多くを知る者である。だが、彼女はあくまで仕える者。自ら流れを変えることはしない。

急に静香が苦しそうな顔をした。股の間から羊水が流れ出す。まるでダムが決壊したように。

新たな死が生まれる。

ある日のこと、屋敷に客人が尋ねてきた。

客人とはいつぶりのことだろうか。

翁面の老人。

出迎えた菊乃は顔色一つ変えなかった。

「どなた様でございますか？」

「三つになつた双子の片割れをもらいに来た」

「その約束はもう果たしたはずではございませんか？」

「約束は破られた。双子が三つになったとき、片割れを決められた里親に預けることになっておるはずじゃ。歴代の当主がそうしてきたように、智代もそうしろと命じたはずじゃが、お主はどうした？」

「……………」

菊乃は黙した。

老人は丸まっていた背を伸ばす。骨が鳴った。背が伸びるだけではない。その形が徐々に変わり、白髪の手髪が色づいていく。

「規則をあまり曲げてもらつては困るわ」

老人の声が若い女の声に変わった。その姿すらも、女だ。翁面で顔を隠しているが、見たことがある。この女。

「あら、驚かないのね。それともお人形さんには驚けないの？」

「同じ存在だとは思っておりませんでした。慶子様は十分に妖しげでしたから」

そこに立っていたのは慶子だった。

「はじめから警戒されていたのね。どうりで私を見るあなたの眼差しが冷たいはずだわ」

「目的はなにでございますか？」

「この世界が永遠に続くことを願っているだけよ」

「おっしゃっている意味がわかりませんが？」

慶子は笑った。愉しげに笑った。

「規則をあまり曲げられるのは困るけれど、あなたが智代の言いつけを破ったことは責めてはいないわ。それはそれで一つの選択肢ということで許すわ。ただあまり私の目の届かないことをされると、管理が大変で困るのよ。そう、だからこれは警告。あなたの守りたいものは私の人質だと思って。だから今回はこうしましょう、美花を外に出さない。里親はあなたの好きにすればいいわ、警告よ、これは」

「……………」

黙した菊乃。

慶子の顔を近づいてくる。鼻先が触れる寸前まで、慶子の顔は菊乃の顔に近づいてきた。

「言わなくてもわかっていると思うけれど、ここでの出来事は忘れてね、うふふ」

軽い足取りで慶子は菊乃の横を通り過ぎて、屋敷の中へ入っていきこうとする。

菊乃が振り返った。

「双子の呪いの発端は、克哉様が行った反魂の失敗 ではない、あなたが教えた方法通りに行ったためでしょうか？」

慶子は足を止めない。振り返ることもない。

さらに菊乃は言葉を投げかける。

「双子の殺し合いの発端は確実にあなたが仕組んだことだと思います。あのときあなたに連れて行かれた美花様が、七つになつてお帰りになられたときには……」

慶子が足を止めた。

ゆつくりとこちらに向けた慶子の顔は、まるで鬼気の形相を浮かべた蛇。

「今回も美花を里子に出しなさい」

最後にそれだけ言つて慶子は暗い屋敷の奥へ消えていった。わざわざ指定して来たと言うことは、そこになにかがあるはずだ。

菊乃は当主の部屋へと急いだ。

「失礼いたします、菊乃でございます」

「お入りなさい」

返事を待つてから、菊乃は障子を開けて部屋の中に入った。部屋の畳は酷く毛羽立つていた。まるで台車でも走らせたような跡がいくつもある。

「ちょうど良かったわ。厠に行きたいと思つていたところなのよ」

「すぐにお連れいたします」

菊乃は車椅子を押しはじめた。そこに乗っているのは、顔に火傷の痕がある静枝だった。

車椅子に乗せられた静枝は全身を拘束されていた。何本ものベルトを軀に巻いて自由を奪い、動かせるのは首から上のみ。顔色は酷く、頬や目元はくぼんで精気を失つていた。

なんのための拘束だろうか？

死相に近い表情を浮かべ、力すらあるとは思えない。暴れてなにかをすることは到底思えず、逃げ出す、自傷の恐れ、いろいろと考えられるが、やはり拘束の理由がわからない。

菊乃に手を借りて用を足しおえた静枝は、再び拘束される。用を足す際に、拘束の一部を解かれていたのだ。

「自分で小便もできないなんて、哀れよね。そう思うでしょう菊乃？」

「……………」

「あなたの予想が正しければ、もう一年も保たないでしょう。一人で十、二人で二十、年数ではなく肉体年齢。生きながらにして躰が腐るって、どんな感じなのかしらねえ」

大声で言つてすぐに、静枝は小声で話しはじめた。

「歴代の当主たちは化け物に取つて代わられていたから、双子のひとりや里子に出したり、殺し合いをさせてきたわけでしょう。私には娘たちにそれをさせる理由がないわ」

「意味があるから行われてきたのか、それともただの座興なのかは、わたくしは存じかねます。どうするか、静枝様のご意志にわたくしは従います」

慶子との約束では、美花を里子に出さなくてはならない。

御札の貼られた部屋の横を通り過ぎたとき、静枝が口を開いた。

「その先にいる奴らなのかどうなのか、なにかにずっと監視されている気がするわ。こんな屋敷捨ててしまつて、みなで外の

世界で暮らすことはできないかしら？」

「わたくしはこのお屋敷に残ります」

「なぜかしら？」

「すべての部屋を開放することが、与えられている使命の一つでございますから」

「菊乃は私たちによくしてくれたわ。はじめは信用していなかったけれど、今は菊乃がいなければ生きていけないわ。どうしてもあなたがここに残るといふのなら、私も残らざるを得ないわ」

車椅子を押しながら廊下を進んでいた菊乃の足が急に止まった。静枝が自らの足で歩いてたら、同じように動きを止めていただろう。

開いている。

床に破り捨てられ落ちている御札の切れ端。

封印されていた部屋の戸が全開に開かれていたのだ。

「全員を私の部屋に集めなさい」

静枝の厳しい口調が冷たい廊下に低く響いた。

ひとりずつ静枝によって問い詰められたが、封印を解いた者が名乗り出ることにはなかった。

その間、屋敷の見回りをしてきた菊乃が戻ってきた。

部屋には緊張が走っている。封印が解かれた緊張感ではなく、静枝の発する鬼気に双子の姉妹が当てられているのだ。

菊乃はすぐに静枝の傍に行き、そっと話す。

「一通り見回っただけでは、見つけることができませんでした」

「隣の部屋に移りましょう」

周りの目を気にして、静枝と菊乃は部屋を移動することにしました。

車椅子を押す菊乃と静枝の背中に声が投げかけられる。

「怖いわ、封印されていた部屋には悪霊がいたのでしょうか？」

不安そうな顔をしている慶子。口元が唾っている。

「慶子に躰を向けて頂戴」

静枝は菊乃に車椅子を動かせ、艶笑を浮かべながら口を開いた。

「この屋敷のそこら中に悪霊がいるわ。一匹逃げたからと言って取るに足らない存在よ。この屋敷の主人はこの私、この屋敷の支配者はこの私なのよ、キャハハハハ！」

すぐに車椅子の向きは変えられた。

慶子や娘たちと付きそう瑤子に背を向けた静枝は目を伏して、重い表情をした。

隣の部屋に入って菊乃と二人きりになると、さらに静枝の表情は暗く重くなっていた。

「見つからないでは済まないわ」

「わかつております」

「私たちの隙を突いて、いつ襲ってくるかわからない。襲われるのは娘たちかもしれない。守りきれないわ」

「実を申しますと、見つからない鬼はもう一匹おります」

「っ!? ほかにも封印の解かれていた部屋があったというの！」

声を荒げた静枝は、はつとして黙した。隣の部屋にまで声が届いてしまう。

菊乃は隣の部屋に視線を向けた。

「現在静枝様がお使いになつております当主の部屋は、代々の当主の部屋でもございました。あの部屋にもかつて鬼が封じられておりました。しかし、あるとき、封印が解かれ、忽然と部屋の中から鬼が消えてしまったのです。それ以来、鬼の行方は杳^{よう}として知れませんが」

すべては語らなかつた。

当主の部屋の封印を解いたのは、翁面の老人。今、隣の部屋にいる慶子だ。

静枝は知らない。

「もう一度、見回つてきて頂戴。そして、何事もなければ様子を見ることにしましょう。娘たちと慶子を一緒に行動させ、瑶子をつけましよう。私には菊乃がついていて」

「畏まりました」

菊乃は意見しなかつた。

もし今回の封印を解いた者が慶子だとしたら、次になにをする気か。慶子、瑶子もまた慶子が仕向けた者、娘たちと共にして危険は及ばないだろうか。

菊乃が自ら不安を口にするのはなかつた。

静かに瞳を閉じて静枝が口を開く。

「ねえ、娘二人をこの屋敷から外の世界へ……お願いできないかしら？」

二人。

慶子との約束では、美花と決まっている。

「畏まりました。準備をいたします」

菊乃はそう返事をした。

薪や藁に灯油をまいて火をつけた。

一瞬にして高く燃え上がる炎が、ゆらゆらと菊乃の瞳に映る。薪と藁の隙間から、人の手らしきものが出ていた。

すぐに菊乃は当主の部屋に向かった。

そこで待っていたのは三人。静枝、美咲、美花。姉妹には直前に聞かせてあった、この屋敷を出ることを。

静枝はこの屋敷に残る。

母に背を向け部屋を出る。美咲は振り返るうともせず、別れの挨拶もしなかった。美花は振り返った。

「お母様」

涙ぐんでいる美花。母はなにも答えず、なにも表情に浮かべず。

「急ぎましょう」

菊乃が二人を急かした。

玄關まで行かず、締め切られていた縁側の雨戸を開けて、外へ出た。

なぜ急ぐのか。時間に追われているのか、それとも別のモノ

に追われているのか、後ろからはなにが迫ってくる？

車庫までやって来た三人を待つていたのは、おぞましい群れだった。

「きゃっ！」

息を呑んで美花が短い悲鳴をあげた。

「なんなのあれ？」

侮蔑しながら美咲が言葉をつき捨てた。

子蜘蛛の群れが行く手を塞いでいたのだ。子蜘蛛と云えど、それは大蜘蛛に比較しての大きさ、その大きさは人の顔ほどはある。それが何十という群れを成しているのだ。

車は使えない。里まで幼い二人を連れて行くことはできるのか。

菊乃は二人の手を引いて走った。

だが、行く手に現れた新たな蜘蛛の群れ。車庫に群がっていた蜘蛛よりもさらに大きな蜘蛛たちだ。

群れの中から大蜘蛛が一匹顔を見せた。

一斉に糸が宙に飛んだ。

菊乃は姉妹を抱き寄せようとしたが、間に合わなかった。

「美咲様！」

蜘蛛たちの狙いははじめから一人。糸に巻かれ動きを封じられた美咲。大蜘蛛たちの糸は、通常の蜘蛛と比べものにならない強度を持つ。火には弱いだが、この場で美咲を開放する術はなかった。

一斉に蜘蛛たちが道を空ける。言わんとしていることはわか

った。美花だけを連れて行けというのだ。

菊乃は動かなかった。

「わたくしの主人はあなた方ではございません。わたくしの主人はお二人を外の世界へとのご命令でございます」

警告だと、慶子は言っていた。その約束を破棄するのか？

たとえ菊乃はそうしようとしても、それを許さない力がある。

蜘蛛の群れが蠢く。子蜘蛛たちの背に乗って人影が運ばれてくる。静枝だ、静枝が捕らえられたのだ。

「私のことは構わないから、娘たちを連れて逃げなさい！」

絶叫に近い叫び声を静枝はあげた。

目の前にある選択肢を選ぶという行為。

「申しわけございません」

菊乃は仕える主人の命に背いた。美花だけを連れて走り出したのだ。

蜘蛛の群れの中から狂気に駆られた悲鳴が木霊した。

決して菊乃は振り返らない。道は開いている。たとえその道が誘われた一本道だとしても、進むことを躊躇ためらわなかった。

正面門を飛び出して、ついに屋敷の敷地の外へ出たとき、菊乃は地面にある物が落ちていることに気づいた。

しかし、なにも見なかったことにした。

そこに落ちていたのは、翁面だった。

「勝手になさい」

車椅子に拘束された静枝はどこを見るでもなく、天井に顔を

向けながら吐き捨てるように言った。

「はい？」

と、瑤子は首を傾けてしまった。

頭をぐるぐると回しながら、静枝は答える。

「その子を生かすも殺すも、勝手になさい。生かすのであれば、面倒はあなたが看なさい」

「は、はい」

おどおどしながら瑤子はうなずいた。その背中に隠れている幼女。頭に二つの瘤がある。名はるりあだと、先ほど瑤子が紹介した。

瑤子よるりあが部屋から去ったあと、静枝は付き添いの菊乃に視線だけを向けた。顔が真逆の方向を向いている。

「今の子が何者かわかる？」

「おそらく、本物の鬼でございます」

「ふふつ、答えが返ってくるなんてあなたはなにを知っているのかしら？」

「……………」

るりあ。

其の名を菊乃は知っている。だが、菊乃の本当の主人は、るりあと瑠璃亜の因果関係について、語らなかつた。名前が同じだけなのか、それとも。

「黙さないで答えなさい」

静かな口調に静枝は怒気を含ませていた。

「……………」

菊乃は黙した。

静枝は待つている。

そして、菊乃が静かに口を開く。

「存じ上げません。なぜならわたくしは、すべてを知っているわけではございません」

「知っていることを答えなさい」

「わたくしのはじめのご主人様は、それについて語る時間がなかったのか、それとも意図して語らなかつたのか、多くを教えたくださいませんでした」

「はじめの主人……が、なぜさっきの鬼のことを知っているのかしら？」

「……………」

「まただんま黙り。昔、あなたの出自　出自という言葉が正しいかは置いといて、そのときもあなたは答えなかつた。ほかにも過去について尋ねると、大抵は黙り。こうしてもつとも私の傍にいるあなたのことを、私はよく知らない。私が生まれたときには、すでにあなたはその姿でこの屋敷に仕えていた。歳を取らないのは瑤子も同じだわ。けれど、あなたはさらに異質だわ。この屋敷では異質。ひとでもなく、物の怪でもなく、あのとき始めてあなたが人形だと知ったときは驚いたわ、自分の首を切れたなんて言うのだもの」

菊乃は口を挟まなかつた。独り言のように静枝はさらに話し続ける。

「当たり前前のご疑問が変わるのは難しいわ。けれど、ひと

たび一つ疑問が生まれれば、日常の全てが疑問に変わる。ときにそれは疑心暗鬼を生ず。娘たちについても……それは考えないようにしているのだったわ。嗚呼、今や自分自身も信用できない。私の判断は正しかったのかしら？」

「わたくしは静枝様に従うのみでございます」

「嘘ばかり。あなたは敵ではない、けれどどうやら私の味方でもないらしい。あなたの意図の先がどこにあるのか、そんな詮索は途方だわ。もう疲れたわ、生かされることに」

一人で十、二人で二十、年数ではなく肉体年齢。いつか静枝が呟いた言葉だ。娘たちは五歳になった。まだ静枝は生きている。

美咲と美花が生まれて七年。

切り開かれた山道を走ってきたスバル360の前に菊乃が立ちただかる。正面門をくぐる前にスバル360は止まらざるを得なかった。

運転席から顔を出した無精髭の男。菊乃は表情ひとつ変えなかった。

「どこに止めればいいですかねえ？」

「ここまでで結構でございます」

「そんなこと言わずに、お茶の一杯でも飲ませてくださいよ。もうくたくたで、喉もからからで、美花ちゃんからもなんか言っつてやってよ……あっ！」

克哉の視線の先で車を先に降りた美花。

向かい合う双子の姉妹。

「お姉さま、お久しぶりです」

「元氣そうね美花。あのころとなにも変わっていないみたい。

”見慣れた顔”だわ”

再会した姉妹の横をスバル360が通り過ぎる。菊乃が止める間もなかった。

運転席から克哉が顔を出す。

「適当に停めさせてもらいますんで」

ハンドルを握って再び顔を前に向けた克哉が眼を丸くした。

「おおつ、なんだガキか!？」

るりあがフロントガラスにべったりと顔を付けていたのだ。

また克哉が窓から顔を出した。

「どけどけど、どかないと轢ひいちまうぞ」

るりあは引かない。

仕方がなく菊乃がるりあを引っ張って捕まえ、そして深々と頭を下げた。

「申しわけございません。幼い子のしたことでございます。どうか許してあげてくださいませ」

と、顔を上げた菊乃は遠く縁側にいる瑤子に眼をやった。

看られた瑤子は度肝を抜かれたようで、目を丸くして固まっている。

克哉が頭を掻いた。

「許すもなにも気にもしてませんよ。それじゃあ冷たいお茶でも用意しててください」

そう言い残して克哉は車を走らせて屋敷に向かつて行ってしまった。

姉妹はなにやら話し込んでいたが、どうやら一段落したよう
で、美花は菊乃とるりあに顔を向けた。

「お久しぶりです菊乃さん。そちらにいる女の子は？」

「るりあ様でございます」

「るりあちゃんと言うのね」

美花に見つめられたるりあは急に駆け出して行ってしまった。
双子の姉妹を菊乃は屋敷の中へ導く。

「静枝様がお待ちでございます。どうぞこちらへ」

久しぶりに帰ってきた屋敷を懐かしむように、美花はゆっくりと歩きながら辺りを見回している。

「美花ちゃん！」

後ろから声を掛けられた。すぐに振り返ると克哉がいた。

「克哉さん、どこに行っていたのですか？」

「車を停めてたんだよ。これからお母さんに会いに行くんだ
ろ？ 俺も行くよ」

克哉の前に菊乃が立ちはだかった。

「静枝様は美咲様と美花様だけをお呼びでございます。静枝様
にご挨拶なさるのなら、ご家族での話が終わってからになさっ
てください」

隠れるように付いてきていたるりあにも釘をさす。

「るりあ様も決して邪魔をなさらぬように」
「すぐさまるりあは克哉の背に隠れた。」

克哉はるりあを抱きかかえた。

「そういうことなら俺らは退散しますか。台所で茶でも飲んで待つてますよ」

るりあは駄々をこねるように足をじたばたさせたが、克哉は構わず抱きかかえながら歩き出した。

そして、再び三人は静枝の元へと向かった。

当主の部屋で車椅子に拘束され、宙を仰いでいた静枝。

「遅いわ。待ちくたびれて死にそうだったわ」

三人を見て静枝は宙を仰ぎながらしゃべった。その顔は木乃伊のように痩せこけている。本当に今にも死にそうだ。

「嗚呼、しゃべるのも辛い。目も霞んでよく見えないわ。美花……もつとこちらへ、美花の顔をよく見せてちょうだい」

見せると言いながらも、静枝は宙を仰いだまま美花を見ようともしない。

「はい、お母様」

ゆつくりと美花は歩き静枝に近づく。

「もつと近く、顔をよく見せてちょうだい」

「はい」

さらに美花が近づいた。目と鼻の先。

美花の頬に枯れ枝のようなものが触れた。それは静枝の両の手だった。拘束が解かれている。

ついに静枝が美花と目を合わせ、微笑んだ。

刹那。

美花が眼を見開いた。

紅い花びらが撒き散らされた。

美咲が息を呑む。

そして、菊乃はただそこに立っていた。

静枝の躰から伸びる不気味な六本の細い長い手。それは手と言ふより脚だろう。蜘蛛に似た六本の脚が静枝の背中から伸びていたのだ。

美花の頬に触れていた枯れ木のような手は、灰のように崩れ落ちた。

続け様に美花も崩れ落ちるように倒れた。その心の臓には穴が開いていた。

女の奇声が木霊した。

叫んだのは美咲だ。

美咲の手にはどこに隠し持っていたのか、短刀が握られていた。

菩薩のような微笑みを浮かべた静枝。

美咲が全体重を掛けた短刀が静枝の心の臓の位置を突いた。

「どうして美花を殺したの、この化け物めっ！」

「化け物であってもあなたの母よ。よく見なさい、そこにある美花の亡骸を」

口調も表情も冷静な静枝。

取り乱しながらも美咲は一瞬静枝の言葉に耳を傾け、倒れている美花に視線を向けた。

「……なっ、なに……この醜い猿のような化け物は？」

もはやそこに美花の面影はなかった。目が眩むほど真っ赤な

血を流して死んでいる不気味な化け物。

「美花は死んだのよ。おそらく四年前、いつの間にか鬼と入れ替わっていたのよ。もしかしたら屋敷を出て行く前に、私の娘は……」

静枝の瞳から一粒の雫がこぼれ落ちた。

六本の細長い脚がぐったりと畳に落ちた。

「騙し騙し生きていたけれど、もう限界だわ」

「お母様はなぜそんな姿に！」

まだ美咲は混乱の最中にいた。

菊乃は知っていたのか。そうでなければ、動かずにそこでじっとしているはずがない。

「普段はどんなに言うことを聞く番犬でも、いざというときに手を噛まれては敵だと言うほかないわ」

それは四年前のことは言っていた。蜘蛛の群れの叛乱。

「敵と背中を合わせた生活はせず、私は共生を選んだのよ。使える物はなんでも使う、今日まで生き延びるためには必要だった」

静枝の寿命はとうに尽きていた。それを生きながらえさせたのは、目の前にある蜘蛛の姿だろう。

話を聞いても美咲はまだ混乱している。

「わからないわ、わからないわなにもかも。お母様は狂っていた、いつも狂っていて会話もろくにできない状態だった。そんなお母様は過去に手紙を残していたわ。私と美花に残した手紙よ、そこには今前にいるお母様は化け物だと書いてあったわ。」

あの手紙はなんなの？ たしかに目の前にいるのは醜い蜘蛛の化け物だわ……けれど、手紙に書いてあったような」

美咲の背後で声が出た。

「あの手紙はかく乱のため、そして鬼を炙り出すために書かれたものでございます。そして、鬼は美咲様ではなかった。そうとなれば、鬼はひとりしかおりません。二度も同じ手は食いません」

二度目。

封印された部屋から消えた鬼はどこへ？

その答え。

静枝の瞳から色が消えはじめた。

「姉妹で殺し合いなどさせない。二代続いて、私たちの勝ちだわ。嗚呼、長い戦いだった……」

躰が崩れ落ちる。腐り、形を保てなくなった躰が、脚の先から崩れていく。

「魂と魄。私たちに足りないのは、設計図のほうよ。あとはそれだけ解決できれば……母の最期の願いを聞きなさい……私の魄は二十歳までの設計図を持って……いるわ……私を喰らえば……美咲は……あと六年……」

静枝は事切れた。一族では最長であった。

無表情のまま菊乃は静枝の屍体を短剣で切り刻みはじめた。

そして、その躰から取り出した血の滴る真っ赤なモノを、半分に分けてから両の手に乗せて美咲に差し出したのだった。

「どうぞ、召し上がってください」

「……………」

無言で美咲はそれを受け取り、背を向けた。

ぼとぼと畳に染みをつくりながら美咲の足下に溢れ落ちる血。菊乃は天井に顔を向けた。

「るりあ様を連れてきてもらえませんか？」

誰に言ったのか？

反応はすぐにあつた。

押し入れから物音がして、天井裏から克哉とるりあが落ちてきたのだ。

克哉は蒼い顔をして言葉を失っている。

菊乃は残りを両の手に乗せてるりあに差し出した。

「どうぞ、召し上がりください」

るりあはそれを奪うように受け取り、むしゃぶりついた。口と手を真つ赤にしながら、熟れた果実を頬張るように、ぐじゅりぐじゅりと雫を垂らして。

突然、るりあの眼がかつと見開かれた。

菊乃が静かに尋ねる。

「繰り返されてきた一族の記憶。思い出されましたか？」

「おらは……これは何度目の……嗚呼、克哉……おらのかわいい娘たちは……」

るりあの言葉に克哉は驚く。

「俺がどうした？」

突然、屋敷全体が激しい揺れに見舞われた。

生臭い風が吹く。

風に舞って御札が飛んできた。何枚もの御札が渦を巻いて飛んでくる。屋敷中を封印していた御札がすべて剥がれている。

「いつたいなにがどうなつてやがる!」

叫んだ克哉の片足が沈んだ。床が地面に沈んだのだ。

さらに屋敷を遅う揺れは強くなった。天井が崩れ落ち、壁が剥がれ落ちる。

逃げ出さなければ建物の下敷きになりかねない。

しかし、激しい揺れで誰もが自由に動けず床に這いつくばっていた。

床が沈んでいる。地盤沈下などではない。それは渦巻く呪いの重さだった。

屋敷中に蜘蛛の子が散る。

すでに菊乃は落ちてきた天井に両足を押しつぶされていた。

それでも這って動き、見えていた少女の手を掴んだ。

「っ!」

菊乃が動揺を見せた。

掴んだ少女の手は、腕から先が消失していた。

「これでなにもかも振り出しに……申しわけございません克哉様、これで終わりになるはずだったのに……」

ぐしゃり。

落ちてきた天井によって菊乃の頭部が潰された。

大地を穿つ大穴。

瓦礫一つすら残さず、屋敷と共にそこに棲むものは消えた。

荒野に佇む女がひとり、鳥居を見上げていた。
「残念でした」

その女も風のように消え、老若男女が混ざったようなひとりの
嗟い声が残された。

第七之世界 隠された物語

それは運命の糸を断ち切る瞬間。

永遠と無限の狭間で、一筋の糸が煌めく。

この世界にもしもは存在していない。

失敗は許されない。やり直しなどできない。それが自然の摂理。

静けさが怖ろしさを孕む夜更け。

当主間には女がいた。

鎖で手足を縛られ、車椅子に拘束され、自らは動くことのできない女当主。

自由を奪われて、なにが当主だろうか？

いや、手足が自由になるうとも、彼女に自由などなかった。

この屋敷は鳥かご。

手足の自由を奪われるくらい、なんのこともない。真の苦痛は魂の自由を奪われることだ。

当主となった静枝はこの屋敷で生まれ育った。

双子の片割れとして生まれ、三歳のとき、妹の静香がこの屋敷を出た。

静枝はこの屋敷に残された。

七歳になり、静香は屋敷に帰ってきたが、すぐにまた静枝ひとりが残される。

この屋敷に残されるのは、いつも静枝だった。

そのおよそ一年後、屋敷の敷地の外れにある祠で、静枝は双子を出産した。

出産後から静枝は目立って変わりはじめた。出産のときになにかあったのか、それともそのあとになにかあったのか。娘たちには狂気を逸していると思われる。それゆえの拘束である。しかし、拘束を命じたのは静枝本人。

静かに閉じられていた眼をカッと開く。

天井からの物音。押し入れが開き、男が中から現れた。天井の住人 克哉。

彼は数日前からこの屋敷の屋根裏に潜伏していた。この当主の間に入ったのは今日がはじめて。覗き見はしていた。

顔を合わせた二人。克哉は柔らかな笑みを浮かべ、静枝は硬い表情。

娘たちが静枝のこの顔を見たら驚くだろう。見せたことのない真剣な眼差しだったからだ。普段の彼女の眼はいつも血走っていた。

しかし、今は違う。

先に口を開いたのは女当主。

「老けたようですね」

「十年以上も経てばな、そのころ俺はまだ高校生だ」

思い耽ったように遠い目をした静枝は、少し頬を赤らめたが、すぐに哀しげにうつむいた。

「わたくしはまだ十五歳、魄はくは二二歳かしら」

静枝は齡十五。しかしその見た目は二十と少しくらいだ。

顔を上げた静枝は克哉を見ているようで見ていない。

「どちらにせよ貴方は遠い。やっとあのころの貴方の年齢に辿り着けた……あつという間、しかしとても苦しく長かった月日」

二人は以前から知り合いだったのか？

いや、「静枝」はこの屋敷から一步も出たことないはずだ。少なくともこの屋敷で、「静枝」と名乗っていた者は。

あのときのように、歴史は繰り返されている。三つのお祝いに、双子の片割れは外の世界に出され、七つのお祝いに屋敷に帰ってくる。そして、代々この一族は双子で殺し合ってきた。

「明日、美花が帰ってくるわ」

「あの子は元気に育ったよ」

「それはよかった……本当によかった……あの子は一族の希望ですもの」

静枝の瞳から一筋の煌めきが零れた。

あの子とは美花のことだろうか？

克哉も美花のことを知っているのだろうか？

一族の希望とは？

鬼塚家は女兒しか産まれない。それも必ず双子である。

双子は心身共に通常の二倍で年を取る。それが呪いといわれている。これは単純な遺伝子の異常ではない。なぜなら双子で殺し合ったのちに 通常の歳の取り方になるからだ。

静枝は嗚咽を漏らしながらむせび泣いていた。娘たちには決して見せたことのない姿。

「わたしにとって孤独な闘いだつた……だれにも話せず……だから話も聞けず、信じた夜道を進み続けることしかできなかった」

「静……静枝は決して孤独じゃなかったよ。直接のやり取りはできなかったが、菊乃が繋いでくれていた。君からの言葉ではなく、菊乃が見聞きした情報を一方的に聞くだけだから、どうしても足りない部分はあつただろう。けど、彼女は君の想いを汲んでいてくれたと思う。君は本当によくやつてくれたよ」

「ええ、わたし……私はどんなモノになると、自分を偽つても、やらなくてはならないことがまだあるわ」

眼が紅く輝いた。

「私は愛する者たちのためなら、鬼でも邪でも、なんだってなりましたよ」

それはヒトの眼ではない。

「俺だつて後戻りはできない。こうやつて俺は姿を見せて、君と話したこともすぐに気づかれるだろう」

克哉の視線は辺りを見回していた。

これまで静枝と克哉は直接的なやり取りをしていなかった。

二人の間には口伝だけでなく、

手紙でのやり取りもなかった。二人の間には菊乃が入っていたが、菊乃は静枝からなにも聞か

されていない。この屋敷から出られない静枝は監視されていると感じていたからだ。

逆に菊乃が静枝に情報を伝えることもなかった。菊乃の役割

は客観的に見聞きした情報を克哉に伝えること。そして、克哉の情報をもとに菊乃は独断で動く。

菊乃という存在は、重要な存在でありながら、ある意味蚊帳の外にいる存在。

屋敷の呪い、一族の呪い、菊乃はどちらの呪いにもかかっていない。

静枝も克哉も口にはしないが、なんらかの力を感じていた。その外に菊乃はいるのだ。

地響きがした。

下から突き上げるような揺れだ。

それはこの屋敷のみを襲う奇つ怪な地震であった。

これがなんらかの力だろうか？

部屋の隅で影が動いた。この場には完全に気配を消していた者がいた。菊乃だ。

「そろそろお時間でございます」

夜は更けている。夜の住人以外は深く寝静まっている刻。

静枝は恐ろしく冷たい表情をした。

「どうにか間に合ってよかつたわ。残す封印の間はただ一つ」

「俺も手伝うよ」

そう言われた瞬間、静枝の表情が柔和になった。

「あのころが懐かしく思える」

静枝の瞼の裏には学生服の後ろ姿。

克哉が部屋を出て行く。

そのあとを静枝が菊乃に車椅子を押され追った。

この屋敷には開かずの間がいくつもあった。

時折、その部屋の中から殺気を感じ、激しい物音がすることもよくあった。

この屋敷にはなにかいる。ヒトではないなにかだ。この屋敷の住人であれば、皆気づいているが、それがなんであるか知る者は限られている。

屋敷は静かだった。これまで通り過ぎた部屋には、封印の護符が張られていなかった。静枝は言っていた。残す封印の間はただ一つ、と。

開かずの間がいくつもあったのは、過去のことだった。

最後に残された場所は、地上ではなかった。

この屋敷を支える根だ。

湿気が肌にまとわりつく、薄暗い地下であった。

屋敷の地下、その地にひとが足を踏み入れたのは、何百年ぶりだろうか。

光のなかったこの場所に、菊乃が薪を各所に置いて火を点けていく。火を結ぶと六芒星になっている。部屋の明かりだけでなく、呪術的な意味もあるのだ。

地鳴りがして、空気が恐怖するように震えた。

「久しぶりだなア、カツヤ」

男の声が響いた。酷く唄れた声だったが、芯は強く狂気を孕んでいる。

「俺はあんたのことを知らない」

「ここ数日か、おまえのを感じてたぞ。カツヤ、カツヤ、カツヤ、カツヤッ！」

獣 それ以上、此の世の者とは思えない咆哮。

その者は鎖に繋がれていた。金属ではない紙で編まれた鎖だ。弱い紙でありながら、それはこの怪物を捕らえ続けていた。

元はヒトであった。今は骨と皮だけになり、土気色をした木乃伊のような存在。肉体からは力を感じられない。しかし、眼や内からは、凄まじい鬼気を放っているのだ。

怒り、憎しみ、孤独。

幾星霜の月日の内にその者が内包する力は強くなっていた。

今までここに封じられていたのも奇跡に近かった。

切っ掛け 切っ掛けさえあれば、封印は解かれる。

その切っ掛けこそが“克哉”だったのだ。

呪文の書かれた紙の鎖が黒い炎に焼かれる。

思わず克哉は後退りをした。

「肌が焼かれそうな鬼気だ。こんな凄まじい妖力を浴びたのはじめてだぞ」

「あのころの私とは違いますわ。克哉さんは下がっていらした」

車椅子が押されて静枝が前に出た。けれどその身体は拘束されてまま、自由を奪われている。

地面がひび割れた。

封印が解かれ、骨と皮だった躰が、筋肉質に隆々と盛り上がっていく。その者は片手でヒトの首をへし折るだろう。その牙

はひと噛みで虎を仕留めるだろう。その眼は見つめられただけで、気の弱い者は死に至るだろう。

かつてその者は賊の頭領であったが、今や鬼人。

ヒトが鬼と化した姿。

「おれがなにをした？ カツヤ、おまえにはよくしてやっただろう。なのに、この仕打ちはなんだ？」

「だから俺は知らん。知らんが、退魔師としての仕事はいつも通りする。あんたが何者でもそれは変わらない」

克哉は短剣を握った。呪文の刻まれた魔導具だ。

魔力、妖力、巫力、呼び名はいろいろとあるが、それらは精神と精神の勝負に用いる。つまり相手が物理的な存在ではない場合に直接的な攻撃を与えることのできる力だ。

目の前にいる鬼人は、妖力と腕力を備えた存在だった。すでに克哉は敵の妖力に当てられてしまっている。たとえ克哉が妖力で優っていたとしても、筋骨隆々の巨人相手では肉体的に歯が立たない。

正攻法では克哉に勝ち目はないのだ。

克哉は地面を蹴って相手に飛び込んで行った。

武器は短剣。攻撃距離が短く、それだけ危険に晒されることになる。

だが、それは罠だった。

隠し持っていたなにかを克哉が投げた。それは拳に収まるほどの物だったが、一瞬のして鬼人を被う蜘蛛の巣と化した。黒い網縄だ。

網の中で藻掻く鬼人。

その機会を見逃さず克哉は短剣を握り直した。しかし、ぞつと寒気がして後ろに飛び退いたのだ。

鬼人の爪が空を搔いた。間一髪で克哉は本能的に躲けたのだ。網縄を破つて鬼人の太い腕が出ている。

克哉は眼を剥いた。

「ご先祖様の髪で編んだ縄だぞ、なんて妖力だ！」

網縄を引き裂いた鬼人はすぐそこまで迫っている。逃げなくては殺される。一撃でも鬼人の攻撃を受ければ、躰が引き裂かれるのは必定。

世界が軋むような悲鳴があがった。

静かな瞳をした菊乃の手には錠。

ぼつんと残された車椅子。

天井に巨大な影が張り付いている！

八本の長い脚。

まるでそれは……しかし、そこにある顔は女。

いつの間にか克哉の横に立っていた菊乃が囁く。

「どうか、目をつぶっていてください」

その声には愁うれいが含まれていた。

克哉は静かに瞳を閉じた。それが危険な行為なことはわかっていた。だが、静枝の願いだ。

すぐに聞こえてきたのは猛獣の悲鳴。

骨の折れる音が聞こえた。

克哉は汗ばむ拳を強く握り、脛が痙攣するほど目を強く閉じ

た。

ばり……ぐしゃ……がり……

やがて聞こえてきたのは咀嚼音。

地下室に腐臭が漂った。

微かにすすり泣く声が聞こえた。若い女の声だった。物悲しい声だった。

克哉は胸を締めつけられながら瞳を閉じ続けた。

その少女は屋敷の敷地内の中にいた。

しかし、もっとも懐かれているのは瑤子だが、その一日の行動の大半は知られていない。

まるで風のような少女だった。

その少女は突然この屋敷に現れた。瑤子に話によれば、あの鳥居の傍で見つけたのだという。素性は不明だが、名はるりあというらしい。

夜が深くなりはじめると、るりあは姿を消す。決して屋敷には近づかない。いったいどこを寢床にしているのか？

広大な庭の片隅に鳥居がある。その先には祠があった。ずいぶんと昔からある祠だ。

昼間でも中は暗い。夜ともならばなおさら。洋燈などがなければ、奥まで辿り着くことはできないだろう。

克哉と静枝が当主の間で会うよりも数時間前、るりあは寢床である祠に帰ってきていた。

少女は明かりを持たず、その眼だけを頼りに奥へと歩いて行

く。ヒトには見えない祠の中が見えているのだ。

最奥に辿り着いたるりあは近くにあつた小石を拾い上げた。

「だれだ？」

警戒した声音だ。

静かな暗闇だった。

ヒトの目ではその暗闇の中になにがあるうと見えない。

ふっと気配がした。

「警戒しないで、私はあなたに嫌なことはしない。名前は……

私には名前がないの。存在のしてないモノには名前なんてない

でしょう？」

少女の声だった。一見して柔らかい花咲く春のような声だが、
芯はしっかりとしている。

るりあはなにかを握った。それは少女が差し出した手だ。

小さな手だが、るりあよりも大きい。

るりあはその手に鼻を近づけ、よく匂いを嗅いだ。

「あいつの匂いがする」

「あいつ？」

「上に棲んでる男だ」

「うふふ、鼻がいいのね。あのひととはいつしよに住んでいた
から」

まだるりあは嗅ぎ続けている。そして時折、不思議そうに首
を傾げるのだ。

そつと少女の手が引かれた。

「ほかに行くところがないの。いいでしょう？ 今日はこちらに

泊めて。ううん、もしかしたらしばらくここにいることになるかも」

るりあは頷いた。

この屋敷では瑠子にしか懐いていないのに、この者には心を許したのだ。

今日は七歳になつた美花が屋敷に帰ってくる日だ。

叔父の家に預けられていた　とされている。

屋敷の正門に姿を見せたのは、美花ただひとりだった。少女がひとり歩いて来られる場所ではない。

美花を出迎えたのはたったひとり。菊乃のみ。

「お久しぶりでございます。お疲れかと思いますが、静枝様がお待ちしております」

「はい、もうへとへとです。麓ふもとの里までは叔父様に送っていただいたのですが、この山道は歩いてきたので」

すでに菊乃は先を歩いていた。慌てて美花はあとを追う。

「あの、待ってください」

「……………」

「お母さまやお姉さまは元気ですか？」

「会えばわかります」

「そうだ、瑠子さんは？」

「彼女はなにも変わっておりません」

庭は広く屋敷までの道のりは長い。

だんだんと菊乃と美花に距離が出はじめた。菊乃の歩調は変

わっていない。美花の足取りが重くなっているのだ。

「菊乃さん……屋敷の雰囲気が変わりましたよね？」

「さあ、わたくしにはわかりかねます」

静かに、気配を殺したように、屋敷はただそこに佇んでいる。

母も、双子の姉も、まだその姿を現さない。

屋敷はまるで死んでいるようだ。

それは屋敷の中に入ってからもうそうだった。異様に静かなのだ。

モノどもはただ息を潜めているだけなのか、それとも……？

そんな静寂を破る騒がしい足音。廊下を駆ける幼い足音だ。

床はとても音を響かせる。

姿を現したのはるりあだった。

突然の幼女を美花は躲すことができず、ぶつかると思った瞬間、るりあが急に足を止めたのだ。そして、そのまま逆方向に向かつて駆け出した。

少女の慌てた悲鳴がした。

「きゃっ」

るりあを追ってきた瑶子の声だった。

瑶子は菊乃といっしょにいる見覚えのある顔に気づいたようだ。

「あっ、美咲さまごめんなさい。るりあちゃん待ってえっつ！」

深く頭を下げて瑶子は姿を消してしまった。美花と美咲を間違えたのだ。

再び歩き出す菊乃。向かう先は当主の間。

「失礼いたします。美花様をお連れいたしました」

と、菊乃が先に入り、続いて美花も部屋に足を踏み入れた。

息の飲む音が聞こえた。

この部屋には鬼気が渦巻いていた。

すでに部屋にいたのは静枝。

そして、美咲。

美咲は冷たい眼差しを美花に送った。口元は笑みを浮かべている。

「お帰りなさい美花」

「はい、ただいま帰りました。お母さま、お姉さま、お久しぶりです」

正座をして頭を下げた美花を見下ろしている静枝。彼女は高い位置にした。

何重ものベルト、そして鎖によって拘束され、車椅子に乗せられている。その片眼には真新しい眼帯。静枝は焦点の合っていない目で天を仰ぎ、頭をゆらゆらと揺らしていた。

「会いたかったわ美花。私の可愛い可愛い娘。そう、食べてしまいたいくらい愛する娘だわ。さあ、もつとこちらへいらっしやい美花、美花、美花」

美花はひざを浮かせて前へ出た。

「もつとこちらへ」

さらに美花は促され近づく。

「手を貸して頂戴、私は美花に触りたくても、このような状態

ではなにもできないわ。さあ、手を伸ばして、私の頬に触れてみて」

言われるまま美花は手を伸ばし、静枝の頬に触れた。

瘦せこけた頬。肌は酷く荒れ、体温はほとんど感じられない。まるで死に向かっているような顔。

「傷にも触れてちょうだい」

顔半分を被う火傷の痕。美花は指先でその痕に触れた。

「あ……」

と、喘ぐような声を漏らした静枝。

「そう、そのまま……眼帯にも触れてくれるかしら」

美花の手は震えていた。その指先でそつと眼帯に触れた。

瞬間、静枝がもう片方の眼を剥いた。

「この眼はくれてやったわ。代わりに私は心の臓を喰らってやった。きゃはははははは！」

狂気。

口を大きく笑う静枝に驚いてか、美花は全身を震わせて腰を抜かし後ろに下がった。

そのようすを見て美咲は不気味にほくそ笑んでいる。

静枝は頭をゆらゆらさせながら天を仰ぐ。

「さあ、戯れはおしまいよ。なぜ美花が本家に戻されたか、理由は言わなくてもわかっているわよね。そつ、生き残ることができるのは片割れのみ。殺し合いなさい、そして相手の肝を喰らうのよ！」

合図は突然だった。

美咲が隠し持っていた短刀を抜いて、美花に襲い掛かったのだ。

肌を刺す殺気。

「死ねーっ！」

鬼の形相をする美咲を前に美花はたじろいだ。

「なにをお姉さま！」

短刀は美花の腕を掠めた。

傷が浅かったのか血は出なかった。

刹那、美花は憎悪に満ちた瞳をした。が、すぐに瞳を潤ませ怯えた表情になった。

時を同じく、静枝は冷静な眼光を光らせていた。だが、こちらもすぐに眼を泳がせ宙を仰ぐ。

刃を再び向けられた美花は、背を向けて逃げ出した。

目頭目尻が切れるほど眼を剥いて静枝が叫ぶ。

「追うのよ、すぐに追って殺しなさい！」

無言で美咲は美花のあとを追った。

当主の間に木霊する嗟い声。

女の嗟い声は屋敷中に響き渡ったのだった。

夕暮れの中、息を切らせながら美花は屋敷の外まで逃げてきた。た。

屋敷の敷地を囲う柵は高いが、足をかけて登れないこともないだろう。

美花は柵の竹に足をかけた。

ぼきっ。

弱くなっていた竹が折れ、片足が吸いこまれるように落ち、そのまま美花は状態を崩して転んでしまった。

ぎよっと美花は眼を剥いた。

躰が引きずられる。

砂塵を巻き上げながら美花の躰が、足を引つ張られるように洞を引きずられる。

すぐに止まったが、柵は遠ざかった。

「はあ……はあ……」

息を肩で切りながら立ち上がろうと地面に両手をつき、顔を上げた先に 美咲が迫っていた。

すぐに逃げようとした美花に声がかかる。

「待って、美花を傷つけるつもりなんてなかったの。演技のもりが手元が狂ってしまっただけなの、許してちょうだい！」

美咲は追うことをやめて足を止めている。距離を保っているのだ。

それを確認した美花は足を止め、いつでも逃げ出せるように、背を向けたまま顔だけを美咲に向けた。

「どういうことですか？」

「お母様は狂ってるわ。姉妹で殺し合うなんて馬鹿げてる。あんなの迷信だわ、私は信じていない。美花は私にとって、ただひとりの妹なのよ」

「お姉さま……」

心に深く感じたように呟いた。

自然と二人の距離は縮まっていた。向かい合う双子は瓜二つ。美咲は鞘に収まっている短刀を差し出す。

「美花が持つていて。私が美花に危害を加えなくても、もしかしたらお母様が……」

「まさかお母さまが……そんな」

「自分の娘たちに殺し合いをさせるような外道よ、やりかねないわ。だったらこちらからやるしかない。そうよ、お母様を殺すのよ！」

美咲の眼は血走っていた。

動揺した素振りを見せる美花。

「そんなこと……そんなこと……できません」

「二人ならできるわ。……まあいいわ、考えておいて頂戴。お母様が痺れを切らす前に」

短刀を手渡すと、美咲が足早に去っていく。

姉妹が殺し合いをせずによいところを見られるのは不都合だ。

しかし、すでに見られていた。

屋敷の屋根のあたりでなにかが微かに輝いた気がする。あまりに一瞬で気づく者などいないだろう。それはレンズの反射だった。

屋根裏部屋の小窓から双眼鏡を覗かせていた克哉。会話は聞こえなかったが、一部始終を見ていた。美咲が短刀を美花に手渡した場面もだ。

「さて、と。どうしたもんかな」

屋根裏部屋を静かに歩き、足下に書かれた数字を確認すると、克哉はそこにある穴を覗いた。穴の真下は当主の間だ。

車椅子の静枝。そして、もうひとりの女が部屋にいた。慶子だ。

「美花さんが帰ってきたんですって？ まだ会ってないのだけれど、どこに行ったのかしらねえ」

「さあ、もう二度と会えないかもしれないわ……うふふ、きゃはは」

壊れた笑い声が響く。

ふっと慶子が天井を見上げた。

胸を鷲掴みにされるほど驚いた克哉だったが、その場を動かず穴から眼を離さなかった。今動いては危険だ。

すぐに慶子は顔を下げた。

「気のせいかしら……それとも鼠かしらね。この屋敷には珍しい」

そして、慶子は部屋を出て行く。

「美花さんを探してくるわね」

ひとり部屋に残された静枝が、しばらくしてから天井を見上げた。静枝は克哉の存在を知っている。だが、何事もなかったように顔を下げた。

ほっと溜め息をつく克哉。

「そう言えば腹が減ったな」

安心して腹が空いてきたようだ。時間も頃合いである。

克哉は別の覗き穴まで移動することにした。今度は台所だ。

覗く前から美味しそうな匂いが香ってきていた。煮物だろうか、醤油の香りがする。

台所では菊乃と瑤子はいつものように働いていた。日常どおりの行動。特に変わったことはしていない。指が五本ある腕をぶつ切りにしているいつもの光景。少し違つとしたら、配膳が一人分多いことくらいだろうか。

白米と味噌汁と山菜、それに謎の生肉を菊乃はおぼんに乗せた。そして、それが当然というように勝手口から出て行く。

その背中に瑤子が声をかける。

「ちよつと待つてください！」

味噌汁を揺らさずに菊乃が振り返つた。

「なんでございますか？」

「これもお願いします」

おぼんに瑤子は柿を乗せて、にっこりと笑つた。

と、思つたらすぐに瑤子は不思議そうに首を傾げた。

「あれ？ いつもより多くありません？」

「……………」

返事をせずに無表情のまま菊乃は勝手口を出て行く。

向かう先はどこか？

菊乃は鳥居をくぐつた。

向かう先は祠だ。

祠の入り口で菊乃は足を止めた。

「お食事をお待ちしました」

と、声をあげてからおぼんを地面に置くと、早々に立ち去る。

菊乃の背後に気配がした。

陶器が微かにぶつかる音。

「少ない」

不満そうな幼女の声。

菊乃が振り返るとるりあがおぼんを持って立っていた。

「そうでございますか、ならこれで」

隠し持っていた梨を菊乃はおぼんに乗せた。

仏頂面だった幼女が、無邪気に笑って祠の奥へ姿を消す。

微かだが菊乃は微笑んだ。

そして、何事もなかったように屋敷に戻っていくように思われたが、足が止められた。

菊乃の顔が向けられた先には美花が立っていた。

近づいてきた菊乃に気づいて顔を上げた美花。その瞳は潤んでいた。

「……菊乃さん」

「どうかなさいましたか？」

「いえ……なんでもありません」

「もうしばらくすると夕餉（ゆうげ）になります。それまでお部屋でお休みになられては？ 部屋は昔となんら変わっておりません、もうお入りになられましたか？」

「……いえ……夕餉……えっ」

美花は明らかに言葉を詰まらせて見せた。

この屋敷の出来事を菊乃は見えてきた。姉妹の殺し合いも何度も目にしてきただろう。当主の間の前の廊下に控えていた菊乃

は、逃げる美花と追う美咲の姿も見ていた。

にも関わらず、菊乃は何事もなかったようにしていた。夕飯の準備をして、部屋で休むことを勧め、殺し合いなどないように淡々としている。

美花が眉尻を下げて尋ねる。

「夕飯はやはりお姉さまもいつしよなのでしょうか？」

「はい、昔も家族三人で食卓を囲んでいたではありませんか？」

「菊乃さんはご存じなのですよね？ わたしとお姉さまがどのような関係にあるか？」

「はい、一族の仕来りでございますから」

菊乃の声にも表情にも、感情が伺えなかった。

美花は背筋をぞつとさせた。

「知っていて……今日は自室で夕食をとります。部屋まで案内してただけませんか？」

「かしこまりました。では美花様のお部屋まで」

「まったくお食事には手を付けていないみたいですよ」

「それは困ったわね」

廊下が話しているのは瑤子と慶子だった。

「あたくしが少し様子を見てきましょう」

と、慶子は瑤子と別れ美花の部屋に向かった。

廊下に置かれている夕食。まったく手を付けられていない。

目の前の部屋は美花の部屋だ。

慶子はふすまを開けた。

「おじゃまするわよ」

声と同時に入ってきた無頼者に美花は酷く驚いた顔をした。

「け……慶子……さん」

「久しぶりね、なかなか挨拶に来てくれないから、あたくしのほうから来てしまったわ」

慶子はぐつと美花に近づき、その距離は鼻と鼻が付きそうなほどだった。

息を呑み込んで美花は躰を震わせた。

「挨拶はすみませんでした……いろいろあつて」

「でも食事は摂らないと元気が出ないわ」

艶めかしい音を立てながら慶子は舌舐りをした。

「ひっ」

小さな悲鳴をあげて美花は一気に部屋の隅まで後退り、壁に背中を強くぶつけて止まった。

悪戯に慶子はほくそ笑んだ。

「あたくしはあなたの味方よ、わかっているでしょう？　こんな屋敷にいては疑心暗鬼になるのも無理はないわね。そうだ、湯でも浴びていらっしやい。憑きもの落ちるかもしれないわ」

「……………」

美花ののどが大きく動き、唾を呑み込む音がした。

「そ、そうします」

「懸命な判断だわ。着替えなどは瑠子さんか菊乃さんに運ぶように言っておきましょう」

慶子は笑った。

空気が冷えたように感じる。

美花は脇目も振らず部屋を飛び出した。

すぐに廊下でつまずいて床に手をつけて倒れた。声もあげず、

美花はすぐに立ち上がって、再び駆け出す。

その背中を慶子はいつまでも眺めていた。美花が廊下の闇に消えるまで。

脱衣所の籠かごに瑤子は寝衣を手拭いを入れた。

「着替えを置いておきますね」

「ありがとうございます」

風呂場から美花の声が返ってきた。

桶の湯を頭から浴びた美花。つぶっていた目元の水を拭おう

としたとき、背中に生温かいなにかが触れた。

「ひっ！」

悲鳴をあげて美花は崩れるように倒れた。

「だ、だれ!？」

「私よ、美咲よ」

「お姉さま!？」

急いで目元を拭い、開けた視界で美花は美咲の姿を確認した。

一系まとわぬ姿でそこに立っている瓜二つの少女。

「昔はいつもいっしょに入っていたわね」

美咲は微笑んだ。

それは昔のことだ。今はあくまで殺し合う仲。にも関わらず

美咲は堂々と浴室に入ってきたのだ。

急に美咲は訝いぶかしんだ。

その視線は美花の胸に注がれている。

瓜二つの双子のほすが、そこだけが違った。

「どうしたの……それ？」

美咲の声音には憎悪が含まれていた。それとも怒りだろうか。

「これは……」

と、囁きながら美花はその傷痕に手を触れた。

胸のちよūd真ん中。切り開かれ、縫い合わされたような手

術痕。古そうな傷だ。

「心臓の手術を……」

「心臓ですって？ どうして、なぜ、病気かなにか？」

怪訝そうに美咲が詰め寄る。

美花は両手で傷痕を隠しながら尻をつけたまま後退る。

「心臓の疾患で……その……」

「私の心臓はなんの問題もないのに？ 私たち双子なのよ？」

どうしてあなただけ？」

「どうしてって聞かれても……病気まで同じなんてことは……」

「……」

「見せなさい、触らせて、あなたの心臓の音を聞かせなさい！」

「……」

伸ばされた美咲の手を振り払って、美花は風呂場を飛びだそ

うとした。

だが、美咲は逃がさない。美花の華奢な腕を掴んで、振り回

すように自分に引き寄せた。

「待ちなさい！」

「きゃっ！」

体勢を崩した美花が足を滑らせ転倒した。

鈍い音がした。

浴槽に後頭部を打ちつけて美花が気絶してしまった。

まったく動じず、美咲は冷笑を浮かべ美花を見下していた。

「呆気ないわね。嗚呼、つまらない」

そして、美咲は風呂場を静かに出て行った。

夜が更ける。

丑三つ時。

巨大な影が廊下を通り過ぎた。

その影を見送って、小さな影は息を殺しながら、静かに静かに廊下を進んだ。

静かにふすまが開けられる。

盛り上がっている掛け布団に手を掛けた。もう片手には鈍く光る短刀。

美花は狂気の形相で掛け布団を剥ぎ取ったのだった。

だが、そこには丸められた座布団。

「いないだど!？」

美花は背筋に鬼気を感じて振り返った。

怖ろしいほど妖艶に微笑む美咲の姿。

肉切り包丁が振り下ろされた。

眉間に刃を受けて美花はうづくまつた。

「ぎゃあああつ、おのれおのれおのれ糞餓鬼がつ！」

傷は浅くなかったが、血は一滴も流れない。

なぜならこのモノには血が通っていないからだ。

美咲は容赦なく肉切り包丁を振り下ろす。何度も何度も、機械的に美花を切り碎いていく。

「ひいいいつ、痛い、痛いいつ！」

「死人なのに痛いだなんて不思議ね、うふふ」

ずたずたに美花の顔が破壊されていく。

指が散らばった、腕が落ちた、足が飛んだ。

腹から内臓が崩れてきた。

半ば肉塊にされながらも美花は動いた。驚のように鋭い爪で美咲の顔を抉ろうとしてきたのだ。

しかし、その手も切り飛ばされた。

「ぎゃあああつ！」

「あんたなんて死ねばいいわ。何度でも何度でも死になさい。

美花の敵よ！」

「うおおおつ、知っていたのか、おれが入れ替わっていたことに！」

「だつて美花は私の中にいるのだから。すでに私は美花を喰らっているの、その肝をね」

「くそおおおつ、なんて怖ろしい奴らだ。この屋敷の奴らは狂つてやがる！」

肉塊が蠢く。その中に浮かび上がった男の顔。

化け物は触手のようなもの伸ばして美咲を締めようとしてきた。

肉切り包丁が触手を断つ。

しかし、その触手は無限の地獄を体現するように、いくつもいくつも伸びて、美咲をなんとしても捕まえようとしてくる。

「きゃっ！」

ついに美咲の腕が触手に捕まった。

肌が焼ける。触手に掴まれた肌が焼かれている。

突然、押し入れが開き、中から黒い綱縄が蜘蛛の巣のように広がった。

煌めく短剣が美咲を捕らえていた触手を断った。

現れた男を見て美咲は驚く。

「だれ!？」

「正義の味方って奴ですよ、美咲お嬢さん」

綱縄に捕らえられた肉塊が呻く。

「才オ、カツヤ……謀ったなカツヤ……許さんぞ……呪い殺してやる」

「そうだよ、俺はおまえさんを利用した。美花お嬢さんに取り憑きやがったおまえを使役したんだ、すべて終わったら自由にしてやると約束してな。昔からそういう約束だつたらしいからな」

「カツヤめ、おれたちになんの恨みがある……毒を盛って殺し、使役までして苦しめるなど、人間のすることか！」

「それは俺の知らない克哉だ。けど、その後始末は俺がする。」

「じゃあな、おまえさんが本当の最後だ」

浮かび上がっていた男の眉間に克哉は短剣を突き刺した。

そして、それはただの肉塊と化した。

かつて屋敷には悪霊たちが封じられていた。ひとの道を外れて毒殺された外道たちの成れの果てだ。そのすべてがついに此の世から消えたのだ。

一つの呪いが解かれた。

部屋に漂う腐臭。

廊下から大きな気配がする。

「場所を変えよう」

と、克哉が押し入れの中に入っていく。

「あなたはだれなの？」

尋ねた美咲に克哉は柔和な笑みを浮かべた。

「君の遠い血縁さ。さあ早く、掃除屋がこの部屋に来る」

「どこへ？」

「この屋敷には屋根裏部屋がある」

「知らないわ、そんなもの」

大きな気配はすぐ部屋の傍まで来ていた。

二人は急いで屋根裏部屋に上がった。

ひとが住めるように家具が置いてあることに、美咲は疑問を感じずにはいられなかった。

「いつの間に？」

「ずっと昔からさ」

「わからないことだらけだね。あなたは何者なの？ 美花に成

りずませていたアレはなに？」

「一族とこの屋敷の呪縛を解こうとしている者。まあ本業はルポライターなんですけど。ところでアレが美花さんじゃないっていつから気づいてたんだい？」

「ひと目見たときから。美花が死んでいるのは前から気づいていたから」

「やっぱりそうか」

美咲の行動はだれかに教えられたものではなかったのだ。

ひと目見たときから。当主の間で美花を刺し殺そうとしたのは本気だった、し損じたのだ。そのあとはすべて演技。味方のふりをしつつ美花を追い詰め、最後は美花から仕掛けてきて畏にはまった。

「あの美花の躰は本物のものでしょう。心臓の傷を見て、すべてが確信に変わったわ」

「それについてはすまないことをした。もう手遅れだったんだ、だからそうすることにした」

「私に美花を喰わせたのね」

場の空気が一気に冷え込んだ。

克哉は深く頷く。

「そうだ」

「ある日を境に美花を躰の中に感じるようになったわ。それでお母様の話を思い出したわ。姉妹で殺し合い、相手の肝を喰らわなければ十歳で死んでしまう。だから美花を殺しなさい、殺しなさい、殺しなさいと頭が割れそうなほど普段から言われ

ていたわ。私は信じていなかったけれど、自分の中に美花を感じたとき、本当だったのだと知ってしまった。そして、おぼろげに美花の死を悟った」

気丈な顔をしている美咲だったが、その瞳からは静かに雫が零れていた。

克哉は啞えた煙草に火を点けた。

「美花さんは三歳のときにこの屋敷を出てすぐか、その前後か詳しいことはわからないが、あの鬼に躰を乗っ取られたんだ。その鬼は代々この屋敷の各部屋に封印されていたうちの一人だ。どうやって封印を解いたのか、なんの理由があつて美花さんに取り憑いたのか、俺に使役されてもそのことは口を割らなかつた……というより、あの苦しみ具合を見ると、言ったら地獄に落とされるって感じだったな。つまり、本当の黒幕がいるんだろっよ」

「黒幕？」

「目星があつたが違った。鬼たちのボスかと思つたんだがな。だから本当にいるかどうかわからないさ。ただ藻掻いても藻掻いても絡め取られるっていうのかな。これまで君の一族は何度も呪いを断ち切ろうとしたが無理だった。俺も含めてね」

「あなたはどんな呪いにかかつているの？」

「それは難しいな。呪いにかかることが決まつてるいる呪いでいいのか。簡単な話が、君たち一族の呪いを解かないと、俺も呪われるんだ」

詳しい説明をしなかつた。できないというほうが正しいかも

しれない。

克哉の一族は代々ある目的を持っていた。はじまりは“菊乃”と名乗った少女がもたらした。退魔師の家系に育ち、先祖から口伝されてきた秘密を克哉も聞いて育った。

それでも克哉は懐疑的であった。気持ちが変わったのは、先祖から受け継がれていたとされる古い手紙を受け取ったからだ。克哉は驚いた、その手紙は自分が自分に宛てたものだったからだ。それでもにわかには信じがたい。

そして、菊乃が克哉の前に現れた。克哉が高校生のところだった。

菊乃は六歳くらいに見える少女を連れていた。

この子を預かって欲しい。

名は静香。

引き取られた静香は克哉と分け隔てなく育てられた、つまり、退魔師として仕込まれたのだ。

七歳になった静香は菊乃に引き取られ、再び屋敷に帰っていた。それから数年後、克哉もこの屋敷に来た。

この屋敷にもう“静香”はいない。

「呪いを解く糸口はあるひとが残してくれた」

呪いが解けるとは喜ばしいことではないか。なのに克哉は哀しそうに囁いたのだ。

美花は克哉の瞳を見つめていた。その瞳になにかを感じている。

「あなたの目、美花に似ているわ……いいえ、私にも。そして、

お母様も時折そんな目をしている」

「静枝さんか……そうだな、詳しい話を君にするなら、彼女には話をしてもらったほうがいいだろう」

「嫌よ、お母様は狂っているわ。あんなひととともに話なんてできるわけがないわ！」

「君は静枝さんの目に気づいているの？」

「……………」

「とにかく行こう」

二人は屋根裏から当主の間に向かった。

しかし、静枝はいなかった。

屋敷の中は完全に静まり返っていたのだった。

月が嗤っていた。

冷たい風は異様な湿気を含んでいる。

その女は髪を靡かせ、屋敷の屋根に立っていた。

「なにか用かしら？」

慶子は不気味に微笑みながら振り返った。

その先に立っていたのは、強ばった顔をした静枝。

「貴女を殺しに」

脅迫した静枝のほろが額に汗を滲ませている。

禍々しい。

慶子の周りで渦巻く不穏な空気。

「あたくしたち友達でしょう？」

「わたしを孕ませたのは誰か……おぼろげな記憶、おぼろげな

幻影」

「なんの話をしているのかしら？」

「人間をやめて鼻が利くようになったわ。人間でないモノを嗅ぎ分けられるようになった。そして、わたしは思い出した……

悪魔の顔を！」

にやりと慶子が嗤った。

「なんの話をしているのか、さっぱりわからないわ」

「一つだけ聞かせて頂戴。美咲と美花は誰の子？」

「悪魔の子」

ざわざわざわ……静枝の肌が粟立った。

殺気。

膨れ上がった狂気が爆発して、静枝の躰を突き破り八本の長い脚が飛び出した。

「美咲と美花はわたしとお姉さまの子よッ！」

巨大な蜘蛛の影が月に描かれた。

「ええ、悪魔の子なんて嘘よ。あれは正真正銘、あなたの子よ」

その言葉を聞いた静枝の動きが鈍った。

カツと開かれた慶子の眼はまるで蛇。

白い月を背にして飛び散った紅い血。

いったいなにが起きたのか？

口元から血を零した静枝は穏やかに微笑んでいたのだった。

「キヤアアアッ！」

甲高い女の悲鳴が早朝から響き渡った。

場所は屋敷の外だ。おそらく玄関先。

菊乃は足音を響かせながら廊下を駆ける。

開かれたままになっっている玄関先には、瑠子が眼を剥いて立ち尽くしていた。

彼女はいつたいなにを見て固まっているのか？

血の気の失せた蒼い顔。瑠子ではなく、そこにあつた首だ。

静枝の生首が玄関先に置かれていたのだ。

「お母様……ッ！」

遅れてやって来た美咲が絶句した。

不気味なことに、生首は魔法陣の上に置かれていた。星を模様を用いる凶形を日本の陰陽道にもあるが、ここに描かれたものには得体の知れない文字が描かれている。この書式は和語や漢語というよりも、洋語に見えるような気がする。

最後にやって来たのは慶子だった。

「なんてこと、静枝……が……なにがあつたの……おそろしい、おそろしいわ！」

怯えたように慶子は喚いた。

このとき美咲は冷静に周りの顔を確かめていた。

取り乱し怯えた慶子。

眼を剥いたまま固まっている瑠子。

無表情で静かに佇む菊乃。

そして、屋敷の物陰から視線を感じた。

美咲がそちらに目を遣ると、逃げていくるりあの後ろ姿を見

えた。

「いつただれが……？」

呟いて美咲はうつむいた。

事故では決してありえない。静枝は殺されたのだ。

美花にとって、『何者に殺されたのか？』という疑問は、以前であれば愚問であった。この屋敷は得体が知れず、なにが起きてても、理由はわからずとも、それが当たり前だったからだ。

過去にも人間の躰の一部が、まるで食べ残したように、廊下に落ちていたことがあった。

しかし、静枝の死は違う。

ずっと黙っていた菊乃が口を凜と開く。

「この屋敷の当主は美咲様でございます。この首の処分も、これからのことも、美咲様がお決めになってください」

無情であった。

美咲は迷うことなく、すぐに返事をする。

「首は菊乃に任せるわから適当に処分して頂戴。それから全員当主の間に集まって頂戴。私は用を済ませてから行くわ」

この場からまず離れたのは美咲だった。皆を残して足早に歩き去る。

用とは屋根裏にある。廊下の隠し扉を開け、美咲は屋根裏部屋の階段を静かに上がった。

克哉は眩しそうな目で小窓の外を眺め、煙草をふかして煙で遊んでいた。

「お母様が殺されたわ」

冷たく強ばった声音で囁くように言った。小さな声だったが、その声はとても響いた。

灰から白い煙を深く吐き出した克哉が振り返る。

「殺された……だれに？」

「あなたでしょう？」

決めつけた口調だ。けれど、本当に決めつけているわけではない。相手の反応を見たいのだ。

「どうしてそう思う？」

「魔法陣の上にお母様の首が置かれていたわ。あなたの使っていた短剣を私はしっかりと覚えていたわ。西洋のものでしょうか？ それと魔法陣の雰囲気が似ていたわ」

「俺じゃない。証明するのは難しいかもしれないが」

「そうね、私はお前のことを信用していないもの」

信じなければ、どんな証拠も意味を成さない。

克哉は煙草の火を机に押しつけて消した。

「現場を見せてくれないか？」

「もう菊乃に片付けさせたわ」

「どこで亡くなっていた？」

「玄関先よ」

「なるほど……見せつけるためか、それとも別の意味が、とにかく意図があるはずだ」

ただの殺人ならば屍体を隠す。なぜならば、屍体とは犯人に繋がる証拠だからだ。

「意図？」

「それはわからない。ただ目的はどうであれ、犯人は自分の存在を誇示する結果になった。つまり、いるんだよ、存在してるんだ。何者かが実際に存在してるんだ」

「なにを言っているの？」

「もうこの屋敷に封印されていた鬼はいない。奴らがいたら、俺は真つ先にそいつらを疑っただろう。屋敷の関係者、俺も含めてな。の犯行か、それとも外から新たな存在が来たか。この屋敷に侵入するのは容易だが、生き残るのは簡単じゃない。ましてや、あの静枝さんを殺すなんて」

まだ克哉の耳には残っている。鬼人の断末魔。骨と肉を喰らうおぞましき音。

しばらく黙した克哉は、気持ちを切り替えるように顔を上げて、美咲を真剣な眼差しで見つめた。

「この屋敷に必要なのはだれだと思う？」

「全員よ」

「美咲お嬢さんにとってはそうかもしれない。俺は君が新たな当主となった今、静枝さんはもう用済みだったと思ってる。必要なら、中身を殺して、外見だけを美花お嬢さんのように使うことだってできた。まあ、同じ手を使ってくるとも考えづらいが」

「しいていうなら、この屋敷に必要なのは、私と菊乃と瑤子よ。あとは部外者だもの」

「その部外者がじつは重要なものかもしれない」

克哉と美咲では立ち位置が違う。見えているものが違えば、

もっている情報も違う。

「そろそろ行くわ。全員、当主の間に集まるように言っている。あなたも来る？」

と、美咲は尋ねたが、克哉は手を振った。

「いや、俺はここから覗いてるよ」

そして、美咲は元来た隠し階段を下りていった。

残された克哉が静かに呟く。

「俺からしてみれば、本当の部外者はあの女先生だけだ」

当主の間に美咲が入ると、三人が正座をしていた。

「るりあは？」

美咲が尋ねると、すぐに返事したのは瑤子だった。

「探したんですけど、どこにもいなくて。やっぱりもう一度探してきたほうがいいでしょうか？」

「必要ないわ、居ても邪魔なだけなもの」

美咲は座った。その場所は静枝がいつもいた場所。静枝の時代にはなかった座布団が敷かれていた。

視線が美咲に集中する。

そして、新たな当主は話しはじめた。

「菊乃には伝えてあったけれど、妹の美花は一族の掟に従って、昨晚、私が殺したわ。そして、母も亡くなり、この屋敷の当主は私となった。まずはじめに、あなた方の処遇について話しましょう。とくに慶子先生は元々部外者、この屋敷に留まる理由はまだあるかしら。とは言っても、この屋敷からは出られない

けれど」

「あたくしは静枝さんに呼ばれてこの屋敷に来たわ。目的は家庭教師として、真の目的は一族の呪いを調べるため。どちらの目的も静枝さんが亡くなったあとと継続するものだと思っているわ。だからあたくしはこれまで通りね」

慶子の続いて菊乃が口を開く。

「わたくしはこの屋敷に仕えるのが役目でございます」

慌てて瑤子は身を乗り出す。

「はい、あたしもがんばってお仕事させていただきます！」

美咲は三人を順番に見てから、小さく頷いた。

「次にお母様の死について。みんなは誰が殺したと思う？」

挑発するように不気味に美咲は微笑んだ。

周りは凍り付いたように口を閉ざし固まっている。

美咲は声を出して笑う。

「うふふふ、本当は興味なんてないの。むしろ狂った老害がいなくなつてよかつたと思ってるわ。でも……私にも危害を加えるつもりなら容赦しないから」

鋭い眼をして美咲は三人を睨み、周りを見回し、天井を見上げ、この屋敷全体を睨みつけた。見えない敵への警告。

このとき慶子は誰にも悟られないように、微かな艶笑を口元に浮かべていた。

息をついて美咲は菊乃に顔を向けた。

「当主になつてなにかすることがある？」

「特にはございません。当主になつた者は」

障子が開かれ、男が部屋に入ってきた。

「ちよつとその話待つてくれませんかねえ」

入ってきた克哉に瑤子は驚いた。

「だれですか!？」

「ルポライターが本業ですが、まあ今は個人的な用事で参上しました」

面識のある美咲は知らない振りをしている。瑤子はあたふたとし、慶子は口元に艶笑を浮かべている。口を開いたのは菊乃だった。

「どこのどなたが存じ上げませんが、早々に立ち去ってください。ただし、この屋敷の敷地内からは出ることができませんが」

茶番だった。

「知つてますよ」

克哉は隠し持っていた護符を剎那うちに瑤子の額に貼り付けた。

意識を失い倒れた瑤子。息はある。

「驚かせてすみませんねえ。本人の前では話しづらいもんで」
人なつっこい笑みで克哉は笑い、畳にあぐらを掻いて座った。
慶子が克哉に尋ねる。

「あなた何者のですの?」

「先ほども言いましたがルポライターです。もう見られてしまったので隠しても仕方ありませんが、裏の顔は退魔師です。この屋敷のこともいろいろと調べさせてもらいました。こ

の屋敷に足を踏み入れると、出られなくなる原因もすでにわかっています」

「教えて」

と、すぐに食い付いたのは美咲。

克哉は頷いた。

「美咲お嬢さんには秘密にしてあつたみたいですがね。原因はそこで眠ってる瑤子です。彼女は蜘蛛の化身であり、この屋敷の狩人。夜更けに大きな気配を感じたことないですかね。大蜘蛛が屋敷を徘徊して、迷い人を食い殺してるんですよ。で、代々の当主は瑤子を使役してきた。そうですね、菊乃さん？」

「外の方に教えることはなにひとつございませぬ」

「なら続きも俺の口から話させてもらいますよ。たしかに普段は敷地内から外に出ることできない。けど不思議なことに、双子の一人が三歳になったとき、外に出ることができるようになりました。疑問に思っていたでしょう美咲お嬢さんも？」

「ええ、外に出られないとされながらも、本当は出る方法があると疑っていたもの。ああ、突然思い出したわ。あの日、たしか瑤子の姿を見かけなかったような気がする……なにか関係あるのかしら？」

克哉は話を少し変えることにした。

「美咲お嬢さん、もしも外に世界に出ることができたら、出たいと思いませんか？ この屋敷を捨て、一族の名も捨て、自由に生きてみたいと思いませんか？」

「ええ、だってこの屋敷の生活なんて大嫌いなんですもの。いつも

屋敷に火でも放つてやろうと思っているわ。なにかも灰になつてしまえばいいわ」

「そうですか、なら方法を教えたらすぐにもやりそうですね。でも外に世界に逃げ出しても一族の呪いは解けませんよ。あなたがあと六年もしないうちに死ぬのは変えられない」

「私があと六年で死ぬですつて！」

恐い顔をして美咲が腰を浮かせた。

「あなたのお祖母さんに会つたことはありませんか？」

黙る美咲に克哉はさらに続ける。

「生きていれば肉体年齢的には三十くらいですかね。人間の平均寿命を考えれば、曾お祖母さんだつて、曾々お祖母さんだつて、さらに曾々々、何代先まで生きてることになるんですかね。なのに誰も生きちゃいません。双子を喰らつて老化が通常の早さになつてから、およそ六年で死ぬんですよ」

「お母様はもつと長生きしていたわ！」

「そのとおり、あなたのお母さんの場合は、魔のモノと合体することで寿命を先延ばしにすることに成功したんですよ。この方法は歴代の当主を参考して編み出した方法です。歴代の当主は美花さんのように、鬼に乗つ取られてたんですよ。静枝さんの代では、鬼に乗つ取られることはなかった。その代わりに美花さんが乗つ取られてしまったわけですがね」

「美花が死んだのはお母様のせいなのね！」

「そうとも言えますがね、それは静枝さんの意図したことでも望んだことでもない。それはわかつてあげて欲しい。本当に悪

いのは取り憑いた鬼、そして……」

言葉の続きが美咲の脳裏に浮かんだ。克哉が示唆していた黒幕の存在だ。

突然、屋敷全体が大きく揺れた。下から突き上げるような激震。屋敷が軋み畳が浮いた。座っていることすらできなかつた。

このままでは屋敷が倒壊してしまうかもしれない。それほどまでに恐ろしい揺れであった。

「克哉様、美咲様、早く外へ！」
菊乃が叫んだ。

しかし、激しい揺れで這いつくばって移動するのも困難だった。

そんな揺れが突然止まったのだ。

新たな少女が現れたのと同時に。

まず口を開いたのは怪訝そうな慶子だった。

「誰？」

鋭い口調は相手を殺すほどの鬼気を孕んでいた。

そこに立っていた少女は巫女装束を着ており、歳は十歳くらいだろうか。長い黒髪、その瞳、その顔立ち、誰かに似ている。したりと克哉が笑った。

「この家の当主はまだ決まっちゃいけない。彼女こそがこの家の長女、静枝の本当の娘だ」

衝撃が走った。

「嘘よ！」

叫んだのは慶子だった。

「子供なんているわけがないわ！」

美咲も追隨する。

「そうよ、私たちを生む前に子供いるなんて、そんなことありえないわ！ 何者なのこの女！」

澄ました顔で少女は優しく微笑んだ。

「鬼頭静枝の第一子、花咲かえと申します」

その声も誰かに似ている。そうだ、美咲に、美花に似ているのだ。その姿も声も、物腰も双子の姉妹に似ているのだ。

しかし、美咲の見た目は十四歳程度、花咲と名乗った少女は明らかにそれよりも年下だ。

慶子は猛獣が咆えるように立ち上がって花咲を睨んだ。

「これのどこが長女なの、美咲よりも若いじゃないの！ それに子供なんて……ッ!？」

慶子はハッと眼を剥いた。なにかに気づいたのだ。

克哉は花咲の真横に立った。

「この子が本当に静枝の娘だと証明するのは難しい。だが証言ならできる。なぜなら俺が父親だからだ」

衝撃の連続に美咲は髪を振り乱した。

「ありえないわ、お母様とあなたが!? 馬鹿なこと言わないで！」

けれど、美咲は二人を見て息を呑んだ。並んだ克哉と花咲が似ているのだ。

克哉は少し哀しげな表情をした。

「君のお母さんじゃない」

その言葉を美咲は理解できず黙した。

克哉が続ける。

「君のお母さんは静香……だ。この屋敷の当主は、姉の振りをし続けていた静香だった。本物の静枝は俺の元でしばらく暮らし、子を産み、それからしばらくして、ある事情で命を落としたりしたんだ」

絶句した美咲は声も出せなかった。慶子も同様だ。菊乃だけが表情を崩さず、自らの意思で黙していた。

衝撃の連続だった。

克哉は煙草に火を点けた。微かに聞こえる咳き込む音。口を押さえているのは慶子だ。

構わず克哉は煙草を吸いながら話しはじめる。

「どうして命を落としたのか、それは一族の呪いに関係する話だ。老化と寿命、その要因。君たち双子を蘇らせるために、静枝は命を捧げたんだ。静枝だけじゃない、歴代の当主たちはみんなそうしてきた」

「私は嫌よ」

すぐに美咲が口を挟んできた。

「美咲お嬢さんは静香の子だが、その性格は静枝によく似ている。でも静枝は命を捧げた。静香の子のために、自分の命を捧げたんだ」

克哉は吸いはじめたばかりの煙草を、縁側に出て庭先に投げ捨てる、当主の間に戻ってきた。

「生まれる子供は死産と決まっている。当主である母は、自分の魂を分割して双子を蘇らせるんだ。類魂の概念という奴で、魂は分割することができる。問題は別にあるがゆえに、呪いが発生するわけだが。」

静枝と静香の代では、二人とも生きているという特別な状況が生まれ、静枝は静香を生かすために、自分の魂を君たち双子に捧げた。本来ならば、命を捧げた当主は、鬼にその肉体を乗っ取られ、死人として生かされることになるのだが、鬼はそのときいなかった。静香は命を捧げず、鬼にも乗っ取られず、双子の肝を喰らうこともせず、一族の流れを確実に変えた。しかし、それだけでは一族の呪いの根本的な解決にはならない。この子は俺たちの希望だ」

花咲。

克哉は花咲の頭を撫でた。

「この子は七つになる。美咲お嬢さんと同じだ。しかし、花咲のほうが若く見えるだろう？」

美咲の見た目は十四歳ほど。花咲の見た目は十歳ほど。

一族が抱えていた急速な老化が軽減されているのだ。

克哉が咳払いをして一気に話す。

「類魂というのは、一つの大きな魂の塊と考えてくれ。たとえば、静枝、静香、美咲、美花、個別の人格を備えた魂を持っていて、元は一つの大きな魂の塊から切り離された存在で、同じ集まりに属している。集まりは一つだけではなく、たとえば俺の魂が属している集まりや、女先生の属している集まりがあ

るわけだ。

次に魂魄の概念だ。魂とはこん魂たましいのことだ。魄はぼく躰の設計図だと思ってくれ。一族が欠落してたのは、この設計図のほうなんだ。双子ふたりを合わせて二十歳までの設計図しか持っていないがゆえに、急速な老化と早死にを招いてしまった。

歴代の当主たちは、ある日突然懐妊した。本当に相手が存在していないのか、それはわからないが、相手の魂魄や遺伝子、それらを受け継がず自立して子供を産んだ。二十までの設計図が延々と受け継がれていたわけなんだ」

気持ちよさそうに慶子が笑った。

「素晴らしい着目点だわ。花咲さんはあなたと静枝、二人の要素を受け継いだ子だから、呪いが薄れたわけね。双子の一人が生き残り、その一人が双子を懐妊していた状況では、絶対に生まれなかった状況ね。まさか双子が二人とも子供を産む自体が起きるなんて、一族の歴史の中では、永い長い歴史の中ではありえなかったことだもの」

新たな分岐が生まれた。

しかし、美咲はどうする？

「ねえ、私も妊娠するのかしら？ 双子を死産するのかしら？ あと六年で死ぬんでしょう？ 私の問題は解決してないわ。当主になりたいわけでもない、そんなものこの女にくれてやるわ」

立ち上がった美咲が当主の間を出て行く。誰も止めなかった。誰もあとを追わなかった。

慶子は微笑みながら花咲を見つめた。

「当主の問題はどうしましょうね。美咲さんと花咲さんに殺し合いをさせて、生き残って者が当主になるっていうのはどうかしら？」

「私が美咲さんと殺し合う理由なんてありません。双子の片割れを喰らわなくていけないのは、設計図の補完ためです。設計図を補わずに、自立妊娠すれば、老化はさらに倍早く、死も早く訪れることになりますから、一族の存続に関わります」

今でも二倍の早さで老化する。それが四倍、八倍と倍掛ければ、三年も生きられないことになる。

菊乃が気配を發した。

「当主の選定はこれまでの歴史で一度もございませんでした。資格のある者が、一人しか生き残っていなかったからでございます。例外的に静香様の例がございますが、静枝様は死んだものとされておりましてから」

「美咲お嬢さんは放棄したんだ。なら花咲が当主で問題ないだろう。一族の問題に使用人や部外者が口を挟む余地はないだろう？ 花咲と美咲お嬢さんの合意があれば問題ない」

克哉の意見に慶子がゆったりと口を挟む。

「そうね、でも花咲さんが本当に静枝さんの娘だったらの話だわ。それが証明できない以上は、当主は美咲さんよ。そもそも静枝さんと静香さんが入れ替わっていた話だって信じがたいもの」

「それはわたくしが証明いたします」

菊乃は二人が入替わっていたことを知っていた。そして、支え続けていたのだ。

髪のをかき上げて慶子が立ち上がった。

「まあいいわ。当主が誰になるうと、あたくしの目的さえ果たせれば。家庭教師として、呪いのほうは解明されてしまったけれど、うふふ」

笑いながら慶子が当主の間を出て行こうとした。が、寸前で振り返った。

「当主の儀式はするのでしょう？ 今日にも？ それとも明日かしら？ 七つのうちにしなくてはいけないのではなかったかしら？」

言葉を残して慶子は去っていった。

急に汗を流しはじめた克哉は、深い溜め息を吐いた。

「さっきの地震は警告か、それとも本気で潰しに来たのか。おそらく後者だろうな、花咲が姿を見せた途端収まりやがった。敵も様子見をすることにしたってことか？」

言葉を終えると、瑤子の額の御札を剥がした。

すぐに瑤子は目を覚まして飛び起きた。

「はっ、あたし……ええっと、どうしてたんですか？」

何事もなかったように菊乃も部屋を出ようとしていた。

「朝餉あさけの準備をいたします。瑤子さんも手伝ってください」

「は、はい！」

瑤子は克哉と花咲の顔をじろじろ見ながら、仕方がなさそうに菊乃のあとを付いていった。

屋敷は異様に静かだ。

それが何かの前触れのようにで怖ろしい。

克哉はふと天井を見上げた。

「下りて来いよ」

がたつと天井で物音がした。

この屋敷には鼠すら棲んでいない。

「仕方ないなあ」

克哉は押し入れを開け、そこから天井に上った。

屋根裏部屋にいた童女が逃げようとする。空かさず克哉は腕を掴んだ。

「鬼ごっこはおしまいだ。逃げることはないだろ、俺のこと嫌なのか？」

ふるふるとるりあは首を横に振った。

「だったら逃げるなよ。なあ、話はどのくらい聞いてた？ 理解できたか？」

別に睨んでいるわけではないだろうか、仏頂面であるりあは口を閉ざしてしまっている。眼はじつと克哉を見たままだ。

「怒ってるのか？」

「……………」

「どうしてだ？」

「……………」

「少しはしゃべってくれよ。花咲のことはもう知ってるだろ？ あれ俺の娘なんだ。でも浮気じゃないからな、まだ起きてもないことなんだから……………ってお前に言っても意味ないか」

るりあが克哉の手を振り払い、そのまま飛び出して、屋根裏から消えてしまった。

克哉は追わなかった。その小さい背中を見つめていただけだった。

「未来の俺、それとも別世界の俺は……どうしてあんなのと？」

「お父様」

声をかけられて克哉はびつくりしたような顔で振り向いた。立っていたのは花咲だ。

「これからどうしますか？」

「正直ここからが難しいところだな。ここから先はわからないことだらけだ、たぶん代々の俺が体験したことのない歴史の分岐に突入したんだと思う。一族の寿命に関する問題は道筋が立ったが、俺が過去に行くことを食い止めるすべ……というか、その根本的な原因、つまりそれが以前発生したものなのか、仕組まれていることなのか。まあおそらくは後者だろうが、なら俺を過去に送り込むなにかを仕掛けてくるはずなんだ。そもそも俺を過去に送り込んで、一族の歴史を繰り返させる理由がわからない」

「仏教には『人間は悟らなければ、何度でも生まれかわり、生の苦しみを味わうことになる。これから抜け出すには解脱し輪廻を断ち切るしかない』とあります」

「これが仏の所業と言いたいのか？ 悟りを開けば、俺は繰り返す世界から抜け出せるのか？」

「いいえ、たぶん悟らなくてはならないのは……」

花咲の瞳は澄んでいた。その中に世界を映し出している。克哉はその瞳の中に、ある面影を見た。

「まさか、そうなのか……いや、口に出してはいけない。これ以上は危険だ」

その言葉を受けて花咲は深く静かに頷いた。

たゆたうと揺れる紅い海。

その海はとても浅く、巫女装束の少女が浮かんでいた。

紅い水は少女を穢すことができなかった。その装束、その肌、その髪にすら、水の一滴も染みこむことはない。侵蝕を決して許さない。

世界を覆う黒い影が渦巻いた。

「小賢しい娘だ」

その声は童わらわのようであり、老人のようであり、男か女かもはつきりしなかった。

花咲が鋭く瞳を見開く。

目の前で「渦巻くモノ」が嗤っている。影で覆われた顔なのに、怖ろしく嗤っていることは伝わってくるのだ。

装束の上から「渦巻くモノ」は、花咲の躰をまさぐりはじめた。

「お前には三つ子孕ましてやろう。それとも五つ子にしようか。それでお前たちのやったことは泡となる。もう二度と我が眼を盗んで外のモノと交配などさせるものか」

これまでそうして来たように、“渦巻くモノ”は一族の当主を孕ませようとしている。

だが、花咲は少女とは思えぬ艶笑を浮かべ、“渦巻くモノ”をあざ笑ったのだ。

「私を孕ませる？ どうやって？」

刹那、“渦巻くモノ”が禍々しい鬼気を発した。

花咲の股が装束の上からまさぐられている。

そして、気づいたのだ。

「謀つたな！」

狂風が吹き荒れた。

“渦巻くモノ”が怒気を発している。

花咲は闇を振り払いながら凜と立ち上がった。

「ええ、私は克哉と静枝の嫡男なのです」

なんと花咲は男だったのだ。

“渦巻くモノ”が後退る。

紅い海が花咲を中心に浄化され、無垢に透き通っていく。

「ここは私の精神世界です。逃がしません」

花咲はいつの間にか手にしていた神楽鈴を鳴らした。

得体の知れない呻き声が出た。

“渦巻くモノ”が纏っていた闇の衣の一部が消失した。

まるでそれは蛇のような眼。

しかしそれは、山羊のような角。

花咲は破魔矢を構えていた。

波紋が立つ。

そして、弓が引かれ、矢が放たれたのだ！

射貫くまで刹那であった。

遅れてやってくる絶叫の波。

海が粟立つ。

“渦巻くモノ”が螺旋の渦を描きながら消えていく。

「この苦しみ何倍にもして返してやる。新たな呪いを受けるがいい、永遠の輪廻の中で苦しみ藻掻くがいい！」

邪悪な気が消えた。

静まり返る世界。

花咲の精神世界は穏やかに返ったのだった。

「起きてください花咲様！」

菊乃の悲鳴めいた声が響き渡った。

当主の間で目覚めた花咲。

世界が真っ赤に染まっていた。熱い。屋敷が燃えているのだ。

布団から飛び起きて花咲は辺りを見回した。

「いったいなにが起きたの!？」

「何者かが屋敷中に火を放ったようでございます」

「ほかの人たちは？」

「わかりません。わたくしの使命として、真っ先に花咲様のご

無事を確かめに参りました」

「……つお父様！」

花咲は天井を見上げた。

煙は高い場所に昇っていく。

「私のことは大丈夫、ほかの人たちと早く屋敷の外へ逃げてください！」

花咲は言い残して押し入れから屋根裏に上った。

やはり煙はすでに屋根裏に充満していた。

「げほげほっ」

巫女装束の袖で口元を押さえて花咲は克哉を探した。

「お父様！」

克哉はベッドの上にいた。眠っているのか、気を失っているのか、それとも……。

駆け寄って花咲は克哉を揺さぶった。

「お父様！ お父様！」

反応がない。

焦る花咲だったが、その横には冷静な菊乃が立っており、脈と呼吸を確かめていた。

「まだ生きております。今はとにかく外へ運びます」

菊乃は人とは思えぬ力で軽々と克哉の躰を持ち上げ、背中に担ぐと来た道を引き返し当主の間に下りた。すぐあとを花咲が追う。

当主の間から縁側、そこから雨戸を開ければ外はすぐそこだ。先を走る菊乃は雨戸に体当たりをした。

外れた雨戸が大きな音を立てて庭先に倒れた。その上を菊乃と花咲が駆ける。

強風が吹いた。

開かれた雨戸から屋敷の中に風が吸いこまれていく。

次の瞬間、炎が龍のように屋敷の中から飛び出して来た。

地面に放り出された克哉。

花咲が叫ぶ。

「菊乃さんッ！」

燃える華の中で菊乃の躰が溶けていく。炎に焼かれ、爛れたように顔が崩れ落ちる。泥のように特殊な肉体が溶けていくのだ。

「申しわけ……ご……ざ……」

溶けた唇から言葉が零れ落ちる。

地面に崩れ落ちた菊乃は炎に抱かれ魂も焦がされた。

屋敷の中から甲高い奇声が聞こえた。

般若の形相をした美咲が屋敷の中から飛び出してきた。髪を振り乱し、その手に持っているのは肉切り包丁。

「死ねええええッ！」

妖しく光る刃は花咲に向けられた。

刃は血を吸った。

前に突き出された花咲の手が肉切り包丁を受けていた。刃は人差し指と中指の間に入り、手首まで切り裂いていた。

重傷を負いながらも花咲は凜としていた。

「肉は断ても、この魂は断てません」

芯の強い声だった。

美咲は怯えた。眼を剥きながら口元を歪め、肉切り包丁を引き抜いて後退った。

「キイイイッ！ 美花、美花、美花一っ！」

肉切り包丁を振り回す美咲に大量の影が群がった。それは子蜘蛛だった。子蜘蛛と言えど、その大きさは人の顔ほど。十数匹の子蜘蛛が糸を吐きながら美咲に飛びかかる。

美咲は糸を切り、子蜘蛛を真つ二つに断つ。

しかし、子蜘蛛は次から次へと屋敷の中から這い出てくる。

嗚呼、炎の道だ。

身を焼かれた子蜘蛛どもが屋敷の中から波となって押し寄せてきた。

炎を纏う子蜘蛛が美咲の躰にしがみつく。

燃える燃える美咲。

揺れる炎の中で美咲は狂い躍った。

「肉は焼かれても、この魂は焼くことはできない」

美咲は艶笑を花咲に向けた。怖ろしい微笑みだった。

着物が燃え、裸体となった美咲の股から、一筋の血が太股を伝わった。

花咲は悟った。

いつしか美咲は安らかな笑みを浮かべてた。そして、炎の華の中で息絶えたのだ。

屋敷から螢火のように光が夜空に昇る。

その光景はまるで死者の魂が天に召されていくようだった。

音を立てて崩れる屋敷。

一つの世界がこの夜に消える。

そして、訪れる朝。

すでに東の空が輝きはじめていた。

花咲は克哉に駆け寄った。

「お父様！」

气道を確保して、唇を重ねる。

命を吹き込むように、息を吹き込んだ。

続けて心臓マッサージをした。

「お父様、お父様、お父様！」

胸に手を置いて断続的に押す。

人工呼吸と心臓マッサージを交互に何度か続け、ついに克哉が目覚めた。

「はっ！ はあはあはあ……静枝と静香がいた……臨死体験……か」

からからの喉で声を吐き出し、額の汗を克哉は拭った。

そして、克哉はなにかを探すように辺りを見回した。

「そういうことか！」

克哉はなにかに納得したようだが、花咲は訝しんで何事かわからない。

そして、短剣を抜いた克哉は、なんと美咲の屍体に刃を突き立てたのだ！

肉の焼ける異臭がまだ立ちこめている。

熱の残る黒い屍体の胸を切り開く。外側は焦げて炭になっていたが、中は生焼けだった。

手を血みどろにする克哉の姿に花咲は戦慄く。

「お父様なにをなさっているのですか！ 死者の肉体を陵辱するなど！」

「死の狭間で静枝と静香が教えてくれたんだ。魂の記憶は受け継がれると……もしもそうなら！」

克哉は肉の中に手を突っ込んだ。

屍体の胸から取り出される心の臓。

まるでまだ生きているような美しい色をしていた。

命の色だ。

克哉は生温かい心臓を大事に抱えて走り出した。

まだ花咲は克哉の行動を理解していなかった。けれど、ここは付いていくしかあるまい。

向かう先に鳥居が見えてきた。

るりあが立っていた。怯えた表情で洞穴の入り口から一步入ったところに立っていた。

朝日に落ちる巨大な影。

克哉の躰を謎の影が覆い呑み込んだ。上空だ。克哉の頭上になにかいる。

大蜘蛛が天から落ちてくる。

間一髪で克哉は避けて地面に転げ回った。心の臓を大事に抱きかかえながら。

「糞ツ、ここに来て敵に回りやがったか！」

すぐさま立ち上がった克哉は心の臓を花咲に託した。

「これをるりあに喰わせろ、怪物は俺がなんとかする！」

短剣を構えて克哉が大蜘蛛に飛びかかった。

花咲は父を信じて決して後ろを振り向かなかった。地面を力強く蹴り上げ、鳥居をくぐり、祠へと続く細道を駆ける。

るりあは逃げた。洞窟の奥へと逃げ込んでしまった。

朝日が差し込んでいるが、奥は深い闇の中。

構わず花咲は奥へと進んだ。

「止まれ！」

るりあの声が暗い世界に響いた。

声はすぐ目の前から聞こえた。足を止めた花咲のすぐそこにるりあがいるのだ。

「美咲さんの魂です。どうかこれを喰らってあなたの一部にしてください」

闇の中に花咲は心の臓を差し出した。

呼吸の音だけが聞こえる。

二人とも動かなかった。

ふっと花咲の手のひらが軽くなった。心の臓が消えた。

嗚呼、咀嚼音が聞こえる。

るりあが美咲の命を喰らっているのだ。おそらく血を滴らせながら、唇を真っ赤に染めながら、むしゃぶりつくって喰らっている。闇闇の中でそれを感じることができた。

「うつつ……ああ……」

突然、るりあが呻きはじめた。

驚く花咲。

「どうしましたか!？」

「ああっ……おらは……苦しい……頭が……怖い怖い……」

「大丈夫ですか？」

暗闇を手探りで花咲はるりあの躰を抱き寄せた。

「……違う」

と、呟いたのは花咲。

自分よりも大きな躰がそこにはあった。

ここにいるのは、るりあではないのか？

髪の間から生えていた大きな二本の角に花咲の手が触れた。

「あなたは誰ですか？」

「おらは……るりあ」

その声は幼女のものではなく、もっと大人びた声だった。

「おらは輪廻を彷徨っていた……繰り返し繰り返し、同じような世界を繰り返し返し、何度も何度も時間を繰り返し返し……嗚呼、また過去に戻るのか……」

洞窟の中まで響いてきた背筋を凍らす咆哮。外になにか強大な存在がいる。それも禍々しい存在だ。

突然の咆哮を聞いて、花咲は震え上がった。

そつと花咲の躰が抱かれた。温もりと安心感。まるでそれは母の胸の中。

唸るように低い声が外から聞こえてくる。

「腐った世界はもういらぬ。世界などいくらでもあるのだから。充分にこの世界は楽しんだ。我に必要なのは廻り巡る世界」

世界が揺れた。激震だ。大地の悲鳴、風の絶叫、雷鳴が轟いた。

「お父様……」

不安に駆られながらも花咲はその場を動くことができなかつ

た。

穴蔵の中で息を潜め、震えることしかできなかった。

外でいつたいなにが起きているのか、想像するだけで恐ろしい。

揺れが治まり、世界が静まり返った。

「ゆくぞ」

るりあが花咲の手を引いて外へと向かう。

暗い暗い世界から、明るい世界へ続く細道。

外からの光が差し込み、るりあの姿がおぼろげに見えてきた。凜とした女の姿。幼女から幼女へ、るりあは変貌を遂げている。

魂と魄。

美咲が持っていた設計図をるりあは“取り戻した”のだ。

外の世界には鳥居だけが残っていた。

屋敷が跡形もなく消えてしまっていたのだ。

完全な消失だった。

「お父様は!？」

人影すらなかった。

辺りを見回した花咲は愕然とした。顔を彩ったのは絶望の色。

まるでそれは丘だった。

屋敷の敷地内をぐるりと囲う巨大な蛇。その蛇は山羊のような角を持ち、自らの尾とを啜っていた。

世界を震わせる声が響いてきた。響くというのは正しくないかもしれない。それは震動ではない。音として頭の中に入って

くるのではなく、精神感応だったからだ。

《鬼女るりあは再び過去を取り戻した。つまり再び永劫廻歸の輪が繋がれたのだ》

「なにを言っているの!？」

花咲は言葉に出して問い質した。

《るりあは廻歸の齒車に囚われた存在なのだ。忘れていた過去を取り戻すことにより、時空を越える事象は発生する》

時空を越える？

まさか克哉は……。

「お父様はまた過去に行く運命を辿ったと言うこと？」

《この箱庭の世界にあつたモノはすべて過去に還つた。汝たちは力に守られた別の世界にいたために回避できたのだ。しかし我はそれを許さない》

大蛇の片眼が零れ落ちた。

それは大地を転がり、膝を抱えた人の姿になり、翁面を被つた背の曲がつた老人になつた。

「わしの永劫を守るために、るりあには廻歸かいきを繰り返してもらわねば困るのじゃ」

翁面が不気味に嗤っている。

汗すらも乾く鬼気。

本物の鬼女が翁面の老人に押されている。

「覚えてるぞ、お前はおらに反魂はんこんの法を教えた神だな？」

るりあの言葉に花咲は驚きを隠せなかつた。

嗚れ声で翁面の老人が嗤う。

「ふおおおお、いかにもわしは神じゃ」

「神……あなたは荒ぶる邪神……いつたいなんの神なのですか？」

震える声で花咲は問うた。

「元はこの山に棲む蛇であった。いつしかこの山の主となり、土地神になったのじゃ」

「なぜ神のあなたがこんな真似をするのですか？」

「神も老いる。そして、死ぬ。忘れられた神、力を失った神の運命に諍あらがいたかったのよ。あたくしは永遠に美しい存在でありたかった」

老人が女が変わっていく。

艶めかしい裸体をくねらす妖女。蛇の眼をして、頭に山羊の角を生やした慶子に変貌したのだ。そして、その片眼には蛆が湧いていた。

「卵が先か、鶏が先か、どちらが先か。はじめは偶然だった。

この廻かいき帰の世界が生まれたのはね。あたくしはこの世界に眼をつけた。永劫に繰り返す世界を維持できれば、時間を支配することができるのでないかと。これはあたくしの実験なのよ。

この箱庭は実験装置なの」

慶子は愉しそうに笑った。

壮大な実験であった。

廻る廻る小さな歯車。

花咲もその一つの歯車でしかなかった。

しかし、この装置は歯車を一つ失っても動き続ける。

「すでに多くの分岐世界が存在しているわ。あなたたちが呪いだなんだと騒ぎ、それをこの世界で解決したところで、大きな渦は廻り続けるのよ。あたくしにとって、あなたたちのやろうとしていることは、無意味でしかないの」

「無意味といいながら、なぜこんなにも干渉してくるのですか？」

鋭い声音で花咲は射貫くように言った。

るりあが慶子に鋭い爪を向け飛びかかった。

二人の躰が触れた瞬間、火花が飛び散りお互い後方に弾かれた。

牙を剥いた慶子が微かに呟く。

「干渉している……」

るりあも異変に気づきはじめていた。

「今の力は……大きな力同士がぶつかり合ったような……そして、なにか視えたぞ」

慶子の姿がいくつも視えた。違う場所、違う行動、無限にも思える慶子の姿が視えたのだ。

禍々しい邪気を発して慶子が地獄から業火を喚んだ。

「再び地獄に堕ち、輪廻を繰り返すがいいわ！」

るりあは構わず炎の中に自ら飛び込み、そのまま慶子の躰を押しえつけた。

「こいつとの繋がりを断て！ この世界はこいつで繋がれている！」

叫ぶるりあ。

花咲は理解できなかった。

数多の分岐世界。平行世界。永劫廻帰えいごうかいきの輪はるりあによって繋がれた。世界の輪を繋ぐのはるりあるりあの役目。しかし、世界と世界を繋ぐのは。

なぜ慶子は干渉する必要があるのか？

分岐する世界は別世界として存在している。別世界として存在しているのは、歯車は噛み合わないのだ。

すべての世界に同時に干渉する存在。

るりあが視た慶子は個であり全である存在。

まだ花咲は理解できずにいた。

激震が起きた。

稲妻が落ちる。

るりあるりあと慶子が歪んで見える。時空が歪んでいるのだ。二人が交わることで謎の干渉が起こっている。

「離せ、離しなさい、大変なことになるわよッ！」

甲高く慶子が叫ぶが、るりあは羽交い締めにしたまま逃がさない。

激しい音を立てながら慶子の角が折られた。

「ギィヤアアアッ！ 魔力の源を……おのれ、おのれ、お前の角もへし折ってくれるわ！」

慶子の手がるりあるりあの角に伸びる。だが、るりあは動じなかった。へし折った慶子の角を花咲の足下に放り投げたのだ。

「それで止めを刺せ！ 毒をもって毒を制せ！ ためらうなッ！」

この状況の中で、るりあは母のような優しい微笑みを浮かべた。

花咲は角を拾い上げ、全体重を乗せて慶子の胸に突き刺した。
「グガガガ……ギャアアアアツ……」

血の気の失せた顔で慶子は眼を剥き花咲を睨みつけた。

角は慶子の躰を貫通し、そしてその後ろにいたるりあの躰も。

血の花がるりあの唇から咲いた。

狂風が渦巻き、花咲の躰が吹き飛ばされた。

慶子の逆立った髪が蛇の群れに変わる。

「^{げせん}下賤な人間風情がアアアツ!!」

大地に奔る蜘蛛の巣のような亀裂。

天に現れた渦巻く空間が世界を吸いこむ。

なにもかも、なにもかも、なにもかもを吸いこんでしまう。

慶子とるりあが天に昇り渦に吸いこまれた。

さらに花咲の躰が浮く。

掴めるものはなにもなく、花咲は地面に爪を立てた。爪の間に滲む血。

しかし、花咲も為す術なく渦に吸いこまれてしまったのだ。

残されたのは鳥居。

そして、屋敷があつた敷地を囲み円を描く謎の土塊の丘。

臉の裏が眩しい。

「起きろ花咲、起きろ！」

男の声。親しみのある声だった。

瞳を開けた花咲の目の前には克哉の顔があった。

「お父……様？」

「いったいなにが起きたのか？」

起き上がった花咲は辺りの風景を眺めた。

似ていた。

しかし、どことなく違う。

自然が息吹いている。

開かれた平野を囲うような不自然な丘。

鳥居がぼつんとあり、その先には洞窟が見える。

花咲は不思議そうな顔をして克哉の顔を見つめた。

「ここは何時でしょうか？」

「俺もついさっき目覚めたばかりで、鳥居と祠はもう調べたん

だが、帰ってきたら居なかったはずの花咲が居て……時間を越

えたらしいことはわかるんだが。あの鳥居やけに新しくかつた

ぞ」

風を切る音が聞こえ、克哉の足下の地面を矢が穿った。

驚いた克哉と花咲が矢の放たれた方向を見ると、そこには角

の生えた女の影が見えた。

「おめえらなにもんだ！」

その声を花咲は知っていた。

「起点が変わったんです。これからはじまる未来の起点が違う

ものになったんですお父様！」

「ん？ なんのこと言ってるんだ？」

「起点が違うということとは、繰り返してないんです！」
矢を構えた女が近づいてくる。

「おめえら、なあにごちゃごちゃしゃべってる」
元氣そうなるりあを花咲は嬉しそうに指差した。

「ここには屋敷もない、盗賊もない、るりあさんは自由なんです！」

刹那、風を切るような音が聞こえた。それは矢ではなく鳴き声だった。

小さな蛇が牙を剥いて花咲の足に噛み付こうとしている！
矢が放たれた。

射貫かれた蛇は呆気なく死んだ。

「ありがとうございます」
お礼を言って頭を下げ、顔を上げたときに花咲は異変に気づいた。

「丘がなくなってる。大蛇が円を描くような小高い丘がなくなってる！」

「そげなもん、はじめからねえよ。おかしな奴だな」

不審そうな口ぶりであるりあはぼそりと呟いた。

るりあは花咲の顔をまじまじと覗き込んだ。

「おめえ、おらたちと同じ鬼の血を引いてんだろ？」

「わかりますか？」

「わがるとも。こっちの男は人間くせえな」

克哉は苦笑いを浮かべた。

「悪かったな普通の人間で。こいつは俺の子供で花咲だ。俺は

克哉」

るりあも名乗ろうとして、ふとおかしなことに気づいたようだ。

「なんでおらの名前知ってたんだ？」

花咲が先ほど指を差して呼んだのだ。

意味深に、少し意地悪そうな、まるで悪ガキのような笑みを克哉は浮かべた。

「そりゃ、花咲はお前さんの遠い親戚だからだよ」

「はあ？ おらの親戚だあ？」

るりあは顔をぐいっと近づけ、鼻と鼻がぶつかりそうな距離で、克哉の瞳を覗き込んだ。

「嘘付いてるようには見えねえな、人間のくせに」

「人間のくせってのは余計だろう」

克哉は人なつっこく笑った。

なぜか花咲も笑った。

「お様は嘘が下手ですから、嘘をつくとも鼻が動くんです。覚えておくと損はありませんよ」

「俺が嘘をつくとも鼻が動くだ？ ないない、そんなの嘘っぱちだ」

克哉の鼻が小刻みに膨らんだ。

腹を抱えてるりあがげらげら笑う。

「ほんとだ、おもしれえな、ぐははははっ！」

上機嫌になったるりあは弓を背負って、少し歩き出し手招きをした。

「気に入ったからついてこい。うめえもんでも喰わせてやる」
「はい！」

花咲は元気よく駆け出そうとした。

その腕を引いて克哉が引き止め、そつと耳打ちをする。

「なあ、大人になつたるりあつてえらいべっぴんだな」

「お父様つたら！」

花咲は克哉の頬をひねってから、るりあのを追って駆け出した。

「いてて。おい待てよ、俺を置いてくなよ」

世界は澄み渡っていた。

天から降り注ぐ陽の光の下に、無邪気な笑い声が木霊した。

新たな未来はここからはじまるのだ。

あやかしの棲む家 完